

魅夢の一族

あまてら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界から遮断された場所で生きてきた一人の少女が、人を殺すことに快楽を感じる、嘘つきで気まぐれな奇術師に拾われ翻弄され、出会いと別れを経験しながら何かに憧れて生きていく物語。（仮

タイトル変えて再投稿しました。（前??インモラル）

原作前ったり、原作沿ったり裏側ったりしてます。

オリジナル設定という名の捏造もありますし、主人公以外のオリキャラも出ます。展開的にはオリストありの原作の進捗状況様子見のオリエンド予定です。案外ふわつと

していただきますのでご了承下さいませ。

※暴力的要素、軽めの性描写要素、変態要素が滲み出ていると思われるので、苦手な方はご注意下さい。

目次

くはじまりく

ウサギを追いかけて

く少女ト奇術師く

三日月がワラウ

イツワリの友

奇術師のコイビト

独占欲という名のオシエ

アイの呪い

開かれたオモチャ箱

友情のアカシ

ウゴキダス世界

貫かれたハナゾノ

1

13

27

39

53

76

96

126

140

160

く蜘蛛ノ頭く

クモの巣へ

魅惑的なカオリ

ハイケイ、仮宿から貴方へ

熱い眼差しのリュウ

キケンな博打

さよならはトツゼンに

く彼女ノ旅路く

ニシから東へ

隻眼とのカイコウ

ホシゾラに願いを

混ざり者はモトメル

カノジョは諦めない

168

188

205

233

256

284

306

327

344

359

376

悪夢の森へヨウコソ

|

389

ウチナル心、秘めて

|

408

く希望ノ世界く

笑顔のウラガワ

|

437

蟻 of the DEAD

|

456

番外編 | ソウマトウ |

|

469

くはじマリく

ウサギを追いかけて

「この森から出てはイケナイの」

母親はいつも言っていた。

「私とアナタが"ミムノイチゾク"だから」

——ミムノイチゾクって、何？

「絶対、これ以上奥へ行つてはダメよ」

少女の問いかけには、決して答えてなどくれない。

——約束は守らなくちゃ。

今日も少女は、森に囲まれたこの小さな家でひっそりと静かに暮らしていく。誰も訪れることのないこの場所で。そう、ひとりで……。

暗い暗い森の中、一点だけ陽が照らす場所。その場所に、小さなレンガ作りの家が
あつた。

その家に一人住んでいる少女の名は、アリシア。年の頃なら18ぐらいだろうか。

僅かな小動物が行き交うだけで誰も訪れず、たった独りで暮らすアリシアは、物心ついてこのかた人と会話は勿論、人間に会った事すらない。

少女がどうして独りなのか、それは彼女にもわからない。

母と呼べる人はいたのだが、アリシアが10歳になったばかりのある日、病気でこの世を去った。母親は生前、何故この場所に二人だけにいるのか、それを一切語ろうとはせずに、アリシアも特別気にはならなかった。

ただ、一つだけ母親がアリシアに言い聞かせていた事がある。

「この森からは出てはイケナイ」

理由を訊いても答えはいつも同じだった。

「私達はミムノイチゾク。この森から出ると喰われてしまうのよ」

ミムノイチゾクとクワレテシマウ。

意味はよくわからなかったが、それがとても恐ろしい事であると自分の中で解釈し、アリシアは今なお約束を守っていた。

この森の中がどれくらい広いのか、近くにある川辺と家周辺の小さな世界しか知らないアリシアは、森の奥に通じる外に何かあるのかを想像出来ない。

「森の外はどんな世界なのかしら？」

くたびれてしまっているお伽話の絵本の一つを読み終えたアリシアは、この頃そんなことを呟いては、窓から見える森の奥を見つめていた。

『森の中から出てはイケナイの』

母親の言葉がアリシアの脳裏をかすめる。

「わかつているわ、かあさま母様」

この森でたったひとりになってしまった時、泣きながら母親を土に埋めてからずっと、約束を守って静かに暮らしてきた。何の疑問も持たないアリシアの唯一の楽しみと言えば、絵本の中の人物達と頭の中で想像しながら会話をすること。しかし、最近それがつまらなく思えてきていた。

「本物の人とお話がしてみたい」

森の外の世界が気になるのは、アリシアが自分以外の“人”と会話をしてみたいと、僅かながらも思い始めていた事が原因であった。

「……でも無理ね。母様と約束したもの」

『クワレテシマウわ』

——ああ、でも。

一度気になってしまうと、後はそればかりが頭の中を占めた。

そんな日々が一ヶ月も続いたある午後の日。アリシアの小さな世界は、静かに終わり

へと向かおうとしていた。

いつもと変わらぬ午後。惚けながら森の奥を見つめていたアリシアの前に、白い一羽の兎が現れた。

「あら、うさぎさん」

よく見れば、兎の前足が赤く血に染まっているではないか。

「大変！ 怪我をしているわ」

治療をしてあげようとゆっくり近寄ったアリシアに、兎は慌てて逃げ出した。

「待ってうさぎさん！」

それを慌てて追い掛けるアリシアは、家から遠くへと離れて行ってしまっている事に気付けなかった。

「……………あ！」

兎をひたすらに追いかけていると、目の前にいた筈の兎の姿が忽然と消えた。

兎の姿を見失ったアリシアがその場に立ち止まって後ろを振り返るが、今まで過ごしてきた家ともう見えなくなっている。

「戻らなきゃ……………」

これ以上先へも進んだ事のないアリシアは、母親と約束した事を思い出して戻ろうと試みた。

「でもうさぎさんが……」

兎の足の怪我が気になった。今は手当てをしてあげたい。心臓がどくどくと脈打つ
のを感じつつも、アリシアは兎を追うのを止めなかった。

——大丈夫。手当てをするために追っているんだもの。

捕まえたらず直ぐにでも戻れば大丈夫だと、自分に言い聞かせながら走るアリシアの頭
の中は、兎の事で一杯になっていた。

「あー、うさぎさん、待ってー！」

すると、先程の兎が生い茂っていた草の中から飛び出て来た。しかし再び追えど兎は
捕まらず、距離は離れていくばかり。

息を切らしたアリシアが我に返るように足を止めれば、辺りはいつの間にか闇に包ま
れている。

「どうしよう、母様との約束なのに……」

見知った森の様子ではない事に、ここに来て漸く不安感と焦りが襲ってきた。怪我を
した兎はいつの間にかいなくなっていて、けれどそんなことはどうでも良くなってい
て。アリシアは慌てて元来た道に戻ろうとした。しかし——。

「……ええ？」

この木々を抜ければきつと、という思いであったが、アリシアの知る森はどこにも無

かった。目の前に見えるのは、初めて見た狭い路地裏である。

「……………」

再度戻ろうと振り返った先もまた、狭い路地だった。

「森じゃない。うさぎさんもない、ここはどこ……う？」

頭の中がパニックに陥る。右往左往するように辺りを見回すが、周りには灰色の壁以外何も無いのだ。

『森から出てはイケナイ』

母親の言葉が、ぐるぐるとアリシアの頭の中に響く。

「ご、ごめんなさい母様……。わたし……」

すると背後から何かの気配が。それを感じ取ったアリシアは、思わず体をびくりとさせて振り返った。

「女だ」

5人のならず者の男達が、ニヤニヤと薄気味悪く笑いながらアリシアに近寄って来るではないか。

「……………」

小さく呟く様にアリシアは言った。

目の前にいるのは紛れもない、絵本でしか見たことのない母以外の人間である。啞然

としながら男達を見つめ、焦りなど吹っ飛ぶぐらいの感動にうち震えるアリシアが、喜びの笑みを向けて挨拶をする。

「はじめまして、わたしはアリシア!」

笑顔のアリシアに男達は気味悪くニタつくばかり。足元から顔までを舐めるように見つめれば、『はじめましてお嬢ちゃん』と言葉を返した。

返事が返ってきた事に更に感激したアリシアが、この後の会話をどうしようかと考えていると、『早く輪姦そうぜ!』と誰かが言う。

アリシアには、その言葉の意味がわからなかった。

「まわす? ぐるぐる?」

アリシアは訊いた。

「へへっ、そうだよ。今からダンス。楽しい楽しいパーティーさ」

「まあ! 素敵!」

目を輝かせて男達に付いて行く。アリシアを囲んで歩く怪しげな男達の企みなど、気付きはしない。

今いた場所よりも更に奥へと進むと、少し開けた森の様な場所に辿り着いた。周りは月明かりのみで薄暗く、パーティーなどやる気配さえ感じない。不思議に思いながら辺りをきよるきよるとするアリシアは、背後から突然口を塞がれて驚いた。

「ひやはは！ とんだ馬鹿なお嬢ちゃんだ！」

周りを囲まれ、口を塞がれて恐怖で体を硬直させたアリシアの首筋を、背後から男が舌でれろりと舐める。

「ひいー」

全身が粟立つた。びくりと身体を震わせたその姿を見て、男達は下品に笑った。

「ヒヒツ、小鹿みたいに震えてやがるぜ！」

塞いだ手を離れた一人の男が、アリシアを乱暴に突き飛ばす。

「きゃっっー」

その衝撃で地面に倒れながらアリシアは、何が何だかわからぬままに、周りを囲む男達を怯えた瞳で見上げた。

「……あ、あの、パーティーは？」

震えた声で問うと、男達は皆、一斉にケタケタと腹を抱えて笑い出した。

「今からパーティーさ、最高のな……」

——怖い。もしかしてわたしは、嘘をつかれたの？

やっと気付いた現実に眩暈を起こしそうになった。恐怖で抜けてしまった腰を地面に擦りながら、アリシアは男達から後退した。

『タベラレテシマウ』

また、母の言葉が頭の中に響く。

「いや……」

「叫んだって誰も来やしねえ」

「ごめんなさい……」

あれ程出ではイケナイと言われていたのに。約束をしたのに。破ってしまった過ちに身体が震え、止まらないのである。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「うるせえな!!」

一人の男が、黙らせる為にアリシアの頬を激しく叩いた。

「ひっ！」

さっさとやってしまおう。そう言って、男達はアリシアの身体を仰向けにすると、強引に地面へと押さえつけた。

『タベラレテシマウ』

また、母の言葉だ。

——ごめんなさい。約束を破ってごめんなさい……。

何度も、何度も謝った。けれど目の前の恐怖は終わらなかった。

「ごめんなさい……かあ、さま」

周りから早くしろと急かされた一人が、『うるせえな』と苛立ちを見せつつ、抵抗しないアリシアのスカートの中に手を入れる。

「——いやああっ！」

急に暴れ始めたアリシアに手こずらされながらも、一人は無理矢理アリシアの脚を割って入ろうとした。

「イヒヒヒっ！」

「助けて、かあさまあ!!」

——いや、イヤよ。タベラレたくない……!!

母親の顔を浮かべ、アリシアは固く目を閉じた。——その時である。

覆いかぶさっていた重みが急に消えたかと思うと、周りの男達のがつ、ぐつ、ぎや、と言う絞る様な声が、頭上から耳に入ってきた。そして次に起こったのは突然の雨。ザーツと生温かい雨粒がアリシアに降りかかったのだ。

その雨は一瞬で止み、アリシアは閉じていた瞼をゆつくりと開ける。

「……え？」

空は満天の星空だった。

どうして——。地面から身体をそつと起こし、アリシアは辺りに目をやる。

どういふことなのか。数人いた筈の男達の姿は何処にもなく、何故急に居なくなつてしまつたのか不思議に思つていたが、それと同時に沸き起こる違和感は、一体何だ。

「何、この臭い……？」

雨水とは似ても似つかない生臭い鉄の臭い。それに手で拭つた体中が異様にべたつくだのである。

ふらつきながらその場で立ち上がり、真つ暗な闇に包まれた森のような場所を、もう一度見渡した。

眩い月の光に照らされた地面に目をやれば、そこは一面赤く、血で濡れているのがわかつた。

「な、なにこれ……？」

体中から血の気が引くのを感じた。

一体誰のだろうか。そして、まさかと思ひながら自分の顔を両手で拭い、手のひらを光に照らし当てた。

「ひっ！」

アリシアの手のひらは、真つ赤でどろどろとした血に染まつていた。先程の雨の違和感。それは、鮮血であつたからなのだ。

——これは誰の？

茫然と両手を広げ、アリシアはその場に立ち尽くす。

——あのヒトたちは、一体どこに行ってしまったの？

先程まで確かに存在していた筈の男達の姿が、誰一人としていないのは何故か。全身の震えが、再び始まったその刹那——、背後からする声に、アリシアはゆっくりと振り返った。

「やあ……◆？ 急な雨にでも、降られたのかい？」

少女ト奇術師

三日月がワラウ

振り向いた先にいたのは、赤茶の髪をオールバックにし、左目の下に涙型の、右目の下に星型のペイントを。服装も相まって、絵本で見たピエロみたいな男だった。

「あ、あ……」

あなたは誰？ そう言いたのに、震えて言葉が上手く出てこない。

「戻る途中で偶然キミらがこの場所に入って行く所見てね？ なんかさ、今夜は興奮して眠れそうになくて、後を付けたんだよ。そしたらさあ……」

台詞の語尾にまるでハートやらの記号を付けたように喋る男は、愉快そうに唇の両端を弓の形に上げて、もういなくなってしまう男達と違う不気味な笑みで語り出した。

「さっきの奴ら、まるで風船のようだったね◆？」

「ふ、ふう……せん？」

「キミがやった念能力だよ」

「ネンノウリョク……？」

初めて耳にした言葉である。

「わからずに使ったの? ……もしかして初めて使ったのかな? うーん◆?」
顎に手を当てながら考えつつ、少し間を置いた男は目線を上からアリシアへと戻した。

「……まあ、良いや◆? 面白いものを見せてもらったし◆?」

目を細め、じりじりと歩み寄って来る。それにびくりと震えたアリシアも、怯えながら男から後退りをした。

——危ない。

理由はわからない。初めて会ったこの男に、本能がそう告げている。

「……あ」

逃げようとしたのに。離れていた男はいつの間にか目の前まで近付いていて、気付いた時には男の片手で首を掴まれており、宙吊りの状態に持ち上げられていたのである。

「ぐ、……あ、あ」

ぐぐぐと、男の掴む手に力が入る。

「くつくつくつ……♥ 血に塗れた女の子を殺すのも、この高ぶる興奮を抑える薬になつてくれるかな?」

絞められた苦しさにアリシアが顔を歪ませれば、男は益々狂喜した。

「……やつぱダメだ。余計に興奮しちゃう♥」

今、一体何が起こっているのか。全てに頭が追い付いていない。あの男達は何処へ行ってしまったのだろうか。何故、自分が血だらけなのか。

——このヒトは誰？ 風船って、ネンノウリヨクって何？ 母様、わたしどうなってしまうの？

心の中で呟いた言葉が伝わったのか、それとも偶然なのか。『キミは死ぬんだよ◆？』
男は告げる。

——シヌ？ ……わたし、死ぬの？

そう思った時、アリシアの目から自然と一筋の涙が流れる。その滴は、男の頬にぼたりぼたりと、まるで雨の雫の様に降り落ちた。

「泣いてるのかい？ さぞ苦しくて辛いだろうね◆？ ん？ キミの腫ってさあ」

——ラピスラズリだ。まるで今の夜空の星みたいに綺麗だね。男はアリシアの眼をジツと見つめながら妖しく口角を上げると、掴んでいたその手を離れた。

放されたアリシアは再び地面へと倒れ込み、苦しみから解放されて激しく咳き込んだ。

「ぐっ、はあ……っ、はあっ……！」

アリシアは一生懸命に息をすると、這いつくばってこの男から逃げる為に必死に身体

を動かした。

「ご——めんなさい、……さまっ」

——夢なら良いのに。

これが悪い夢ならどれ程良いか。酸欠でくらくらとする視界。逃げようと身体を必死に引きずり、薄れていく意識の中でふと見上げた先には、星空を背にした三日月が笑っていた。

誰かに頬を撫でられる。

母親が、幼いアリシアを撫でてくれたあの日々の様に。優しく、そつと。

——今までの出来事は全て夢だったのね。

目が覚めれば、きつとあの悪夢から解放される。いつもと変わらない、静かな毎日が続っている。そう信じて、アリシアはゆっくりと瞼を開いた。

悪夢は終わり——。

目を開けて最初に見た天井は、アリシアの知った天井ではなかった。

がばりと上半身を起こして周りを確認を試みたが、やはり此処はアリシアの家ではない。

「……ハハ、どハハッ」

豪華な装飾で飾られた部屋。キングサイズより広く、とても柔らかな良い匂いのする白いベッドの上で再度周りを見渡し、この一室がベッドルームであることが伺えた。

「まだ夢を見ているのかしら……？」

目覚めたばかりでぼうっとするアリシアが、何となく自分の身体に視線を向ければ、何故か服を着てはおらず、全裸のままである事に気付いた。

「何で、裸なの？」

着ていた服はどうしたのだろうか、ベッドの下を確認するが落ちてはいない。仕方ないとアリシアは、ベッドのシーツで身体を包む。

——そうよ、きつとまだ夢を見ているんだわ。

自分に言い聞かせながら、そろりとベッドから降りてみる。

「夢なのにヒトはいないのね」

夢の中にならいつも人はいると思ったのに。少しだけ残念に思いつつ、出入り口であるろう閉められたドアノブに手をかけようとしたその時だった。

「おはよう◆？」

「ひいあー！」

背後から右の耳元で囁く様に聴こえた声に驚いたアリシアは、情けない声を上げて振り返った。

「酷いなあく◆？ まるで化け物にでも遭遇しちゃったみたいに驚くなんて◆？」

「あ、あ、あ」

「びっくりして声も出ない？」

腰を抜かしてその場にぺたりと座ったアリシアが凝視するのは、別の夢で会ったと思つた、ピエロみたいな男である。

「ゆ、ゆ、ゆ」

「幽霊でもなければ夢でもない◆？ 今キミの目の前にいるボクは、確かな現実さつ◆？」

そう言つて、アリシアの目線に合わさるように男はしゃがんだ。

——現実。母親との約束を破り、初めて接触したヒトにタベラレそうになったり、首を絞められて死んでしまいそうになったあの悪夢が、まさか現実であつたのか。

アリシアは、何かに頭を殴られたような衝撃を受けた。

「い………嫌!!」

認める事が出来ない現実から逃避しなくなったアリシアは、声を上げてベッドの上に駆け上がると、シーツの中に包まってガタガタと震え出した。

——怖い！

シーツに包まって膝を抱えていれば、ベッドがぎしりと音を立てる。

そして次の瞬間には、包まっていたシーツはあつという間に剥がされて、気付けばベッドに押し倒される様な体勢になっていた。

驚いて顔を上げれば、自分の上に覆い被さる張本人と目が合った。

「まだまだ寝たりないのかい？」

奇しい笑みを崩すことなく上にいる男は、驚きと不安な表情でジツと見つめたアリシアに、『そんな綺麗な瞳で見つめられちゃったら、興奮するんだけど♥』と、舌なめずりをして見せた。

その舌なめずりがあの男達を彷彿とさせ、アリシアは顔を青くして目をぎゅつと瞑りながら身を縮こませた。

「わ、わたしをタベナイで！ きつと美味しくないわ！」

そう叫ぶように云ったアリシアに、男は一瞬だけ、頭にはてなを浮かべる。

「……それって、比喩的な意味かな？」

「ひゅ？ わたし、タベラレテしまうのでしょうか？」

ゆっくり目を開けてもう一度男を見つめたアリシアは、首を左右に振った。

「タベラレるのは、いや……！」

もしかして男自身が思っている事と、アリシアの言葉の意味が違うのでは……と気付いた男は、『そっちの“食べられたくない”ね◆？』と鋭い目を細め、アリシアの上から

ゆっくりと離れた。

「安心しなよ、ボクは人を食べる趣味は持ち合わせてない◆?」

「……本当?」

男が『ああ』と答えると、それを聞いて安堵したらしいアリシアは、一気に緊張を解いた。

「それにしても……◆?」

ちらりと、アリシアの今の状態を見やる。大抵なら初対面での全裸の自分を恥ずかしながらののだが、アリシアは裸の自分を恥ずかしがる様子はない。半身を起こし、膝を抱えて肌寒そうにしているだけだ。

てつきり恥じらうかと思ったのに……◆?」

それはそれで良いかもねと、男は寝室から一度出ると、何やら白い箱を三箱抱えて戻って来た。

「そのままの格好でもボクは充分にかまわないんだけど……◆? コレ、着なよ」

そう言つて、男はアリシアに箱を渡した。

「え?」

きよとんと不思議そうに男を見つめて『プレゼント?』と、訊ねる。

「そうだね。キミが着ていた服は捨てちゃったし、仕方ないから適当に買ってきたんだ

よ
◆?」

「……わ、わたしの為に?」

アリシアは大きな瞳をより大きくさせると、先程までの怯えた顔は何処へと思わんばかりの、キラキラとした明るい笑みを浮かべた。

「母様以外から貰うプレゼントなんて、初めて……!」

顔を紅潮させ、大事にそうに受け取った箱を抱きしめるアリシア。その姿を見つめていた男は、何処から急に漂って来た甘い匂いに、ふと気付いた。

甘い匂い——?」

何処から匂うのだろうか、男は不思議に思つて辺りを見回してみる。

「まあ素敵!」

アリシアが箱から出した服は、ゴシック調の黒いミニのワンピースに白いエプロン。ボーダーのニーソックスと黒のストラップシューズだ。

「気に入ったかい?」

アリシアの喜ぶ姿に今度は気を取られ、男は匂いの事など今はどうでも良くなつて来た。

「とつても!」

アリシアは小さな子供のようにはしやぎながら、恥ずかしがったり変に気にする事な

く男の前でそれに着替えた。

「ピツタリだわ」

まるで誂えたように、服はアリシアの体に良く馴染む。

「これも付けてごらん」

新たに渡された頭に付ける黒いリボンを装着し、アリシアはクルクルとその場で回って見せた。

「とつても良く似合ってるよ◆？」

「嬉しい……」

まるで、とある物語に出てくる少女の格好みたいだ。アリシアは純粹に嬉しそうである。

「あ、そうだ◆？ キミの名前をまだ聞いてなかった◆？ ボクはヒソカ。キミは？」

「わたしはアリシアよ」

「良い名前だね◆？ ……とところで、アリシア。キミ、あんな所に一人で一体何やってたんだい？」

話を切り出された質問に、アリシアはうーんと考えるように唸った。

「このへんに住んで？」

「いいえ」

「じゃあ何処から?」

続けていた笑顔は、一瞬にして暗く曇り始める。

「……森にいたの、わたし」

「森?」

アリシアはこくりと頷いた。

「とても静かな場所よ」

「一人で?」

「小さい頃は母様と一緒にだったわ。でも、死んでしまったからずっとわたしひとりなのよ」

そう言って、落ち込んだ表情を見せていたのも束の間。アリシアはヒソカに顔を向けると、再び明るい笑顔に戻った。

「ずっとひとりだったの。母様以外のヒトなんて見たこともなかった。絵本でしか知らなかったヒト、お話をしてみたかったの。そう! 今こういうのが会話なんでしょう?」

ああ、嬉しい!」

興奮覚めやらぬといった感じなのだろうか。アリシアは感激のあまりに早口になっていた。

「初めはどうしようかと思ったの。母様との約束を破って森から出てしまったし、タベ

ラレテシマウのが恐かったし。だけど……」

ヒソカの両手をぎゅつと包むように、優しく握り締める。

「親切なあなたにお会い出来て、本当に良かった。ありがとう」

アリシアから天真爛漫な笑みを向けられて、ヒソカは思った。

——この娘は馬鹿か？

「……ねえアリシア。キミさ、ボクに首を絞められて殺されそうになったんだよ？」

「ええ。とても驚いたし恐かった」

「じゃあ——」

「でもあなたはわたしをタベなかったし、素敵なプレゼントもくれたし、会話もしてくれてるわ」

初めに見せていた怯えた表情は、すっかり消えた様子である。キラキラと瞳を輝かせ、嬉しそうに笑顔を自分に向ける目の前のアリシア。

殺されそうになった相手に対して、こうも無防備に警戒を解くのだろうか？

「ボクがキミを殺さなかったのは、ただの気まぐれだよ♣？ キミなんて、あつという間に……」

ヒソカはいつの間にか出した一枚のトランプカードをアリシアの首元へと当て、『やれちゃうんだ♥』と唇を剃り返すような笑いをして言った。

——さあ、ボクに怯えた顔を見せてごらん ◆？

しかし、期待は裏切られるのである。

「それ、一体どこから出したの？」

怯えることはなく、逆にトランプの方に注目したアリシアは、まるで余興を楽しんでいるかのようなだった。

「次は何を出すの？」

ヒソカは、なんとか順を追ってアリシアの経緯を聞き出せた。初めはただの頭が弱いだけの娘だと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

母親が生きていた幼い時までの知識しかないだけで、実際に読み込みは早かった。

——くくく、面白い玩具を見つけたよ ♥

ただの中身のない娘なら適当に遊んで殺すつもりであったヒソカは、目の前にいるアリシアを妖しく見つめながら、あの夜の出来事を思い出していった。

あの夜にアリシアが使った能力。数人の男達が一瞬で宙に浮かび、風船の様に膨らんだかと思うと、直ぐにパアンと弾け割れた。割れた男達の血は、まるで雨の如くアリシアに降り注がれ、なんともグロテクスで、なんともエロティック。

あの光景に体が震え出し、楽しくて興奮した事も思い出したヒソカは、自身の下半

身を熱く滾らせながらニタリと不気味に笑うのだった。

「どうしたの、ヒソカ？」

「アリシア、ボクと友達になろう？」

イツワリの友

「トモダチ？」

「そう、友達♠？」

何を思ってしまったのか。ヒソカは突然、アリシアに友達になろうなどと告げたのである。

「わたしと友達になってくれるの？」

普通ならばこの状況、『何故』と困惑するところであろうが、アリシアは素直に『嬉しい』と喜んだのだ。

「わたし、ヒトの友達なんて初めて！」

これ以上ないくらい喜びように、アリシアは小さな子供の様にはしゃ燥いだ。

ただし、ヒソカが真に友達になろうと思つて告げたのではないと、勿論知る筈もない。ヒソカはたまたま見つけた真新しそうな玩具に嘘を吐いて自分を信用させようと考へていた。今でも充分ヒソカに無防備なアリシアは、人を疑う事を知らないのだ。

母親以外の人に接触した事のないアリシアは、まるで卵から孵った雛鳥のようで、何でも信じ、何でも思い通りに扱える最良の玩具であった。

——この娘はどんな顔をするかな？

ヒソカには密かな楽しみがあつて、自分を心底信用しきつた玩具がいらなくなつた場合、残酷に心を傷付けて壊す。正しくは殺してしまふのだが、壊す前の、その傷付いた悲痛な表情を見るのが堪らない程楽しくて興奮するのだ。

しかしその前に殆どの玩具が壊れてしまふので、なかなかその楽しみを味わえないでいた。

——今回は直ぐに壊さないように大事に遊ばなくちやね♥

その前に飽きなければ、だけど。なんて思つているヒソカに気付きもせず、アリシアはまだ純粹に感動し、『なんて優しくて親切なヒソカ』と喜ぶだけである。

初めて出会つた時のなんとも言えない恐怖を、今のヒソカには感じられない。

多分、アリシアにプレゼントを初めて送つた"ヒト"でもあるし、タベヨウとはしない"ヒト"でもある。アリシアの中で『とても良いヒト』という認識が出来たせいか、現在の心境では、ヒソカを恐ろしく思わないだけなのかもしれない。

あの真つ赤に染まつた夜の事など忘れてしまふぐらゐに、この状況に感激していたアリシアではあつたが、やはり森の事が気にかかる。

「ねえヒソカ、わたしがいた場所まで連れて行ってくれないかしら?」

「どうして?」

「だって森へ戻れるかもしれないもの」

「どうやって森から出たかもわからないのに?」

「それは……そうだけど、でも戻らなくちゃ、わたし」

「何で?」

問い返してくるヒソカの表情は、とてもニコリとしているのに少しも笑っていないようにも感じられた。

「……母様との約束なの」

「でも破ったんだろ?」

ヒソカは空いていた距離を縮めながらアリシアに近寄った。

「キミは自ら約束を破ってまで森を抜けたんだからさあ、きつともう戻れないんじゃないかな? ……多分、これは約束を破った罰だね。よくある話だよ」

「そんな……」

背の高いヒソカを見上げれば、ズイツと鼻先が当たる距離まで顔を近付けられる。

「それに、今更戻ってどうするの? キミ以外の人間は誰もいないんだろ? だったら

さあ——」

ヒソカの細い切れ長の目が、不安に染まるアリシアの顔を捉えた。

「つまらない罪を後悔するより、今の現状を楽しめれば良い◆？ どう足掻いてもキミが約束を破ってしまった事実は変わらないし。折角人間と触れ合える機会を手に入れたんだ◆？ これからをエンジョイしようじゃないか、アリシア？」

そう言つて笑うヒソカに何も言えなくて、アリシアは俯いて頬を軽く膨らませた。

「おや、納得いかない様子かな？ 楽しめないならこの部屋を出るんだね◆ だけどアリシア、外にはキミを食べてしまう人間達がいるよ◆？ キミは騙され易いし、あつと
いう間にペロリ……だしね？」

えっ、と声を出して顔を上げたアリシアの表情は、今にも泣き出してしまいそうであつた。

「どうだい？ それでも行くのかな？」

アリシアは下唇を軽く噛みながら考えてみた。

あの森に帰らなければ。という焦りに似た思いがあつたが、一方でこのまま戻つたとしても、誰もいない日々を今までと同じように過ごしていけるだろうか、という思いも僅かながらにはある。

絵本でしか知り得なかつた、母や自分以外の人との会話。まだ見ぬ未知の世界。それに一歩足を踏み入れてしまった事で、今までの暮らしが物足りないモノに変わつてし

まった気がした。

アリシアは暫く黙った後、小さく呟くように『行かない』とだけ返した。

ヒソカはその言葉を待っていた。薄ら笑いを浮かべて、『お利口さんだね◆?』と、アリシアの頭を優しく撫でてやる。

撫でられたアリシアは、幼い時に母親に撫でてもらった記憶を思い浮かべながら、とてもこそばゆい気持ちになった。

「じゃあボクは出かけてくるから。いい子で大人しく待つてるんだよ◆」

ヒソカが部屋を出て行った。正しくは、何処かへと出かけたのである。

ひとり残されて何もする事がなくなったアリシアは、ベッドルームからリビングルームに入った。

リビングはベッドルームよりも広く、豪華であることに変わりはない。アリシアは天井のシャンデリアを見つめ、『きれい』と口をあんぐりとさせながら呟く。

初めて見る物が多く、部屋中をあちらこちらと見回しながら回っていると、視界に入った大きなテレビが気になった。

「何かしら、これ?」

アリシアの家にはテレビなんて勿論無くて、それが何なのかもわからないのである。

テレビの電源スイッチにアリシアが漸く気付いた時、その衝撃にあまりにも驚いて腰を抜かしたのは言うまでもない。

それから何時間経ったであろうか。

外が闇に包まれ始めた頃。帰ってきたヒソカは薄暗いリビングを見渡し、つけっぱなしのテレビへと近付いた。

リモコンを探そうと視線を下に向けると、向き合うようにある広いソファアーの上で横になって眠るアリシアに気付いた。

すやすやと寝息を立てるアリシアの顔を、ヒソカが指の腹でそつと撫でる。

——本当、無防備だなあ ♣？

まるで、『わたしを食べて』状態なアリシアを前にし、ヒソカは目を細めてと口角を上げた。

すると突然、ケータイの着信音が鳴り響いた。

ああ、忘れてた。ヒソカはポケットに入れていたケータイを取り出すと、液晶画面に表示されているであろう相手を確認する事なく電話に出た。

「やあ ♡ ……ごめんごめん。ちよつと色々あつてね ♡ え？ それは秘密に決まってるじゃないか ♣？ ——まあ、面白そうな玩具見つけたつてところかな ♣ ククツ…

じゃ、また ♡」

通話終了ボタンを押し、再びポケットに仕舞うと、眠るアリシアの耳元に口を近づけた。

「アリシア◆ こんなところで寝ると風邪を引いちゃうよ?」

ヒソカの声によつて目をパチリと覚ましたアリシアは、ゆつくりと上半身だけを起した。

「ん……、おかえ、りなさい」

目覚めたばかりで意識は虚ろ。テレビを見ながらいつの間にか寝てしまっていたらしいアリシアは、部屋中が薄暗いのに気付いた。

「夜……?」

パツとつけられた電気に部屋中が明るくなり、眩しさに目を細ませながら辺りに目をやる。

——夢じゃなかったのね。

夢ではなく現実であるという事に何となく胸をなでおろしつつも、内心、森に戻ってはいない不安も僅かに残っていた。

「退屈しなかったかい?」

広めのソファアームのもう半分側に、ヒソカが座つてこちらを伺う。

「ちつとも。……ねえ、この箱みたいなのは何かしら?」

「テレビの事かい？」

「てれび？ てれびと言うのね、これは」

「もしかして初めて？」

こくりと頷いたアリシアは徐々に頭と目が冴えてきたようで、瞳をキラキラ輝かせては嬉々としながら言った。

「とても素晴らしいの。色々な人が沢山出てきたり、お料理を作ったり、遊んだり、物語が始まったり。凄く楽しかったわ」

「それは良かった◆？ ところでさあ、お腹は空いていない？」

自分がまだ食事をしていない事に気づいたアリシアは、ヒソカに聞かれるまですっかり忘れていたようだった。

「……多分、空いていると思うわ」

「多分？」

多分という言葉を少し変に思いつつ、ヒソカは部屋に設置されていた電話の受話器を手を取った。

「テレビも知らないみたいだし、勿論電話の使い方なんてのもわからないみたいだから教えてあげる◆」

ルームサービスを頼もうと言い出したヒソカは、アリシアにそのやり方を教え始め

た。

「何か飲みたくなったり食べなくなったりしたらこのボタンを押す。そしたらフロントに繋がるから。それじゃあ、かけてみるよ?」

ボタンを押し、数秒黙る。

「適当に何品か食べる物と、……ああ、それぞれ。フルーツもね。後はオレンジジュースを頼むよ◆」

頼み終えたヒソカはゆっくりと受話器を置いて電話を切った。

「……とまあ、こんな風に頼めば良いからね◆? 何かあるかは聞けばメニューを教えしてくれるから◆?」

アリシアはヒソカの隣に立ち、興味津々に電話というものを観察した。それから少し待っていると、ヒソカが頼んだ料理が部屋に運ばれて来た。

テーブルに並べられた食事は、肉料理や炒め物、フルーツ盛り等々である。

「さ、食べなよ◆?」

テーブルの上にある料理をジッと見つめながらアリシアは、隣で愉しそうに口の両端を上げるヒソカに『あなたは食べないの?』と、訊ねた。

「ボクは遠慮するよ、食べてきたからね◆?」

「そう……」

「もしかして嫌いなあった？」

アリシアが最初に手をつけたのは、隅にあった野菜だけのサラダである。

「わたし、これだけで良い。他は食べられないわ」

「……キミの身体が華奢なのはそのせいだね？　好き嫌いはダメだよ、ちゃんと食べないと◆」

——もつとボク好みの体つきになってほしいし……◆？

勿論その想いが聞こえるワケもなく、サラダ以外に目を移すアリシアは、渋々口に運んで複雑な表情を見せた。

「ごめんなさい、もうお腹いっぱい」

結局、サラダ以外の料理は殆ど残してしまった。

「折角用意してくれたのに……」

「徐々に食べれるようになるさ◆？」

「ヒソカ、ありがとう」

アリシアが申し訳なさそうな顔をしてお礼を言えば、『いちいちお礼を言つてちやとキリがないよ。ボクらはもう友達なんだ、気軽にやろう◆？』と、ヒソカは微笑んだ。

「でも……」

「親しき仲にも何とかって言うけどさア、そんなの気にしないでいいんだボクには◆？」

友達のアリシアにボクが何かしてあげたいと思っただけなんだし◆？ キミはそれを素直に受け取ってくれればイイから◆」

初めてのヒトの友達から衣服のプレゼントをされ、見たこともない料理を用意してくれた事に感謝の気持ちは伝えたい。アリシアは思った。

「なんだかわたしばかり悪いわ。わたし、あなたに何にもお返しが出来ない」

「いいよ、ボクはキミと楽しく遊べたらそれで◆？」

「……ダメよ！」

アリシアは、急にソファァーから勢いをつけて立ち上がった。

「わたしだってあなたにお礼がしたいし。そうよ、何かプレゼントがしたいわ！」

少し興奮気味に云うアリシアの言葉に、ヒソカは唇をほころばせた。

「ヒソカは何が欲しいとか、してほしいとかって、ある？」

——ああ、なんて顔でボクを見つめるんだろう◆？

徐々に自身は高ぶって、アリシアから見えない右手には力が入る。

今のキミをめちやくちやに壊せたらどんなにイイか……◆

その事を伝えたら、アリシアはどんな表情を返すだろう。一体、どんなに風に怯えるだろうか。想像すればする程に、それはとても酷くて愉快であった。

——駄目だ……。まだまだ全然駄目◆？

折角見つけた玩具を直ぐに壊してしまうのは勿体なさ過ぎる。ヒソカは一度心を落ち着かせて冷静になった。

「ありがとうアリシア◆？　今直ぐには思い浮かばないから、また今度お願いするよ◆？」

微笑むアリシアの頭を、ヒソカは左手で優しく撫でた。

奇術師のコイビト

アリシアの視線の先には、ヒソカの作るトランプタワーがあった。

「ヒソカって凄いのね。わたしはそこまで出来ないもの。それに、どうやってさつきからカードを出しているの?」

何でも感動し何でも喜ぶアリシアが『素敵ね』と拍手を送れば、『ボクは奇術師さ◆?』と何枚も手から出して見せた。

「さあ、アリシア、もう寝る時間だよ◆?」

先程からアリシアが小さな欠伸をしていたのを気付いたヒソカは、手を取ってベッドルームへと導いた。

「さあ、おやすみ◆?」

アリシアを大きなベッドに寝かせ、一人その部屋を出ようとするヒソカに、アリシアは声をかける。

「ヒソカは眠くないの?」

「ボクはまだやることがあるからね◆?」

「ふーん、そんなのね。じゃあ、おやすみなさいヒソカ」

静かに笑みながらベッドルームを出たヒソカは、また何処かへと出かけて行った。

ベッドの中に残されたアリシヤは睡魔に勝てず、瞳を閉じてそのまま深い眠りへと落ちていった。

アリシヤが夢の中の住人と化して暫く経った頃、ヒソカは別の場所にいた。薄暗い部屋に月の光が照らす中、ヒソカは女と行為に及んでいたのである。女の艶かしい声と共に、淫らに絡み合うのは二つの躰からだ。それが終わりを迎えると、ヒソカはベッドからその身を起こした。

「どうしたの……?」

静かな足音を立てて窓際へと歩くヒソカを目で追った女は、余韻を感じながらおもむろにベッドを離れると、逞しい男の背中に飛び込むように抱き着いた。

「……ヒソカ?」

何も答えてはくれないし、何も語り出そうとはしない。男の背中越しから伝わってくるのは、言い表せぬ程の拒絶である。女ハツとして焦りの表情を浮かべると、ヒソカから慌てるようにして飛び退いた。

「——キミとは、今夜でお別れ♣?」

本当につまらなそうな声で告げる。

「そんな、……嫌よ！」

「しようがないじゃないか、飽きちゃったんだから♣？」

くるりと振り向いたヒソカは、いつも見せていた顔で女を見つめた。

「私あなたを、あ……、愛してるの！」

女の口から出た『愛』という言葉に、ヒソカは思わず吹き出した。

「やめてくれよそんな冗談♣？ つまらなくて死にそうなんだけど♣？」

「冗談じゃないわ。最初はただ、遊びでも良いと思っただの。けど、今は本気なのよ！」

必死に擦り寄る女には、何の感情も持てはしない。

「……言いたいことは、それだけかい？」

冷たい返しに女が顔を上げると、明らかにヒソカは笑ってなどいなかった。そんなヒソカの表情に、女の肝が一瞬で冷える。

「抱いたのはただの気まぐれ——そう、キミがこの天空闘技場で働く受付嬢で、念を使える女性だったから♣？ ただの女の子には興味ないんだよね、ボク♣？」

シヨックのあまり呆然と立つ女の横を通り、ヒソカは身支度を始めた。

「……それじゃ♣？」

「ま、待つてヒソカ！ 遊びでも良いの、お願い……！」

ドアの前で女に呼び止められたヒソカは、もう振り返りもしない。

「ボクがそんなキミを殺さないでいるのは、せめてもの慈悲だよ? ——いや、ただの気まぐれかも? ……さようなら?」

ボタンと音を立ててドアが閉まるまで、女はその場に立ち尽くすだけであった。

ヒソカⅡモロウ。このヒソカという男は、人を殺す事によつて快樂を覚えたり、または興奮を治める為に殺す事もあつたりと、常識では考えられない性癖を持っている。

時々、興奮した身体を押さえる目的で人と交わる事もしばしばあつた。因みにヒソカは、相手が男でも女でも問題は無い。

翌朝。アリシアが目を覚ますと、カーテンから薄つすらと朝の光が射しているのが見えた。

——ヒソカは?

ベッドルームは自分ひとりだけ。まだ戻つて来てはいないらしいヒソカを探してみようと、アリシアはベッドから起き上がる。

「いないの? ヒソカ?」

隣のリビングルームのドアを開けて入ったとほぼ同時だった。

「なんだい?」

「——きゃあつ!」

背後から突然声がして、アリシアは飛び上がる程に驚いた。

「ひ、ヒソカ！」

振り向けば、微笑を口角に浮かばせたヒソカが真後ろにいた。

「フフフ◆？」

「急に後ろからあらわれるんだもの。びっくりしたわ」

「キミの驚いた声や顔が見たかったからね◆？」

悪戯っぽく笑うヒソカに『心臓が止まるかと思っただから』と口を尖らせれば、『それはイイネ◆？』とアリシアには聴こえない声でヒソカは呟いた。

「ねえアリシア、お風呂に入ろう◆？」

「え？ お風呂？」

きよとん顔のアリシアの手を引いて、ヒソカはバスルームへと連れて行った。

「さあ、服を脱いで◆？」

アリシアはやはり恥ずかしがる事もなく、ヒソカの目の前で衣服を脱いだ。

「ヒソカも一緒なの？」

「そうだよ◆？」

「何故？ お風呂は一人で入るものじゃないの？」

「一人で入るより楽しいし、それにボク達友達だろ？」

「友達だと一緒に入るの？」

「まあね◆？ 友達じゃなくても、遠い何処かの島国では、男女が一緒に入る”オンセン”っていうお風呂があるって話さ◆？」

何となく言いくるめる事に成功したヒソカは、自分も着ていた服を一気に脱ぎ始めた。

アリシアの目の前で露わになった身体には、一片の無駄など無い。とても固く締まった筋肉は念入りに鍛えられていて、まるでそれは、美術館に飾られている彫刻像の様なある。

普通なら見惚れてしまうであろうその肉体美体に、アリシアは見惚れるどころか、自身との身体の違いを見比べる事の方に興味を引かれていた。

——ヒソカと、わたしのカラダは違うのね。

「……さあ、ボクが身体を洗ってあげるよ♥」

広いバスルームの中のバスタブには、既にお湯がはられている。アリシアがバスタブへと視線を向けていれば『まずは頭からね◆？』と、適温のシャワーで髪から洗い始めた。

「自分で出来るわ」

「イイからイイから♥ アリシアはジツとしててよ◆？」

ヒソカは手慣れた様子でアリシアの体を丁寧に洗い流し終わると、『先にこのバスタ

ブの中に入っててね◆?』と指をさした。

言われる通りにゆつたりとしたバスタブに肩まで浸かるアリシアは、自分自身をシャワーで洗い流すヒソカからバスタブの中のお湯へと目を向けると、気持ちの良いリラックスマジックのままに、ぼうつと呆けながら待った。

「……ふう◆?」

身体を洗い終えたヒソカがバスタブに足を入れた時、アリシアはふと顔を上げてヒソカを凝視した。

「……ヒソカ?」

「何?」

オールバックにしていた少し長めの髪は濡れて下がり、顔にあったペイントも全て洗い流されていたので、一瞬別人のように見える。

「違う人みたいだわ」

「よく言われるんだよね◆?」

バスタブの端と端、向き合う形で座った目の前ヒソカを黙って見つめれば、彼は負けじとアリシアを見つめ返した。

背中まである癖のない長いネイビーブルーの髪が肌に張り付き、髪の色と同じ瞳には無数の小さな星が見える。雪のように白い肌、華奢な身体ではあるのに、それなりに女

らしい曲線美。頬は薄紅に染まり、閉じられた唇はとても瑞々しく柔らかさそうである。

簡単に壊れちやいそうだねえ……◆？

めちやくちやに壊した姿を想像すれば、熱を帯びる自身がグググ、と堅く反り上がる。

「それは何？」

アリシアの脚にソレが触れてしまった。

当たるとナニかに視線を向けながら不思議そうな顔をして見つめるアリシアに、『今度ゆつくりと教えてあげる◆？』とヒソカは、嬉しくて堪らない悪戯小僧のように笑った。

二人でバスタイムを楽しんだ後、ヒソカは脱衣所でアリシアにバスローブを着させ、その手を引きながらバスルームを出た。

「キミに新しいのがあるんだ◆？！」

ヒソカによって用意された新しいアリシアの服は、最初に貰った服装と似た、ゴシック調のモノクロワンピースであった。

「これもわたしに？ 素敵だわ！」

心から喜ぶアリシアは感激のあまり、前から思わずヒソカに抱きついた。

「ありがとうヒソカ！」

深い意味など勿論ある筈が無い。純粹に嬉しい気持ちを持ったアリシアを、ヒソカは満足そうな顔で抱きしめ返した。

ふと香るのは、シャンプーの香りとは別の甘い匂い。昨日も匂ったあの香りだ。何処からか匂うのではなく、アリシア自身から香っている。

——この匂いは何？

すると後ろから見知った気配が。それを感じ取ったヒソカは、アリシアからゆつくりと離れた。

「いらつしやい——マチ♥」

いつからいたのか。入り口付近の壁にもたれかかった女に声をかける。マチと呼ばれたその女は、眉間に皺を寄せながらヒソカを睨みつけていた。

——女のヒト……？

ヒソカの後ろからマチを見たアリシアは、母以外の女の人間を初めて目にし、テレビで見たのとは違う新鮮さに胸が高鳴った。

「会いに来てくれて嬉しいよ♥」

不機嫌窮まりない表情のマチは、一度ヒソカに視線を向けると直ぐ、後ろでこつそりとこちらを伺うアリシアへと移した。

「この前のすつぽかした理由を聞きに来たの。その返答によっちゃあ……」

「わざわざその為にボクに会いに？」

「んなわけないでしょ。返答もだけど、ていうかアンタが呼び出したんじゃない。早く

返答と、呼び出した理由言いなさいよ」

ぎろりとヒソカを横目で睨めば、本人は薄気味悪い程にマチを熱く見つめている。

「——この前のはさ、全員動き出さなくても解決できただろ？ 団長も動かなかったんだし◆？ ボクがしやしやり出る幕はなさそうだ、と思ったから◆？」

「……はあ？ 何そのふざけた答え」

「ふざけてはないよ◆？ 大勢で動くより効率良いと考えたんだ◆？ 団長には悪かった、ごめんねと伝えてくれないかな？」

「……っふん」

マチは、納得のいっていない不満気な表情を露わにした。

「……で、呼び出した理由は？」

「マチに逢いたかったからだよ♥」

「さようなら」

おもいつきりのスルースキル発動で立ち去ろうとするマチの前を、ヒソカは塞ぐ様に立つ。

「半分本気で半分冗談だけど、明日からさあ、久しぶりに試合に出るんだ◆？ だからいつもの頼むよ♥ 勿論報酬は弾むし◆？」

マチはヒソカを睨み上げながら、苛立ちを込めて溜息を吐いた。

「わかったからそこどいてくれない？」

その答えに口角をニイッと上げたヒソカが嬉しそうに横へとズレれば、マチはヒソカから視線を外して部屋から去って行った。

マチが立ち去った扉の向こうを、ヒソカは名残惜しく見つめている。そんな様子にアリシアは、二人の関係について頭の中で整理しながら、ピタリと当てはまる何かを考えていた。

「さつき来た娘はマチっていうんだ◆？」

アリシアへと向き直したヒソカは、マチという女性の事を話ながら側へと歩いて来る。

「美人だろ？ ちよつとツンとしてるけど、そこが堪らないんだよねえ♥」

楽しそうに微笑むヒソカを見つめて、やつと当てはまる言葉が閃いたアリシアは、『なるほど！』と少し大きい独り言を呟いた。

「何がなるほど、なワケ？」

ひとり納得し、満足そうな表情であるアリシアに質問すれば、「マチはヒソカの恋人なのね！」という答えが返る。

「フフフ♥ —— そう、つれない恋人さ♥」

ヒソカは目を細めて笑うと、アリシアの鼻先をちよんと軽く押した。

「ここは何ていうところなの?」

身嗜みを整え終えた後、アリシアからの質問にヒソカは、此処が何処なのかを説明し始めた。

此処は地上251階、高さ991mの天空闘技場という所で、一日平均4000人の腕自慢がより高い階を目指してやってくる場所だという。細かいことは端折られたが、現在ヒソカは200階クラスの選手であるらしい。

「明日は久しぶりに闘えるから、とつても楽しみなんだ? —— まあ、やり甲斐があれば、だけど?」

闘技場とは、一体どんなところなのだろうか。初めて知る事に少しだけ気を惹かれたアリシアは、頭の中で色々と想像を巡らせるのだった。

一方その頃、ヒソカに呆気ない程簡単に別れを告げられた天空闘技場の受付嬢は、未だにヒソカを諦め切れずにいた。

「—— ねえ、あの200階クラスのヒソカ様の……、聞いた?」

同じく受付嬢をしているもう一人が話しかける。嗜好きの彼女は、天空闘技場で働く職場仲間からこっそり教えてもらった話をよくするのだが、関係を秘密にしていた女は『ヒソカ』という名前に少し動揺しながらも、内に秘めて『何かあったの?』と冷静を装った。

「ヒソカ様の部屋にね、若い女性がいるんですって」

——女性。それを聞いて、女はほんの少しだけ心を揺さぶられた。

実際男と女の関係にはなったものの、ヒソカの部屋には一度も訪ねた事は無く、向こうからやって来るのをただ待つ身。秘め事であったので自分との噂ではなくて良かったとは思う反面、自分じゃない相手が気になってしまふ。

——もしかして。

女は、心当たりのある女性を一人思い浮かべた。

そういえば、前に一度だけ見てる。確かマチとかつて……。

ある夜、ヒソカの部屋の場所を訊ねて受付に来たマチという女性の事を、女はヒソカに問うた事があつた。

「……マチの事かい?」

名前を口にしたのに、直ぐにはぐらかされてしまった。けれどマチという女とヒソカの関係が嫉妬に値する男女の関係では無いと、外れを知らない自信のあつた女の勘が告げている。

「それって髪を高く、一つに結び上げている女性じゃなくて?」

「あー、聞いてるのと違うわ」

返つてきた予想とは違う答えに、女の胸がざわりとした。

「ルームサービスで部屋に入った時に見たらしいんだけど、ネイビーブルーの長い髪を垂らした美少女だそうよ」

——あの娘じゃない！

女は、胸を締め付けられる程の不安に駆られた。

マチという女は、ネイビーブルーの髪色じゃなかった！

「とても大事そうにその女性を扱ってみたいだから、実は恋人なんじゃないかって噂。ヒソカ様ってお顔は素敵だけれど、色々癖が有りそうだし……。そんな人の恋人って、凄く興味深いわよね」

愉快そうに噂を語る彼女に、『そうね』と女は愛想笑いを返した。しかし、隠して握ったその右手が、僅かな怒りを持って震えているのである。

——ねえ、ヒソカ。一体その女は誰なの？

一方的である深い嫉妬の念は、女の心の奥底でふつつつと湧き上がっていた。

独占欲という名のオシエ

その日ヒソカは、試合に出る為にアリシアを一人残して闘技場へと出かけて行った。

「試合は9時。このテレビからでも見れるよ◆? 興味があるなら見ると良い◆?」

そう前日の夜に教えてくれたので、アリシアは早くに起きてヒソカを見送るつもりだった。……が、ヒソカはアリシアが寝ている間に部屋を出てしまっていて、それを実行するには至れなかった。

やがて深い眠りから目覚めるように、アリシアの瞼はゆつくりと開かれる。見慣れたきた天井だけが見える筈なのに、開いた目の先に映るのは、見知らぬ青年の顔であった。

「……………誰?」

男の長い黒髪が、さらりとアリシアの頬に垂れた。

闇のように深くて黒い大きな瞳は、アリシアをじいっと見つめていた。男の顔の整った一つ一つのパーツには、感情が一切感じられない。

「キミン……誰? ていうか寝ただけか。てつきり死んでるのかと思った」

近付けていた顔を離し、アリシアの上から男は退いた。

——なんだか似てるわ。

男の長くて美しい髪もさることながら、その服装にも目を奪われる。起きたばかりの呆けた頭で思い浮かぶのは、ヒソカであった。

そうよ。ヒソカの格好に似てるんだわ。

上半身を起こし、小さく欠伸をしようとしたアリシアは、ふと思い出したように考えた。

——このヒトに、わたしはタべられてしまわないかしら？

見知らぬ誰かに対し、僅かな不安を持ったのは、自分を襲った男達の事が頭を過ぎったからである。

「わ、わたしはアリシア……」

ベッドの掛け布団で顔を半分隠しながら、アリシアは小さな声で名を名乗った。

「ふーん、アリシアね。——ま、別にキミの名前なんてどうでも良いけど」

男は一向に表情を変えず、開かれたままのドアからリビングへと出て行く。

謎の男の動向が気になったアリシアはベッドからそろりと出ると、その部屋からこっそりと男の様子を伺ってみた。

「——ねえ、ヒソカは？」

男はヒソカの居場所を訊いた。背中を向けたまま、アリシアには見向きもしないが。

「……し、試合に出るって」

「あつそ。でき、キミってもしかしてヒソカのセ——」

決して故意ではなかった。男の言葉を遮ったものないアリシアは、ベッドルームのドアから隠れ気味に体を出して、『友達よ』と答える。

「友達、ねえ……」

そう呟やいて、顔だけを振り向かせた男の暗い瞳はアリシアのつま先から脳天までを捉えた。

「……もしかして、あなたもヒソカのお友達？」

「違うね。まあ、面倒だから似たような感じで解釈してくれて良いよ」

その言葉を聞いた瞬間、アリシアは一気に全ての警戒心を解き放った。安心しきったような笑顔を見せながらベッドルームのドアを離れ、男の傍まで駆けるように歩み寄った。

「あなたもヒソカとお友達で良かった！」

突然気を許したアリシアに、男が『別に良くはない』と返そうとした時である。

「あー！」

またしても突然である。思い出したかのように声を上げたアリシアは、慌てて洗面台も備えてあるバスルームに駆け込み、急いで洗顔と歯を磨き終わると、ベッドルームに

走った。

慌ただしいなと思いつつ、男がベッドルームに消えたアリシアを見に行けば、何着かの服を見ては『うーん』と唸りながら考えている様子だった。

どうやら、ヒソカが何着もアリシアに服を用意していたらしい。

「もしかしてさ、何を着るか悩んでるのかい？」

男が抑揚の無い声で問いかける。

「これとこれ、どちらが良いと思うかしら？」

アリシアはどれを着ようかと迷っている二つの服を目の前に出した。

「そんなの自分で好きなように決めれば良いじゃないか」

「うーん。どれも素敵だから迷っているの」

「じゃ、それ」

めんどくさいなあと、手っ取り早く男が指差すのは、ゴスロリの赤いチエックワンピースの方だった。

「こっちなね！」

するとアリシアは、まだ会ったばかりの男の目の前でバスローブを脱ぎ、自分が裸になっっている事もお構いなしで着替え始めたのである。

一方の男は特に驚くでもなく、無表情だ。『変わった女だな』とだけ思っ、すたすた

とベッドルームからリビングへと戻った。

「ごめんなさい。着るのに少し時間がかかってしまったわ」

急いでリビングへと出て来たアリシアの格好は、男が選んだ赤いチュウクのワンピースに、黒の網タイツと赤いパンプス。頭の右上には、ヘアピンで留めるタイプのミニサイズの帽子が付いていた。

「本当なら直ぐにお茶を出すべきなんだけど、持ってきてもらわないといけないの。ごめんなさい」

「別にいらないし、いいよ」

ヒソカが帰って来るまでどうしていいようかと考えていた男は、そんな小さな事を気にもしていない様子だった。

「ねえ、そういえばあなたも、『てんくうとうぎじょう』の試合に出るの？」

「出ないよ」

はつきりと即答する男に『ふーん』と相槌を打ち、『あ、試合、見なきゃ』とアリシアは、テーブルの上に置いてあるテレビのリモコンを手に取る。

「まさかテレビで見るの？」

「ええ」

「直接観に行けば？」

「無理よ。タベラレテシマウから」

顔を曇らせて言う、アリシアの言葉の意味が男には理解出来ない。

「誰に？」

「ヒトよ。母様が言っていたの」

「ヒソカやオレも人だけど？」

「ヒソカはわたしを『タベナイ』って言ったわ。あなたは、ヒソカの友達だから……」

「友達だったら食べないとでも？」

ズイツと顔を近付ける男の瞳を見つめ返したアリシアは、少し間を置いてから首を横に振った。

「だって……。あなたわたしの事何とも思ってたなさそうなもの」

「うん。キミなんてどうでも良い。だから殺すことも簡単だけど、後が面倒くさそうだから止めておくよ。でさあ——」

男は唐突にアリシアを後ろに向かせた。

「ちよつとだけそっち向いてて」

それに何の疑問も持たなかったアリシアは、男に言われるまま素直に従った。

「はい。もう良いよ」

「——誰？」

許可がおりて向き直れば、今までそこにいた男ではない別の見知らぬ男が、カタカタと音を立てて小刻みに顔を揺らしながら目の前に立っていた。

顔や体には針のような物が無数に刺さっており、見た目とその小刻みな動作も相まって少々不気味ではある。

「誰でもないけど。ちよつとこの方が都合良くつてね」

声は先程の男のものだった。もしかや男の変装か。気付いたアリシアは興奮気味に、『凄い！ どうやったの？』と目を輝かせた。

「そんなことよりさ、近くでやってんのにテレビなんかで試合見るなんてどうかしてるよ。外へ出て観に行けば？」

「で、でも……」

「行きたくなければ此処にいればいいんじゃない？ ま、オレは観に行くし」

一人でスタスタと部屋から出て行こうとする男の背中を見つめては、母やヒソカの言葉が頭を過ぎる。

——行っちゃ、ダメよ、ね？

けれど、気はそちらへと惹かれてしまうのだ。

「わ、わたしも行くー！」

男を呼び止めるように、悩んだ末のアリシアは勇気を振り絞って言った。

この部屋から一步、また一步と外に出る。ただの廊下の筈だが、何だかとても息苦しい。先に前に行く男は気にもしてないので、アリシアは置いて行かれぬよう必死で付いて行つた。

ヒソカ、怒るかしら——？

不安に駆られたが、ここまで出てしまつてはもう遅いのかも知れない。

エレベーターという物に初めて乗り込んだ時、中にいた女性がこちらを見て不思議そうにしていたが、特別それに対して気になる事はひとつも無かつた。それよりも、エレベーターに乗った時の初めての浮遊感の方が、今のアリシアには勝つていたからだ。

エレベーターを降りたアリシアと謎の男が、闘技場がある会場へと向かつている丁度その頃——。噂好きの受付嬢が、アリシアの姿を知っている従業員と一緒に歩いている途中、偶然にも二人を目撃していた。

「大変大変っ！」

急いで例の受付嬢の女を見つけると、周りを少し警戒しながら声をかける。

「どうしたのよ。そんなに慌てて」

「この前話した、ヒソカ様の部屋にいる女性を目撃したの！ さつきー！」

「え？」

「見た本人が『件の彼女だ』って教えてくれたんだから、絶対に間違いないわ」

それを聞いた女は動揺してか、『どんな娘だったの?』と身を乗り出しながら詳しく訊き出そうと必死になっていた。

「話しに聞いた通りの目を惹く綺麗な女の子だったわね。バツチリ覚えちゃったし」

「一人で?」

「知らない方と一緒に歩いてたの。闘技場がある会場へ。会場から戻って来る時に此処を通る筈だから、見かけたら教えてあげるわね」

「ありがとう……」

疑惑の相手を、早くこの目に収めなければ。女の胸の奥にある、どす黒い炎は燃え盛り、更に熱を増したのだった。

「此処が会場だよ」

闘技場であるという大きな建物の入り口前には、多くの人集りが既にあった。

「観る為にはチケット買わなきゃいけないんだけど……」

ちらりと、真横に立つアリシアを見る。

「ちけつと? どうすればいいの?」

「……まあ良いや。後でヒソカに請求するから」

男は溜息混じりに独り言を呟くと、一人でチケット売り場まで歩いて行った。

初めて見る大きな建物や会場。沢山の人の数に圧倒されながら、周りの様子にアリシアは興味津々。

「ヒトってこんなにもいるのね、凄い！」

「付いて来なよ」

購入して戻って来た男と共に、会場の客席入り口を通って中へと入れば、今まで見た事もない大勢の『ヒト』の数に、アリシアは興奮した。

「この席だね」

男は右側に座り、アリシアは左側に座る。その席からステージは距離があつて、下の試合が小さく見えてしまう。すると何かを察知してか、男に大きなモニターを指さされ、『あれに映るよ』と教えてくれた。

「何だかドキドキするわ……」

アリシアと針男の、一見して異色である二人の姿は、その格好も去ることながら周りの視線を多く浴びていた。

男はその主な視線の多くがアリシアに向けられている事に気付きはしたが、そのまま知らぬフリをしておいた。

やがて観客席を照らす明かりが消されると、真ん中のステージにスポットが当てられた。遂に試合が始まったのである。

「ヒソカ対ムノの対決です!!」

どこからか聴こえてくる女性アナウンサーの声が会場中に響き渡り、会場にいる観客達が、一斉に始まりを喜ぶ声を上げる。

——凄い。周りに圧倒されつつ、ステージ上に現れたヒソカと対戦者のムノに、アリシアの目は一気に釘付けになった。

「あー！ ヒソカだわ」

「この試合……、直ぐ終わるね」

隣で顔をカタカタと揺らしながら冷静に語り出した男に、アリシアは問いかける。

「すぐ？ どういう意味？」

「まあ見てなよ」

言われた通りにアリシアは、ステージからヒソカと対戦相手を映すモニターへと目を向ける。

ヒソカの顔は本当につまらなそうな顔付きで相手選手を見遣っていて、『期待ハズレなんだけど♣？』と不満を吐露していた。

その台詞にカチンと頭にきたムノは、審判の合図と共に先に動き出すと、手からナイフを出して、目に見えない速さでヒソカに攻撃をしかけた。

危ない。悲鳴を上げそうになったアリシアは、思わず両手で口を抑える。

「おおっと！ ムノ選手が先手に出ましたが……」

ムノの攻撃をいとも簡単に避け、くるりと華麗にムーンサルトを決めたヒソカは、一瞬のうちにムノの背後に回って背中を蹴り飛ばした。

「せつかちだなあ………」

「今度はヒソカ選手が反撃です！」

ヒソカは、倒れて起き上がるうとするムノを、今度は正面から蹴り上げる。腹部にヒットし、転がり起きたムノには苦痛の表情が。

「ぐっうっ………」

腹を押さえながらヒソカを睨み上げると、もう一度手からナイフを出した。

アリシアはその手に現れたナイフをじっと凝視しながら、隣で静かに観戦する男に質問を投げる。

「ねえ、あの手のまわりの、ボワツとしたのは何？」

男はムノの手を見た後、隣のアリシアに視線を移した。

「……さあね。後でヒソカに教えてもらいなよ」

素っ気ない返事をして、男は再び試合へと目を戻す。

「くそおお……!!」

吠えるように声を荒げたムノが再度ヒソカに攻撃をしかけようと駆け出し、後ろに素

早く回り込んだ。

「懲りないなあ♣?」

飄々たる態度のヒソカが、また薄い笑みを浮かべた時である。

何だか……。

徐々に動悸が激しくなるのを感じる。アリシアが両腕で自身を抱きしめるように俯いていると、その周りに座っていた観客達が、次々にざわつき始めた。幸い、そのざわつきは他の観客達の罵声や声援で掻き消されて、特別目立ちはしなかったのだが。

「——おい、なんか良い匂いしねえか?」

隣でカタつく男は、ボソリと静かに聴こえてきた誰かの声に耳を傾けた。

「ああ、なんか甘い良い匂いだ……」

次々とそのような言葉が交わされる中、男の鼻先にも甘い香りが漂ってきた。

視界に入れていた、隣にいるアリシアを見遣れば、うずくまるようにして震えているのに気付く。

甘い——。

なんとも言えない、今まで嗅いだ事のない甘い匂いは、間違いなくアリシアから匂ってきている。

——さつきまで匂いなんてなかったのに。

アリシアから発する匂いに意識を取られていると、突然アリシアが席を立ち上がった。

「あ、あの。わたし、外に出ているわ……」

男にそう伝えると、アリシアは慌てて会場から出て行った。

アリシアが去った後の周りの様子といえば、『匂いがしなくなつた』や『もつと嗅ぎてえ匂いだ』などの小声がするものの、暫くすると何事もなかつたかのように皆、試合へと集中したのだった。

会場を一人で出たアリシアは、近くに設置されていたベンチにもたれかかるようにして腰を下ろした。

晴天の空に顔を上げて深呼吸。先程の激しい動悸はもう治まっている。観客達の熱気にやられたせいなのだろうか。アリシアは何故だか、忘れそうになっていたあの日の事を頭に過ぎらせた。

「そうよ、あの日わたしは……」

——血に塗れていた。

ぎゅつと両手を握り締めながら辺りを見回してみる。

——あの森は、一体どこなのかしら？

今なら森へ戻れるかもしれない。勢いに任せて立ち上がってはみたものの、一步踏み

出そうとした足が止まる。ヒソカの言葉を思い出したからだ。

『だけどアリシア、外にはキミを食べてしまう人間達がいるよ♠？ キミは騙され易いし、あつという間だしね？』

——怖い。

外にひとりでいるのが急に恐ろしくなって、会場へと戻ろうと体を向けるのだが、どうやって出て来たのかあまり覚えてはおらず、入り方すらもよくわからない。

悩んだ結果、アリシアの足は会場へ戻る事なく、ヒソカの部屋に帰る道を選んだ。

——あれ、どっちだったかしら？

迷ってしまったのだろうか。来た道をはっきりと覚えていなかったアリシアは、選手用の施設前で立ち尽くしながら、『どうしよう』と焦っていた。

「道に迷ってしまったのですか？」

澄んだその声に振り向けば、そこには優しそうに微笑む、制服を着た女性が一人立っていた。

「もしかして、お部屋の戻り方をお忘れに？」

こちらに話しかけてくる女性を、少し驚いた表情で見つめていたアリシアは、返事の代わりにこくりと一度頷く。

「あなたは……、ヒソカ様のお連れの方ね。お部屋はわかりますから、案内致しますね」

にこやかな笑顔を向けてくる女性の親切な心遣い。アリシアは嬉しさと頬を染めると、その女性の案内に付いて行く事にした。

「さ、こちらですよ」

女性のわかりやすい案内によって、アリシアは無事部屋の前に戻る事が出来た。

「あ、あの、ありがとう」

「いいえ。……では、これで失礼します」

優しさに感動したアリシアは、立ち去ろうとする女性を引き止める為、自ら名を名乗って呼び止める。

「あの！ わたしはアリシア。あなたのお名前は？」

「……私は、この天空闘技場の受付嬢をやっている、メルサです」

わからない事があれば、是非声をかけて下さいね。最後にそう答えて、メルサと言う女性は廊下の奥に去って行った。アリシアはゆっくりと部屋のドアを閉め、はあ、と小さな息を吐くと、目の前のソファへと飛び込んだ。

「嬉しい！ 女のヒトと会話ができるなんて！」

あまりの嬉しさに、ヒソカの試合や森の事が一気に吹き飛んでしまったようだ。

「……うふふっ」

思い出す度に笑みがこぼれ落ちる。ソファに仰向けで寝転がるアリシアは、いつの間

にか部屋に戻って来た男に無表情で見下ろされてる事に気づくと、バツと勢いをつけて飛び起きた。因みに、男の姿はもう元に戻っている。

「戻ってたんだ。迷子にでもなってるかと思ったよ」

「ねえ、聞いて！」

アリシアは跳ねるように近付くと、顔をほころばせながら男を見上げた。

——また、だ。

ふわりと、あの独特の甘い匂いがする。男はアリシアの首元に顔を近付けて、その匂いを深く鼻で吸い込んだ。

「キミ、良い匂いがするね。甘い匂いがする」

「え？　におい？」

アリシアは、自身の腕や肩の辺りを嗅いでみた。けれど、男の言う甘い匂いなど少しもしないのである。

「甘いにおいだなんて……。わたし甘いものなんて食べてないし、ちつともにおわないわ」

不思議そうに男を見つめると、無表情ではある男も『じゃあ何で匂ってんの？』と、言わんばかりにアリシアを見つめ返した。

「——やあ、イルミ、来てたんだね◆？」

出入り口のドアの方からの見知った声に二人が振り向けば、これまたいつの間にか帰ってきたらしいヒソカがそこにいた。

「ヒソカ！ おかえりなさい！」

「ただいま◆？」

笑顔で迎えたアリシアに笑みを見せ、ヒソカは二人に近寄って来る。

「『やあ』じゃないよ。一体いつまで待たせる気？」

「ごめんごめん◆？ でもイルミ、いつの間にかアリシアと仲良くなつてたんだね♥」

「仲良くはなつてないけど」

「そう？」

「そんな事よりもさ、用件、さっさと済ませたいんだよね」

「ああ、ちよつと待つてて◆？」

ヒソカはアリシアの肩をそつと抱いて、『少し此処にいて◆？』とベッドルームにアリシアを移動させてからそのドアを閉めた。

「お・ま・た・せ♥」

「もしかしてさあ、ヒソカが言つてた"おもちゃ"つて、あの娘この事？」

「うん◆？」

「相変わらず変わった趣味だね。全く理解出来ないよ」

男の言葉に対し、ヒソカはくつくつと戯けながら笑った。

「ねえ、イルミ♣？ 彼女をこの部屋から外へ出しただろ？」

「ああ、連れ出したよ。いけなかった？」

「別に♠？ —— 試合中さ、アリシアの熱い視線とキミを感じたんだ♥ だから直ぐにわかった」

「へえ。なんかテレビで試合見るとか言ってたからさ、わざわざ近くにいて生で見ないってのはナイだろ？ だから観に行つた。でも、強制はしてないよ」

「ふーん……◆？」

「連れて思ったんだけど——」

男は言いかけて、近くのソファアに腰をかける。

「ただ歩いてるだけなの目立ってしようがなかった」

「際立つてる端麗さがあるからね♠？ 人は美しいものに目を奪われる◆？」

「後さ、あの娘のアノ匂い……何？」

—— におい？

一瞬、何の事を言っているのかと考えたヒソカだったが、それには心当たりがあった。

「ああ、あの不思議な甘い香りかい？」

「特殊な念かなとは思つたけど、そうでもないし。そうそう、念は使えるみたいだね。擬

を使ってオーラを見てたよ」

「アリシアは無意識で念を使ってるんだね◆？」

「無意識？」

「くつくつくつ◆？ 色々あるんだけど、知りたい？」

「別に。あ、チケツト代、よろしく」

急かされた割には長々と会話をした二人が用事の内容を簡潔に済ませると、男は『それじゃあ』と一言だけ残して出て行った。

「終わったよ◆？」

ベッドルームのドアを開けると、ベッドの上でうつ伏せに寝転んでいたアリシアが、ゆっくりと振り返りながら起き上がる。

「ヒソカのお友達は？」

「イルミの事かい？ 今さっき帰ったよ◆？」

「イルミっていうのね、あのヒト。あのヒトもとても親切だったわ」

「ボクの試合どうだった？」

アリシアは『しまった』と、焦りの表情を露わにした。

「ごめんなさい。ヒソカに黙って外へ出たわ。後、途中で気分が悪くなって、最後まで見れなかったの……」

しよんぼりと反省するアリシアに、ヒソカは口角を上げて手を差し伸べる。

「さあ、バスルームへ行こう◆?」

出された手とヒソカを交互に見つめ、アリシアは少し戸惑いながら、恐る恐るヒソカの手に触れた。

「……叱らないの?」

「別に◆?」

ヒソカは、微塵も怒ってなどいない様子であった。

「やっぱりその服も似合うね◆?」

アリシアの格好を褒めるヒソカは、『選んで用意した自分のセンスに間違いはなかった』と自負し、満足気に目を細めている。

「今日、どれを着ようか迷ったの」

今日の服選びを思い出したアリシアは、悩んでいた服をイルミに相談した時の事をヒソカに伝えてみた。

「イルミにどれが良いか訊いたら、この服が良いって!」

ヒソカの笑みに釣られたアリシアが笑顔を向ければ、瞬きの間にヒソカの表情が凍りつくのが垣間見えた。

「そう◆?」

何か間を感じたようにも見えたが、気のせいだったのかもしれない。ヒソカは変わらずに口角を上げたままで、『さ、早く脱いで◆?』とアリシアを急かしている。

「先に入っててくれるかい? ボク、ちよつとだけ用事を済ませるから◆?」

アリシアを先に入れたヒソカは、一旦一人でバスルームを出た。その手には、つい今し方までアリシアが着ていた赤チエツクのワンピースがある。

「用意したのはボクだけど、それでもボク以外の奴に選ばせた服なんて……、もう必要ないつ◆?」

ヒソカはまるで汚物を見るようにワンピースをぐしゃぐしゃに丸めると、出入り口のドアを開けて適当に投げ捨てた。そして部屋に備えられている電話の受話器を手に取り、フロントにかける。

「……悪いんだけど、廊下に捨ててあるのをさ、処分しといてほしいんだ◆? 今直ぐにね◆?」

その事を頼み終えると、ヒソカは受話器を置いて嬉しそうにバスルームへと向かった。

途中、ふと足を止めたヒソカは思う。もしかしたらアリシアはイルミの前で着替えをしたのかもしれない、と。バスタブに入ったら真つ先にその事についての話を切り出すのと、『ボク以外の前での着替えを止めるように教えなくちゃ◆?』と考えながら、ヒ

ソカは鼻歌交じりにアリシアの待つバスルームのドアを開けるのであった。

アイの呪い

「じゃあ行つて来るよ♣?」

アリシアをひとりで残し、ヒソカは外出する事がある。行き先なんて言わないし、アリシアも訊きはしない。その日に戻つて来たり、二日後だったり、時には数日だったり。そんなヒソカから決まつて臭うのは、微かな鉄の臭い。

——この臭い、好きじゃない。

臭いに関して深く追求するつもりは微塵も無い。それよりもつと、アリシアの思考を奪っているものがあつたからだ。

イルミが来た日に出会つた、メルサという女性。彼女に興味を持つてしまったアリシアは、出入り口のドアの前にかれこれ1時間は立ち尽くしたままである。

——メルサとまた会つて、お話がしたいわ。

けれど、この部屋から一人で勝手に出ても良いとは言われていない。……なので、ドアノブさえ回すのが躊躇われていた。

でも……。

気持ちは抑えきれなかった。

暫く悩んだ後、勇気を振り絞り勢いに任せてドアを開けたアリシアは、音を立てずにそろりと部屋の外へ出る。

——大丈夫よ、直ぐに戻れば良いんだから。

アリシアは思うままに走った。道順はメルサのおかげで覚えていたようで、もう迷うことはない。エレベーターを降りて受付がある場所を探せば、直ぐ目の前の筈だ。

「あつた……！」

そこへ向かおうと、足を一步前に出した時である。

「どうしました?」

誰かに声をかけられて、アリシアは反射的に振り向いた。

「メルサ……！」

会いたかったメルサがそこにいた。

それはメルサも同じだった。だがアリシアとは違い、嫉妬に対する憎しみの感情が含まれている。

「どうしてもアナタに会って、もう一度お礼を言いたかったの……！」

アリシアはふわりと笑いかけ、メルサに近寄った。

「それでわざわざ……」

アリシアから漂う不思議な甘い香りに、ざわりとざわつく何かを感じたメルサは、唇の端を上げて微笑み返す。

「メルサ、あの……ね」

急にもじもじとし始めたアリシアは、顔を少し赤らめながら下を向いて告げた。

「わたしと、お友達になつてほしいの」

その言葉を聞いたメルサは、心の中でほくそ笑んだ。

「私で良ければ是非！」

「本当？」

「ええ」

メルサの返事に歓喜したアリシアは、思わずメルサの両手を取つて握り締めた。

「ありがとう！ 女のヒトの友達なんて、わたし初めてなの！」

その後のアリシアはというと、とても喜ばしい気持ちで一杯になりながら、嬉々として部屋へと戻つて行つた。そんなアリシアの様子を薄ら笑いで見つめていたメルサ自身も、ひとり喜びにうち震えていた。

——なんておバカさんなの。せいぜい友達ごっこを楽しんでおくといいわ。

そう、メルサの目的はアリシアを貶める事。嫉妬に絡む女の憎しみが、何も知らない

アリシアに注がれていたのである。

それからというもののアリシアは、ヒソカが出掛けていなくなったのを見計らう度、こっそりとメルサに会いに行くようになった。

メルサは仕事の合間を抜け出し、アリシアに優しく話しかけたりする事でアリシアとの仲を深めていった。初めは周りにバレないかとヒヤヒヤとしたものの、アリシアは意外にもこっそりと会いにやって来る。お陰で他の同僚にはアリシアとの事を変に知られる心配はなかった。

「ヒソカ様は今日もいないの？」

「ええ。だからメルサに会いに行けるの」

「まあ。ひとりで寂しくない？」

「さみしい？ いいえ。今まで一人だったもの。だけど、ひとりだとなまらない日もあ
るの。でも、でもね、今はメルサに会えるからとっても楽しい！」

清らかで明るい花のように美しく笑うアリシア。それを眩しく感じながら『恨めしい
……』と、メルサの心はどす黒く沈んで行った。

一週間後。ヒソカが戻ってきた。

勿論、ヒソカにはメルサの事は秘密だ。内緒で出て行く事に対してのスリルと興奮も
相まって、生まれて初めての嘘に罪悪感はあまり無い。

「随分と楽しそうな顔をするじゃないか◆？　ひとりで退屈じゃなかったのかい？」
「いいえ、全然」

ニコニコと嬉しそうに笑うアリシアのあの甘い香りは、更に強く放っている。ヒソカは目を細め、じいつと熱くアリシアを見つめた。

「退屈しないんだっいたら良かった◆？　戻ってきたばかりだけど、今からまた出掛けなくちゃいけないんだよね◆？」

「そうなの？」

「だからアリシアは、おとなしくこの部屋で待っているんだよ？」

「うん！　いつてらっしやい」

「いつてきます◆？」

ヒソカがまた出掛けて行った。アリシアは暫くソファに座ってそわそわとしながらテレビを見た後、はやる気持ちを抑えきれずに、出入り口のドアノブを回した。開けたドアから顔だけを出して辺りを確認すれば、アリシアは心躍るように走った。目的は勿論、メルサに会いに、である。

アリシアが出て行ったのを見計らって直ぐ、死角になっっている曲がり角からこつそりと静かにヒソカが現れた。

「ふーん……◆？　やっぱりね◆？」

ヒソカは何となく勘付いていた。『出掛ける』と嘘をついて、アリシアが部屋から出て来るのを待っていたのだ。

「あらアリシア」

受付付近でメルサに近づけば、メルサはアリシアがやって来るのを待っていたようだった。

「どうしたの？」

「またひとりになれたから、メルサに会いに来たの」

一見して仲良く微笑み合う二人を遠目に、ヒソカは少し驚いていた。

「まさかアリシアがボクに黙ってまで会いに行った相手が彼女とは……◆？」

なんとも意外とは思いつつ、ヒソカの視線がメルサに向けられる。

「なるほど……◆？」

切れ長の目を更に細めて、ヒソカは踵を返した。

それから数分後。アリシアはいつものようにして部屋に戻ってきた。

「おかえり◆？」

そう背後から声をかければ、アリシアは小さな悲鳴を上げて振り向いた。

「ひ、ヒソカ……！」

「ひどいなあ、アリシア◆？」

「で、出かけたんじゃないなかったの？」

「出掛けたフ・リさ♥」

動揺しているからだろう。思わず後退りしてしまったアリシアを奥へと追い詰めるように、ヒソカは薄く笑いながらじりじりと迫った。

「あ、あのね、イルミが来た日に初めて会ったの。メルサと」

「メルサ？」

「とても親切にしてくれたから、また会ってお礼を言いたかっただけなの」

遂に壁が背中が当たった。これ以上後ろには退がれない。アリシアは冷や汗を流しながら、近づいて来るヒソカを見つめた。

「メルサはとても優しく、お友達になったの、わたし達。だから……」

目の前まで来たヒソカを、アリシアはただ見上げるしかない。何を考えているのだろうか。ニイつと口の両端を上げるヒソカは、アリシアの顔ギリギリまで自分の顔を近付けた。

「ボクに内緒で外へ出る気分は最高かい？……興奮、しただろ？」

ぞくりと背筋を凍らせ、逸らせない瞳を怯えながら見つめ返せば、ヒソカは舌先でペロリと自分の唇を舐めた。そして右手でアリシアの髪の毛先に触れる。

「……そんなに、怯えなくてもイイのに◆？」

髪からやがて頬へ。触れたままの手は更に首へと下がり、そつと首元へ。

「ご、ごめんなさい」

「アリシア、ボクが言った事忘れたのかな？ 『キミは騙されやすいから、食べられてしまふよ』って◆？」

「……メルサは、メルサはわたしを騙してなんかいないわ」

「本当に？ 彼女がそんなことをしないと、本気で思ってるのかい？」

「メルサは違う」

ヒソカの言葉に少しだけ胸の辺りがむかむかとしたアリシアは、初めてヒソカを睨み上げた。今まで生きてきて、相手を睨むなどした事もないのに。

——ボクを睨みつける顔も、堪らなくイイね◆？

そんなアリシアに対しヒソカは随分と余裕で、しかも嬉しそうである。

「ヒソカは、なんでそんなことを言うの？」

「ボクはアリシアの為に忠告してあげてるだけ◆？」

アリシアはヒソカから目を逸らし、不満気に口を尖らせた。

「メルサは違う！ わたしを騙してタベたりなんかしないわ！」

アリシアはヒソカを力一杯押しのと、走り去るようにしてそのまま部屋を出て行ってしまった。

「やれやれ……？◆？」

アリシアの去った方向に視線を向けながら、ヒソカは一人呟いた。

「……少し、甘やかし過ぎたかなあ◆？」

飛び出したアリシアが向かった先は、メルサのいる受付である。いつもなら受付の前まで行かずとも、メルサが気付いてこちらにやって来るのだが、流石の今回はメルサも予想だにできなかった。

「メルサー！」

息を切らしてやって来たアリシアが目に入り、メルサは一瞬で肝を冷やす。

「あれ？ 彼女……」

メルサの隣にいた噂好きの受付嬢は、受付に現れたアリシアの姿に気付いた様子だった。

「どうかなさいましたか？」

メルサは隣の同僚である受付嬢を気にしつつ、そこから離れるようにアリシアを連れて外へ出た。

「どうしたの？ 突然。さっき会ったばかりなのに」

「あの、な、なんでもないの。ただ、メルサに会いたくて」

「そう……」

視線を外へとやれば、もう空は夕闇に染まりつつある。

「——アリシア。私、もう少しで仕事が終わるの。だからちよつと此処で待つてて」「うん」

外にアリシア一人をベンチに残し、メルサは建物の中に戻って行った。

——いつまでも馴れ合いごっこなんてやってられない。今日で終わり、こんな事！メルサは急遽、『アリシアを貶めるといふ目的』を実行する事に決めたのであった。

「さっきのヒソカ様の？」

メルサが受付に戻って来ると、案の定、噂好きの彼女はそう訊ねてきた。

「なんか場所を教えてほしいって訊かれてしまったのよ」

「なあんだ、そうなの？」

適当に返したのに、意外にもあつさりと彼女は納得してくれた。それはきつと、別の話のネタ収集に夢中であつたからだろう。

メルサが終わるのを待つて数分後。空はすっかり闇色になった。辺りは建物の中から出る明かりと、周りに備え付けられている照明に照らされていて、決して暗くはない。

——メルサ、まだかな？

少しだけ肌寒く感じる。メルサの事やヒソカから逃げるように飛び出してしまった

事が頭を過ぎり、アリシアは小さな溜息を吐いた。

「お待たせ」

それから少し待っていると、メルサがやっと現れた。

「メルサ、いつもとは違う格好ね」

私服姿はこの時に初めて見た。いつも見るメルサの姿は天空闘技場の受付嬢の格好であったが、今回は違った。タイトなミニの黒いワンピース姿のメルサは、どこか色気の漂う艶やかな女性に思える。

「私だって、仕事が終われば普通の服に着替えるわ」

「素敵なお洋服ね」

「アナタの服も素敵じゃない」

「ヒソカがプレゼントしてくれたの」

「……そう」

顔が引き攣りそうになるのを堪えつつ、メルサはアリシアの前を歩き出した。

「どこに行くの？」

「お散歩よ。こここの敷地には近くに森林があつてね」

「森林……」

もしかしたらあの森なのだろうか。と思ったアリシアは、少し気乗りがしない。けれ

ど、メルサと散歩が出来る喜びの方が今は勝ってしまっている。

「ねえメルサ、星が綺麗よ」

夜空の星を眺めながら歩き、少し前に行くメルサに声をかけた。

「そうね、とても……」

——彼がやって来る晩は、いつも星が綺麗だった。

ヒソカとの情事を思い浮かべ、メルサは胸の辺りをギュツと押さえた。

——この女がいなくなれば。

自分でも信じられないくらい醜い嫉妬心、愛憎。ヒソカとアリシアへの憎しみを募らせる日々に、やっと終止符が打たれようとしていた。

「メルサ、そっちは真つ暗よ」

「大丈夫、月が照らしてくれるから」

森林の奥に進むメルサに対して何の疑問も持たないアリシアは、自分達を照らす丸い月に目を細めて微笑んだ。

やがて奥まで暫く歩いた頃だろうか。辺りはすっかり森林に囲まれて、人の気配すらない場所にやって来た。目の前には大きな泉もある。

「メルサ？」

その場に立ち止まったまま動かないメルサに、アリシアは名前を呼びかける。する

と、周りの草影から歩いて来る音がして、三人の柄の悪い男達が現れた。

「メ、メルサ……?」

思わずメルサの側に寄つたのは、初めて会つたあの男達を思い出して恐くなつたからだ。

「アリシア」

メルサは、今まで見せた事のない冷たい表情をアリシアに向けた。

「……あんた、目障りなのよ」

「あー!」

メルサに突き飛ばされたその反動により、アリシアは地面に尻餅をついた。

「ど、どうしたのメルサ?」

メルサの行動が信じられなかった。見上げれば、唇の両端を少し弓なりに下のほうへ曲げ、アリシアを蔑むように笑っていた。

「——馬鹿な娘」

「え……?」

「今まで親切に友情ごっこをしてあげたのはね、アンタを陥れる為なのよ」

「メルサ?」

「まだわかんないの? あんたは此処で、めちやくちやにされちゃうの! 使い物にな

らないようにね、……アハハ！」

嘲笑うメルサに唾然とするアリシアは、こんなのは嘘だという悲痛な目を向けて、自分を蔑んでくる女を見つめた。

「嘘よ。メルサは違う」

「何が違うの？ 全部本当、これは現実なの」

「メルサは、お友達だって……」

「まだ言ってるの？ 私はあんたが大嫌い、憎いの。今すぐにも消えて欲しいの。あの人の……、ヒソカの傍からいなくなれば良いのよ！」

凄まじい形相で罵倒しながら、メルサは声を荒げる。そんなメルサの口から出たヒソカに、アリシアは何故と疑問に思った。

「ヒソカ……?」

「そうよ。ヒソカの傍にいるあんたなんか……、死ねばいいんだわ！」

メルサは男達に『好きにどうぞ』と言い捨てると、アリシアの顔も見ずに去って行く。

「……ま、待ってメルサ！」

慌てて追い掛けようとするれば、三人の中の一人の男に腕を引っ張られ、地面に突き飛ばされてしまった。

「きゃあー」

「ギャハハ！ 哀れなやつだなあ」

「お前の事は好きにさせてもらうぜ。……たつぷりな」

一人に胸元を乱暴に掴まれて、服の前ボタンの部分が引き破られた。

「あー！」

抵抗しようにも三人に押さえ付けられて、アリシアの力ではどうしようもない。

——メルサは違う、わたしに酷いことなんてしたりしないわ！

アリシアは、メルサの優しい笑顔を思い出していた。

騙したり……。

『今まで親切に友情ごっこをしてあげたのはね、アンタを陥れる為よ』

——友達なのよ。

『ヒソカの傍にいるアンタなんか、死ねばいいんだわ！』

違う。メルサは……！

アリシアの目の前が歪んで見える。初めて森を抜けた時、初めて出会った男達にタバ
ラレソウになったあの日とリンクしたように、興奮しながら衣服をまさぐる男達を見つ
めた。

「メルサあ……！」

大粒の涙がぼろぼろと、止まりを知らずに流れ落ちる。浮かんだメルサの嘲笑う顔

が、ノイズ混じりにプツリと消えた。

「つやだ、タベラレタクナイ!!」

そう叫んだ刹那――。

「うぐっ!」

三人の男達は、突然ピタリと動きを止めた。そして苦しそうに顔を歪め始めたかと思うと、少しずつ地面から体を浮かせていくのである。

「……あ」

それに驚いたアリシアが解き放たれた身体を慌てて起こし、徐々に浮いていく男達を交互に見つめれば、男達の身体が段々と膨らんでいつているのがわかった。

「ぐぐぐ……っ!」

苦しそうに喉元を押さえ、顔中に血管を浮き出させ、眼球も飛び出しそうな勢いであった。まるで風船のように膨らんでしまった男達は、それから瞬く間もなくアリシアの目の前でパアンと弾け割れたのである。

臓物等の形も残さず細かい飛沫が雨粒の様であった血は、アリシアの頭上に降り注がれた。

「あ、あ、あ……っ」

あまりの衝撃にショックを受け、上手く声も出せない。

これは、一体これは……、何？

顔を拭つて掌を広げて見れば、月の光りに照らされてハッキリとそれが見えた。——
真つ赤な血である。生臭い鉄の臭いが、アリシアの鼻を酷くついた。

「うっ……」

臭いに反応してか、吐き気に耐え切れずにその場で嘔吐した。血の臭いは纏わり付いていて、アリシアから離れない。

「う、はあ、はあ……っ」

泉が視界に入り、アリシアは足をもたつかせながら必死になつて飛び込んだ。

「……っだ、やだ、やだ、やだあ！」

早くこの臭いを取りたい、洗わなきゃと、全身に浴びた男達の血を、泉の水で洗い落とそうとしたのである。

一方でメルサは、未だ森林の中を一人で歩いてきた。アリシアを置いて帰る事に微塵も心は痛まない。むしろ清々しいとさえ思っていた。

——今夜はぐっすりと寝れそうだな。

晴天の如く微笑を口角に漂わせたメルサの背後で、何者かの気配がした。——否、メルサはそれが誰であるのかを知っている。

「心は晴れた？」

決して忘れる事の出来ぬ相手の声に、胸は高鳴る。メルサは急いで声のした方へ振り向いた。

「ヒソカ……!」

「随分と悪趣味だよね◆? それとも、イイ趣味してるって言った方が良い?」

トランプ一枚を片手で何度も出し入れするヒソカは、メルサに妖しく微笑みかけた。

「見てたの……?」

「うん◆? 途中からだけど◆?」

メルサに言い知れぬ緊張が走る。

「あなたを愛してたからよ! あなたを愛して愛して、憎くて憎くて……。あんな娘さえないなければ、いなくなればって! だから——」

涙を流しながら訴える哀れな女。そんなメルサを見つめながら、ヒソカは堪らなく可笑しく思った。

「だからアリシアを騙してあんな事を? ……本当、キミって滑稽なんだけど◆? それをボクに言ったところでどうなると言うの? 期待に応えらるても?」

「あなたを愛してるの……」

「ソフフ……。薄っぺらいね◆?」

緩んでいた口元が下がり、冷たい表情へと変化する。

「キミはボクの大切な玩具を酷く傷付けた。——ボクよりも先に、ね◆？」
ヒソカの周りのオーラが揺らいだ。

「……殺すの？」

「勿論◆ そのつもりだよ◆？」

「今頃あの娘はどうなってるかしら？」

動揺させるつもりだったのか。アリシアの今の状況を口に出すも、ヒソカの表情は一つも変わらなかつた。

「彼女はね、キミなんかよりもずっとずっと素晴らしい強さを持っているよ◆
？ 今頃あの三人の男達は、形も残ってないんじゃないかなあ？」

そう言つてペロりと唇を舐めるヒソカに対し、もう引き返す事の出来ない恐怖を感じたメルサは、退がるでもなく前へ、ヒソカへと向かつた。

「あの娘も所詮、あなたにとつてはただの玩具。いずれは飽きたらゴミの様に棄てる！
……なんて残酷なのかしら」

「——そんな残酷なボクを、キミは愛したんだろ？」

メルサは自らを嘲笑うかのように、『ええ……』と力なく答える。

「本気で人を愛する感情なんて、あなたはわからないんでしょうね」

「そうだね◆？ でも、大切な果実を大事に愛でる気持ちはあるさ◆？」

「それは本当の愛じゃないのよ」

「……面白いことを言うね♣?」

メルサは瞳から更に一滴涙を垂らし、ヒソカを愛おしむように見つめた。

「あい、し——」

瞬きをする間も無かった。何かを言いかけたメルサの首が、身体から離れてしまったからだ。

「今度こそ、ささようなら♣?」

ごろりと地面に横たわるメルサの瞳は、最期までヒソカを映していた。

開かれたオモチヤ箱

「やだ……いやあー！」

必死になって泉で血を洗うアリシアは、先程の出来事を頭の中で何度もフラッシュバックしていた。半ば半狂乱になりながら、泉にいた魚や、たまたま側にいた小動物等もアリシアの視界に入った途端に、あの恐ろしい光景のように。パァンと弾け割れてしまったのだ。

「やだあー！ 助けて母様あつー！」

——わたしはどうしてしまったの？

泉の中で身体を震わせ、アリシアは声を押し殺して泣いた。

小さな嗚咽が森林に響き渡る。その声と血の臭いを頼りに、ヒソカは奥まで進んだ。心配を消して来てみれば、月明かりに照らされた血の雨の跡を見つけた。

——やっばりね♥

アリシアは念能力で再び人を殺した。残忍たるアリシアの念能力。一度だけ見たあ

の惨たらしい光景は、今もヒソカの脳裏に焼き付いて離れない。

「あ、いたいた◆？ アリシア♥」

泉から離れている細い木の横から、ヒソカはアリシアに声をかけた。

「ヒソカ……っ」

アリシアは体をびくりと震わせながらも、決してそちらを振り向こうとはしない。

「来ちゃダメ、ダメよ！」

「どうして？」

「わたしに近寄るとダメなの。死んでしまうの！」

「それがキミの念能力さ◆？」

「ネ、ネンノウリヨク？ これが……？」

「そう◆？ キミは念能力が何なのかわからないみたいだね。無意識で取得したか、誰かに擦り込まれる様に教わったのかのどちらかの方法で念が使えるんだよ◆？」

——普通は少し時間がかかると思うんだけど。キミはやっぱり……ソフフっ♥」

一人可笑しく笑うヒソカが、一步また一步と歩み寄れば、アリシアは身を縮こませて『ダメ！』と叫んだ。

泉の中にまだ生き残っていたであろう魚が、アリシアの近くで宙に浮きながら膨らんで弾け割れる。

「キミは……特質系？」

「ダメっ、ヒソカが死んじゃうわ！」

背後にヒソカが近寄る気配を感じ取り、アリシアはぎゅつと目を瞑った。

「ボクは死なない◆？　アリシアはその、とても素敵な能力を自分でちゃんとコントロール出来る筈だよ？」

「む、無理だわ。あんな、あんな恐ろしい事、わたしっ」

「大丈夫、出来るよキミなら◆？　ボクを傷付ける事なんてしないさ◆？　——もしかして、したいのかなあ？」

「傷付けたりなんてしない、だってあなたは、わたしの初めての、大事なお友達だもの！」
ゆっくりと歩み寄るヒソカは、ずぶ濡れになって立ち尽くすアリシアを、後ろから優しく抱きしめた。

「そうだよアリシア、ボクらは友達◆？　……ホラ、キミはボクを傷付けてなんかいないだろ？」

強く閉じた目を開けて、アリシアは後ろから抱きしめるヒソカを見上げた。月の光りに照らされた大きな瞳には、美しい幾つもの星が輝き、その目から涙が大量に溢れ出している。

「ヒソカ……！」

アリシアはヒソカの胸に抱きつくど、その手に力を込めて咽び泣いた。

——殺さずに生かして良かった……♥

アリシアを抱き締め返しながら、ヒソカは妖しく光る月を仰いだ。

「さあ、アリシア。風邪を引くといけないからさ、帰ってシャワーでも浴びよう◆？」

二人は部屋へと戻った。人に見られないようになるべくひっそりと。血塗れのアリシアをヒソカが用意したマントで隠しながら。

「ヒソカの言うとおりだった。メルサは……」

お湯が張られたバスタブに浸かりながら、アリシアはどこか虚ろな目をして言った。

「これでわかっただろ？ 今のキミは何も知らないから騙されやすい◆？ 迂闊に心を許しちゃイケないんだよ◆？ ボク以外にね◆？」

流れる涙を人差し指で拭われたアリシアは、ヒソカに目を移した。

「ねえ、わたしは恐ろしい化け物なのかしら？」

「いいや◆？」

「じゃあ、あんな恐ろしいノウリヨク……。なんでわたしは使えるの？」

「それは、キミが望んで使えるようになったから◆？」

「わたしあんな恐ろしい事、望んでなんかいない」

「そうかな？ キミは望んだ筈だよ？」

「望んでない！」

アリシアが声を荒げると、照明の一つがパアンと弾け割れた。

「——へえ、生きてるのだけかと思っただけど◆？」

そう言つて唇の端を上げたヒソカの右頬から、タラリと血が流れる。どうやら細かく飛び散つた破片で傷付いらしい。

「ああ！」

アリシアは慌ててヒソカの右頬を両手で押さえた。

「ごめんなさい！ わたし……、わたし、ヒソカを傷つけるつもりなんてなかったの！」
目の前で取り乱すアリシアを愉しそうに見つめるヒソカは、両手で一生懸命に押さえ
るその手に自らの手を重ねた。

「キミが傷付けたんじゃないから安心しなよ◆？」

「でも、ヒソカの顔に……！」

「ボクは大丈夫◆？」

ヒソカはアリシアを抱き上げると、割れた照明の破片を避けて歩き、安全な場所にアリシアを降ろした。タオルで身体を拭き、バスローブを身につけたヒソカがふと横に目を向ければ、アリシアはまだ、濡れたままの状態で呆然と立っている。

「風邪を引いちゃうよ？」

アリシアの手からタオルをそつと奪い、優しく頭を拭いてやる。

「……ヒソカ」

「なんだい？」

伏せられていたアリシアの目が、ヒソカに向かれた。

「あのネンノウリヨクは、わたしが望んだから？」

「ん、念能力には能力使用者の個性があつてね？ それぞれの意識や気持ちで、個別の能力が目覚めることがあるんだ？ 念を扱う使用者達は皆、いずれかの系統に属する性質を持つて……おつと、長くなるからこれはまた後に置いといて——」

ヒソカはアリシアにバスローブを掛け、肩を抱いてバスルームを出た。

「キミは特質系なのかなあ？ 意識や気持ちで特殊能力が目覚めるけど、自分の系統と違った能力が目覚めることもあるし。でもやっぱり系統と一致すれば抜群に良いし

……♥」

「だけどわたし、人を殺したいなんて思っただけじゃないわ」

「殺したいとは思ってなくても、死にたくないって思ったり、生きたいって思ったりしたんじゃないかい？」

「あ……」

『タベラレタクハナイ』と強く思った、あの時の事が頭を過ぎった。

「風船の様に弾け割れたり、雨の様に降り注いだりするのは、キミの心の中に印象的だった意識が反応したのかも◆？ 残酷なモノをファンシーにする事で、残酷さが少しでもマシになるようにとか♥ ……キミは自分を守る為にあの能力を得たんだよ。とつても素敵なね◆？」

ソファに座らされて床と睨めっこをするアリシアは、着ていたバスローブの端をぎゅゅと握り締めた。

「ちつとも素敵じゃないわ」

「そんな事はないさ◆？ ボクはアリシアが素敵な念能力を使えてとても嬉しいよ◆？」

「あんな恐ろしいの、素敵だなんて思えない」

「何で？ キミ自身を守る能力じゃないか。キミは騙されやすいし、か弱いし、キミが強くならなければ生きる事は難しいよ◆？ だからボクと友達でいることも出来なくなるだろうね◆？」

心の中で舌を出しながら、ヒソカは告げた。

「わたしが弱いと、ヒソカとはお友達でいられないの？」

アリシアは今にも泣き出しそうな表情でヒソカに迫った。

「……まあ、そうだね◆？」

「いやっ！ 折角ヒソカとお友達になれたのに」

「ボクはね、キミとずっと一緒にいられる訳じゃない。何処かへ一人で出かける事もあ
る◆？ その間に何かがあるかわからないんだ、キミ自身が身を守るくらいのこと出来な
いと、ボクとは一緒にいられないし友達でもいられないよ◆？」

ヒソカはアリシアの濡れた髪に触れながら言う。

「自分で自分を守って、少しでも強くなれたら……お友達でいてくれる？」

「勿論だよ◆？」

その答えに安堵したのだろう。アリシアは、パアツと電気が点いたような笑顔を見せ
て喜んだ。

「本当に？」

「ああ、本当だよ◆？」

「とても不安だけど、わたし頑張るから！」

イイねえ、その顔——◆？

偶然拾った玩具の最期がますます楽しみである。ヒソカのその口元は、更に緩んで
いった。

その晩から、アリシアは少しだけ自由になれた。それはヒソカが、アリシアが一人で
自分から遠くへ離れて行く事はしないだろうと自信をもって確信し、固く閉めていた玩

具の箱を外したからである。

それでもアリシアは殆ど部屋から出なかった。それはまだ、メルサの事を引きずっているからだろう。

警戒する事を覚え始めたアリシアは、以前よりかは慎重になっていた。そしてもう一つ、アリシアは強くなる為にはどうしたら良いかとヒソカに問いかける。

「教えてあげよう◆? 手取り足取り、……ね♥」

念能力というものをヒソカから教わる事にもなったのである。

「出来るかしら……」

「ヤル気があるならね◆? 大丈夫。キミは読み込み早そうだからイケるよ◆?」

こうしてアリシアは、『ヒソカと友達でありたい』『タベラレタクナイ』という理由を持って、強くなる訓練を始めたのだった。

「キミが何系なのか調べよう◆?」

先ずは基本である四大行を学ぶ事。しかしその前に、自分が何系であるのかを知る必要があつた。

「ボクが考えたオーラ別性格分析で当てはめると、ぱつと見、単純一途な強化系なんだけどなあ◆?」

「オーラ別性格分析」とは、実戦経験を長く積んできたヒソカが、系統別と性格に共

通点があるのを発見し、独断と偏見で考案された系統診断である。

「でもキミが使ったのは強化系のそれとは違う特質系だし……◆?」

系統を知る方法は、もう一つあった。心源流教えの一つで、自分の得意系統を見分ける際に使用されるという、「水見式」だ。

やり方は非常に簡単。グラス一杯に水を入れ、その上に一枚の葉っぱを置く。手のオーラでグラスを包むようにして「練」を行えば、系統によって異なる変化が生じる為、生まれ持った属性が分かるのである。

「これは?」

グラスの中の水は沸騰し、葉っぱは消失。その様子を隣で見ていたヒソカの前元は、弧を描いていた。

「キミは特質系だつてさ◆?」

「とくしつけない……。ヒソカは?」

「ボクはね、教えてもイイけど、今は秘密♥」

「ズルい!」

「系統を秘密にするのは、自分を守る為でもある。覚えておきなよ◆?」

基本を学びつつ、アリスシアの能力であるあの力を操る事も、勿論訓練していった。

「ボクとこのグラス、どっちが大事かな?」

「ヒソカ」

「フフフ◆？　じゃあこのグラスはいらないね◆？」

グラスに集中すれば、僅かに浮き上がったグラスは膨張してパアンと弾け割れた。

「そうそう◆？　その感覚を覚えるんだよ◆？」

幾度か物で試した後、アリシアは力尽きて倒れた。それから何時間も目を覚ますことなく眠り続けている。

——まるで眠り姫の様だね。

ここに来た当初からアリシアがよく眠っている事に、ヒソカは今更ながら気付いた。

食事は野菜や果物ばかりを食し、肉や魚はさほど好んで食べない。体力は持つのかと思われたが、それを眠る事によって補っているらしい。

あの念能力を使い過ぎると、こんなにも長く眠るアリシアの弱点。

「早く目覚めなよ、つままないじゃないか◆？」

そう呟くと、ヒソカは眠るアリシアの頬に唇を落とした。

アリシアがヒソカと初めて出会った日から半年。ヒソカに教わりながら学んだ四五行は、既にマスターし終えていた。

あの恐ろしい能力は訓練を重ね、今では自在にコントロール出来るようになってい

る。始めはグラスから。時にはカエルなどの爬虫類や哺乳類、虫なども試した。生き物を殺す罪悪感や恐怖もあったが、ヒソカと友達として一緒にいる為、タベラレずに生きていく為には『必要だから』と、自分に言い聞かせるしかなかった。

「名前を付けるかい？」

「名前？」

ある日の午後。ヒソカが、アリシアの使う能力の命名を提案してきた。

「名前を考えるのって、簡単なようでむずかしいのね」

「それじゃあ……」

名前をつけるという発想がアリシアにはなかったため、幾つかの名前の候補をヒソカに上げてもらおうと、その中から『弾ける赤い風船』ブラッドバルーンを選ぶ。

「ほうら♥ キミの能力、もっと素敵になったね◆？ なんとってこのボクが、名付け親

だからねえ♥」

「そうかしら？」

「そうさ◆？」

年が明けて1999年1月――。

「良いコで待っててね◆？」

ヒソカは出掛けたつきり戻って来なかった。

アリシアは毎日テレビから流れる情報に釘付けになりながら、いつかは戻って来るだろうヒソカの帰りを待つ。外には時々出るようにしていたのだが、メルサとの一件以来、一時は部屋から出るのさえ躊躇っていた時があった。

外へ出るには必ず受付の前を通らなければならないからである。

ヒソカとの訓練の為に一時的に一緒に外へ出た時には、ヒソカの背に身を隠しながら出られた。しかし、いざ一人となると後ろに隠れる事も出来はしない。アリシアは、緊張な面持ちで受付の前を通った。

——いない。

メルサの姿は受付に無かった。次の日も、そのまた次の日も、メルサの姿はどこにも無いのである。

いなくてほっと安堵する半面、姿が全く見えないのが少々気にかかる。一体、メルサは何処へ行ってしまったのだろうか。不思議に思っていたアリシアが、入り口前のベンチで惚けながら座っていたある日の事だ。

近くで立ち話をする男二人の話し声が、やけに鮮明に耳に入ってきた。

「前いた受付嬢のネーチャン美人だったよな」

「ああ！ あのメルサって？」

「そうそう」

「あの受付嬢さ、半年近く前に退職届け出して辞めちまったんだよ」

「マジかよ?」

「マジさ。何日か無断欠勤した後にフツと現れて、何にも話さずに……だよ」

アリシアは驚いた。男達の会話の信憑性はわからないけれど、確かにメルサと言っているのが聴こえた。

メルサ……。

姿を全く見ないのは、もしかしたら本当に辞めていなくなってしまったからなのかもしれない。あの日を最後に見たメルサの顔が、今もアリシアの頭からなかなか離れてはくれなかった。

そして一週間後。ヒソカは帰って来た。

「どこへ行っていたの?」

「ハンター試験◆?」

「はんたーしけん?」

「ハンター試験について知る前に、ハンターから勉強しないとね◆?」

微笑みを浮かべながらソファに腰を下ろし、ヒソカはハンターについて説明をした。

ハンターとは、怪物・財宝・賞金首・美食・幻獣等を追求する者達の総称である。

プロのハンターの資格を得るためのハンター試験とは、毎年凄い数の参加者が集い、

脱落者が多く出る程の過酷な試練をクリアしなければ合格しないとされる、超難関試験なのだそうだ。

「ハンターライセンスを持つてるとね、色々便利なんだよね◆？」

そう言つて何処か遠くを見つめては、口元が緩みっぱなしのヒソカである。何か他に良い事でもあつたらしい。

「何かあつたの？」

「青い果実を見つけたんだ♥」

「青い、果実？」

「そう◆？ まだまだ青いんだけどね、ソフフ♥」

真つ赤に熟して美味しく実らないかなあ。とまで独り言のように話すヒソカに、『早く実れば良いわね』と返したアリシアは、ヒソカの青い果実の例えを理解してはいなかった。

ただわかる事といえば、いつも以上にヒソカが楽しそうに笑っている……というだけである。

それからまた日は経ち、3月のある日。テーブルの上にお金と紙が置いてあつた。

『お腹が空いたら、このお金で何か食べ物を買おうと良いよ♥』

紙にはそう書かれてある。アリシアは置かれていた紙のお金を一枚手に取つて、じつ

くりと見つめた。

アリシアは森の中でしか過ごしていない為、お金を触った事も見た事もないのだ。今までルームサービスを頼んでいたのだが、何故急にした事もない買い物？ と考えていると、ふと心当たりが頭の中を過る。それは三日前の事だ。

見ていたテレビ番組の中で、人がレジで買い物をする様子を、アリシアがヒソカに問うたのだ。

「これは何をしているの？」

「普通に買い物をしているだけだよ？ もしかしてさあ、買い物したコトがないの？」
「ないわ」

「ふーん、なるほどねえ◆？」

というやり取りをした覚えがあった。

「そうよ……」

ヒソカは買い物の経験がない自分の為に、わざわざ機会を与えてくれたのではないかと、アリシアは悟る。

「ありがとうヒソカ！」

感動したアリシアは、お金を大事そうに胸に当てて喜んだ。しかも今は不思議なくらい空腹感もあって、実にタイミングが良い。早速アリシアは、初の買い物に出掛ける準備

備を始めた。

——あ、着なきや。

服を新たに着替えたアリシアは、髪の色と同じ、ネイビーブルーよりも深くて濃い色をしたフード付きマントを身につけた。これはメルサの一件後、ヒソカからプレゼントされた物である。

フードは被ると顔半分が隠れ、マントは全体を被う形をし、丈の長さは足元までである。一見して男女の区別がつきにくい姿にはなるが、外に出る時には必ず着用するようにしている。

買い方は……、どうすれば良いのかしら？

上機嫌なままに外へ出たアリシアは、施設内にあるフード店や売店の前でひとり、何をどう買えば良いのか迷っていた。

テレビで見た感じではレジに物を持って行き、店員とお金のやり取りをし、買う。という流れであったが、このフード店や売店は、直接店員に何かを注文して事が進む形式のようである。

うーん……。

他の人が買っていく様子を暫く見学し、どのタイミングで行動に移すか悩んでいた時だった。

「っわあー！」

「あー！」

その場でうろろとしていたアリシアが、走っていた知らない誰かとぶつかった拍子
に、前のめりに倒れてしまったのである。

「いたた……」

どうやらぶつかった相手も反動により地面に尻餅をついたらしく、痛そうにお尻を押
さえながらゆつくりと立ち上がった。

「ごご、ごめんなさいー！」

まだ、上半身を起こした状態で座ったままのアリシアに慌てて近寄って来たのは、こ
の施設ではあまり見かけない少年だった

「大丈夫？」

アリシアより背の低いその少年は自分の手を差し出して、座り込んだ状態のアリシア
を立たせてくれた。

「わた——」

「なんでお前が謝ってんだよ、ゴン！」

自分も謝ろうと口を開く寸前。背後から別の誰かの声が出て、アリシアは振り向い
た。

その先にいたのは銀髪の、これまた同じ歳ぐらいの少年である。「ゴン」と呼ばれた目の前の少年は、彼の事を『キルア』と、呼び返した。

「余所見してたコイツが悪いだろ！」

ギロリと不服そうにこちらを睨む少年に対しアリシアは、『ご、ごめんなさい……』と力弱く謝るしか出来ない。

「オレもスピード出して走っちゃったんだしきあ」

「甘いんだよ gon は！」

「本当に、ごめんなさい！」

二人の少年に頭を下げてその場から去ろうとすると、銀髪の少年が『おい！』と、アリシアを呼び止める。

「アンタさあ、さつきからずーっと店の前でうろろうろしてたけど、買わないワケ？」

「キルア見てたの？」

「お前が来るの待ってた間に、コイツがさつきから視界に入ってきてたんだよ。フードマント被ってるからちよつと浮いてるし、嫌でも目に入ってるね」

まさか見られていたとは。人目につかない筈のマントであったのに、このキルアという少年には気付かれてしまうなんて。アリシアは何をどう返して良いのか悩み、考えていた。

「もしかしてさ、買い方わからない？」

ゴンが、ずいっとアリシアに顔を寄せてくる。

「あ、えっと、一応テレビで見たりとか、他の人が買うところを見てなんとなくはわかる……と思う」

やや自信のない言い方をすれば、銀髪の少年キルアが信じられないと言った表情でアリシアを見つめた。

「買い方わからないとかマジかよー！」

「ねえ！　じゃあ一緒に買いに行こうよ！」

ゴンがアリシアを誘った事に、キルアが思わず『ゴン！』と不満の声を上げる。

「だってこの人困ってるんじゃないかな？　オレ達も買いに来たんだしさ、ついでにこの人も一緒に行けば良いって思ったんだ。ね、行こうよ！」

有無を言わず、アリシアの手を掴んで走り出すゴンには戸惑いを隠せない。

「……つたく」

反対にキルアはというと、その行動に呆れながらも、仕方なく付いて走った。

「このね、バーガー美味しいんだっ」

「ばーがー？」

バーガーとはなんなのかと、連れられて入った店の中を見渡せば、パンで何かを挟ん

だ食べ物絵の絵や看板が目に入る。

「バーガー知らないの？」

「パンで何かを挟んだ食べ物っていうのは、わかったわ」

「バーガーも食べたことないとか……。一体どういう育ち方してんだよ」

二人の後ろにいるキルアは、呆れた眼差しをアリシアに向けた。

「ありきたりなバーガーシヨップだけど、美味しいんだよねこれが！」

ニコニコとこちらに笑顔を向けるゴンに、アリシアは一瞬頬が緩みそうになるのを抑えた。それを止めたのは、メルサの顔が頭の中を過ぎったからである。

「いらつしやいませー！」

何も返さない俯き加減のアリシアの手をぐっと引き寄せて、ゴンは店のカウンターに前進。

「このスペシャルバーガーセット二つ！ キルアは？」

「俺はスペシャルダブルバーガーセットで」

「それでお願いまーす！」

アリシアはただただ、少年達が注文する姿を見つめているしか出来なくて、会計の時に自分の分の紙のお金を出すだけで精一杯だった。

「はい、これお釣り！」

少年からお釣りを受け取ったアリシアは、マントの内側にあるポケットにそのお金を仕舞う。

「天気も良いしき、外のベンチに座って食べようよ！」

そう言つて店の外へと駆け走るゴンの背中を唾然として見つめていると、『ほんとお人よしつていうか、バカというか』呆れを通り越したような声で、溜息交じりにキルアが呟いた。

少年達の後を付いて行けば『こつち！』と、ゴンがアリシアを右隣りに。キルアを左隣りに座らせようとしていた。――が、キルアは敢えてその横に備えられていたもう一つのベンチに腰を下ろす。

「はい、スペシャルバーガーセット。キルアもはい！」

ゴンからバーガーとポテト、ジュースを受け取る。どうやって食べるのだろうかと、包み紙に包まれたバーガーをアリシアはじつと見つめた。

「いただきますーすー！」

少年二人がバーガーを食べ始める。その様子に視線を向け、再びバーガーに目を戻したアリシアは、恐る恐る包み紙を開けてみた。

――良い匂い。

開けた瞬間、今まで感じたことの無い、とても美味しそうな匂いがした。バーガーの

それは、パンに挟まれたレタスや目玉焼き、そして苦手なひき肉の塊である。

アリシアは躊躇するも、ゆっくりとそのバーガーを一口だけかじる。

「——美味しい！」

生まれて初めて食べたバーガーは、今まで味わった事の無い、とても美味なものであった。

「でしょー！」

「うん、とつてもっ」

ゴンは、アリシアが美味しそうにバーガーを食べる様子に満足気だ。

「ばーがー」って、こんなにも美味しいものだったのね。

気付けばアリシアは、いつの間にかバーガーをぺろりと完食し終えていた。

「ごちそうさま！」

三人でごちそうさまをし、座っていたベンチから立ち上がる。

「お腹いっぱいになったよねー、キルア？」

「また直ぐに減るだろ？」

「えへへー、まあね」

二人の会話を聞きつつ、そろそろ戻ろうと思ったアリシアは、ゴンとキルアに声をかけた。

「あの、二人とも。さつきは、どうもありがとう」

「別にお礼言われるような事してないよ〜」

「バーガーなんて誰でも食ったことあんのに。アンタよっぽど金持ちか貧乏なんだろうな」

「キルア、失礼だよ」

目の前の少年二人がああだこうだと言いつつ様子を見つめていたアリシアは、何だか微笑ましくも羨ましく思いながら、無意識に『ふふ』と、微笑を口角に浮かばせた。

「笑った!」

特にマズイと焦った訳ではなかったが、慌てて口を手で押さえる。少年二人はアリシアの笑い声にし少し驚いていたのだ。

「なんだ、笑ったり出来んのか」

キルアが言う。

「てつきり何も感情出さねえ変なヤツって思ってたけど」

「だからあー! キルアさつきから失礼だつてば〜」

「あーはいはい。悪かったって」

再び、言い合いが始まりそうなゴンとキルアの間挟まれて困ったアリシアは、この

空気を切り替えるように二人を止めに入る。

「あの！　"ばーがー"、どうもありがとう。それじゃあ……」

もう一度お礼を言つて頭を下げると、アリシアは二人の前から急いで去ろうとした。

「ねえ！」

ゴンが呼び止める。

「オレはゴン、キミは？」

足を止めて振り返れば、改めてゴンは自分の名前を告げ、アリシアの名前を問う。

「こっちはキルア！」

ゴンについてに紹介されたキルアは、『何勝手に紹介してんだよ』と文句を言いたげな表情を浮かべ、ゴンをジト目で睨んでいる。

アリシアは少しだけ黙ったまま、ゴンとキルアを交互に見つめてから口を開く。

「——わたしの名前は、アリシア」

それだけを答えると、アリシアはその場から逃げ去るようにして、ゴンとキルアと別れたのだった。

ゴンとキルアという少年達に出会ったその夜の事。アリシアは、ベットの中でなかなか寝付けずにいた。

初めての買い物でゴンに助け舟を出してもらい、生まれて初めての"ばーがー"なる

ものを口にしたあの瞬間、あの美味さ。そして少年達との会話をしたあの短い時間を過ぎ、まだ興奮が冷めやらぬといった状態に陥っていたのである。

ヒソカといえはまだ戻ってはおらず、広いベッドルームにアリシア一人という状況だ。

何だかんだで眠れないと思いつつも、瞼はいつの間にか落ちてくる。

数時間経つた頃だろうか。アリシアはぱちりと目を覚ました。辺りはまだ暗く、外が夜であるというのはわかった。ゆっくりと上半身を起こしてベッドルームの入口に目を向けると、少しだけドアが開いているのに気付いた。しかも、扉の向こうの部屋から明かりが少しだけ漏れているではないか。

——ヒソカ、帰って来たのかしら？

アリシアはそつと静かにベッドから出ると、その扉のドアノブに手を伸ばしかけた。

何——？

けれどその手は、ドアノブを回すことなくそつと引つ込めらる。何か小さく、微かに呻く声があったからだ。何だか息遣いも混じるその呻きと共に、アリシアの全身がピリピリとしたモノを感じ取った。

イルミについて行った、あの闘技場で感じたヒソカの試合を思い出す。息苦しく感じ、あの感覚に似たような気分に入り、徐々にアリシアの動悸は激しくなっていた。

暴れだしそうな程に鳴る心音が部屋中に響き渡ってしまいそうだと焦りつつも、アリシアは怖いもの見たさでそつとドアの隙間からリビングを覗いてみた。

目だけを動かし、辺りを伺う。まだ微かに聴こえる呻きの方向へと、視線を向ける。
え……………？

ソファがある場所に、ヒソカが前屈みになって小刻みに震えてるように伺えた。どうしたのかと心配にも思いながらヒソカを見つめれば、ヒソカの身体から禍々しい何かのオーラが浮き上がっているのがわかった。

「……………」

そのオーラに圧倒され、鳥肌を立たせたアリシアは、ヒソカの次の行動に悲鳴を上げそうになった。

前屈みに蹲うずくまっていたヒソカが顔をのつたりと上げ、こちら側を見てニヤリと不気味に笑ったからである。

——どうしよう！

本能的な恐怖を感じ取ってしまったのか。禍々しいオーラを目の当たりにして、死が過ぎる。パニックに陥ったアリシアは音を立てないように一目散にベッドの中に入ると、小さく身を縮こませた。

どうか来ないで。ドアを開けてベッドルームに入って来る音に、アリシアの心臓はビ

クリと跳ねた。そしてベッドの軋みがぎしりと鳴る。

「……………」

包まっていた布団が剥がされ、アリシアはガタガタと震えながら視線を天井付近に移動させた。リビングからの照明の明かりが逆光し、その姿は影に染まっている。

「…………ひ、ヒソカ?」

森で暮らしていたアリシアの視力は暗闇に強く、馬乗りになって自分を見下ろす人物がヒソカである事はわかっていた。——が、あえて名前を口に出す。ヒソカはと言うと、アリシアに名を呼ばれても何も答えない。不気味に思える程に、口が裂けるような笑顔を向けるだけである。

「ヒソカ…………?」

問いかけるようにもう一度を名を呼んだその瞬間だった。アリシアの首が、ヒソカの右手によってきつく絞められたのだ。

「ぐっ——あつ!」

両手でヒソカの右手を掴み、引き離そうと必死に足掻くが簡単には逃れられない。

「や、は、あ、う…………っ!」

苦しく呻く声を上げてヒソカを見つめると、ヒソカは恍惚とした表情でアリシアを見下ろしていた。

——苦しい！ ヒソカ止めてっ！

苦しさと恐怖の境によって失禁したアリシアは、そのまま意識を手放した。

どのくらい時間が経ったのか。目を覚ませば朝の日差しがカーテンの隙間から射され、その眩しさにアリシアは目を細める。

「……朝？」

上半身をがばりと起こし、警戒しながら周りを見回せば、何かを思い出すように我に返って自分の首元に手を当ててみる。

——あれは、夢？

一体どういう事なのだろうか。昨夜の出来事は夢であったのか。暫くベッドの上で呆けていたアリシアは、まるで夢遊病のようにフラフラと歩きながら洗面所へと向かった。

「おはよう◆？」

洗面所を開けると、中にはヒソカが。鏡越しにこちらを見て立っていた。

「お、おはよう……！」

ほんの少しだけ肩がびくりとなった。しかし、昨晚の禍々しいヒソカではないとわかると、アリシアは心から安堵した。

「昨日の夜驚いたよ◆？」

「え？」

「怖い夢でも見たのかな？ 酷くうなされててね、凄くバタバタと暴れちゃって、ベッドのシーツが首に巻き付いてたんだよ◆？」

「うなされてた？」

「ホラ、首元を見てごらん。少し痕になってるから◆？」

洗面台の鏡を見れば、自分の首に薄っすらと絞まった痕のようなものが確認出来た。

「夢、だったの……？」

「そんなに恐ろしい夢だったのかい？」

「ええ。とつても。夢で本当に良かった」

「へえ——♥」

ほっと胸を撫で下ろしているアリシアから背を向けたヒソカは、自身の右手首にある、引つ搔かれた真新しい傷跡を舌でぺろりと舐め上げながら、不敵な笑みを浮かべて言った。

「——夢で、良かったね♥」

友情のアカシ

ひと月余り経過したある日。この日は、ヒソカの久しぶりの試合であった。聞くところによると、何やら因縁の対決らしい。

「会場で直接見るかい？」

アリシアは迷っていた。初めて見た会場で気分を悪くし、途中で出てしまった事があったからだ。

「また気分が悪くなって最後まで観れないかもしれないから、今回は……テレビにするわ」

ヒソカは薄く笑いながら『残念♣？』と、アリシアの頭を優しく撫でた。

「ごめんなさい。次は絶対に行くから」

「謝らなくて良いよ♣？ 無理は禁物だからね♣？」

——あんな残酷な能力を扱えながら、目の前の暴力に耐性は殆ど無い……か♣？

早く慣れてくれたら良いのに。ヒソカは心の中で焦れつたく思いながらも、焦ってはいけないうと、自分にそう言い聞かせるのだった。

ヒソカが試合に行ってしまった後、アリシアは一人、テレビの前で試合中継が始まるのを待っていた。

映し出された画面では広い会場が見え、多くの観客で溢れ返る様子が伺える。たまに外へ出た時に耳にするヒソカの試合の人氣さを、アリシアは改めて実感した。

——どうかヒソカが勝ちますように。

心の中で祈っていれば、中継カメラがステージ上に現れたヒソカと対戦相手のカストロを映した。

「さあ、いよいよ始まりです！ ヒソカ選手VSカストロ選手の大決戦です！」
会場は様々な声で大盛り上がりである。

『——始め!!』

試合は審判の合図により始まった。随分とヒソカは余裕の表情である。相手のカストロは、そんなヒソカに先制攻撃を仕掛けた。

大丈夫。恐くないわ……。

画面越しから見ていたアリシアは、イルミと会場で見たあの時のように、激しくなっていく動悸に身を抑えながら堪えていた。

「ああー！」

ヒソカが、カストロの攻撃で左の頬にダメージを受ける。そのまた次も、だ。

『クリーンヒット!! &ダウン!!』

カストロの足技によって、右側の蛭谷こめかみ辺りがヒットしたヒソカは、そのままステージの床に倒れてしまった。

一方的なカストロの攻めが続き、ポイントは4-0。まさかの敗退死かと、会場の観客が騒めく中、相変わらずヒソカの顔は余裕を見せていた。

カストロはというと、次の攻撃を仕掛ける為に攻撃の構えをとっている。オーラだ。カストロは放っていた。画面に釘付けになりながらアリシアは、そんなカストロの様子に息を飲んだ。

すると次の瞬間。余裕あるヒソカが左腕を差し出せば、カストロは素早い動きでヒソカの背後に回り、あつという間にヒソカの右腕を打撃によって引きちぎったのである。アリシアは慄き、思わず両手で顔を被った。

ヒソカの腕が……! !

身体を震わせたアリシアは、手の隙間からテレビ画面を覗き見た。観客達は皆、息を呑む。ヒソカは背後にいるカストロに攻撃。避けたカストロが離れると、痛みに声を上げる事もなく自身のちぎれた右腕を手を取った。

『キミの能力の正体は……キミのダブル、だろ?』

どうやらヒソカは、カストロの本当の能力に気付いたらしい。カストロがグツと力を

込めると、オーラを放つ自分の隣にもう一人のカストロ口が姿を現した。

「——なんとカストロ口選手が二人に分裂しました!?!」

実況アナウンサーも思わず驚きの声を上げる。

ドツベルゲンガーかとヒソカが訊けば、カストロ口は『まさしく』と頷いた。カストロ口は念によって分身を作り出していたのだ。

分身ダブルが攻撃を仕掛け、本体が死角に潜む。相手が反応する瞬間に分身を消し、本体が直撃する。勿論分身はただの幻影ではなく、消えるまでは実在するもう一人のカストロ口である。

『これが念によって完成した真の虎咬拳、名付けて虎咬真拳!!』

自分の念能力を語りつつ、カストロ口は再度攻撃の体勢になった。ヒソカはニタリと笑いを、そして自身の千切れた右腕をムシャリと口にする。

——腕を!

その異様とも狂気とも思える光景には、画面の前のアリシアや観客達が皆、ゾツと背筋を凍らせた。

「まさか狂気! 狂気であります! そしてヒソカは、スカーフで右腕を覆い隠しました!!」

ヒソカはどこからか出したスカーフで右腕を隠し、頭上目掛けて高く放り上げた。

まるでマジックショーか。放り上げた腕は13枚のトランプカードに変わると、ひらりと舞い散る花びらのように落ちて床に散らばった。

——あ！

アリシアには見えていた。ヒソカから瞬間的に放たれた何本ものオーラを。一つは頭上に舞い上がったスカーフ。次は13枚のトランプにそれぞれ。そして千切られた右腕に。それらは全て、ヒソカ側の右腕と繋がっている。更に床のトランプカードから伸びた13本のオーラの先端が、ヒソカの左手に握られていた。

秘密だ、と教えられてもいなかったヒソカの念能力を、ここにきて初めて目にした瞬間だった。

『この中から一つ好きな数を選んで頭に思い浮かべて♥』

ヒソカは、カストロ口に浮かばせた数に4を足してさらに倍をさせ、6を引かせて2で割らせ、最初に思った数を引かせた。

『ボクにはその答えが予めわかった♣?』

答えは……。ヒソカは、千切れて無い右腕の傷口に左の手を突っ込むと、ぐりぐりと奥深く突っ込んだ。そしてズルリと中から一枚のカード引き出すと、『1だろ?』と、答えを当ててみせたのだ。

「これぞまさに狂気!! 悪魔の手品! 自分の傷口にネタを仕込んでいました——」

！ ポイントにもならない!! 試合にも一切関係なし! にも関わらず! ヒソカの異常性がここに極まれりー!」

『良かったらこれ、あげるよ◆?』

記念にどうぞ。ヒソカは、腕の中から引き出したスペードのAをカストロに投げた。その際、左手に握られていた13本のオーラをカストロの全身に貼り付けている。本人はそれを、一切気付いていない様子だった。

異常にも戯けるヒソカに対し、カストロは苛立ちを隠せない。

『くだらない事を!』

『こつちもヤツてイイよ◆?』

するとヒソカは自らカストロに向け、今度は左腕を差し出していた。その時もヒソカは、差し出した左拳の先端から伸びたオーラをカストロの顎に貼り付けている。

『望み通りにしてやる!』

「あつと、カストロ選手の片方が猛然と突進です!!」

受けて立つ。挑発に乗ったもう一人のカストロがヒソカへと動き、そして差し出された左腕をぶち切った。——と、ほぼ同時。もう一人のカストロが姿を消してしまったのである。

——消えた?

アリシアや観客達が、息を飲むようにカストロに注目している一瞬の間であった。なんと、ヒソカの右腕が復活しているのだ。

「腕が……」

手の隙間から恐々と見ていたアリシアはそろりと顔から手を離し、テレビ画面にかじりつくように注目した。

ヒソカは『これも手品だ』と笑みを浮かべ、ゆつくりとカストロに近付きながら自身のオーラを放つ。

『予知しよう、キミは踊り狂って死ぬ◆?』

『……だ、黙れヒソカ!!』

怒れるカストロが飛び掛かるように高く飛び上がり、もう一人の自分を出現させてヒソカに突撃しようとするれば、ヒソカの視線がスツと本体である方のカストロへと移った。

そう、カストロの分身は通常の自分をイメージで再現する為、本体が途中で汚れてしまった状態までの再現が細部まで仕切れていなかったのである。

それをヒソカは見抜いていた。それに焦った本体のカストロが、分身の攻撃を軽く避けるヒソカの背後を狙った時だ。

カストロの下顎に、千切れたヒソカの左腕が横からヒットしたのだ。思いっきり入っ

た一撃により頭がくらくつき、よろめいたカストロは出していた分身を保つ事さえも無理であったようだ。

自分の意志でその場から動けないカストロから、ヒソカはそつと離れた。するとどこからともなく、正面からカストロに向かってトランプカードが向かって来るではないか。

——引き寄せられてるみたい。

先程ヒソカがカードに貼り付けておいたオーラは、カストロにも繋がっているのだ。慌てて分身を出そうとして出せなかったカストロの左腕に、ヒソカのトランプカードが抉るように突き刺さる。

カストロの念、分身には高い集中力が必要な為、正常な状態ではない今は不可能に等しい。次は右腕、最期は全身に13枚ものトランプカードが突き刺さっていった。その姿はまるで、踊っているようにも見える。

『キミの敗因は……、メモリのムダ使い、さ♥』

息絶えたカストロがその場に倒れると、ヒソカはその様子を見ることなく、会場から歓声を浴びて去って行った。

「あ……」

テレビ画面の前で啞然と惚けていたアリシアは、やっと我に返った。ヒソカの両腕

は、どうなつてしまったのだろうか。

「大変！」

ソファから慌てて立ち上がると、アリシアフードマントを手に掴んで急いで部屋を飛び出した。両腕が千切られてしまったヒソカを心配に思った焦りからである。

特にどうするでもなく、ただ会場を目指したアリシアは、途中にある反対側のエレベーターでヒソカと行き違った事に気付きはしなかった。

必死になつて会場の場所に着いたアリシアは、何処にどうやって行けばヒソカに会えるのか、という事も知らずにそのまま来てしまった事になかなか気付けないでいて、暫く一人で闘技会場の前で立ち尽くしていた。

会場からは帰りの客達が疎らに通り過ぎて行き、立つたまま動かないアリシアに皆が目を向けていた。

——もしかしたらヒソカ、もう、部屋に戻っているのかしら？

此処にいても意味がない気がすると思ったアリシアが仕方なく元来た道に戻っていると、前方から、いつか見た人物が歩いて来るのがわかった。

あのヒトは……。

以前、ヒソカの部屋で見たマチという女性であった。アリシアは少し緊張した面持ちながら、ヒソカの恋人であろうマチを発見して嬉しく思い、急いでマチの元へと走った。

「ん?」

自分の元へと向かって来るアリシアに気付いたマチは、『アンタ、誰』というような顔で睨みつけた。

「あ、あの……あ」

「何?」

フードマントを着ている事を思い出したアリシアは、被っていたフードを下ろしてマチに顔を見せた。しかしマチは気付かないのか、警戒するような威圧的な態度でアリシアを見つめ返す。

見た感じでは、背が同じくらいか。歳は自分より下に見えるが、それ程変わらなくらいなのだろうか。マチは思った。だがそれよりも目を惹かれるのは、アリシアの美しさだった。

「わたし、ヒソカの部屋であなたを……!」

アリシアが言ったのその言葉に、マチはある事を思い出した。

コイツ、ヒソカが連れ込んだ……!

その女が何でわざわざ自分に話しかけて来たのか。もしかして自分は、ヒソカのそういう関係だと誤解されているのでは。だとしたら面倒くさい。マチは『誤解しないで』と、言おうとした。

「あなたにまた会えて嬉しい！」

アリシアがマチの両手を取って、ぎゅつと優しく握ってきたのである。

「……は？」

意味がわからないと呆気に取られたマチが更に見つめ返してやれば、目の前のアリシアはまるで、可憐な花のような柔らかい笑みを浮かべているだけで、マチに対して警戒心や嫉妬心のかけらも感じられなかった。

そしてそんなアリシアからは、微かに甘い匂いもしてくる。

「あたしは嬉しくも何ともないんだけど。離してくんない？」

「あつ、ごめんなさい！」

アリシアは慌ててマチから手を離れた。

「つい、嬉しかったの。ヒソカの恋人に会えて……」

「——はあ？ 誰が、誰の？」

「あなたとヒソカよ」

何を言ってるんだコイツはと、マチは苛立ちながら眉間に皺を寄せる。

「恋人じゃない」

「でもヒソカが……」

「とにかく、あたしはアイツの恋人でも何でもないし、勝手にそう思われちゃあ迷惑な

んだよ」

それを捨て台詞に、マチはアリシアの横を通り去って行ってしまった。

——また会えるかしら？

行ってしまったマチの背中を残念そうに見つめながら、アリシアも踵を返して急ぐ。少し息を切らして戻ったアリシアは、部屋の扉を勢い良く開けた。

「おかえり◆？」

「ヒソカ……」

目の前には、アリシアを出迎えるようにヒソカが立っている。ずっと気になっていたヒソカの腕に注目すると、不思議な事に両腕は千切れてなどいなかった。

「腕は？」

「ああ、腕はね……」

ヒソカは交互に両腕を見た後、両手をプラプラとさせて『なんともないよ♥』と笑って見せた。

「ほん、とうに？」

「嘘なんてつくワケないだろ？」

アリシアは目の前のヒソカの腕に触れ、優しく撫でる。

「良かった……」

眩くように言ったアリシアの大きな瞳からは、ぽろぽろと雫が流れ落ちた。「心配してくれたのかな？」

ヒソカは、アリシアの目から次々と流れ落ちてくる涙を人差し指でそっと拭き取ってやる。

美しい夜に輝く星空のような瞳が、ヒソカを映す。甘い匂いと相まって自分だけを真っ直ぐ見つめてくる瞳にぞくりとしたヒソカは、アリシアのふつくらとした唇に自分の唇をそっと押し当てた。

時間としては数秒間。瞳をばちくりとさせて、アリシアは不思議そうな顔でヒソカを見つめる。

「思ってたよりも、キミの唇って柔らかいんだね♥」

頬を染めて恥ずかしがったりするかなと、ヒソカは期待していた。けれどもアリシアは、頬を染めるでも恥ずかしがるでもない。

「変よ」

涙は、いつの間にやらすっかり止まってしまっていた。

「……何が変なんだい？」

「だっておかしいじゃない」

「おかしいことなんてないさ◆？」

「どうして？　口づけは恋人同士でするものよ？　わたしとヒソカは友達だわ」

「うーん◆？　あまり深く考えなくてもいいけど、恋人じゃなくてもキスはするんだよ♥　——つまり、さっきのは友情のキスさ◆？」

勿論、そんなのは真つ赤な嘘である。

「友情……の？」

「キミがボクを心配して泣いてくれたのが嬉しくてね◆？　友人として心から嬉しく思ったんだ♥　だからさっきのは、友情の証さ◆？」

普通ならば信じてはもらえないだろう。しかしアリシアは、そういう口づけもあるのか。と、ひとり納得してしまったようだった。

「さっきのは友情の証だったのね」

その反応が期待していたのとは違って、ヒソカはちよつぱり残念に思う。

——でも、これはこれで良いかな◆？

「ヒソカ、服が汚れているわ」

「キミと一瞬にお風呂に入ろうと思って待っていたんだ◆？」

「それじゃ今日は、わたしがヒソカの体を洗ってあげる」

「んふふ、それは楽しみ♥」

ヒソカはアリシアの肩を抱きながら、一緒にバスルームへと入って行った。

ウゴキダス世界

マチッコマチネは、とある場所に呼び出されていた。

「——そういう事だ。手間をかけるが、ヒソカにはお前が伝えてくれ」

奥の上座に座るリーダーらしき若い男は、正面に離れて立っていたマチを見つめながら言った。

「別に手間なんかじゃないよ。団長の命令だし」

「お前が言えばアイツも喜んで来るだろう」

団長と呼ばれたリーダー格の男は、そう言つて薄い笑みを見せる。

「そう言うけどさ、アイツがちゃんと真面目に来た例しあつた？」

「ないわね」

男の離れて横に立つ、鷲鼻に特徴のある女がきつぱりと言つた。

「今は天空闘技場だつて？」

「うん。……そうね」

「あら、何？ その一瞬嫌な顔。何かあったの？」

女は、マチの一瞬の表情を見逃しはしなかった。

まあね。マチは面倒くさそうな深い溜息を漏らし、この場にいる皆に説明をした。

「アイツ、女を連れ込んでる時にあたしを呼んでさ。こつちは見たくないもん見せられて、本当迷惑なんだよ」

「それは」愁傷様なこつた」

不思議な形の帽子とマントを着用している男が口元を小さく緩ませながら、『どんな女だった？』と、興味津々な様子でマチに問う。

「随分と興味あるのね」

そんな男をジト目で睨んだマチは、嫌味を込めて返してやる。

「そりゃあなくは無いだろ？ あの変態じみた野郎を相手にするんだから。で、どうなんだよ？」

……くだらない。マチは眉間に皺を作り、またも深い溜息を吐いた。

「——でも」

何かを思い出しながら、若干躊躇い気味に小さく呟いたマチに、鷲鼻の女が『何よ』と反応を示す。

「いや、ちよつと思ひ出した事があつてね。別に言うつもりなんて更々なかったんだけ

ど、ちよつと気になる女だったから……」

「マチ」

リーダー格の男がマチの名を呼ぶ。

「お前の気になった事は全て教えてくれ」

「……わかつた。ヒソカが連れ込んでた女がさ、見たこともない目の色をしてたんだよ」

「目の色？」

マチはこくりと頷いた。

「目の中に星が見えたんだ。無数のね」

「星——？」

「瞳の中の星」に反応したりリーダー格の男は、それを聞いた途端にひとり考えに耽る。

「後、そいつが勝手に話しかけて来た時にも変な事があつてさ、これはちよつとわからな
いんだけど。なんかそいつから、今まで嗅いだ事のない匂いがしたんだよ。甘い匂いっ
ての？ だけどお菓子の甘い匂いじゃない。あれは——」

マチがああの時の甘い香りを思い出そうとすれば、それに答えるかの如く、リーダー格
の男はポトリと雫のように呟いた。

「魅夢ミムノイチソクの一族……」

「ミムノイチゾク？」

鷺鼻の女が男に訊き返す。

「マチ。もしかしたらその女は、『魅夢の一族』かもしれない」

「だからなんなの？ そのミムノイチゾクって……」

けれど決して、その問いには答えてくれなかった。男は数秒黙ると、マチに目線だけを向けた。

「もう一つ頼みがある」

「——頼み？」

7月10日。

バスルームに入ってから出るまで、終止ヒソカがいつも以上に愉し気な顔である事にアリシアは気付いた。時折ヒソカはどこか遠い目をして、何かを思い出しながらニタニタと笑っているのだ。まるで、ハンター試験から帰って来たあの日のようである。

「アリシア」

暫く物思いに耽っているように見せた後、ヒソカは不意にアリシアの名を呼んだ。

「どうしたの？」

「今日試合があるんだけど、これで見るかい？」

ヒソカが指さすのは、テレビの画面である。

「試合……」

アリシアは一呼吸置くと、『会場で見たいわ』と答えた。

「ボクは嬉しいけど、平気かい？」

「ヒトには慣れてきたの。まだ少し自信はないけど……でも、きつと平気よ」

大丈夫だと笑って見せれば、ヒソカもそれに合わせて微笑み返した。

「今回の試合は絶対会場で見て欲しかったんだ◆？ キミが見に来てくれるなんて、本当に嬉しいよ◆？」

ヒソカは自分の顔をアリシアの顔に近付けると、息がかかる程の距離を保ちながらこう言った。

「試合に勝つたらさあ、ボクにプレゼントをくれるかい？」

「え？」

「忘れちゃったのかな？ キミが言ったんだよ？ ボクに何かプレゼントしたいって？」

「あ、ごめんなさい。そう、だったわね」

アリシアは忘れてしまっていたが、思い出したかのように『どんなプレゼントが欲しいの？』と、改めて欲しい物をヒソカに問うた。

「それは……」

ヒソカは、アリシアの胸の真ん中辺りを人差し指で押し当てる。

「キミ、かな♥」

「——わたし?」

アリシアは首を傾げた。それは一体どういう意味なのだろうか。うーんと唸りながら困った顔をすれば、ヒソカは『さて、ボクはもう行かなくちゃ◆?』と言つて、アリシアから離れていった。

「いってらっしゃい」

「いってきます◆?」

ヒソカが試合の為に部屋から出て行った後、クラシカルロリータの赤いワンピースに着替えながらアリシアはひとり、ヒソカへ送る予定であるプレゼントの内容について考えていた。

「……プレゼント、かぁ」

思いつく限りの事をいくら考えても、アリシアにはヒソカの言つた意味が全く理解出来ない。

気になるけど……。

一先ずは試合を観に出なければ。プレゼントの内容を考えながらずっと部屋の中に

籠つてはいられない。アリシアは一旦これを頭の隅に置くと、フードマントを着用してから会場へと急いだ。

——前よりたくさんのヒトだわ。

イルミと一緒に行って以来の闘技会場の熱気は、凄まじいものだった。

やや緊張しながら買ったチケットを持ったアリシアは、入りきらない程の観客達の中を通り抜けてから、やっと席に着いた。

——もうすぐかしら？

そわそわと緊張した面持ちで辺りを見渡せば、周りに座る観客達から『ヒソカが勝つ』や『対戦相手が勝つ』など、それについてあだこうだと言いつつ声が入ってくる。

それ程までに今日の試合は、観客達から注目された対戦なのだろう。

「ゴン選手VSヒソカ選手！ いよいよ注目の一戦が始まろうとしております！」
始まりを告げるアナウンサーの第一声は、観客達の大歓声を沸き起こした。

「あー！」

相手の選手が先に登場した。アリシアは思わず驚きの声を上げる。ヒソカの対戦相手であるゴンは、アリシアに初めてハンバーガーなるものを教えてくれた少年であったのだ。

「相手があの子だったなんて……」

まさかのゴンであった事に、アリシアは驚きと不安を隠せない。そして、反対側のゲートから現れたヒソカに観客達の興奮はヒートアップ。罵倒や応援など、様々である。

アナウンサーによる情報によると、ヒソカは現在9勝3敗。勝てばフロアマスター。負ければ地上落ちの分け目の勝負という。

オーラが……。

二人が対峙した時、ヒソカから禍々しいオーラが溢れ出した。

「ポイント&p;KO制！ 時間無制限、一本勝負！ ——始め!!」

例の如く、審判による開始の合図で試合が始まる。先に動いたのは、ゴンだ。素早い動きでヒソカに攻撃を仕掛けるも、余裕のヒソカは難無く避けている。それでも尚攻撃を止める事のないゴンではあったが、ちよつとした隙を突かれてヒソカからの攻めを受けてしまった。

「クリーンヒット！ 1ポイント、ヒソカ！」

審判の言葉に会場が沸いた。あまりの大歓声に驚いたアリシアは、思わず両手で耳を塞いでしまう。

す、す、す……！

熱氣とオーラに満ち溢れた闘技会場でまた気分を悪くしてしまいそうになったが、ヒソカの為に何とか堪えた。試合を会場で観ると言ったのは自分であるし、何よりゴンの事が気にかかる。

——大丈夫かしら。

ヒソカの試合の様子を天空闘技場で耳にした限り、必ず対戦相手は重傷または屍と化しているという。

——あの子も死んでしまうの？

ゴンを心配しながらもヒソカに勝利してほしいと思っているアリシアは、複雑な心境を持ったまま、この試合を息を飲んで見守っていた。

「まだボクは、開始位置から動いてさえないんだけどねエ……◆？」

ヒソカはこの試合を楽しんでいる様子である。それは、自分が格上だと自覚しているからだろう。

歯を食い縛り、拳を握り締めるゴンは再度ヒソカに向かって走った。反対方向へと移動し、ステージに敷き詰められていた石板を剥がすと、ヒソカの前に壁の如く立て上げる。そして勢いを付けたジャンプ蹴りをし、その石板を砕き割った。

〔出たあ——！ ゴン選手の石板返しい——!!〕

砕かれて石つぶてになったそれが、ヒソカ目掛けて飛んで行く——が、つぶては当た

らない。ヒソカがそれを殴って落としていたからだ。

だが、ゴンは当てる為に石板を砕き割ったのではなかった。つぶてを殴り落としているその一瞬の隙を狙い、素早く背後に回り込んだゴンは、不意をつかれて気づかなかつたヒソカの左頬に一発くらわせたのである。

——あ！

「クリティカル2ポイントツ！ ゴン!!」

ゴンにポイントが入り、観客の大歓声が上がった。そんな中、左右にいた観客が『甘い匂いがする』と言っているのが聴こえてきたが、アリシアは特にそれを気にはしなかった。

さて、これでポイントはひっくり返り、2対1のゴンがリードとなる。ヒソカは開始から全く動かなかつたその場から移動し、薄く笑みを浮かべてゴンのもとへと歩み寄る。

ゴンは自分のポケットの中に手をつ突っ込むと、中から何かを取り出し、丸いプレートのような物をヒソカに手渡した。

「今のは一体何だったんだー!!? わからーん!」

二人だけにしかわからない何かのやり取りを終えると、お互いに攻撃の構えを取る。

「念について、どこまで習ったんだい?」

試合中にも関わらず、ヒソカは念の話をゴンにし始めた。『基礎は全部』ゴンがそう答えれば、『キミ、強化系だろ?』と、ヒソカは言い当ててみせた。しかし、これはあくまで推測である。

「な、何でわかったの?」

素直で正直なゴンから返ってきた反応に頬を緩ませながら、自分で考案したオーラ別性格分析でゴンを分析し、強化系で単純一途と診断。ヒソカ自身は変化系で、気まぐれで嘘つきだと言う。

変化系は強化系と正反対で相性は良いとの事。ただし、気まぐれな変化系は、大事なものがあつという間にゴミへと変わるのだそうだ。

「……だからボクを失望させるなよ、ゴン◆?」

目の先にいるゴンを見据えながら、ヒソカのオーラが揺らいだ。素早いヒソカの攻撃がゴンに当たり、反動で転げたところをヒソカが蹴り上げようとした。

間一髪。避けたゴンは無事であった。――が、その衝撃により、床の石板が観客席にまで飛んでいったのである。石板はアリシアの頭上を通り過ぎ、上の方で物凄い音を立ててぶち当たっていた。

「な、何というキック力でしょう! 石板を観客席までけり飛ばしましたあー!」

ヒソカの攻撃は止まらない。ゴンはそれを受けたり避けたりで必死の様子である。

「クリティカルヒソカ！ プラスポイント！ 3-2！」

気付けば、あつという間に再逆転していた。

「かかっておいでよ♥」

「やだね！ 作戦中っ！」

息を切らしたゴンが、この状況に焦りの色を浮かべている。

「無理にでもこつちへ来てもらおうかな……♥」

そう言うのと、ヒソカは人差し指を一本立てて見せた。

あれって……。

凝を使ってヒソカの指に注目すると、その指から何かが伸びて、ゴンの左頬にくっついて見えているのが見える。自然と凝を使いこなせていたアリシアも気付かぬ内、先程のオーラ別性格分析の際に飛ばしてつけていたらしい。

「ソフフ……◆？」

ヒソカが人差し指をクイツッと軽く曲げれば、吸い寄せられるようにゴンが引つ張られた。

「ゴンがヒソカに引き寄せられる……！！」

ヒソカのもとまで引つ張られた gon は、自分の意思とは反対にヒソカの拳を受け入れてしまった。

「これ、伸縮自在の愛^{パンジーガム}。つていうんだ？ よく伸びよく縮む。つけるも剥がすもボクの意志[♣]？ ——もう、逃げられないよ[♥]」

アリシアには『自分を守る為に、系統や念能力は秘密にするんだよ』と言い聞かせていたのに、ヒソカ自身は簡単に自分の念能力について明かしてしまった。明かした能力が全てではないにしても、知られたところで何ともないのか、または自分の能力の強さに自信があるのかもしれない。

観客達の凄まじい歓声が会場に広がった。ゴンはその場にダウンし、両手と膝を付いている。

「クリティカル& a m p : ダウン!! プラス3ポイントヒソカ!! 6-2!!」

めげずに立ち上がったゴン相手に、ヒソカは闘いを中断させて三択問題出したが、答えは三択以外の四択目。ゴンを揶揄って面白がりながら少しの時間を取った。試合はヒソカの勝利目前。さあ、戦闘再開——となった時である。

ゴンは逃げもせず、自らヒソカに向かって行ったのだ。殴る、殴る、殴る。まるでサンドバッグかパンチングボールのように。ゴンの行動全てを全身に感じ、異常な欲情に駆られたヒソカはなんとも言えない恍惚な顔を浮かべて少年^{少年}を見下ろした。

「うわあああ——!!」

妖怪か変態か。不気味たる表情のヒソカ。ゾッと背筋を凍らせたゴンは、これでもか

と言うくらいにヒソカの顔面を一点に集中して攻め込む。

「おおー!?」 ラツシユラツシユラツシユラツシユラツシユ! 猛ーラッ
ッシユ!

なすがままに殴ら続けたヒソカの口角が裂けるかの如く上がった。ヒソカが握り締めた左手を動かせば伸縮自在の愛バベンツールガムによって再びゴンが引つ張られ、拳に目がけて顔面が入る。そして最後の一発を受け、防御体勢のままヒソカから離れたゴンであったが……。

「両者クリティカル! プラス2ポイントトツ! プラスダウンポイントーヒソカ!

9ー4!!」

審判の判断は、ヒソカへポイントを上げたのだった。

「直ぐに起きたよ! ガードだつてしてたじゃん!」

必死に訴えるゴンに審判は首を横に振るだけ。観客達は一斉にブーイングを投げた。

ゴンに対して不利なジャッジが見える中、後1ポイントダウンや更なる攻撃を受ければ、ゴンの負けである。

「くくくく……、油断大敵だよ、ゴン◆?」

ヒソカは左手をゴンから見て右に指差すと、『右の方を見てごらん◆?』と告げた。勿論、素直に右を向いたゴンの左頬には石つぶてがぶつかり、予期せぬ衝撃によって床に

倒れてしまった。

「あ、ゴメンゴメン？　ボクから見て右の方だった？」

ゴンが審判に文句を言っていた隙を狙い、ヒソカは左手のオーラを右に投げつけたのだ。そしてすかさず伸縮自在の愛で素早く縮むように発動したのである。

「ダウン& p:クリーンヒット！　プラス2ポイント11ー4！！　TKOにより、勝者ヒソカ！」

大いに盛り上がりを見せた試合は、ヒソカの勝利で終了した。アリシアはヒソカが満足気な顔で微笑みながら闘技会場を去って行く姿を見つめながら、暫く啞然としたまま動けないでいた。

——あの子が、ゴンが死ななくて良かった。

親切にしてくれたゴンの顔が浮かぶ。一緒にハンバーガーを買ってくれたあの日の出来事を再度思い出し、ゴンが死ななくて本当に良かったと、心から胸を撫で下ろした。一方、アリシアがまだ、会場から動けないでいたその間である。試合を終えて自室に戻って直ぐ、軽くシャワーを浴びてバスルームから出たヒソカは、窓際にもたれて待っているマチに気付く。否——、浴びている最中に既にマチが来ている事はわかってた。

「……………ふふ♥　待たせてしまったかな？」

ヒソカは側まで近寄ると、ねっとりとした目でマチを妖しく見下ろした。そんなヒソカに応える素振りなど一片も見せず、マチはヒソカをじろりと見上げながら云う。

「伝令の変更」

その一言に、ヒソカの笑みはピタリ止まった。

「8月30日正午までに、『暇な奴』改め、『全団員必ず』ヨークシンシティに集合」

「……団長も来るのかい？」

「恐らくね」

マチはヒソカから離れると、背を向けてドアの前まで歩く。

「今までで一番大きな仕事になるんじゃない？——今度黙ってすっぽかしたら、団長

自ら制裁にのりだすかもよ」

「それは怖いね◆?」

去ろうとしてドアノブに手をかけようとしたマチは、一度その手を止めて振り向いた。

「それともう一つ。あんたが連れ込んでる女、アイツも『連れて来い』……だつてさ」

「アリシアの事かい？ 何で団長が？」

「いけなかった？ 伝えたんだよ。部屋にこういう女がいたって。女の特徴言ったら何でか団長が突然、アイツも連れて来るようになって」

「……うーん♣？ 意味がわからないんだけど？」

「何よ、云われて困るような相手だったの？」

「別に♥ でもさあ、何故団長が？」

「知り合いなんじゃない？」

「アリシアと団長が知り合い？」

「さあね。詳しくはよくわからないけど、『ミムノイチゾクかも』とだけしか言わなかったから」

「ミムノイチゾク……？」

後は団長に直接訊けばわかることでしょと、再びマチはドアノブに手を伸ばす。

「了解♥ ……とところでさ、マチ、どうだい今夜♥ 一緒に食事でも？」

しかしマチは完全スルーを決め、さっさと部屋から出て行ってしまった。

……残念。ヒソカは、ついさっきマチから聞いた事を頭の中で振り返りながら考えていた。

「ふうん……？ 何故アリシアを？」

「ミムノイチゾク」というのも聞き覚えがなく、一体どういう理由があつて『連れて来い』なのか、ヒソカには全く検討がつかない。

「——まあ、いいや◆？」

ヨークシンシティに行っている間、何処にアリシアを置いておこうかという手間が省ける。細かい事は団長自ら説明してもらおうと、ヒソカはカーテンを少し開いて窓から見える空を眺めた。

アリシアがやつと部屋に戻った頃、ヒソカはまだバスローブ姿のままだった。ソファに座りながらローテーブルの上でひとり、トランプタワーを作って待っていたのだ。

「おかえりアリシア◆?」

「ただいま!」

完成したトランプタワーから目を離し、少し息が乱れたアリシアにヒソカは目をやった。

「走って来たのかい?」

「ええ。ヒソカにおめでとうって言いたくて」

「わざわざ息を切らしてまでなんて、嬉しいなあ◆?」

アリシアは最後まで試合を生で見れた喜びと、周りの熱狂にまたも驚いた事を、若干興奮気味で語り始めた。

「それでね、わたし、あのこが死んでしまうんじゃないかって少しハラハラしていたの」

「ゴンを殺すつもりは今のところ無いからねえ◆? 今回は新たに成長も知れたし……

くくくつ、本当に愉しかったよ◆?」

「本当に嬉しそうね」

「うん◆？ ボクはゴンが大好きだから◆？」

アリシアは好きという単語の深い意味がわからなかった。けれど何となく、ヒソカとゴンは知り合いであって、友達という感覚で好きなのもかもしれない。心の中でそう自己解決させていた。

「アリシア」

先程まで試合の話しの雰囲気であったこの場の空気を、テレビのリモコンのボタンを押すようにヒソカは切り替える。

「隣において◆？」

自らが座るソファに誘うと、アリシアは素直にヒソカの横へと座った。その時にふわりとまた、例の香りがヒソカの鼻腔をくすぐる。

「勝ったらのプレゼントだけど……」

ヒソカに言われて、アリシアは思い出した。

「その事なんだけど、よく意味がわからなかったわ。一生懸命考えたのよ。でも思いつかなくて、……わたしに出来る事なの？」

「ふふ、勿論◆？」

ヒソカはアリシアの髪の毛を指で遊びながら、そつとその指先で首筋を撫でた。

「くすぐったいわ」

するとヒソカはソファから立ち上がり、突然アリシアを抱き抱えた。

「ヒソカ？」

微笑のまま、ヒソカはその足でベッドルームに向かって行く。

「ねえ、プレゼントどうしたら良いの？」

ベッドに寝かされたアリシアは、自分の上を覆いかぶさって来るヒソカに、もう一度問いかけてみる。

「言っただろ？ プレゼントは、キミ◆？」

「……わたしを、どうするの？」

理解出来ずに困り果てているアリシアに、ヒソカはやつと答えた。

「キミを、——食べる♥」

貫かれたハナゾノ

「た、たべる?」

ヒソカに『食べる』と告げられたアリシアはさーっと一気に血の気を引かせ、恐る恐るそれについて訊いた。

「怯える必要はないよ ♠?」

「前にわたしのことは食べないって言った」

「本当にむしやむしやとキミを食べるわけじゃないし ♡」

「もつとわからないわ……」

上に覆いかぶさるヒソカはアリシアの両脚を割って入り、形良く並んだ歯をすらりと見せた笑みを浮かべて、アリシアの首筋を指の腹で撫でた。

不安が押し寄せる。この状況は理解出来なかった。怯えながら小刻みに震えるアリシアの姿は、ヒソカの興奮を高める材料でしかない。

「怖いかい? でも怖がらなくてイイんだよ ♠? ボクはキミを殺すんじゃない——
プレゼントが欲しいだけなんだ ♡」

初めて会ったあの日の夜のような狂気を、アリシアはヒソカから感じ取った。

「本当はもう少し我慢する予定だったんだけどさあ、今日みたいな愉しい試合の後は、本当に我慢出来なくなっちゃうんだよねえ◆？」

ヒソカはアリシアの右手首を掴むと、自身の熱く滾る場所へと持つて行く。バスロ―ブ越しから触らされた固い何かは、アリシアの知らない感触であった。

「……ほら、わかるかなア？ さつきからなかなか治まらなくなつてね◆？ もうこんな硬くなつちやつた♥」

「……ヒソカ、手が痛い」

力を込められ、ヒソカに掴まれている手首が痛む。『離して』とアリシアが言うより先に、ゴンとの試合で見たような禍々しさ溢れるオーラを、ヒソカは発した。

「ひ…………っ！」

アリシアは恐怖から、ヒソカに掴まれていた手を咄嗟に振り解こうとした。だが、それは叶わなかった。自分を見下ろすヒソカは、まるで自分をタベようとしたあの男達のようにも見える。

「……ボクを殺すかい？」

アリシアの念の力を知っているヒソカは、アリシアの唇を人差し指で何度か撫でながら問いかける。

「そ、そんなことしないっ。だってヒソカは、わたしのお友達だもの！」

今にも泣き出しそうな顔で返せば、ヒソカはくつくつと可笑しそうに笑ってアリシアの額に唇を一つ落とした。流れるように次は鼻の頭。鎖骨、最後に右脚を持ち上げ、膝の上辺りをねつとりと蹴り上げる。

それに合わせていくように段々と動悸が速まっていったアリシアは、次は一体何が起こるのかを純粹に恐れた。森にもいた、蛞蝓なめくじのような舌先で太ももを這われ、アリシアの身体はびくりと大きく震える。『やめて』と震える声で訴えるも、ヒソカは止めてはくれない。寧ろエスカレート。

「こ、——怖い。ヒソカ、わたしにな、何をするの？」

「ソッフ ♥ とつても、気持ちイイコト…… ♥」

秘部に息がかかった瞬間。アリシアは恐怖に耐え切れずに、ぎゅつと瞳を閉じた。

それはとても長く感じられた。一体どれくらい続いたのだろうか。ベッドシートに顔を埋めて横向き体勢のまま、違和感の残る下腹部を押さえてアリシアは咽び泣いていた。

「……………う、ううっ」

先程までのアレは、あの行為は何なのか。恐ろしくてとても痛いあの時間は、全て現実であったのだろうか。

「アリシア」

ヒソカの手が背後からそつと肩に触れると、アリシアはその身を縮めて小さく震わせた。

「ボクを嫌いになった？」

声からは、さつきまでの狂気は一切感じられない。アリシアは一瞬間を置いてから、首を横に振った。

「よくボクを殺さなかったね◆？」

「……だ、だってヒソカは、大切な、お友達……だもの」

鼻を嚙りながら返せば、ヒソカはアリシアの髪を優しく指で梳かし、『痛かっただろ？』と口元を緩ませる。

「止めてくれなかったわ」

「悪かったと思ってるよ◆？ けどどしようがないじゃないか◆？ 一度動き出したら止められないし、それにとつても気持ちが悪くってね♥」

「わたしは、痛かったわ！」

勢いよく上半身だけを起こしてヒソカの方へと体を向けると、アリシアはボロボロと涙を流しながら感情的に怒った。

「苦しくて息も出来なくて！ 痛くて、痛くて！ ……ううっ！」

泣きながら憤激の表情を見せるアリシアに『おやおや』となったヒソカもゆつくりと体を起こし、頬に微笑の皺を寄せて言った。

「ごめんねアリシア、ボクなりに優しくしたつもりなただけど、でもさア、痛いのは初めだけだから♥」

満悦らしい笑みを浮かべてヒソカは、怒っているアリシアの頭を撫でた。

「そんな顔のキミもまた……、そそつちやうんだけど◆？　くくくつ♥」

あのオーラが再びヒソカから溢れ出すのを感じ取ったアリシアは、体を強張らせ、流していた涙を一瞬にして引っ込めた。

「——さあ、機嫌を直してボクとシャワーを浴びよう？」

目の前に差し出されたヒソカの手を見つめて数秒間。少し戸惑いながらもアリシアはその手を取った。

「ソッフ、良い子だね◆？」

全てを洗い流してバスルームから出ると、ヒソカからこの部屋を出て行く話と、次に行く場所の話が聞かされた。

「よーくしんしてい？」

「そう◆？」

「よーくしんしてい = 何をするの？」

「実はボクシア、幻影旅団のメンバーでね……って言ってもキミにはわからないだろうけど、そのメンバーの団長の命令で、ヨークシンシティに行かなきゃいけないんだよねエ♣？」

勿論初めて聞いた場所である。だがアリシアは、それ以上ヨークシンについて訊こうとは思わなかった。今は大きな窓から見える夜空の星が、思考を奪っているからだ。

「キミを連れてヨークシンまで行く予定はなかったんだけど、団長がキミも一緒につて♣」

ヒソカも座っていたソファから移動し、アリシアの隣に立って窓から見える星を見つめた。

「……クロロという人物と、心当たりある？」

「知らない。誰？」

「じゃあ『ミムノイチゾク』ってなんだい？」

その質問に、アリシアは視線を夜空から隣に立つヒソカへと向ける。

「ミムノイチゾク……」

『私とアナタが"ミムノイチゾク"だから』

母親に言い聞かされていた言葉が、久しぶりに頭の中で響いた。

「わからない。だけど、母様がいつも言っていたわ」

ヒソカから視線をゆつくりと外し、アリシアは暗い顔をして目を伏せた。

「母様とわたしが『ミムノイチゾクだから』って。それ以上は教えてくれなかったの」
「ふうん……？」

ますます謎めくその言葉に、ヒソカも少しは気になってきた。だが、『わからない』と言うアリシアにこれ以上質問を続けても、知りたい答えは返ってはこないだろう。それならばアリシアについて詳しく知っているであろう人物に直接訊いたほうが早そうだと、今はこの件を頭の隅に置く事にした。

「——ヒソカ」

名を呼ばれ、ヒソカはアリシアに目を移す。

「わたし、これからどうなるのかしら？」

アリシアは森林公園の先に見える、雑居の建物を見つめながら言った。住んでいた森から約束を破って出て来た先は、丁度あの雑居の辺りだった筈。初めは戻ろうとしたのに、『二度と戻れないだろう』と言われてしまっただけからは、あの場所に近づく事も出来なかった。

本当は戻りたいと思っていたあの気持ちも、ヒトと関わってしまった今では完全に薄れ、寧ろ戻りたくなくて近付かないようになっていた。この場所を離れたら、きつともう二度とあの森には戻れないだろうと、何故かアリシアは思った。

「さあ、それはわからない◆？ ……でも、今はボクと楽しい時間を過ごさせる◆？ これからもね◆？」

アリシアがヒソカを見上げると、いつもと変わらない微笑みがそこにあった。

「一緒にトランプタワーで競争しようか◆？」

「……ええ。そうね」

——ごめんなさい、母様。

約束を破つて森を出てしまった事、もうあの森には帰らない事を決心しながら、アリシアは心の中で母親に謝った。

く蜘蛛ノ頭く

クモの巣へ

天空闘技場を後にして、アリシアはヒソカに付いて飛行場へと向かうと、生まれて初めての飛行船に乗った。

「凄い！ 見て、わたし達空を飛んでいるわ！」

飛行船の先頭側にある、広長い窓に手を付いて大興奮のアリシアは、地上を見下ろしながら目をキラキラと輝かせていた。

「大袈裟だなあ ◆？」

大喜びのアリシアの背後からヒソカが現れ、同じように地上を見下ろしながら声をかける。

「キミの初めての色々付き合えて、本当嬉しいよ ◆？」

この日が来るまでの数週間とちよつと。メルサの一件から始めた訓練をアリシアに続けさせていたヒソカは、使いこなすには難しいとされる、応用技修得への修行に付き

合っていた。

元々念を使えている様子はあったのだが、それを理解せずに無意識で使っていたアリシアは、酷く不安定さが目立っていた。

けれど修行の結果。読み込みの早いアリシアは予想を反し、初めから出来ていた応用技の凝の正しい修得に成功したのである。

——イイねイイねえ◆？ 脆い玩具のままより断然イイよ♥

目の前にいるアリシアの成長に身体をゾクゾクとさせながら、香ってきた甘い匂いにと、違いがあることを気付いた。

——こんなに濃い香りだったっけ？

初めて匂ったあの時の香りよりも更に濃い匂いは、いつも以上にヒソカの気分を心地良くさせていたのだった。

幻影旅団。蜘蛛の頭と、団員12本の蜘蛛の脚に見立てた13人で構成された、危険度Aクラスの賞金首の盗賊集団である。

盗みと殺し、稀に慈善活動もする彼等は、熟練のハンターでも迂闊に手を出せない存在。

その旅団の団長、団員No. 0のクロロルシルフルは、これから活動する間の借宿

を目指して一人、木陰のベンチで休憩がてらに古い書物を読んでいた。

その書物の内容は、太古の歴史や人物等が記されている古文書のようなもので、ずっと昔に読んでからのお気に入りの一つであった。

クロロがパラパラとめくる先にある文字は、「魅夢の一族」ミムノイチゾクと記されている。その文字を人差し指でゆつくりとなぞり、ふ、と静かな笑みを浮かべた。

果たしてそうなのか、そうでないのか……。

クロロは、ゆつくりとその本を閉じた。

ヨークシンシティーの飛行場に到着後、アリシアは前に行くヒソカに黙々と付いて歩いた。

被っているフードを少し上げて見た周りの景色と言えば、どこもかしこも高層ビルばかり。

夜が一層華やこの都市は、ヨルビアン大陸の西端にある、ヨークシンシティー。年に一度、毎年9月に大規模なオークションが開催され、コレクターや観光客で溢れかえっている夢の都市である。

——建物がいっぱいだわ。

そんな景色に少々圧倒されたアリシアは、今から何処へ向かうのか全く検討もつかな

い。

「ヒソカ、どこへ向かっているの?」

「蜘蛛のメンバーが待っている場所さ♣? 他の誰にも知られないような所だから、少し歩くよ♣?」

何処なのかは結局わからないままだったが、取り敢えずヒソカに付いて行くしかないようだ。

「……不安かい?」

歩きながらヒソカが訊いた。

「少しだけ……」

「だろぅね♣? ……けど、マチもいるよ♥」

「ヒソカの恋人の?」

「んふふ♥」

「恋人と同じめんばーって素敵ね!」

「そうかなあ?」

「そうよ」

アリシアの中での恋人というイメージは、幼い頃に絵本で見たお姫様と王子様の物語や、恋愛ドラマで見たカップルのキスマまでの純愛ストーリーでしか知識がない。恋愛と

はプラトニックなものだと、アリシアは本気で信じているのである。

暫く歩いてみると辺りは徐々に静けさを増していき、廃墟が目立ち始めた。周りの廃墟を物珍しそうに見ながら、アリシアは歩きを速めた。

「どうしたんだい？」

少し後ろを歩くアリシアが突然歩みを速めたのに気付いたヒソカは、前を向いたままアリシアに声をかける。

「なんだか息苦しいわ……」

「この廃墟の空間に当てられて、そう感じてるだけだよ……」

「そう、なのかしら……？」

さあ着いたよ。ヒソカが指を指した。一棟の廃墟の中に誘われて、アリシアは恐々としながら古びたコンクリートの建物の中へと入った。

まだ外は暗くもないのに、廃墟の建物の中は真つ暗闇である。

「この奥の場所で待とう……」

更に進んだ奥の部屋らしき中に入れば、床や壁や天井までもが崩れかけているのがわかった。だが、今すぐに壊れてしまう心配はなさそうだった。

少しの間二人で待っていただろうか。静けさの中で何者かの気配を感じ取ったアリシアは、慌ててヒソカの背に隠れる。

「随分とお早いお着きだたな」

男の声で、誰かが嫌味を込めて言った。

ヒソカの視線の先には、幻影旅団全団員に囲まれた蜘蛛のリーダーの姿があった。团长である男の久しい顔を熱い眼差しで見つめたヒソカは、ニタリといやらし気な笑みを浮かべていた。

「みんなが集まるの遅過ぎなんだよ◆？」

かけられた嫌味の言葉もなんのそののである。

「……本当むかつくヤツね」

黒いマントを纏い、顔から下半分を隠した小柄な男。団員No. 2のフェイタン||ポートオが言う。

「おいヒソカ」

無精髭を生やし、着流しを着ている丁髷の男は、団員No. 1のノブナガ||ハザマだ。「なあに？」

「テメエ、誰と来やがった？　そこにいる奴は誰だ？」

ノブナガは顎をしゃくってヒソカの後ろを指した。それは、ヒソカの背後に隠れているアリシアに気付いたからである。

「団長の命令でね、連れて来てるんだよ◆？」

「命令？ なんの？ 聞いてねーぞ。んなもん」

ノブナガがクロロに目を向けると、同じく知らなかった他の団員達もクロロへと注目した。

「悪い。まだ定かではなかったからな。直接確かめるまで黙っていた。——ヒソカ」

ヒソカはクロロをじっと見つめ返し、そこから視線を後ろにいるアリシアに向けた。

「さあ、アリシア、前へ出るんだよ◆？」

名を呼ばれたアリシアは少し躊躇いながらも、怖じ怖じとヒソカの前へ移動した。

団員達の一斉なる視線は、全てアリシアに注がれた。その反応は、マチ以外とても訝しげである。

「フードを下ろして顔を見せろ」

クロロがそう言うのと、アリシアは前方にいるクロロへと顔を向けた。

オールバックの髪型、額には十字架の入れ墨。耳たぶのイヤリングが特徴的な男である。アリシアはクロロに言われた通り、素直にフードを下ろして自分の顔を見せた。

——と同時。ヒソカ、マチ以外の団員皆に電流が走る。アリシアを見る周りの反応が大きく変わった瞬間だった。

「どんなツラしてる奴かと思いきや……」

一番肌を露出している薄着の大男、団員No. 11のウボオーギンがアリシアの容姿

に驚き、思わず口を開いていた。

それはアリシアを初めて見た者達も皆、同じ気持ちだった。

今までどれ程の美人を見てきた事か。目は肥えているつもりだ。——だが、アリシアの美しさはただ美しいだけではない。この世の者ではない次元の違う別格の美しさがあり、見たこともない星空の瞳も相まってとても神秘的な雰囲気を漂わせている。

言葉をも失ってしまったかのような団員達の反応に、何故か優越感のヒソカは静かに笑った。

「……でさあ、命令どおり彼女を連れて来たのは良いんだけど、説明してくれないかな？」

ヒソカの言葉にハッと我に返った団員達の視線が、再びクロロへと向かれる。

「……わかった。一つヒソカに尋ねるが、その娘から独特な匂いむすめはあるか？」

「あの甘いイイ香りの事かな？」

「マチ、お前が言っていたのは？」

「確かにソイツ本人だよ」

二人からの返事に満足らしく笑みを漏らしたクロロは、アリシアをしつかりと見定めた。

「団長？」

鷲鼻に睫毛の長い女、団員N.O. 9であるパクノダが呼ぶと、クロロは静かに口を開いた。

「そこにいる娘は恐らく、『魅夢の一族』の末裔だろう」

「ミムノイチゾク？」

ノブナガとウボオーギンが声を揃えた。

「待つて団長！ 魅夢の一族って……！」

一見して爽やかな好青年風の男、団員N.O. 6のシャルナークⅡリュウセイが、驚きの声を上げてアリシアを見た。

「魅夢の一族。かつてこの世に存在し、今は途絶えてしまったとされる幻の民族の事だ」
「聞いたことないけど、凄いの？」

眼鏡をかけた少女、団員N.O. 8のシズクⅡムラサキは、周りの空気を読まずに質問した。

「凄いつてもんじゃないよ！ でも、今は影の薄い都市伝説ぐらいにしか思われてないけどヤ」

と、シャルナークは答える。

「その娘が魅夢の一族だと知られば、世界中の考古学者やコレクター、裏の住人達や政治家達がこぞって欲しがらるだろう。その存在価値は、オレ達の想像もつかない程……」

そんな価値が。クロロから聞いた団員達のアリシアを見る目は、更に違うものへと変わっていた。

「あのコ、どういう価値があるの?」

シズクは、再び質問をクロロへと投げた。

「魅夢の一族が歴史に記され始めたのは古代からだ。その地に留まる事無く生きる移住民族の彼等は、強い戦闘力を誇る存在であり、ネイビーブルーの髪色と星を降らしたような瞳を持つ、美しい者達だそう。こぞって他の国々が欲しがらる強大戦力でもあったが、彼等にはまだ世から望まれるものがあつた」

「なんだよ」

気になったノブナガが、早く言えと急かす。

「"匂い"だ。彼等は特殊な人間で、独特の甘い匂いを発する。しかもその香りは人を魅了する成分が含まれ、その香りに取り付かれた者は数知れず。魅夢の一族の女を取り合つて戦争が起きた歴史もある」

あのさあ。挙手をして喋るのは、またまた眼鏡少女のシズクだ。

「それなりに強かつたんでしょ? なんで途絶えちゃつたの?」

「時代が平穏を望み争い事が減ると、時の流れと共に、必要とされなくなつた力が退化していく民族の話は良くある。他の民族との交じりにより純血が数を減らしていく事や、

力を持たなくなったおかげで狙われる事も勿論。魅夢の一族も例に漏れず……だ。彼等らが他と違う価値を見出された事で、結果急速に途絶えたんだ」

その価値とは、美しさもさることながら、一つは食用として。

幻の美食と噂されていた魅夢の一族の肉は、脳天を刺激する程の美味さ。もう他の食べ物を受け付けなくなってしまいう程。

二つ目は肉体そのもの。一度軀を合わせれば、極楽の世界へ誘われるような快楽を体験出来る。

一番の標的は純血の女と子供だ。男も例外ではないが、殆どが無残に殺されて人肉嗜食達の餌食となった。

奪われ殺され、食べられ続けた魅夢の一族は、それが原因で途絶えたとも言われている。

淡々と語り終えたクロロの話に耳を傾けていた団員達は、何故途絶えた筈の一族であるアリシアが、今ここに存在するのかを疑問に思った。

「深くは考えつかねえが、ミムノイチゾクってのは、とうにいなくなっちゃってるんだろ？ ソイツ本当にミムノイチゾクなのか？」

ウボオーギンが睨みを利かして質問すると、『髪色と目が云われてる通りだからそうじゃないの？』とパクノダが返した。

「髪色や瞳の特徴、匂いは魅夢の一族の証しだから、多分彼女は本物……とオレも思っていたんだけどね」

シャルナークがそう言うのと、奥に立っていたクロロがゆつくりとアリシアに近寄って行く。

「魅夢の一族を見極める方法が、髪色や瞳以外にもう一つある。彼等は、体の一部に印をつける伝統的な風習を持っていた」

アリシアの目の前に、クロロは立った。

「一族以外と交ざった者達には無くなってしまった印が……」

アリシアの左耳に手を伸ばすと、クロロはその耳に顔を近付けた。

「何してるね？」

フエイタンである。

「やはり真正正銘、この娘は魅夢の一族だ」

アリシアの髪を少し上げてずらし、左耳の裏側の耳たぶを指で曲げて見ながらクロロは呟くように言った。

「魅夢の一族は子が生まれると、直ぐに一族の証として小さな入れ墨を左耳の耳たぶの裏に彫る風習があったんだ。この娘にも同じ小さな星型の入れ墨が彫られている」

「それじゃあもしかして……!」

シャルナークがアリシアを凝視しながら言った。

「しかも純血だ」

クロロはアリシアからヒソカへと目を移した。

「ヒソカ、お前は何処で拾ってきたんだ？」

「たまたま偶然見付けて連れ帰っただけ？ 場所は天空闘技場近くの森林公園だった気もするけど、彼女は別の森から来た……としかわからなくって？」

クロロはもう一度アリシアを見つめて、『何処の森だ？ 他に仲間はない？』と質問を投げた。

——なんだか、頭が。

目の前に立っている男の質問に答えなければと思っていると、急に頭の中がふわりとしてくる感覚にアリシアは陥った。

「わ、わからないわ。わたしはうさぎを追っていただけなの。気付いたら知らない場所にいる……、森では母様と一緒にいた。でももう、死んでしまった。他に仲間なんて知らない。生まれた時から母様以外のヒトは見たことがなかったもの……」

ふわりふわり。徐々に意識は朦朧としてくる。そんな状態のアリシアは、何とか本当の事をクロロに伝える。決して嘘ではないと。

「最後の生き残りってやつか？」

ノブナガが問うと、クロロの代わりにシャルナークが返した。

「確か最後に発見された極秘記録によると、十数年以上前に男と女の二人組の目撃が報告されているよ。男の方は捕まって裏で捌かれたって」

「女の方は生き残ったのか？」

エジプト風の衣装を身につけた目付きの悪い男、団員No. 5のフィンクスⅡマグカブがシャルナークに訊いた。

「捕まえ損ねたらしいけど。もしその女が子を宿していたとしたら……」

やはりアリシアは魅夢の一族の生き残りにして最後の存在。

「ヒソカ、この娘をどうしておくつもりだ？」

再びクロロがヒソカを見ると、ヒソカはクツクツと笑い出した。

「もしかしてさあ、彼女を連れて来させたのは、金にする為……なのかなあ？ 利用する

のはまた別として、生憎だけどボクは献上するつもり全くないから◆？ ……今のところは、ね◆？」

そう答えながらニタリと笑顔を向けると、フェイタンは『ミムノイチゾクが貴重と知て手放すのが惜しくなたか』と、ヒソカを睨んだ。

「別になんの一族だろうと、そんな事どうでも良いよ◆？ アリシアはボクが見付けた玩具なんだ、今は誰にも譲る気はない◆？」

ヒソカがそう伝えれば、クロロはあまり表情を変えずに平然として『それは残念だな』と、言った。

「まあ良い。だがこの娘は想像も超えた価値がある。迂闊に壊したりするな」

「やだなあ、そんなもつたいたいコトしないよ◆？」

薄気味悪く笑うヒソカに対し、ノブナガはぽつりと悪態を吐くように『ウソこけつ』と呟いた。

「ソイツがミムノイチゾクってのはわかった。けどよ、団長こそ、どうするんだ？」

「まさかただ見てみたかっただけ……とか？」

フィンクスとシズクが更に問いかけ、クロロは一人考えながら静かに唸った。

「正直、驚きを隠せないでいるんだ」

その表情は少しも驚いてるようには見えない。

「団長でも驚く事って、あるんだね」

シズクが言うのと、『オレだつて驚きはする』とクロロは返す。

「……でもまあ、そんな珍しいお宝に折角出会えたんだしよ、この際売っちゃまったらどうだ？」

「そうね。ただ見るだけの観賞用なんて旅団らしくないよ」

ノブナガとフェイタンの提案に少しムツとしたのはヒソカだった。

「彼女は売らない♣?」

「お前が決める事じゃないね」

「見付けたのはボク♠?」

「それがどした。お前が何度団長の手を煩わせたか忘れたか?」

「お詫びに捧げろ……とでも言うつもりなら答えはノー◆?」

「相変わらず癪に障るヤツね……」

ヒソカを一方的に睨み、フェイタンから険悪なオーラが溢れる。

「団員同士のマジギレは禁止だ、抑えろフェイタン」

声を低く出してフェイタンを制止させようとするのは、不気味な怪物のような風貌と長い耳たぶや顔中に無数の傷跡が特徴である巨漢、団員N0.7、フランクリンⅡボルドーである。

「ヒソカが手放す気はないようだからな、今はこのままに置いておくしかないだろう」

「欲しいモノは奪ってでも手に入れるのがモト……。団長はヒソカに甘いね」

「そうだけ団長。わざわざこうして目の前にあるのによ」

クロロに不満を告げるのはフェイタンとウボオーギンだ。

「確かにそうだが、団員であるヒソカから今無理矢理奪つたところで何になる? 一先ず今こうして蜘蛛の手にあるんだ、焦る問題にはならない。それに、貴重な魅夢の一族

の女をそう簡単に競売に賭ける訳にはいかないだろ。死体でさえ高値が付くんだ」
「……団長」

『死体』に反応したのは、この中で一番背が低く、全身を覆う程の長い毛が特徴の団員 No. 12、コルトピットノフメイルだった。

「ボクの念能力を使えば、そのコの死体は可能だよ」

「おー、その手がありや何度でも稼げるじゃねーか！」

「だけどノブナガ、貴重な一体を何度も売りに出してたら貴重じゃなくなるだろーが」

「そうだよ、ネットにすぐ出回っちゃうし」

フランクリンとシャルナークにそう言われ、ノブナガは『んなもんわかりやーしねえって！』と返した。

団員達がああだこうだとアリシアについて話す中、マチは呆れながらふとアリシアに視線を向けた。

話の当事者であり、自分の素性を少なからず知る事になったのだ。さぞかし今は恐怖心や不安感でいっぱいなんでしょうねと、マチは思っていたのである。けれど、アリシアの表情からは恐怖心など表れてはいなかった。

何も聞いていないのか、否——、耳に入っていない。虚ろに地面へと目を伏せるだけで、ぼうつと突っ立っているだけなのだ。

「団長、偽物の死体だけなら……ボクはかまわないよ◆？」

ヒソカがクロロを見つめて笑いかけた。

「何がかまわねえだよ。てめえがそんなこと言える立場かっての」

「しつこいなあ……？ さつきから言ってるだろ？ 彼女はボクの玩具だつて◆？」

そう返してきたヒソカに、フィンクスは苛立ちながら軽く舌打ちをした。

「ちよつと！ いつまでも話が進まないと埒があかないわ。ここはいつもので任せましようよ」

痺れを切らしたパクノダが提案するのはコイントスだ。団員内で起きた揉め事など、意見が分かれた時に解決する為の旅団ルールである。

「この件を団長に全部委ねるか、ヒソカに任せるかにしましょう」

「じゃあ誰が投げる？」

「私がやるわ」

そう言つてパクノダはコインを手に取り、上へと投げて落ちてきたコインを手の平で素早く隠した。

クロロが表と言えば、必然的に裏はヒソカである。そしてパクノダは、ゆつくりと隠したコインを団員らに見せた。

「……この件は、団長に委ねましょう」

結果は表。旅団内のルールに従って団員達は皆、クロロの言葉を待った。

「その娘の今後は保留。取り敢えずはヒソカに任せよう。今はそれよりも、みんなに集まってもらった目的を話す」

クロロの言葉にヒソカ以外、特にフェイタンやフィンクス、ノブナガは不満大有りだった。だがそこはぐつと抑えるしかない。ヨークシンに集まった本来の目的を忘れては元も子もないのだ。

早速話が進められようとのこの場の空気が切り替わった時、アリシアは強烈な目眩に襲われていた。

普通ならば自分自身の存在を疑問に思い、ヒソカの玩具発見や今の状況に怯えたり混乱したりする状況なのではあるが、今はそれどころではない。立っているのがやつとなのだ。

そんなアリシアに気付いたのは、マチ以外にパクノダだった。

恐くないのかしらと、視線をクロロからアリシアに向けた瞬間。——倒れる。パクノダが言うより先、アリシアがそのままバタリと地面に倒れ込んだ。

「オイ、倒れたぞ」

フランクリンの言葉に、皆がアリシアへと再度注目した。

「——限界だったかなあ◆？」

ヒソカは何も驚きはせず、倒れているアリシアを抱き起こした。

「何がだ？」

クロロが問うと、ヒソカは薄笑いを浮かべて『睡眠を取っていないからね◆？』とクロロを見つめ返した。

「……さあ、話を進めてよ、団長♥」

魅惑的な力才り

9月1日。

3年2ヶ月ぶりに集結した、幻影旅団全メンバー。

クロロから告げられた今回の目的は、特に裏のお宝が競売されるという、
アンダーグラウンドオークション
 『地下競売』のお宝を丸ごとかつさらう事である。

「——オレが許す、殺せ。邪魔する奴は残らずな」

同日夜。

仮宿にしている廃墟に残ったクロロ、ヒソカ、フィンクス、ボノレノフ、パクノダ、コルトピ以外のメンバーが、マフィアが仕切る地下競売会場へと向かった。

気絶するように眠ってしまったアリシアは、この仮宿のビルの隣に建つ、同じく廃墟である建物の一室でひとり寝かされたままだった。

「品物がない?」

残りのメンバーで待機中、クロロに一本の電話がかかる。相手はウボオーギンからで

あった。

『——ああ。金庫の中には何一つ入っちゃいなかった』

地下競売会場を襲撃し、目的の品を手に入れようとしたところ、マフィア側が事前に競売品を持ち出していたのか、金庫の中は空っぽであったのだ。

『あまりにタイミングが良すぎる。オレ達の中に背信者^{ユダ}がいるぜ』

「いないよ、そんな奴は」

ククロはそれを否定した。

「それにオレの考えじゃ、ユダは裏切り者じゃない」

旅団^{クモ}の中の『裏切り者』は、一体何のメリットがあつて売るといふのか。

金、名誉、地位。それで満足する者が、本当に旅団の中にいるのか。

『……流石に、そんな奴はいねえな』

「だろう？ ——それともう一つ。解せない点がある」

仮に密告者がいたとして、対応は実に中途半端である。A級首の旅団の情報を知っているとしても、警備が甘い。

「——オレの結論を言うと、情報提供者はいるが、その内容は具体的ではない。にも拘らず、それを信用している人物がマフィアコミュニティーの上層部にいる」

『よく……わからねえな。どんな情報が誰から誰へ伝わってるか、がよ。まあいい。——』

——で、オレ達はどうすればいい?』

「競売品をどこに移したかは聞いたか?」

『ああ。だが——』

オークションニアは死ぬまで『何も知らない』としか答えなかった。

「移動場所を知ってる奴の情報は聞き出したんだろう?」

『勿論だ』

地下競売を仕切るのはマフィアンコミュニティで、6大陸10地区を縄張りにして
いる大組織、通称^{じゅうろうどう}「十老頭」の「長達が元締めである。

この10人がこの時期にだけ一ヶ所に集まり、話し合いによって様々な指示を出す。
実際動くのは「十老頭」ご自慢の実行部隊、『陰獣』。それぞれの長が組織最強の武闘派
を持ち寄り結成された。

『警備にそいつらが参加してなかった事からみても、オレ達の介入は知らなかったと考
えていいだろう』

「——で、競売品の移動手段には何を使った?」

『それがよお、陰獣の構成員がたった一人で来たそうだ』

現れた構成員は、『変更指令だ』と言って金庫の中に入った。

確かに手ぶらで入って手ぶらで出て行った筈なのに、25平方メートル位の金庫の中

の競売品は、全て無くなっていたのである。

『……そいつは梟と名乗る大柄の男だ』

「シズクと同じタイプの念能力者か」

団員のシズクの能力は具現化系で、念で創った掃除機を使って色々なものを吸い込ませることが出来る能力を持っている。

『おそらくな。向こうも500人近い客が消えた事で気付いた筈だ』

敵は同じく念能力者だ。

『戦^やつていいよな?』

「勿論だ。追って相手に適当に暴れてやれよ、そうすれば陰獣の方から姿を現わすさ」

ウボオーギンとの電話を切ったクロロは、読もうとして途中で閉じていた古書を再度開いた。

「あつと……、そうだ忘れてた◆?」

同じ空間で待機していたヒソカが、突然思い出したかのように立ち上がった。

「今日人と会う約束をしていたんだ◆? 行ってもイイだろ?」

「ああ、かまわない。明日の午後6時までに戻ればな」

クロロは古書から目を離さない。

「……悪巧みか? ヒソカ」

「——勿論♥」

ヒソカはそう答えると、一人仮宿から出て行ってしまった。

「団長、あの娘の様子見てきた方がいいかしら？」

クロロから少し離れて座っていたパクノダは、ヒソカの去った方向に目を向けながら訊いた。

「いや、今は眠らせておけ」

「了解……」

古書から目を離さないクロロに目を移せば、彼の右の瞼がほんの僅かに動くのが見えた。それに気付いた時、パクノダの心の内側には小さな波が立っていた。

「おい、冗談か、それ？」

フィックスが半笑いで言った。

陰獣を相手し終えた筈のメンバーから、信じられない一報が届いたからである。ウボオーギンが、マフィア側に捕らえられてしまったのだ。

「まさかあのウボオーを……、な」

全身に包帯を巻き、その上からボクサーの様なトランクスとグローブを身に付けた団員No. 10、ボノレノフllンドングが呟いた。

クロロはこれに対し、フィックスに命令を下して陰獣を全滅させたメンバーと合流さ

せると、直ぐにウボオーギン救出に向かわせた。

そして深夜。ウボオーギンの救出は難なく成功した。だが、ウボオーギンを捕らえた張本人の姿は、そこには既に無かった。

その後のノブナガからの連絡によると、ウボオーギンはその人物と決着をつけたいが為、『集合時間までには必ず戻る』という約束のもとで単独行動に出たという。勿論、コイントスの結果の行動であつた事も伝えられたのだつた。

「……ん」

まだ星も出ている夜明け前。アリシアは突然に目を覚ました。

——ここは？

真つ暗ではあつたが、見えなくもない。多少埃臭いこの空間は、昔ホテルの一室として使用されていたらしい形跡があつた。

——わたし、もしかして寝てしまったの？

眠る前の状況が、アリシアの頭の中でフラッシュバックした。

暗い廃墟の中でヒソカと待っていると、団長と呼ばれた男を中心にして、マチを含む何人かが現れた事。

魅夢ミムの一族ミムノイチゾクについて詳しい者がおり、他に「仲間」がいるのかという質問に答えた

事。ただし、それ以降の記憶は氣を失ってしまったので曖昧である。

アリシアは壊れかけのベッドの上から起き上がると、部屋の中を見回した。

「ヒソカ？」

返事は無い。

「誰もいないの？」

アリシアは部屋から出ようとして、古くなったドアノブを回した。開いたドアが錆付いていたせいで、ぎいと耳障りな音を立てる。

顔だけを覗かせて見れば、ひびの入ったコンクリートむき出しの壁と床が続く、長い廊下があった。

慣れているので全く見えない事は無いが、やはり暗い。窓枠だけがかろうじて残っている窓から、月の光が薄く廊下を照らしているだけだった。

その光に導かれるように、アリシアは窓の外で輝く月と星空を見上げた。

——朝の匂いがする。

僅かな風によって漂う、夏の朝の匂いを感じて瞳を閉じる。すると左側の廊下奥から誰かの気配がして、アリシアは目を開いた。

ヒソカ、……じゃない。

暗闇の奥から現れたのは、クロロだった。

「起きたようだな」

アリシアは自分の目の前までやって来るクロロに少しだけ警戒し、不安げな眼差しを向けた。

「オレが恐いか？」

クロロの表情が変わりはない。その瞳は、いつか見たイルミの暗い闇色とはまた違った、深くて真つ暗な色をしている。

「……わか、らない」

イルミの目を見た時には、何故だか直ぐにわかった。アリシアを殺そうと、タベヨウとしているのかそうでないのかを。

けれどクロロの場合、そのどちらでもないのだ。

「わからない？」

「だ、だって、本当にわからなくて……」

アリシアはクロロの瞳に映る自分を見つめた。クロロもまた、アリシアの瞳を見つめている。

「あなたは、わたしをタベる？」

どちらとも取れる質問をしたアリシアに対し、クロロは少し間を空けてから答えた。

「……なるほど、だからわからないと言ったのか。そうだな、オレはお前を食べようとも、——殺そうとも思っていない。これなら、どうだ？」

クロロの言葉に抑揚はあまりない。けれどそれで心落ち着かせたのか、アリシアはクロロに微笑んでみせた。

——でも、やっぱりわからないの。

アリシアは口には出さず、心の中で再度思った。クロロのアリシアを見つめる瞳は、あまりにも暗くて深過ぎる。

「ねえ、そういうえば——」

ふと我に返るように思い出したアリシアが、ヒソカの行方をクロロに訊こうとした次の瞬間。

クロロはアリシアを、自らの腕の中に抱き寄せたのである。

——え？

突然の事にアリシアは驚いた。

「僅かに香る、これがそうか？」

クロロの息が首筋に当たって、アリシアは妙にくすぐったく思った。そして腕の中にいれば、クロロの心音がダイレクトに伝わってくるのがわかる。

この音……。

アリシアは目を瞑り、その胸に耳を当てて聴いた。クロロの乱れの無い静かな心音を、全身で感じ取るのだ。

——ああ、なんだかとっても懐かしい。

生まれる前のお腹にいる時に感じた母の心音と、クロロの心音はとてもよく似ている。

幼い頃に母親に抱き締められた記憶を頭の中に思い浮かべ、アリシアは無意識のうちにクロロの背中に腕を回していた。

「ほう、これは凄いな」

クロロは強く発せられた甘い香りをひと嗅ぎすると、ゆつくりと腕の中のアリシアを解放した。

「名は、——確かアリシアだったな？」

アリシアも閉じていた瞳を開き、背に回っていた腕を離してクロロを見上げた。

「ええ、そうよ。あなたは——だん、だん……」

「クロロだ」

「クロロ、ね。ねえクロロ、わたしあなたの心臓の音、とても大好き」

「そうか……」

——オレはお前の瞳と甘い香りが気に入った。

笑顔のアリシアから壊れた窓へと目を移したクロロは、窓から覗く明けの明星に目を細めた。

アリシアが眠っていた廃ホテルの屋上。フェンス越しから日の出前の東の方向を見つめ、パクノダは一人佇んでいた。

——団長はあの娘アリシアを欲しがっている。

クロロは感情を余り出さない。

けれどパクノダは、そんなクロロの一瞬を見逃しはしなかった。

——本当、昔から変わらないわね。

他の団員は絶対に気付かない癖のようなもの。クロロが本気で欲しがる時、右の瞼がほんの僅かに動く。

——今回の場合は、一体どうするのかしら？

欲しいモノは奪つてでも手に入れる、それが幻影旅団クモ。

魅夢の一族であるアリシアは、団員であるヒソカの言わば所有物。アリシアが団員のモノでなければ、クロロは躊躇せずに奪つていただろう。——でも、団員だからといって遠慮する必要はない筈だ。

「団長。ヒソカはあの、アリシアって娘を手放すと思う？」

クロロがアリシアのもとに行く前、パクノダは敢えてそう訊いていた。

「どうだろうな。今までと同じならば直ぐに飽きて手放すか、その前に殺していただろう」

その口ぶりが、パクノダは妙に気になった。

「今回は違うの?」

クロロは一拍置くと、パクノダに目を向けながら答えた。

「恐らく今のヒソカは、あの娘を手放そうとはしないし殺しもしない。——そうだな、もう自分の意思では殺す事も出来ないが正しい、か」

「どういうこと?」

「パクは魅夢の一族をよく知らないんだったな」

「ミムノイチゾクと、ヒソカがあの娘を手放せない理由は、何か関係あるのかしら?」

「……そうだ」

クロロはやおらにパクノダから背を向けた。

「いつもなら迷う事なく欲しいモノを手に入れてきた貴方が、ヒソカに対して遠慮してるとは思えない。その理由も、ミムノイチゾクが関係して……?」

「"副作用"だ」

「……副作用?」

クロロはそれだけ言うと、それ以上何も語らずにパクノダのもとから去って行ってしまった。

——副作用? 一体どういう意味なの?

クロロが言った副作用とは何の副作用なのか。だが、はつきりとわかっている事は、クロロがアリシアを欲しがっているという事実。

団長……。

パクノダは、少しアリシアを羨ましく思った。本気で欲しがる時の癖を、好きな書物にししか出さなかった筈のクロロが、アリシアには出したのだから。

——欲しいと思われるなんて、ね……。

団員の誰も気付かないクロロの表情ひとつひとつを、パクノダはずっと見てきた。

これが家族のように思っ過ぎてきた大事な仲間としての感情なのか、ただの陳腐な恋愛感情なのかは、今のパクノダ自身にもわからない。

「……馬鹿馬鹿しいわね」

パクノダは、空を仰ぎ見ながら自分自身を自嘲した。

「あれが魅入られた人の末路さ」

クロロはとある廃れた村で、魅夢の一族の女に魅入られてしまったという男を見た事があった。

子供の頃に盗んだ古い書物に、【魅夢の一族】という聞いた事もない民族の名を初めて知った時から、クロロは魅夢の一族について高い関心をもっていた。

だが実際、存在はお伽話のように薄く、やがてクロロの記憶の隅に残るだけであった。それから何年か過ぎた頃。団員との待ち合わせの場所へと向かう途中に寄った村で、ある話を耳にし、子供の頃の記憶と共に魅夢の一族の興味が蘇ったのである。

「この村の奥にはな、浮浪者が住み着いてる一角があるんだけど、なんとその中に、昔魅夢の一族の女を手にした事がある男がいるってよ」

「その話、本当？」

「へえ、兄さん、魅夢の一族をご存知で？」

「ガキの頃聞いたことがあってね。……でも、所謂お伽話だろ？」

「お伽話じゃないさ。本当に存在してたんだって。ここだけの話、何年か前に一族の最後の生き残りらしい男が、こっそり競売に出されてたんだから」

「そうなんだ。——で、さっき言ってた、手にした事のある男の話を詳しく知りたいんだけど」

その時までのクロロの心境は、半分興味範囲で半分どうでもよかった。

「その男つてのは、昔ある一帯を取り仕切ってた大地主でね、どういうルートか知らないが、当時絶滅寸前だった魅夢の一族の女を手に入れたんだ」

「何で大地主をやってた男が浮浪者に？」

「魅入られちゃったからだよ」

「魅入られた？」

「見りやあわかる」

連れて行かれた先は、浮浪者が住み着いてるといふ場所だった。

「ほら」

指された指の先に目を向ければ、古びた建物の隅で項垂れて座り込む、見るからに薄汚れた老人がいた。

頭はボサボサの長い白髪頭。衣服は汚れが目立ち、あちらこちらとほつれている。口は開けっ放しで涎を垂れ流し、身体は痩せ細って骨と皮だけ。とても生きているとは言い難い状態だった。

「ワシも昔、若い時に人から聞いた話なんだが、あの男は手に入れた魅夢の一族の女を大層大事にしてたそうだ」

初めは普通に愛でるだけだったのが、女を見る周囲の羨望に嫉妬し、徐々に男の様子がおかしくなったという。

「自分の側近の男が狙っていると言いついては次々と周りの人間を殺し、誰もがその男に近づくのを恐れた。——だが、そうやって殺された男達の妻や親兄弟が恨みや怒りを募らせ、ついには村々全体で男に復讐を……と、動き出してしまったんだとよ」

元々から横暴で酷かった男の仕打ちを更に上行く非道は、ついに我慢の限界に達し、

男の屋敷へと大勢で押し寄せる事態となった。

「……まずは屋敷を荒らすだろ？ 警備なんかとつくだに見限っていないし。粗方荒らし回った後の皆の目的は、男の命よりも大事にしていた魅夢の一族の女だね。だからその女を男の目の前で殺してやる事が、何よりの復讐だったらしい」

「……で、復讐は遂げられた？」

「ああ。男の目の前で無惨に、だだよ。男はあまりにもものショックで一瞬にして廃人のようになっちまって、今のあの状態なんだとさ」

「男は殺されなかったんだね」

「殺すより生き地獄を与えたかったんだらうよ」

魅入られた男の末路を語り終え、『大昔から魅夢の一族を手にした奴らは、殆どがああなっちまうそうだ』と、ご老人は最後にそう教えてくれた。

その後、クロロは魅夢の一族について記された本などを探し出し、魅夢の一族に関わった者達の魅入られた最期を知ることが出来た。

いくつかは取り扱い説明書のようなもので、『食べる目的なら交わるな』、『死ぬと瞳の中の星が消える』など。

中には『並大抵の者が魅夢の一族を手にはならない』と書かれ、古い文献の一部には、『人の精神を狂わす悪魔、魔女』として処刑された事も記録されていた。

——人の精神を狂わす悪魔か、面白い。

クロロはそれらを読み続ける度に、魅夢の一族への興味を増していた。

人は何故、かくも滅んだ文明や歴史、民族に魅かれるのだろうか。

——残念、一度でもこの目で拝んでみたかった。

ある日のマチから、魅夢の一族の特徴を持つ女の存在を知らされたのは、この日から4年後の事である。

ハイケイ、仮宿から貴方へ

夜明けと共に、ヒソカとウボオーギン以外の団員が仮宿に戻って来た。

情報を得る為と、運搬役であった陰獣の一人を捕らえて来たらしく、尋問にフェイタ
ン、見張りの交代要員でフィンクスはそのまま別棟へと向かった。

残りのメンバーはそれぞれに仮宿内を自由に過ごし、瓦礫だらけの倉庫跡らしき場所
には現在、半分寝かけのボノレノフト、うつらうつらとしているコルトピ、そして古書
を読むクロロがいる。

静寂に包まれている中、アリシアの声が僅かに響いた。

「何を読んでいるの?」

廃ホテルから来たアリシアは、古書を読むクロロを発見するや否や、その隣に腰を下
ろした。

「……古い歴史書だ」

「ふーん。クロロは本が好きなの?」

始めは古書から目を離さなかったクロロは、『本が好きなの?』という質問に反応してアリシアを見つめた。

「ああ、本は好きだ。お前は本が好きか?」

「好きよ。だって色んなことを教えてくれるもの」

アリシアが知ってる本といえ、母親から与えられた絵本のみ。けれどその本だけが唯一、自分以外のヒトの存在を知らせ、森以外の世界を教えてくれたのである。

「……そうだな」

クロロは優しい目つきで読みかけの古書を閉じると、自分の近くに積み置いている中から一冊を取り出した。

「これは、表紙が好みで試しに手に入れて読んでみたんだが——」

深緑一色の表紙は、まだ新しいようにも見える。厚みは4cm程で、『彼女は知らない世界で』というタイトルだった。

「つまらなくはない、が。……オレには少々物足りなかった。だが、お前なら気に入るかもしれん」

クロロはそう言うと、その本をアリシアの目の前に差し出した。

「——え?」

アリシアは目の前に出された本とクロロを交互に見つめ、『もしかして、プレゼント

？」と訊いた。

「プレゼント？　そういう事になるのか……？　売るにも大したモノにはならないし、どうしようかと思っていたところだ」

アリシアの手を取ったクロロは、その手の上に本を乗せる。

「後はお前の好きにすれば良い」

「わたしの好きに……？」

アリシアは本の表紙を指でなぞり、満足らしく笑みを漏らしながらそれを抱き締めた。

「クロロからのプレゼント、大事にするわ。ありがとう……！」

放たれた甘い香りは、読んでいる途中で閉じた古書をまた開こうとするクロロの鼻腔を擦った。

早く読んでみたいと立ち上がったアリシアは、クロロから少し離れた場所に移動すると、ワクワクとしながら本を開いた。

『彼女は知らない世界で』

ベルはどこにでもいる普通の少女だった。

物語冒頭の一行目にはそう書かれていた。

クロロから貰った本は大衆文学の所謂、よくある異世界モノである。

階段から転げ落ちた少女が見知らぬ異世界で目覚め、元の世界に帰る方法を探しながら旅に出るという物語だ。

文字ばかりの本をいざ読めるのかどうかという心配はあったものの、ルビを振られていたおかげでそれは難なくクリア出来そうだった。

アリシアは心の中で辿々しく読んでいくと、徐々に物語の中へと引き込まれていった。

9月2日日夜。

地下競売の品が盗まれた事により、マフィア側がなんとかして取り戻し報復しようと、競売を装って旅団クモの首に賞金をかけた。

一人でも多くの人材が欲しかったのか、表の競売上では幻影旅団であるとは発表されなかった。

顔が割れたのは、ウボオーギンにノブナガ、シズクにシャルナーク、フェイタンとマチ、フランクリンの七名。

金額は標的一名につき、20億ジェニーの小切手だった。その情報は、団員達も既に得ている状況である。

そして、標的の一人になったウボオーギンは時間を過ぎても戻らなかったが、ヒソカ

は時間ギリギリに仮宿へと一人戻ってきたのだった。

旅団のメンバーを集めさせ、今は戻らないウボオーギンの行方と、それに関係しているであろう鎖使いの人物について話し合いが行われた。

操作系が具現化系か。先ずは鎖使いの系統を予想。圧倒的な戦闘力を誇っていたウボオーギンだが、一対一で敗れる可能性が高いのが、この両タイプである。

具現化系は、物体化したものに特殊な能力を付加する能力者が多い。その能力次第では、ウボオーギンの力が通じない場合があった。操作系であるなら、ウボオーギン本人が操作されてしまうともう致命的だ。

「やっぱりオレもついて行くべきだった。……くそっ！」

ウボオーギンの単独行動直前まで一緒だったシャルナークが苛立ちを募らせる。

「夜明けまで待つて戻らなければ、予定変更だ」

しかし結局、ウボオーギンは朝を迎えても戻りはしなかった。

予定は変更となり、クロ口の新たな命令が出されようとしていた。ウボオーギンの行方は鎖使いが握っている筈である。団員は誰も鎖使いの顔を知らない。その人物を捕まえるには情報が必要だった。

「ノブナガ、マチは二人組ペアになって鎖野郎を探し出し、見つけたら連れて来い」

「それだけか——？」

クロロに目だけを向けて、ノブナガが問う。

「それだけだ。オレは別口を探る。フィックス、一緒に来い」

「わかった」

「後のメンバーは全員仮宿に待機だ」

ノブナガとマチがラフなジャージに着替えてから仮宿を出た後、クロロの命令は密かに変更された。

「フィックス、お前はパクノダと二人組ペアになってノブナガとマチを見張れ」

「はあ？ なんの為に？」

「顔が割れているあの二人が表に姿を出せば、鎖野郎本人もしくは、仲間のマフィアをおびき出せるかもしれん。そいつらから情報を得れば良い。お前達はノブナガとマチにおびき出された奴らを後方から尾行しろ」

「何でまたあいつらには言わなかったんだ？」

「敵を騙すにはまず味方からでしょ」

パクノダがクロロの代わりに答える。

「そうだ。敢えて言わないことで、あの二人も普段通りに振る舞えるようになるからな」
「……なるほど」

フィックスはそれを納得し、パクノダと一緒にノブナガとマチを追って行った。

クロ口といえば、別口を探ると言つて、単独で仮宿を出て行ったのだった。

それから夕方近く経つた頃だろうか。シャルナークのケータイに、パクノダから連絡が入つた。

「ノブナガとマチを尾行してきた子供二人、捕まえたつてさ。もう直ぐしたら此処に連れて来るつて」

「子供？ 鎖野郎の仲間か？」

フランクリンが訊ねる。

「どうだろうね……。鎖野郎に繋がつてたら良いんだけど」

静かで穏やかな空間が、少しだけピリピリとした雰囲気に変わる。今まで本に夢中になり過ぎていたアリシアはこの変化を感じ取り、やっと我に返つた。

「——ヒソカ、戻つてたの？」

ヒソカが戻つていた事も、クロ口達が仮宿を出ている事も、アリシアは今の今まで気付いていなかった。それほど、本を読むのに没頭していたのだ。

「キミが物凄く夢中だったからさあ、邪魔しちや悪いと思つてね◆？」

「気づかなくてごめんなさい。……あ、ねえ、ヒソカ」

アリシアはこの緊張感のある空間を不安に感じ、こつそりとヒソカに耳打ちをした。

「みんな、何か、あつたの？」

「色々、ね……◆？　もう少ししたら誰かがやって来るけど、キミはおとなしく見物でもしてて◆？」

「喋っちゃいけないってことね？」

「だね◆？　静かに本の続きでも読んでたらイイよ◆？」

ヒソカは、どこか楽し気に声を潜めて言った。

「戻て来たね」

フエイタンの声に皆が入り口の方へと注目すれば、張り詰めた空気がより高まった。

——あ！

ノブナガとマチ、フィンクスにパクノダが捕まえたという子供二人の姿を目で捉えた瞬間、アリシアは思わず声を上げそうになった。

何故ならその子供二人は、天空闘技場で会ったゴンとキルアであったからだ。

「あの子達のこと、何も知らないふりをしてればイイ♥」

耳元でヒソカの囁きが僅かに聴こえた。

——知らないふり？

どうして知らないふりなどしなければならぬのか。直ぐにでも訊きたい衝動に駆られはしたけれど、アリシアはそれをなんとか我慢して、今はヒソカの言うとおりにしようと思った。

——あ、わたし、フードを被ってない。

今のアリシアがフードマントを身に付けていなかったお陰なのか、素顔を知らないゴンとキルアがアリシアに気付いた様子はない。

「あつー！」

しかし、その隣にいるヒソカには気付いたらしいゴンが思わず声を上げる。

「何だ？ 顔見知りでもないか？」

ノブナガに問われてしまい、 gon はしまったと焦り顔。どうやらこの二人も、何やら事情を抱えていたようだった。

——誤魔化せるか？

咄嗟の判断をしたキルアは、ヒソカの近くに座るシズクを指差した。

「あー！ 腕相撲あのとぎの女!!」

「何だ、シズクの知り合いか？」

フィンクスに訊かれたシズクは、『ううん、全然』と答える。

「ああ……、思い出した。腕相撲してた子供ね」

「なんだっけ？ それ」

一昨日、地下競売会場に向かう途中でフェイタンとフランクリンと一緒にだったシズクは、条件競売をしていたゴンと落札条件である腕相撲をして負けていたのだそうだ。し

かし、当のシズクはその事をすっかり忘れてしまっている様子である。

「ムリね。シズクは一度忘れたこと思い出さない」

「ウソだよ。いくらあたしでも子供には負けないよ」

フランクリンはすかさず、『いや、その時お前、右手でやったから』とシズクに突っ込みを入れた。

「何で？ あたし左利きだよ」

「……いや、いい。オレの勘違いだった」

これ以上は何も言うまい。フランクリンは諦めた。

「ほお、お前エ、シズクとやって勝ったのか」

ノブナガが興味有り気に言う。

「うん」

「まさか旅団の人だとは思わなかったなあ」

一応は話が逸れた事に、キルアはホッと胸を撫で下ろしていた。

「——よし、ならオレと勝負だ」

丁髷を下ろしていたノブナガは、髪を後ろに一つ束ねて言った。まさかの腕相撲の流れである。

知らないふりをして黙っていたヒソカは、ゆっくりとその場からアリシアの横を通つ

て移動すると、腕相撲を始めたゴンを見守るキルアの背後に立った。

簡易な作りの腕相撲台では、早くも鈍い音を立ててゴンの右手が打ち付けられた。

「もう一度。——レディ……ゴッ！」

ノブナガはまたもゴンの右手を台に打ち付けた。ゴンの手の甲は、打ち付けられたせいで血が滲んでいる。

「なア、オレあ旅団カクモの中で、腕相撲何番目に強いかね？」

「7〜8番つてとこじゃねーか？」

「弱くもないけど、強くもないよね」

フランクリンとマチがノブナガに答えた。

「——でよ、一番強エのがウボオーギンで男だったんだが、こいつが鎖野郎にやられたらしくてな」

「だからそんな奴、知らないって言ってんだろ？」

「おいガキ……次に許可なく喋ったら、ぶっ殺すぞ」

ノブナガはキルアを睨みながら、更にゴンの右手を打ち付ける。

「奴あ強化系でな、竹を割ったようなガチンコ好きの単細胞だ。その反面時間にうるさくてよお……よく遅刻が原因で、オレやフランクリンと喧嘩になったが、オレは素の殴り合いじゃ、ボコられっ放しだった」

ノブナガはウボオーギンとの思い出を頭に浮かべながら語り出した。

「旅団設立前からの付き合いだ。オレが誰よりも、よく知っている」

ゴンを掴む手に力を込め、ノブナガは打ち震えながら涙を一粒流した。

「あいつが戦って負けるわけがねエ。汚ねエ罫にかけられたに決まってる！ 絶対に許さねえ、何人ぶつ殺してでも探し出す」

鎖使いは旅団に強い恨みを持ち、マフィアのノストラードファミリー組に最近雇われた人物である。その事を伝えると、ノブナガはもう一度ゴンに訊いた。

「直接知らなくても、噂で聞いたりしてねえかよく思い出せ。心当たりがあったら今隠さず全部喋れよ」

「知らないね。たとえ知ってても、お前らなんかに教えるもんか」

ノブナガと掴み合っている右手により強い力を込めて、ゴンは言う。

「仲間の為に泣けるんだね。幻影旅団は血も涙もない連中なんだって、オレは思ってた。だったらさ、なんでその気持ちをほんの少し……、ほんの少しだけで良いから、お前らが殺した人達に何で、——何で分けてやれなかったんだ!!」

この場にいる全員に衝撃が走る。ノブナガの右手が、ゴンによって台に打ち付けられてしまったからだ。

刹那に動いたのはフェイタンである。ゴンの左手首を掴み、背中側に腕を捻り上げる

と、台の上にそのまま押し付けた。

「お前、調子乗り過ぎね」

「ゴン!!」

キルアがそれを止めようとした時、ヒソカが一枚のトランプをキルアの首元に当てて言った。

「動くと、今以上に切れるよ♠?」

当てられたトランプにより、キルアの首は僅かに切れてしまっていた。

「質問に答えるね。鎖野郎、知らないか?」

「言っただろ、お前らに教える事なんか一つもない!!」

「フェイタン!」

咄嗟的に止めたのはノブナガである。

「やめろ」

「何をやめるか?」

「オメエがやろうとしていることだよ」

ノブナガにはわかっていて。フェイタンがゴンの腕をへし折ろうとしている事を。

「ふん、始めは指ね。軽く爪剥ぐ」

「どこでもいい。とにかくやめろ」

「何故お前、私に命令するか？ 従う必要ないね」

ノブナガとフェイタンの間に流れる緊迫した空気を、フランクリンとマチ、シズクが断ち切った。

「おい、やめとけノブナガ」

「ルール、忘れてないだろうね」

「団員同士のマジ切れ、御法度だよ」

コインの出番である。

ノブナガはコイントスをし、それを取って押さえた。フェイタンが裏で、ノブナガ自身を表。結果は表だった。

「フェイタン、放してやれ」

フィックスが言うと、フェイタンは仕方なくゴンを放した。しかし、まだ鎖使いの事を二人から訊き出せてはいない。

「知らねえなら解放してやればいいさ。どうだ？ パクノダ」

フランクリンはパクノダに目を向けた。それは、パクノダの念能力の一つに、人や物に触れる事で記憶を読み取れるという能力があるからだ。

「来る途中調べてみたけど、二人共本当に心当たりはないわね」

「本当？」

「ええ、この子達に鎖野郎の記憶はないわ」

「珍しくハズれたな、お前の勘」

その場に腰を下ろしたノブナガが、マチに向けて言った。

「……おかしいね。まあ、パクノダが言うのなら間違いないんだろうけどさ」

鎖使いと関係ないのなら、二人をこのまま帰しても良いのではという流れになろうとしている中、フィンクスが口を開いた。

「関係ないとは言いい切れねえぞ。後ろで糸を引いている人物がいる筈だぜ」

もし鎖使いが普段に鎖を身に付けていなかったとしたら。だとしたら、ゴンやキルアが鎖使いだと認識していかないだけかもしれない。解放するのは黒幕を吐かせてからの方が良いのではないか。フィンクスがそう言えば、シャルナークが横から否定した。

「黒幕がいたとしても、そいつは鎖野郎じゃないよ。奴は単独で行動してる筈だから」

わざわざ子供を使わなくとも、ノストラード組を通じて情報はいくらかでも入ってくる。それは、鎖使いが組に所属しているからだ。

「オレ達の標的は鎖野郎だけだ。それ以外は放つとけば良い」

「……だ、そうだ。よかたな、お家帰れるね」

小さな子供に言うように、半分小馬鹿にしたフェイタンが背を向けると、ゴンはその背中にあつかんべえを仕返した。

「——いや、駄目だ。そいつは帰えさねえ」

二人を解放するという流れで漸くまとまろうとしたところで、今度はノブナガである。

「ボウズ、旅団に入れよ」

ノブナガは何を血迷ったのだろうか。ゴンを旅団に入れようと提案したのだ。

勿論、ゴン本人は頑なに断った。しかしノブナガは諦めない。ゴンの中に、ウボオーギンに通ずるふてぶてしきを見出してしまったからである。

「団長が戻るまでこいつら、此処に置いとくぜ。入団を推薦する」

「本気かよ!？」

「団長が認める筈ないね」

フィックスとフェイタンは半ば呆れるように。マチも、『暑さで頭やられたんじやない?』と言った顔をしていた。

「見張りはお前が一人でやれよ」

というわけで、ノブナガは一人でゴンとキルアを監視下に置き、仮宿内で監禁する事にしたのだった。

日暮れ。ノブナガ以外の団員は、今日収穫出来たマファイアに関する情報等について話し合っていた。

「これだけ動き回って、全く姿を見ないってのは不自然だもんね」

「今日一番の収穫が、ガキ2人だからな」

「奴等が諦めたとは思えないから、次の作戦に向けての準備期間だと考えられる」

シズクとフィンクス、そしてシャルナークが言った。

鎖使いをおびき寄せつつ、襲ってくるマフィアを締め上げ、鎖使いの情報を得るといふ予定は狂ってしまった。

「仕方ないから、逆にこっから積極的に狩りに出ようと思う」

シャルナークはハンターサイトで入手した、ノストラードファミリー組 構成員の顔写真リストを用意していたらしく、団員らに配り始めた。

「特にこの5人は重要人物だ。ボディガードとして、組長の娘に付いているらしいんだけど」

「娘？」

フランクリンとパクノダは、渡された顔写真リストに目を通す。

「ウボオーをさらったのがこいつらだ。けどウボアイオーは、『この中に鎖野郎はいない』って言うってた」

シャルナークは、皆と少し離れた場所に座るヒソカにリストを渡す為、名前を読んだ。「ヒソカあ」

「いらぬい◆？？」

「え？」

「だつて載つていないんでしょ？ 鎖野郎ての。なら、あつてもなくても同じ、無駄無駄

◆？」

「かもしれないけどさ……」

折角用意したのに。シャルナークが思つていると、マチが横から口を挟んだ。

「いらぬいって言つてんだからさあ、無理にやることはないよ」

「その通りだ。後左上のヤツ、バツつけといてくれ」

マチに同意したフィンクスが、リストを指して『コイツ、オレが殺つた』とも続けた。

——まとまりが無いんだかあるんだか。

やれやれと溜め息を漏らしたシャルナークは気を引き締めるように、引き続き二人組で行動してリストの人物探しを全力で挙げるよう声を張るのであった。

「ノブナガは留守番だろ？ あたしは？」

午後10時に仮宿集合という事も決まり、其々が行動に出ようとしていた頃、マチがシャルナークに声をかける。

「丁度10人いるから、誰かあまつた奴と組みなよ」

あまり……？

マチはふと周りを見た。皆は既に組み終わり、其々に出発を始めているではないか。だが、一人だけあまっている——ヒソカが。

大丈夫かしら……？

アリシアは、ゴンとキルアの二人が監禁されているであろう方向を見ていた。

「大丈夫だよ◆？」

アリシアの近くで座っていたヒソカが、その場から立ち上がって言った。

「あの子達を心配してるんだろ？」

「ヒソカは、心配じゃないの？」

「別に◆？ だって、あの子達はそんなにヤワじゃないし……◆？」

「あんたさあ——」

背後から、マチの平淡な声がした。

ラフな格好からいつもの服装に着替えてきたマチは、背中を向けたままのヒソカを横目で見ている。

「あの腕相撲の子と顔見知りよね？ にしては、お互いよそよそしくなかった？」

ヒソカは、口の両端を吊り上げながらくつくつと笑うだけで何も答えない。

「……さつさと行くよ」

マチは面倒だと諦めたのか、それ以上は説明を求めずに、仮宿から出発するようヒソ

かに促した。

「オーケー♥ あ、ねえマチ、アリシアも連れて行こうと思うんだけど、かまわないだろうか？」

ヒツカの言葉に対して、マチとアリシアは言い合わせたように『え?』と声を揃えた。

「はあ? 何で連れてく必要あんのよ」

「そりゃあボクと2人つきりで行く方がキミも嬉しい——」

「それは絶対無い」

最後まで言わずまいと、マチは遮った。

「ヒツカ、わたしひとりでも平気だから」

アリシアはヒツカの側に近寄ると、マチには聴こえないように小声で告げた。

「折角だからマチと二人で行くべきよ。お邪魔虫はお留守番してるわ」

「え?」

「——え?」

ヒツカの反応に対し、もしかして間違えてしまったのかというような顔をしながら、こういうのが『空気を読む』のではないのかと、アリシアはひとり考えに耽る。

「よくしんに来る前に見たテレビの番組でね、人が言っていたのよ。『空気を読みましよう』って……」

「何それ？」

アリシアが見たバラエティー番組に『空気の読み方講座』というのがあって、その中の例えに「友人カップルのデートに付いて行くのは空気を読めない」とあった。

ヒソカにマチが恋人だと信じ込まされているアリシアは、この状況がまさに『空気を読む時』だと思いい出し、読み方講座に倣って実践を試みてみたのだ。

「えつとね、だから、二人でどうぞって意味なの」

「……キミなりに気を遣ってくれてるのはわかったよ◆？」

「ちよつと、何ちんたらやってんの？ 早くしな！」

アリシアとヒソカの話のやり取りに痺れを切らしたららしいマチは、一人先に出て行つてしまった。

「じゃ、行つてくるから◆？」

「いつてらっしやい」

二人だけで行くとわかったアリシアは、何故か満足気に手を振ってヒソカを見送ると、放置されていた木箱の上に腰を下ろして読書を再開した。

「お・ま・た・せ♥」

「別に待つてないよ」

先に前を歩くマチに追いついたヒソカは、少し後ろに付いて歩きながら忍び笑いをし

た。

「アリシアは“空気を読んで”お留守番してるってさ♥」

「あっそう」

少しだけ沈黙を貫いた後、マチは沈みゆく夕日に目を向けたまま、再び口を開いた。

「——あのアリシアって奴、今自分が置かれてる状況理解してんの？」

「さあ？ 彼女は初めからあまり自分自身を追究しようとはしなかったし、『一族の最後の生き残り』なんて突然言われても、ピンと来てないんじゃないかなあ♥」

「にしてもあたしさらに警戒心無さ過ぎじゃない？」

あれでも少しは警戒心芽生えてる筈だけど。ヒソカは心の中で呟いた。

「……今は、何も危害が無いからねえ♥」

「何よ、なんか引つかかる言い方だね」

「何も無ければ、何も無いってことでイイじゃないかなあ♥」

ヒソカの含みある言い方に、マチは眉間に皺を寄せる。

「しかし蒸せるねえ♥ この時期って夜も蒸し暑いからさあ、すぐ汗かいちゃって肌がベタついちゃうよ♥ ——ねえマチ、あそこで休憩しないかい？」

ヒソカが立ち止まって指差す先には、ホテルの建物があった。

「一人で行ってな」

「つれないなあ〜♥」

マチはいつものように冷たくあしらうと、シャルナークから渡されたリストの人物の事に、今は意識を集中するのだった。

陽は完全に暮れて夜。

十老頭は、1日に起きた教訓から、会場をセメタリービルへと移動して厳戒態勢を敷いた。

裏では賞金をかけて装った競売で集まった人材に、対旅団用の警備に雇った暗殺者の準備も密かに進められていた。

その頃、二人組でリストの人物を探しながら市内を目指していたノブナガ以外の旅団員達は、先に行動を起こしていたクロクからの連絡を受け、セメタリービルに進路を変更。団員達に、その道中での暴れ方に珍しく条件をつけた。

『派手に、殺れ!!』

市内の検問は旅団員にいと簡単に破られ、止めようとするマフィアらが次々と殺されていく。

華やかで美しいヨークシンの夜の街は、爆発音や銃撃による発砲音、そしてマフィア達の阿鼻叫喚によって、恐ろしい旋律を奏でていた。

——ウヴオーさん、聞こえますか？

ウボオーギンの死を知ったクロロによる、旅団員からウボオーギンへの鎮魂歌レクイエムだった。

「くそつ、アイツら何処へ行きやがった?」

他の団員達が街で暴れている一方で、仮宿で留守番をしていたノブナガはというと、目の前で見張っておきながらなんと、ゴンの策略に引つかかって二人を逃がしてしまっていたのであった。

とりあえずノブナガは仮宿の周辺を探し回ったが、既に遅かった。ゴンとキルアは、この場所から遠くへと離れてしまっていたからだ。

「まんまとやられたぜ。……つたくよお!」

勢いで壁を殴りつけたが、怒りよりも残念である気持ちの方が強い。

あーあと溜め息混じりに待機場の荒れた倉庫入ったノブナガは、真つ暗闇の中を面倒くさそうにして、蠟燭の一つ一つに火をつけていった。

「——ん?」

最後に端の方にあつた蠟燭に火をつけようとした時だ。

近くで規則正しい寝息が微かに聴こえる。ノブナガは辺りを見回し、大型サイズの木

箱の後ろ側を覗いた。

こいつは……。

木箱にもたれて寝息を立てて眠っていたのは、アリシアだった。どうやら、本を読みながらそのまま眠っていたらしい。

「おい、起きろ」

ノブナガはめんどくさそうにアリシアの肩を揺すった。

「……んっ」

何度か揺すられて起きたアリシアは、寝惚け眼で小さく欠伸を漏らした。

「一人か？」

「そうよ……、あなたは——」

徐々に意識に頭が冴えてくると、アリシアはやつと目の前の人物がノブナガであることに気付いた。

「あの子達は？」

「あ？ アイツらか……？」

アリシアが誰の事を訊いたのか直ぐに理解出来たノブナガは、数秒黙った後に『逃げちまったよ』と、ばつが悪そうに答えた。

「逃げた？」

『だって、あの子達はそんなにヤワじゃないし……◆?』

だからヒソカはあの時、ああ言ったのだろうか。ゴンやキルアの二人が逃げたと知って、アリシアは心の中でほっと安堵していた。

そんなアリシアを横目で見ながら、ノブナガは目の前の蠟燭に火をつける。

——ミムノ……なんたらだっけか？

魅夢ミムノイソクの一族の生き残りであるアリシアを初めて目にした時は、確かに『美しい』と本心から思った。

——しかしよオ、よく見りやあまだまだ小娘ガキじゃねえーか。

普通とは違う、際立つ美しさはあるが、アリシアの顔にはまだ幼さが残っているのだ。

——小娘にやあピクリとも来ねえ。

何でもイけるアイツじゃあるまいしと、頭に思い浮かべたのはヒソカである。

すると突然。建物の隙間のどこからか吹いた夜風が、ぬるりとアリシアを撫でて通り過ぎ、その時の風に乗った僅かな甘い香りが、ノブナガの鼻腔を擦くすくすって逃げていく。

甘え……………。

甘いのに嫌ではない。むしろ心地が良い。蠟燭の灯りも相俟って、ノブナガの目にはアリシアが異様に艶めかしく映った。

——甘い匂いのせいかな？

ノブナガは、何度か手の甲で自分の目をゴシゴシと擦った。

「どうか、したの?」

真横にいて気になったのか。アリシアは少し、ノブナガを警戒しつつも見つめ返した。

「あ? ……んでもねーよ」

目元から手の甲を離せば、自分を見つめるアリシアと目が合う。アリシアの瞳には星々が輝いているようで、ノブナガはその異様とも思える美しさに息を呑んだ。

その瞬間——。全てを掴まれてしまうような感覚に囚われて、最後に意識までもがアリシアの奥に吸い込まれそうになった。

「——やめろ」

なんとか我に返ったノブナガは、アリシアから焦るようにして背を向けた。

危ねえ……っ

つい今し方まで何も思わなかったというのに。

意識まで吸い込まれそうになったあの感覚は、恐ろしい程の恍惚感があった。これ以上アリシアの近くに居続けるのはマズイと、ノブナガはアリシアから距離を置いた。

当のアリシアはというと、遠く離れて座ったノブナガを最初は不思議そうに思っていたのだが、そのうち何事も無いと判断した様子で、本を読み始めている。

——念、か？ いや違う。

凝でアリシアを見るが、何も無い。

——そういやあ、団長が言ってたな。

『彼等は特殊な人間で、独特の甘い香りには人を魅了する成分が含まれ、その香りに取り付かれた者は数知れず——』

クロロからの説明を思い出しながら、これが魅^特夢^なの一族^間と言われる所以かと、冷静になつてきた頭で改めて思った。

と同時に、魅夢の一族であるアリシアという存在を薄気味悪く感じながら、ノブナガは団員の戻りを待つのだった。

熱い眼差しのリユウ

マフィア側が用意した対旅団相手の二千人近い武装構成員は、ほぼ壊滅状態だった。そんな中、十老頭の依頼を受けた伝説の暗殺一家、ゾルディック家のシルバとゼノは、混乱たるマフィア幹部達をセメタリービル内の大広間に留めさせた後、既に侵入していたクロロと対峙していた。

二対一、クロロ自身には不利な状況下だ。しかし当の本人には、幾らかの余裕さえあった。

「ワシが奴の動きを止めたら、ワシもろともで構わん——殺れ」

交戦が続く中、ゼノがシルバに言った。

クロロがオーラを放てば、ゼノは自身の手にオーラを集中させる。

「盗賊スキルハンターの極意」

クロロの右手に、『極』の文字上に手形がついた本が現れた。そしてその本を開けば、左手にはマントが出現した。

シルバが過去にクロロと関わりがあったらしく、クロロが他人の能力を盗むという事を知っていた為、それが盗んだ能力の一つであろうと、ゼノは推測した。

その性質がわからない以上、迂闊に攻撃が出来ず厄介である。だが、それは普通の使い手が思う事であって、ゼノには関係ない。

「ドラゴンヘッド
龍頭戯画」

ゼノはオーラを龍の形に錬成すると、その形のオーラを操ってクロロに襲いかからせた。

「ドラゴンランス
牙突」

本を持つ手をそのままにして避けるクロロであるが、その度に少しずつ傷を負っている。

——そうか。

ゼノはクロロの能力を見極めていた。

クロロ自身の能力は、具現化した本に他人の能力を封じ込め、更に自在に引き出して使用出来る。しかしその代償として、引き出した能力を使う際に、常にその本を手にしていなければならない。

先程クロロが出したマントも、盗んだ具現化系の能力であった。

クロロは間合いを詰め、対象物ゼに接近し、その技で生け捕りにしようとしていたのだ。

だがゼノはそれに気付き、クロロに近付こうとはしない。

離れて攻撃をしかけるゼノも、隙を見てクロロを捕らえようとしていた。

生け捕りは無理か。クロロはゼノを捕らえるのを諦め、右手で開いていた本を閉じた。

本を閉じる事により、左手に出していた能力は必然的に解除されてしまうが、今は致し方なかった。離れて様子を伺っているシルバへの警戒をも、クロロは怠りはしない。

あの時より、体術は更に向上している。過去にクロロと対峙した時の事を、シルバは思い出していた。

クロロの秘めた能力が未知数である以上、命を賭して動きを止めない限り、確実には仕留められない。シルバが増幅させたオーラを放つと、一瞬、クロロの意識がゼノからシルバへと取られた。

その一瞬を、ゼノは決して見逃しはしない。技を放てば、クロロは隙を突かれて体勢を崩してしまった。

ゼノはそこへ突撃し、クロロの両脚を掴んで激しく攻撃を続けながら、壁へと追い込んでいった。

「今じゃ!! 殺れ!!」

その頃、大広間に留まっていたマファイアの幹部らは、下から起きた突然の爆発と揺れ

に酷く驚いていた。

「一体何が起きてやがるんだ!？」

「相当デケエ爆発だぞ!!」

「もう我慢出来ねえ!」

これ以上この場に留まり続けるのは我慢の限界だったのか、幹部らは大勢で現場に向かおうと動き出した。

「皆さん落ち着いて下さい!!」

そんな混乱の中、十老頭との連絡が、やっと取れたとの知らせが入った。

中継の為、十老頭と直接話が出来るといふ事で、全員オークション会場へと急ぐ。静かに騒つく会場内では皆、緊張の面持ちで十老頭との中継を待っている。

会場に設置された巨大モニター画面には、砂嵐の映像から徐々にはつきりと、十老頭の1人の姿が映し出された。

『大分ゴタゴタしちゃったが、もう大丈夫だ。——旅団ヤッの頭は始末した』

会場のマフィア幹部らは、その言葉にどよめきと歓喜の声を上げた。残りの団員を殺るのも時間の問題。狩りはプロに任せて競売を楽しむよう、十老頭は言う。

モニターに映し出される十老頭全員の姿を見た会場のマフィア幹部らは、その言葉を完全に信じて安堵の表情を浮かべていた。

だが、幹部らは知らない。

十老頭の先程の言葉が全て、誰かによって操られたモノであつた事を——。ピピピと、電子音が鳴り響いた。

シルバの持つていた、ゾルディック家専用無線機が鳴つていたので。

これが鳴るのは……、"暗殺完了の証"である。

「イルミか」

シルバがそれに出ると、抑揚のない声が、『オレの依頼人は？』と訊ねた。

彼もまたゾルディック家であり、ゼノの孫で、シルバの息子でもある。

「ハン」にいる」

シルバの目の先には、爆発の衝撃によつて大きく崩れた瓦礫の山があつた。

その一部がゴトリと動き、瓦礫の下からボロボロになつたゼノとクロロが出てきた。

『あ、今戦つてたんだ？ まだ彼生きてる？ じゃあさ、伝えといてよ』

イルミの言う『彼』とは、クロロの事だつた。クロロも、ゾルディック家のイルミと依頼を交わしていたのである。

『十老頭は始末した。約束の講座に入金、よろしく』つて』

イルミとの無線を切り終わると、ゼノとシルバはそこから去ろうとしていた。

クロロは敢えて『殺らなくていいの？』と、ゼノに問うた。

「ワシらの依頼人は十老頭。その依頼人が死んでしまった以上、おぬしはもうターゲツトではないのぞな」

ゾルディック家は快樂殺人者ではない。決して好きでやっているわけではなく、タダ働きもタダ死にも真つ平御免であるのだ。

「1つ訊いて良いかい？」

「^サ一対一で闘えば、どちらが勝つかというクロロの質問に対し、ゼノは『十中八九ワシじゃろ』と気怠そうに答えた。

「おぬしが本気でワシを殺ろうと思えば、話は別だが」

最後に『全くなめたガキじゃ』と言ひ残し、ゼノとシルバは踵を返して去って行つた。あれは盗めねえわ。その場にひとり残つたクロロは、仰向けに倒れて息を吐いた。

「お待たせしました皆様！ ではこれより、オークションを開始いたします!!」

オークションは予定通り行われた。

しかしそのオークションは、既に幻影旅団の手の内にあつた。

オークシヨニアはシャルナークの能力で操られ、宝はコルトピの能力によりコピーされる、偽物が本物として出品されていた。

一方で情報を頼りに向かつたマフィアらは、旅団の頭の死体の他に、四名の残党の死体を発見した。

だが、それらの遺体は全て、コルトピの能力による偽物フェイクだった。

地上で起きていた争い事など嘘であったかのように、オークションは大変に盛り上がっている。

次々とお宝は落札され、そしてラストの品が競りにかけられようとしていた。

〔世界七大美色の一つ、『緋の眼』でございマス!!〕

絶滅したとされる、クルタ族固有の体質である『緋の眼』。

興奮状態になると緋色になり、その状態時で死ぬと、褪せない緋色のまま残る。

その色は世界七大美色の一つと評され、闇市場で高額に取引されているのである。

〔クルタ族が滅亡した今、現存するのには僅か36対！ こちらは、その中デも強い緋の発色を残す絶品!!〕

会場は『緋の眼』に大いに沸くと、1億ジエニーからのスタートで競りが始まった。そして次々に競られ、3億1000まで上がった時である。

〔3億5000!!〕

一人の人物が声を張った。

どこかの蒼い民族衣装のような格好をして、一見、男にも女にも見える風貌であった。

〔3億5150!!〕

〔3億7500!!〕

周りもそれにつられてか、緋の眼の額は徐々に値上がっていく。

「6億!!」

先ほどの人物が、また声を張った。

「10億!!」

このまま落札かと思われた時、小太りのスキンヘットの男が、倍の値を競り上げてきた。

何やら顔見知りらしい二人は互いに睨み合うと、周りが競りから降りてもなお、競うように値を上げていった。

——結果、スキンヘットの男が負け、民族衣装を着たもう1人が『緋の眼』を35億で落札した。

こうして、コピーされた全ての品が落札され、旅団クモは本物の競売品を奪う事に成功したのであった。

仮宿で留守番をしていた不機嫌なノブナガと、本をひたすら読んでいたアリシアのもとに、クロロを含めた団員達が戻って来た。

「おかえりなさい」

「ただいま◆? いい子にしてたかい?」

「ええ。ねえ、楽しかった?」

団員達が外へ出た目的など、詳しくは知らないアリシアの『楽しかった?』の意味は、マチと2人で出かけた事に対してだ。

「まあまあだった、かなあ◆?」

ヒソカはなんとなくその意味を感じ取りながらも、街で暴れてきた感想をアリシアに答えていた。

「先ずはお疲れ様って事でさ、乾杯しようよ」

どこぞから手に入れてきた酒缶を、シャルナークが皆に配り始める。

「はい、ヒソカ」

「2本あるけど?」

「アリシア彼女の分もだよ」

シャルナークはアリシアを指して言った。

「どうせなら全員で乾杯した方が良いしね」

「そうだね◆?」

シャルナークが奥側に座る団員のもとへと移動すると、ヒソカは隣に座っていたアリシアへ酒缶を手渡した。

「これは何?」

「今からこれで、みんなと乾杯するんだよ◆？」

「カンパイ？ それって、何かお祝いするの？」

「そうだよ◆？ 欲しかった宝が手に入ったからね◆？」

「そのお祝いなのね？」

アリシアは愉しそうにして、両手で酒缶を持った。

「乾杯」の声に合わせて酒缶のプルタブを開け、皆が一気に酒を飲む姿を、アリシアは同じように真似しようとした。

「おっと、キミは一気にイかない方がイイよ◆？」

アリシアが飲もうとするすんでのところを、ヒソカは止めた。

「一気に飲まなければ良いのね？」

「うん◆？」

一口だけ口に含んで飲んだ瞬間、アリシアはとても複雑な表情をした。

「美味しくないわ……」

「だろうね◆？」

皆が美味しそうに飲んでいるので、てつきり美味しいのだと期待していたアリシアは、がっかりと肩を落とした。

旅団の死体は、未だ偽物だとは知られていなかった。

解剖された死体の映像や画像等が、見せしめとしてネット上で出回る中、マフィアからは死体からの情報を得る為に探っていた。

「どーなってるんだオイ？」

その手のプロに任せたものの、半日以上経ってもまだ報告が無い事に、マフィアの構成員は痺れを切らしていた。

「いいんだよ」

マフィアに頼まれて調査していた男は、溜め息交じりに言った。

過去60年間に渡り、ありとあらゆるデータで世界中を調べたが、旅団の頭を含んだ5名は存在しなかった。自らのデータを消すなど、高過ぎるリスクを考えれば無理な話だった。

個人情報管理する コンピューター 脳 は3つ子システムとあって、外部から干渉されない二つの

脳みそが、24時間もう一つの外部用脳を、欠損が無いようにチェックしている。

仮に侵入成功したとして、データを抹消、あるいは書き換えたとしても、0.1秒後には修復されてしまうのだ。

「つまり？」

構成員の一人は、男の話をあまり理解出来なかったらしい。

「何度も言っているだろ。こいつらは存在しない」

「ふざけんな！ 現に死体があるじゃねーか！」

やけに偉そうな男の態度に、構成員は半ば苛立ちながら返した。

「社会的には、だよ」

だが、男の態度に変わりはない。

「蒸発や死んだふりは今でも容易に出来るけど、一度社会に存在した事を、全ての情報から消し去るのは、今はまずムリ。なら——」

男が出した結論は一つ。

流星街。

ラペ共和国と同じ位の土地面積に、現在800万の人間が、根拠もなく住んでいると言われている。

流星街にはゴミや武器、死体や赤ん坊、この世の何を捨てても許されていた。

住人は、その全てを受け入れているのだ。

「公式には無人って事になってる。1500年以上前から、廃棄物の処理場としてね」
中で人々がどう暮らし、何を信じ教わっているのか、誰にもわからない。

最近彼等が、こちら側に唯一残したメッセージがあった。

『我々は、何もかも拒まない。だから、我々から、何も奪うな』

100年前前にある国で、身分証を持たない浮浪者が殺人容疑で捕まった。

その浮浪者は国籍を始めとする、社会的存在証明を全く持たない者であり、後に本人の口から、流星街の住人であると判明した。

その国の警察は、否認する男を強引に起訴し、裁判所は、ろくに弁護の余地さえ与えずに有罪を言い渡した。

三年後。麻薬中毒の通り魔が逮捕され、余罪が次々と明らかとなり、浮浪者の冤罪が証明された。

その直後だった。警官に裁判官、検事に目撃証人、陪審員に弁護士ら、冤罪に関わった31名が何者かに殺されたのである。

『我々は、何もかも拒まない。だから、我々から、何も奪うな』

細切れの死体脇に残されたメッセージだ。

「旅団が流星街出身だとすると、相手が悪過ぎる」

「そんな台詞は、むしろオレ達が言われる立場なんじゃねーのか!？」

「その時の奴等の殺しの手口だけ——」
怒るもう一人の構成員に、『自爆だよ』と男が告げた時、その構成員は言葉も出なかった。

目撃者によれば、笑顔で標的に握手を求め、その直後に爆発。其々違う場所にいた31人が、同時に吹っ飛ばされたという。

「仲間一人が3年間不当に拘束され、その報復の為に、31人が平気で命を投げ出し、31人の命を奪う」

彼等は、いざとなれば足し算も引き算もしない。彼等の絆は、他人より細く、家族より強いのだ。

「相手が悪い。十老頭も、そう言うね」

男の言葉に対し何も言えなかった構成員二人は、直ぐに組の上層部に結果報告を出した。

コミュニティはそれを受け、旅団の残党狩りを断念。かけられていた懸賞金も、白紙となった。

「此処で良いんじゃない?」

「そうね」

アリシアはマチとパクノダに連れられて、とある安ホテルの一室にいた。

何故そのような場所にいるのか。それは、旅団が競売品を奪う事に成功した後の事である。

廃墟のあの暗い倉庫にて、アリシアが地面にいる蟻を眺めていた時だった。

「ねえ」

突然声をかけられて、反射的にその方へと顔を上げると、アリシアを見下ろすようにパクノダが立っていた。

「早く立って」

「え？」

一体何だろうと、アリシアは言われるままに立とうとした。すると――。

「ボクも混ざりたいんだけど？」

アリシアの隣にいたヒソカが、二人の間に割るように入ってきた。

「無理ね。女だけで行くから」

「ズルいなあ◆？ ナニをするんだい？」

「別に何だって良いでしょ。女は色々と面倒があるの」

パクノダは適当にヒソカをあしらうと、次は静かに読書を続けるクロロに顔を向けて声をかける。

「団長、そういう事だから少し出かけてくるわ」

「ああ」

クロロが本から目を離さずに相槌を打てば、パクノダはマチからの視線を受けた。

「それじゃあ行ってくるわね」

残念そうに『行ってらっしゃい◆？』と言うヒソカに手を振り、アリシアはパクノダ

に付いて行く。挟むようにして後ろから来たのはマチで、どうやら三人だけで何処かへと向うらしい。

もう一人眼鏡をかけた少女がいたが、その娘は一緒に付いては来なかった。

こうして三人で行き着いた場所が、冒頭のホテルだ。そして話は最初に戻る。

「静かで良いわね」

この安ホテルはアジトである廃墟からも割と近く、ヨークシンの華やかで派手な街から離れた、人目のつかない閑静な場所に建てられていた。

「シズクも無理矢理連れてくれば良かったかしら？」

「本人が断ったんだし。……まあ、忘れて後で文句言いそうだけど」

「フフ、そうね」

パクノダとマチが窓から外の様子を眺めている間、手持ち無沙汰な様子のアリシアは本を抱き締めたまま、シングルベッドの上に腰を下ろした。

——これからどうするのかしら？

ヒソカ以外の人と行動したのは初めてで、少しの緊張と感動が入り混じった気分である。

「……さて」

パクノダがこちらを振り向いた。

「アリシア……でいいわよね？」

「あなたは——」

「私はパクノダ」

ベッドの上に座っているアリシアの隣に移動したパクノダは、さり気なくアリシアの肩に手を触れて問う。

「アナタ、どこ森からやって来たのか、本当に覚えてない？」

その質問に対してアリシアは、母と暮らしてきた森、小さなレンガ造りの家での母との幸せな時間、独りになってからの過ごしてきた日々を思い出していた。

「……わたし、本当にあの森がどこにあったのかわからないの」

「そう……、残念ね」

パクノダは特質系能力者である。

一つに、記憶を読み取る能力を持ち、人や物に触れ、そこに宿る記憶を読み取ることが出来る。人に対してそれを行う場合は、軽く質問をすることで、その人物が反射的に連想した記憶を読み取れるのである。

試しに情報を手に入れようとしたパクノダであったが、アリシアの記憶には母親との日々や、何処だかわからない森とレンガの家だけしか読み取れなかったのだ。

例の森にアリシア以外にも魅夢の一族の生き残りがいるのではという期待も虚しく、

これ以上は無駄かと、パクノダは軽く溜め息を漏らした。

「——ねえ、先にシャワーでも浴びてきたら？　一緒にマチも」

ここに来た目的は、アリシアの住んでいた森の情報を手に入れる為だけではない。夏の茹だるような暑さを流したい。その為でもあったのだ。

さて、唐突なパクノダにぎよつとしたマチは、アリシアを指差しながら不服を唱える。

「ちよつと、何であたしが一緒に入んなきゃなんないのよ」

「一緒に入った方が効率良いわよ、きつと」

「それならパクが入れば？」

「……私より歳も近いくらいのアンタ達のが、色々と良いでしょ」

「色々って……何？」

二人が言い合いに発展しそうな空気を醸し出し始めたその時、シャワーと耳にしたアリシアは、今からお風呂に入るのかと理解して、二人に訊ねる。

「ねえ、みんなで一緒に入るのでしょう？」

目が点になったパクノダとマチは、アリシアの発言に対して、『はあ？』と声を揃えた。「だって、お風呂は一人で入るより楽しいって、ヒソカが言ってたわ」

二人はアリシアを呆れるように凝視しつつ、こう思った。今までずっと、ヒソカと一緒に入っていたのかと。

「アンタまさか、それ真に受けて……」

「ちよつとマチ、それ以上は止めてよ。気分が下がるじゃない」

そんな想像はしたくない。パクノダは、能力を使って余計な質問をしなくて良かったとさえ思った。二人の間に数秒の沈黙が流れた後、耐え切れなくなつたマチは行動に移した。

「……ああつ、もう！ 面倒だよ、さつさと入れれば良いんだろ、さつさとー！」

腹立ち紛れにアリシアのマントを素早く剥がし、服も脱がそうとしたマチはふと、その手を止める。

「そんなマチを不思議に思つたパクノダが『どうしたの？』と声をかければ、『お願いがあるんだけど』マチは言つた。

「……二人分の下着は？」

「ああ、そうよ。途中で用意するの忘れてたわね。分かつた。適当にその辺から手に入れてくるから、先入つててよ」

やれやれとパクノダが部屋を出るや否や、マチは無言で自分の服を床に脱ぎ捨てた。

脱がされる途中だったアリシアもマチに合わせるように、慌てて自分で服を脱いでいく。

脱ぎ終わったマチは、高く一つに結んでいた髪を下ろし、先に一人でバスルームへと

向かった。その顔は、不機嫌極まりない程に。

入って直ぐにシャワーの蛇口を捻り、お湯を出して頭からシャワーを浴びる。

「何であたしが一緒に入んなきゃいけないのよ……」

その声は、シャワーの音に掻き消される事なく響く。すると、背後からバスルームのドアが遠慮気味に開かれた。

アリシアが入って来る気配を感じたマチは、素早く振り向いて乱暴に腕を引つつかむと、そのままアリシアの頭にシャワーを浴びせた。腹いせである。

「ひゃっ……」

驚いたアリシアは抵抗する間も無くシャワーを浴びせられ続けていたが、流石に息が苦しい。

「ま、まっ……てー!」

逃れたくとも、マチに押さえられては上手く逃れられない。アリシアは何とか頑張つて、出て来るシャワーから顔を背ける。

「何? この狭いバスルームから早く出る為にわざわざ洗ってやってんだから、大人しくしな!」

「で、でも……! これじゃあ苦しいわ!」

頭上一点に目掛けてシャワーを当てていた事に気付いたマチは、軽く舌打ちをしてか

ら、掴んでいた腕を離れた。解放されたアリシアはマチへと身体を向け、濡れて顔にへばり付いた髪を掻き上げる。

「……文句ある？」

何も言わずに、じいっと見つめてくるアリシアをマチが睨めば、本人は少しだけ顔を赤らめて、もじもじとしながら口元を緩めていた。

「わたし、母様以外の女のヒトと一緒に入ったことがなくて……。それに、あなたと一緒にだから、本当に嬉しくて」

「……はあ？」

何が嬉しいのか全く理解出来やしないと、訝しくアリシアを横目で見たマチは、何故だか一瞬、どきりと心臓が波打った。

全身シャワーでずぶ濡れとなったアリシアの姿が、女の自分ですら艶めかしく思えたのである。

傷一つない白い絹肌に、パクノダやシズクの胸程ではないが、自分より大きくてツンと美しく上がった乳房。

ネイビーブルーの髪は色濃く、星空のような瞳とほのかに紅い唇。アリシアの全てが眩く妖しく、それにプラスされた甘い香りは、心地良く鼻を擦った。

——女でも関係無いの？

クロロから聞いた魅夢の一族という存在は、性別関係なく魅力するのだろうか。

——だとしたら、あたしでもコイツに魅了されるってわけ？

本当に最悪だ。マチは自分の下唇を噛みながら、今度は顔面に向けてシャワーをかけてやった。

適当に盗んだ中であつた、使い捨てのシャンプーを雑に泡立てると、その泡でアリシアの髪をこれまた雑に洗う。『痛い』と言う声を無視しながら、マチはアリシアの服に手をかけようとした時の事を頭に過ぎらせていた。

何故途中で止めたのか。それは、ある事に気が付いたからだつた。

何とアリシアは、下着を一切身につけていなかったのだ。

勿論考えなくても、ヒソカが着させてないという事は確実であろう。

変態——。

長い付き合いではないが、ヒソカが大体どんな奴かは、知りたくなくても分かっていた。

何でもイケるらしいあの男は、嘘つきで薄っぺらい言葉を次から次へと並べ立てる、いけ好かない男だ。

プライベートでは係わらないようにしているが、仕事となると話は別で、金の為に接しなくてはならない。

それ故に色々絡まれる事も多々あつて、マチとつては非常に鬱陶しい相手。

そんなヒソカの言葉巧を真に受けて、素直に従っているアリシアには、女としての哀れみよりも怒りが勝る。

——この先、アンタがどうなるうと、どうされようと、あたしは興味ない。

「ま、マチ、目に泡が入ったわ!」

「黙つてな! 風呂はね、一人で入るもんなんだよ!」

動き回ろうとするアリシアを押しさえつけ、マチは再びシャワーを頭からぶっかけるのだった。

その後。仮宿戻つたアリシア以外の二人が、ヒソカに対して軽蔑に近い、変態を見るような眼差しを向けたのは言うまでもない。

「ねえアリシア◆?」戻つて来てからさあ、あの二人から物凄く熱い眼差しを受けているんだけど◆? 何でか知らない?」

「いいえ。何も」

キケンな博打

クロロ達が仮宿に戻ってから不機嫌だったノブナガは、日が昇り明るくなっても、未だ不機嫌のままだった。

「どーいうことだ？ 引き上げるってのはよ」

ひとりクロロの前に立つノブナガが言った。

「言葉の通りだ。今夜ここを発つ」

仮宿で祝杯を上げてから暫く経つた後、クロロは『ここを引き上げる』と皆に告げたのである。

「鎖野郎が残ってる」

ノブナガは納得しなかった。

「こたわるんだな」

「ああ、こたわるね。」

ウボオーギンの仇を討つまでは、鎖野郎を探し出して八つ裂きにするまでは引かな

い。ノブナガの決意は固かった。

「ノブナガ、いい加減にしねえか。団長命令だぞ！」

黙って聞いていたフランクリンは、遂に口を出した。

「本当にそりゃあ、団長としての命令か？ クロロよ」

ノブナガはフランクリンを無視し、クロロをじつと見据えている。クロロもそんなノブナガを見つめ返し、過去の記憶を思い起こしていた。

「ノブナガ——」

クロロは瞬きと共に右手にオーラを発し、本を出現させた。

「オレの質問に答えろ」

「はあ？」

唐突でよくわからぬままにクロロから質問を受けたノブナガは、生年月日と血液型、フルネームを答え、渡された紙にそれらを書いた。

クロロはその紙を見つめ、今度は左手に不気味なモノが薄つすらと憑いたペンを出すと、取り憑かれたように何かを紙に書き出していた。

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬とむらうだろう

加わり損ねた睦月は一人で

霜月の影を追い続ける

菊が葉もろとも涸れ落ちて

血塗られた緋の眼の地に臥す傍らで

それでも蜘蛛は止まらない

遺る手足が半分になろうとも

「詩の形を借りた、100%当たる予知能力を持った女から盗んだ。今回、オレ達がマフィアの競売を襲う事も、その女に予言されていた。十老頭にファンがいたらしい」

『女』とは、ノストラードフアマリー組のボスの娘の事である。

クロロは ” 天使の自働筆記ラブリゴーストライター ” という特質系の能力を、盗賊の極意スキルハンターを使って手に入

れていた。

能力によって紙に書かれたのは、今月の週毎に起きる、ノブナガの運命の予言だった。「どうなんだ、ノブナガ?」

自動書記の為、クロロには占いの内容がわからない。シャルナークは直接ノブナガに訊いた。

「来週、……おそらく五人死ぬ」

ノブナガは書かれた予言の紙をじっと見つめながら答えると、予言も自ら皆に伝えた。

「他の事は何だかさっぱりわからねエが、蜘蛛の手足つてのがオレ達団員の事だろうから、半分て事は、ウボオーの他五人て事だろう?」

「オレの占いにも同じように出ていた。多分、他の団員を占っても、同じような結果が出るだろう」

クロロが予言された自分の紙を順番に回し見させると、黙って聞いていたシズクが口を開く。

「ちよつとあたしを占ってみて下さい」

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬うだろう

あなたは仲間と墓標に血をそえる

霜月が寂しくないようにと

黒い商品ばかりの収納場しのばで

あなたは永い眠りを強いられる

何よりも孤独を恐れなさい

二人きり程怖いものないのだから

「来週死ぬの、あたしだ」

そう言うも、表情に変化は無い。シズクの占いには2周目までしかなかった。

「後ね、パクノダとシャルナークも死ぬよ」

ノブナガが『何でわかる?』と問えば、暦の月が団員の番号を表してるみたいだとシズクは答えた。

霜月は11月。ウボオーギンの団員番号である。菊が菊月で9月、葉が葉月で8月。涸れるが水無月で6月をそれぞれ暗示しており、涸れ落ちるが枯れ落ちると掛かり、まるで死を示していた。

「緋の眼はオレ達の誰か、じゃない」

「十中八九、鎖野郎の事だろう」

フィックスの後にクロロが言う。

「緋の眼……、思い出した。目が赤くなる連中ね」

「あの時の生き残りがいたという事か」

「そいつも死ぬって?」

パクノダとフェイタンの後にボノレノフが続けると、フィックスは横に寝転んで肘を

ついたままの体勢で、『わからんぜ、血だらけで地に臥してるってだけじゃあ』と鼻で笑いながら言った。

「これでわかっただろ？ ノブナガ。このまま鎖野郎と闘り合うと被害が大きい、戦力半減だよ？」

「だけだよお……」

「オレやノブナガの能力はいくらでも代わりが利くけど、シズクとパクノダはレアなんだ。旅団として失うわけにはいかない」

シャルナークの言う事は勿論わかっていた。だがノブナガは、どうしても鎖使いを諦めたくなかった。

「今日が9月の第一周目の土曜日。今日中に本拠地ホトムに戻れば、来週鎖野郎に会う事はま
ずないだろう」

悪い予言を回避するチャンスが与えられている所が、この予知能力の最大の利点である。クロロ達がこの地を離れて、鎖野郎と戦いさえしなければ、逆に100%この予言は成就しない。

「ノブナガ」

クロロは更に続けた。

「お前やウボオーは特攻だ。死ぬのも仕事の一つに含まれる。お前らすすんで捨て石に

なる事を選んだんじゃなかったか」

——そうだ。ノブナガの視線は、クロロから地面へと移っていた。

「シズク、パク、シャルは主に情報処理部隊。オレ達全身の行動を補佐する生命線だ。こいつらの盾になって守るのが、お前の役目じゃないのか、違うか？ 旅団の立場を忘れて駄々をこねてんのは、オレとお前どっちだ？ 何か言う事はあるか？」

論すクロロにこれ以上何も返せないノブナガは、半ば諦めたような声で『ねエよ』と答えるしかなかった。

外は雨が降り出し、近くで雷の轟音が響いていた。

本を読んでいたアリシアは、クロロやノブナガの話を途切れ途切れでしか聞いておらず、内容にはあまり興味を示さなかった。

それよりも外の雷に気を取られ、大きな雷が鳴る度に、びくりと身体を震わせていた。そんなアリシアの斜め後ろに座るヒソカは、携帯電話をいじりながら誰かに向けてメールを送っていた。

——送信、と♥

送り終わったヒソカの口角はニタリとつり上がり、視線をクロロへと向ける。

これから残りのメンバーも占うと言って、クロロは団員達に紙を回し配った。

「そこにはシズクのように、危険回避の助言が出ているかもしれない」

それぞれに名前と生年月日、血液型を書かせた。しかし、それらがどうしても不明な者は仕方なく省かれた。最後に自分も占ってくれるのだろうか、雷から占いに興味を惹かれたアリシアも同じく、生年月日や血液型が不明の為に諦めるしかなかった。

赤目の客が貴方の店を訪れる

半身は天使で半身は死神

月達の秘密を売るといいだろう

霜月のそれが特に喜ばれるはずだ

熱い日に件の客の仲介で

逆十字の男と2人きりになれるだろう

偽りの卯月は暦からはがされる

これで残りは6枚となる

片眼の熊の手招きで

大事な箱から夜空の星が飛び出すだろう

誘いの糸を切つてはいけない

伝えば逢瀬が叶うから

「回ってきた順番で占いの結果を見ていたヒソカのもとに、パクノダがやって来た。どんな占いが出たの？ 見せて」

パクノダの声で、皆が一斉にヒソカへと注目する。

「やめた方がいい❖？ 見たら驚くよ？」

「いいから」

ヒソカは『ハイハイ❖？』と、あつさり結果の紙をパクノダに差し出した。

パクノダがそれを読む間、ヒソカはトランプを切って一枚だけを選んで目にする。――

――鎌を持った骸骨のジョーカーだった。

「ねえ！ ちょっとみんなも見て」

内容に驚いた。パクノダがフランクリンにそれを渡すと、周囲にいた団員らが集まって来た。

赤目の客が貴方の店を訪れて

貴方に物々交換を持ちかける

客は錠の剣を貴方に差し出して

月達の秘密を攫って行くだろう

11 本足の蜘蛛が懐郷病に罹り

さらに5本の足を失うだろう

仮宿から出てはいけない

貴方もその足の1本なのだから

パクノダや他の団員が見ている結果は、先程とは違うものになっていた。それは皆が気付かぬ間に、ヒソカが瞬時に自身の能力である、薄^{ドゥッキリテクスチャー}つぺらな嘘を使つて内容を改ざんしていたからだつた。

「見せろ！」

ノブナガは読んでいたシャルナークから無理矢理奪うと、変えられたとも知らない結果を目にした。

「ヒソカ……」

ピリリとした不穏な空気を醸し出し、ノブナガは高い場所に座るヒソカを睨み上げる。

ヒソカの近くにいたアリシアは、流星にこの状況には雷よりも気になって、ノブナガとヒソカを交互に見ていた。

「てめエが売つたのか？ ウボオーを」

腰に差していた刀の鞘を、ノブナガは抜いた。

「イエスと取るぜ!!」

何も答えずに再度トランプを一枚だけ引くヒソカに対し、ノブナガは動こうとした――が、それは前に出たフランクリンとシャルナークによって止められた。

「どけ!」

「まあ待てよ。話を訊いてからだ」

「話? 何もねエな。コイツがウポオーを赤目の客に売ったって、はつきり出てるじゃねーか!」

「落ち着きなよ。これは予言だから、行動によつては回避出来るって団長が言ってたろ」「ヒソカ、今週何があったか説明しろ」

フランクリンが代わりに問いかけると、ヒソカは『言えない◆?』と答えた。

「だが……、そこにある一つ目の詩の内容は、事実だったと言っておこう◆?」

「聞いたろ、どけ!!」

「まあ、待てつて」

「何故言えない?」

今度はシャルナークが問う。

しかし、それでもヒソカは答えない。

「言わないんじゃない? 言えない◆? ボクがギリギリ言えるのはそこまでだ◆? そ

れで納得出来ないなら——」

ヒソカはその場でゆっくりと立ち上がった。

「——ボクもボクを守る為、戦わざるを得ないなあ……◆？」

ノブナガとヒソカ、2人の間に流れるのは、異様な緊迫感だった。

「……チツ、止めとくぜ。てめエは戦り辛エからな——」

軽く溜息を吐いたノブナガは、鞘に刀を戻した。

「——つなわけねエだろボケエエ!!」

ノブナガは皆の不意を突き、ヒソカに襲いかかろうと動いたのである。

——危ない!

アリシアは迫ってくるノブナガに対して強い殺気を感じ、驚きのあまり
ブラッドバルーン
弾ける赤い風船を使いそうになった。

だが次の瞬間。ヒソカの前に来る筈であったノブナガが、全く別の方へと移動して
いたのだ。

「ノブナガ、少し黙れ」

黙って聞いていたクロロが静かに口を開く。

ノブナガを瞬時に移動させたのは、クロロの能力であった。

その能力を皆が初めて知り、一体どんな能力で、どう使ったのかさえわからなかった。

「ヒソカ。いくつか質問する。答えられないものは『言えない』で良い」
クロロはヒソカに質問を投げた。

「攫われた秘密というのは、何の事だ？」

「団員の能力◆？」

「それは何人だ？」

「七人……いや、八人か◆？ 団長にウボオーギン、シズク、マチ、フランクリンとパクノダ、シャルナークにボクで八人だ◆？」

次にクロロは相手の能力、形貌、ヒソカと相手との関係を訊いたが、どれも『言えない◆？』の一点張り。

「赤目の客……鎖野郎は、最低でも二つの能力を有する敵だ。一つはウボオーを捕らえた時の能力、もう一つはヒソカの言動を縛っている能力」

後者の能力が【掟の剣】という表現から察すれば、相手に何らかのルールを強いるものである。

鎖使いがヒソカに与えた"掟"^{ルール}が、『オレに嘘を吐くな』と『オレに関して一切説明するな』だとクロロは推測し、考えを述べていった。

「ここからは更に想像に依るが、ヒソカの体内には敵が仕掛けた何か、が埋まっている」
【物々交換】で【差し出す】とあるにもかかわらず、【攫う】のでは前後の文意が食い

違ってくる。

【掟の剣】がヒソカを攻撃するという予言を暗示させる為、差し出すと刺し出すを掛けたものであると、クロロは思った。

「その剣でヒソカの言動を規制している。具現化系か操作系かは断定できないが、何かかなり強制力の大きな能力とみている」

ちよつと整理してみよう。シャルナークが言った。

「鎖の使い手となると、操作系なら実物の鎖を使い、ウボオーを倒した。具現化なら念で作った鎖を使ってウボオーを倒した」

「それって何か違いあるの?」

シズクの質問に、シャルナークは『大アリス』と答えた。具現化なら、手ぶらを装う事が出来るからだ。

操作系は人や物体を媒介しなければ力を発揮出来ないので、常に武器は手放せない。特に物体操作の場合、使い込んだモノでないと威力、制度が上昇しない事が多い。

「……つまり、愛用品を失くしたら致命的って、リスクがある」

「そつか、具現化はイメージ修行が大変だけど、一度具現化出来ちゃえば出し入れ自由だもんね」

「しかし、具現化した鎖で本当にウボオーの馬鹿力を押さえ込めるもんなのか?」

次はフィックスが質問した。

「可能だよ。捕らえた瞬間に、相手を麻痺させたり眠らせたり出来る鎖を具現化すれば良い。ちよつと難しい制約を付けければ出来る筈」

それより問題は、ヒソカを縛っている力だ。

「……掟の剣つて言うんだから、何かを守らせるんだろ？」

「そう、それが団長の挙げた2つの命令である可能性は高い。後は、鎖野郎への『攻撃不可』とかあるかもね。確認は出来ないけど、多分、約束を破ったら死ぬって事だと思っ
よ」

鎖使いについての話がまとめられようとしている中で、ヒソカだけは心の中でほくそ笑んでいた。それは、ヒソカの体内に掟の剣など刺さっていないからだ。

しかも、皆が見たヒソカの予言が、ヒソカの能力で上貼りされた創作であると、クロ口でさえ気付いてはいない。唯一真実なのは、団員の能力を鎖使いに話したという一点だけ。

しかも八人ではなく二人、ウボオーギンとシズクの能力のみ。ヒソカは団員個々の能力全てを知っているわけではない。

パクノダの場合は対象に触れ、そこに残る記憶を探る特質系であるという事だけしか知らない。

他の団員達も、同じようにそれぞれ切り札を隠し持っている。実践経験の中で自身身の情報が漏れる事は、即、"死"に繋がるという事を知っているからだ。

ヒソカも例外に非ず。薄っぺらな嘘を知るのは、団員の中でマチのみ。

だがマチは、ヒソカ的能力を真に理解出来てはいない。

体を保護や装飾するものだとしか解釈していないが、実際ヒソカ的能力で平面上に再現出来る質感は、軽く千を超える。

ヒソカは賭けをした。旅団全員を敵に回し、命さえ落としかねなかつた危険な賭けを。

全ては旅団クモをヨークシンに留まらせ、クロロと戦う為であつた。それは正に執念。

「ボクは此処に残るよ♥ 死ぬ前にやりたい事があるんでね♥ 仮宿は離れない◆?」

「……団長」

ヒソカが告げた後、シャルナークがクロロに『退くか残るか』を問うた。

「——残ろう」

クロロは少しの間を置いて答えた。

黒い商品ばかりの収納場で

貴方は永い眠りを強いられる

何よりも孤独を恐れなさい

2人きり程怖いものはないのだから

暗くてわずかに明る日

貴方は狭い個室で二択を迫られる

誇りか裏切りかしか答えはないだろう

死神が貴方の側に佇む限り

電話を掛けてはいけない

一番大事な時につながらないから

電話に出るのもすすめない

3回に一度は死神につながるから

11本足の蜘蛛が懐郷病に罹りかか

さらに5本の足を失うだろう

仮宿から出てはいけない

貴方もその足の1本なのだから

順番にシズク、パクノダ、シャルナーク、ヒソカ。死の予言が出た者達だ。

「それじゃあ班を決める。来週はこの班を基本に動き、単独行動は絶対に避ける事」

先ず、シズクにパクノダとマチ。データ不足のコルトピとフィックスにフェイタン。ノブナガとシャルナークにクロロ。そしてポノレノフとフランクリン、ヒソカは待機という班で決まった。

アリシアは勿論、仮宿でおとなしく待機である。

「団長、一つ良い？」

思い出したかのようにマチが言った。

「子供がさあ、此処の場所知ってただけど。まあ、鎖野郎とは関係ないみたいなんだけど。やっぱりどうも気になるのよね」

「子供？」

マチが言っていた子供というのは、ゴンとキルアの事である。

「あ！ そうだ忘れてた、団長!!」

ノブナガも二人を思い出したらしく、声を上げて若干興奮気味に話に入って来た。

「そいつの入団を推薦するぜ！」

「ちよつと！ こっちはそんなつもりで話をしてんじゃないよ！」

マチとノブナガは、クロロにゴンとキルアの話を、粗方説明した。

「なる程、確かに面白そうな奴ではある。……だが、話を聞く限りそいつは旅団には入らないだろう」

「説得するさー!」

ノブナガは特にゴンを気に入ったらしく、『なんとしても連れて来るから、兎に角見てくれ』とクロロに頼んだ。

「……うむ」

「団長!」

「——で、マチ。お前が気になる事とは?」

「あ、え——と、何となく……な、だけなんだけど」

「勘か?」

マチの勘はよく当たり、とても頼りになるものだった。

「その子供、もしかしたら何か重大な繋がりがあるかもしれないな」

用心の為にアジトのダミーを増やしておくべきかと、クロロはコルトピに棟を増やさせた。

コルトピのコピーする能力は"円"の役割も果たし、贗にせのアジトのどれかに誰かが進入すれば、コルトピ本人に直ぐにわかるようになってる。

「全員で最終的な確認をしておこう」

クロロは、先ずシャルナークの名を呼んだ。

「ウボオーから聞いた鎖野郎の情報つてのは、前に話した分だけなんだな？」

シャルナークは頷くと、ウボオーギンと一緒にハンターサイトでノストラードファミリー組の構成員の顔写真を、片っ端から調べていた事を話した。

「その時ウボオーが『こいつらだ!』と言ったのが、この写真の中の上段3人」

シャルナークは自分で用意していた構成員の顔写真リストの三人を指差した。

「ウボオーは奴等の宿泊場所がわかった時点で行っちゃったけど、オレはその後もう少し調べてみて、こいつらが娘のボディガードだつて事がわかったんだ」

「それが一日の深夜だな。オレも昨日、そのサイトを調べてみた」

クロロはノストラード組のボスの娘の写真を、順番に回して見せた。

「そしてこつちが、オレが調べた時のボディガードの顔写真リスト。更に二人加わっている」

「もう新しい情報に変わってたの?」

新たな顔写真リストにシャルナークは勿論、フィンクスとフランクリンも食い入るように見つめた。

「これを調べてから一日近く経っている。シャル、後でもう一度このサイトを確認して

みてくれ」

「了解」

「ボディーガード、七人もしくはそれ以上……か。娘っ子一人に大層なこったな」
「親バカなんだろ」

新しい顔写真リストを見ながら、フランクリンとフィックスが言った。

「娘自身より、その能力の方が大事らしい」

クロロの情報によれば、父親は娘の占いで現在の地位を築き、それを面白く思っていない連中も多かったという。

「でもなんでこのコ、ヨークシンに来たのかな？」

回って来た娘の写真を見つめたシズクに、パクノダは『そりやあ、オークションなんじゃない？』と返した。

——そうか。

二人の言葉に、クロロは直感した。

「シズク、パクノダ」

「はい？」

「ナイスだ」

唐突過ぎて意味がわからないと言った顔を、パクノダとシズクは向け、クロロは独り

言のように何かを呟いている。

「——何故、ボスの娘はヨークシンに来たか？　そこにオレが気付いていれば、もつと早く鎖野郎に辿り着いていた……！」

ボスの娘がボディガード付きでヨークシンに来た目的、それはオークションである。

だが、占いの能力ばかりに気を取られて重要視してはいなかったが、クロロが見たサイトの情報では、娘には人体収集家という、もう一つの顔があった。

「人体……！　緋の眼か！」

鎖使いがノストラード組に入ったのは、偶然なのではない。

今回の地下競売に緋の眼が出品される事と、それをノストラードの娘が狙っていると、いう事を予め突き止めていたとすれば、鎖使いの目的は二つ。

「オレ達への復讐と、仲間の眼の奪還」

クロロはシャルナークに、競売品の中に緋の眼があったかどうかを訊いた。

「ごめんわかんない。競売の最中は、進行役を自動操作してたから」

すると後ろにいたコルトピが、『あつたよ。確か、コピーした』と言った。

「お前のコピー、"円"の効果があると言ったな。緋の眼のコピーが今どこにあるのかわかるか？」

「本物を触れば、ね」

奪った宝の中を探し、漸くシズクが緋の眼を発見した。

「同じ形のもの、あっちの方角……。だいたい、5500m」

能力を使つてコピーの場所を特定したコルトピが、ある方向を指差した。

「急いだ方がよいよ。コピーしたの昨日の夜だから、後数時間で消えちゃうから」

クロロはフィリンクスから地図を受け取り、コルトピのコピーの場所を割り出していた。仮宿から約5500。そこは、ホテルベーチタクル。

「団長、オレに行かせてくれ」

今のノブナガの表情からは先程までの、ただ怒りに任せて必死だった時の様子は無い。クロロはノブナガを見据え、それを承諾した。

「その代わり、オレと一緒にだ。単独行動は許さない」

「了解!!」

「パク、マチ、シズク。お前達も一緒に来い。メンバー交代。シャル、コルトピと代われ」
「OK」

こうして、クロロ、パクノダ、マチ、シズク、ノブナガ、コルトピの六名は、ベーチタクルホテルへ向けて行動を開始する。

「クロロ」

仮宿の建物からクロロコが出る寸前、アリシアは声をかけて手を振った。

「いつてらっしやい」

アリシアの声に振り向いたその一瞬、クロロコの唇が微笑を浮かべたように見えた。その視線はアリシアを捉え、そして背後のヒソカへと移してから、クロロコは踵を返して行った。

「団長とも仲良くなったんだね◆？」

ベーチタクルホテルへと向かったクロロコ達から向き直れば、いつもと同じようどこか違う笑顔のヒソカが言った。

「クロロコがね、わたしに本をプレゼントしてくれたのよ」

アリシアは、クロロコから貰ったその本を抱き締めて見せた。

「へえ◆？ 団長が、ねえ◆？」

大事そうに本抱き締めるアリシアからは、甘い香りが漂って来る。

——そんなにアリシアが欲しいかい？

先程の目を合わせたクロロコが脳裏をかすめる。その眼はアリシア^{獲物}を欲する眼差しだった。

——本当にイイ目だった……♥

下半身を熱く滾らせながら、ヒソカはクロロコとの闘いを心から待ち遠しく思うのだっ

た。

外は未だ雨が降り続けている。

クロロ口達はコンチネンタル通りを西へと進み、中心街を目指して、渋滞を避ける為に電車に乗り込む。途中、目的地に近いリパ駅で降りた。

「動いてる……！ 下にゆっくり降りてる」

能力によって反応し、察知したコルトピが言った。コピーの緋の眼を持った何者かは、どうやらエレベーターで降りているらしい。

「これから全員で捕獲にかかる。お互いにお互いをフォロー出来る間合いを保て。パクノダ、敵を捕まえたらウボオーの事を訊き出せ」

「了解」

「その後はノブナガ、お前の好きにして良い」

クロロの『Go』という掛け声と共に、六人は全員その場から一斉に駆け出した。「2時の方向、時速50km程で移動中」

車に乗ったのか。逃げられる前に捕まえないければ。よりスピードを上げて走っていると、何者かが背後から追って来るのを、クロロは感じ取った。

——尾けられている。

「追うのに夢中で気付かなかった」

漸く気付いたマチとシズクは、後ろを意識しながら走った。

「前と後ろ、どっちが鎖野郎だ!？」

舌打ちをしたノブナガがクロロの隣を走り、次の命令を待った。

「団長!」

「ノブナガ、パクノダ、コルトピは前を追え!」

「了解!」

命令に従った三人は前方へと走り、残ったクロロとマチ、シズクは、不意を突くように体勢を後ろへと向き直った。

「見えたか?」

シズクが見たのは路地に隠れた影のみ。マチはゴミ箱の後ろに隠れた何者かの姿を捉えていた。

「"凝"を怠るな」

「了解」

警戒を強めたクロロ達は"凝"を使用し、沈黙のままに様子を見て待った。すると――

「ごめんなさい! もう追っかけないから、許して下さい!!」

ゴミ箱の後ろから両手を上げて出て来たのは、ゴンであった。

「またこの子？」

「こいつか、例の子供は」

マチは路地の方向を見つめながら、『出てきな』と相手に呼びかける。すると、その呼びかけに応じたキルアが路地からゆっくりと現れた。

「何の用だ？　もうあたしらに賞金懸けてるマフィアはいないよ」

「え、ホント!?　どうして？」

銀髪の少年、キルアが問う。

「どうする、団長？」

「捕まえろ」

瞬時でゴンとキルアの背後を取り、マチは自らの念糸で2人を拘束した。

そしてクロロはコートからケータイを取り出し、仮宿で連絡を待つフィックスへと電話をかけた。

「……フィックスか、オレだ。ビーチタクルホテルまで来てくれ」

一方でノブナガとパクノダ、コルトピの三人は、鎖使いのデータを引き出せる事に成功していた。

「こっちはスクワラって男だった。ウボオーのその後はわからないままだったけど、鎖

野郎の名前と顔はわかったわ。……能力は、まだ不明」

『わかった。ビーチタクルホテルのロビーで待つ』

クロロへの電話を切ったパクノダは、ノブナガとコルトピと共に、ビーチタクルホテルへと向かうスピードを速めるのであった。

さよならはトツゼンに

「鎖野郎に攫われた？」

待機組として仮宿に残っていたフランクリンに、シャルナークから思いも寄らぬ連絡が入った。

「団長が攫われたって、どういう事だよ？」

横に座るボノレノフと、ヒソカの隣で本を読んでいたアリシアは、『団長』に反応してフランクリンを見た。

「ベーチタクルホテルで何があつたんだ？」

『実はさあ——』

シャルナーク達がホテルに到着する前、既にクロロは攫われた後だった。

『オレも軽くしか話の流れは聞いてないけど……』

別行動で動いたパクノダらによって、鎖使いの顔と名前の情報を得たクロロ達は、後から呼び寄せたフィンクスやフェイタン、シャルナークと合流する為に、ベーチタクル

ホテルのロビーで待つていたという。

『あの子供達もなんか途中で捕まえてて……』

「そいつら、何でまた捕まったんだ？」

『オレ達に懸けられた賞金目当てで、団長達を尾行してたんだって』

小さな溜め息をシャルナークは吐いた。

『ある意味捕まえてて良かったよ。あの2人、鎖野郎と繋がりがあるみたい』

クロロが攫われる数分前の事――。

「あんた達に懸けられてた賞金を取り消しになった事、知らなかったただけだよ」

「その結果、また尾行に失敗したのか？　こりねえな。だがこれも何かの縁ってやつよ。

オレ達は惹かれ合う運命ってわけだ」

ゴンやキルアにまた会えた事を喜ぶノブナガは、改めてクロロに二人を薦めていた。

顔も見たくないと、目を瞑るゴンとキルア。クロロはそんな二人を見据え、ひとり何かを考えた後に、もう一度。パクノダに能力を使って調べさせようとした。

「何を訊く？」

「何を、隠してる？　かだ」

パクノダが触れようとすると、『無駄だね』とキルアが言った。キルアは、パクノダの能力を知っているという態度だった。

「オレ達は何も隠してないし、何も知らない。仮に何かを知ってても……!」
「やればわかること。黙りなさい」

パクノダはキルアの顎を掴み上げた。

「もし知ってても、別の事考えて頭の中読ませないもんね!」

今度はゴンの顎を掴み上げる。

「何か……、勘違いしてるわね」

パクノダが引き出すのは、記憶の底の最ももっとも純粹な原記憶であった。

「あんた達が創り出したイメージを読むわけじゃない」

パクノダの質問で対象者の記憶を刺激すると、池に石を投げた時の様に、記憶の底で沈殿した泥が舞うのだ。

「それが原記憶。加工されてない記憶。私はそれをすくい取る——偽証は、不可能よ」

苦しさに顔を歪める二人を見つめながら、パクノダは質問した。

「何を——隠してるの?」

その時である。突然、視界が闇に包まれた。

——否、消えた?

ロビーの照明が、全て消えてしまったのである。瞬きの間、パクノダが自身の左腕の骨が折られる音に意識を戻すと、今度は顎を蹴り上げられた。

——右の奴が抜けた!?

念糸で二人でを捕まえていたマチは、右側にいた筈のキルアが、念の糸から抜け出たのに気付いた。

見えない——!

右の横腹を蹴られ、マチはその場から体勢を崩す。

左は放さない。左側のゴンは、まだ糸から逃れてはいない。マチは左手を振り上げ、念糸で繋がれたゴンを頭上高く飛ばすと、前方から来る殺気を感じ取った。

「捕まえた」

ガードしたマチの心臓辺りを手刀で突こうとしたキルアの手は、ギリギリ手前の筋肉によって止められてしまった。

マチはその手を抜けなくさせ、キルアが逃げれないように全力で抱き締める。

「殺気を出せばこつちも構える。闇に乗じた意味がないね。刺すなら首だよ。ま、ガードしたけど」

完全に身動きの取れなくなったキルアを助けようと動いたゴンも、成すすべなくノブナガに捕まった。——その時、ノブナガの横を何かが通り、後ろの柱に刺さる。

「団長は……?」

暗闇に目が慣れ、シズクは気付いた。クロ口の姿がない事に。

停電したその隙をつかれ、混乱に乗じてクロロは攫われたのだ。

『——で、オレ達に着いた』

ノブナガの横を通った何かは、紙切れが巻かれたナイフだった。その紙には、『二人の記憶、話せば殺す』と書かれていた。

『パクやマチは負傷してたし、八人で団長を追うとしたら、団長のケータイを使って鎖野郎が電話をかけてきたんだ』

鎖野郎こと、名をクラピカという人物は、従わなければ即座にクロロを殺すと言い、三つの指示を出してきた。

一つ目は『追跡するな』。二つ目『人質の二人に危害を加えるな』。三つ目は『パクノダという女に代われ』だった。

パクノダに代わった後、次はノブナガに交代。パクノダ以外は全員アジトに戻り、人質と一緒に十人常と同じ場所にいる事を指示され、またパクノダに代わった。

『フェイタンがその内容を盗み聴きしようと試みてたけど、出来なくてね』
「何でだ？」

『鎖野郎の仲間には嘘を見破る奴がいるらしい。オレ達が小細工しようものなら、団長は死ぬ』

シャルナークは『一旦七人で戻るから』と告げると、そのまま電話を切った。

「十人揃ってねーと、団長が死ぬ……か。人質を連絡係に使うとはな」

なんて頭の良い野郎だと、フランクリンは思った。

「クロロ、大丈夫なのかしら……？」

アリシアは、ガラスが割れた窓から見える外を見つめながら、クロロを心配するように言った。

その隣ではヒソカが携帯電話を取り出し、また誰かへとメールを打っていた。その表情は誰にも見られずこっそりと。気味悪くほくそ笑む。

雨脚が強まる中、暗闇の中の仮宿内に僅かな物音が響く。

「……誰かいるな」

団員とは違う人の気配を感じ取ったフランクリンは、ボノレノフとヒソカ、アリシアも連れて仮宿内を調べに動いた。そして、待機していた建物の隣の廃ホテルに入ろうとした時である。

前に行くフランクリンとボノレノフの後ろを、少し離れて歩いていたアリシアの左耳に、ヒソカが優しく唇を落としたのだ。

声は出さなかったが、突然何なのだろうとアリシアが見上げれば、愉しそうに口角を上げたままのヒソカは、辺りを調べているフランクリンやボノレノフの前を一人歩いて行った。

「オイ、気を付けろよ」

「大丈夫だよ……?」

先を行つたヒソカが扉の開いていた部屋に入った。——すると突然、後方から音がした。フランクリンとボノレノフは音のした方へと反射的に振り返る。

そこにいたのは、紅い振袖の着物を着た子供だった。その子供は、此方を少し振り向くや否や、窓から外へと逃げるように飛び降りて行つた。

「……あれも奴等の仲間か?」

走り去る子供を窓から顔を出して見ていたボノレノフが、『追うか?』と訊けば、フランクリンは『全員揃うのを待とう』と返した。

物音の正体がわかつた後は、また元の場所に戻り、七人の帰りを再び待つた。

「今度はヒソカも心配でしょ?」

斜め後ろに座つたヒソカに振り向いて、アリシアが訊いた。

「それは勿論だよ」

アリシアの声に反応するまで地面を見つめていたヒソカは、視線をアリシアへと移して答えた。

——あれ?

アリシアはヒソカと目を合わせながら、微妙な違和感を感じていた。目の前の男はヒ

ソカである筈なのに、ヒソカではない気がしたのだ。

「どうしたんだい？」

見つめたまま黙るアリシアにヒソカが声をかける。その瞳は、夜に溶けてしまいそうな程の、暗い闇色をしていた。

「あなた——」

アリシアが何かを言いかけた時である。

七人が仮宿に戻って来たのだ。

「ノブナガ、どうしたんだ？」

気絶しているノブナガを抱えたフィンクスを見て、ボノレノフが言った。

「色々あってね」

フィンクスの代わりにシャルナークが答えた。床に寝かされたノブナガを見るフランクリンは、戻って来た団員達の雰囲気から、すんなりと仮宿に戻って来たわけではないかと推測する。

今はただ、鎖使いからの連絡を待つしかないが、クロロやパクノダがいなかったこの場の空気は、何とも言えず最悪なものである。

時間が経った。誰も何も語らず沈黙が続いたせいで、やけに長くも感じられた。

すると、鎖使いからの『条件はパクノダに伝えた』という連絡があった後、仮宿にパ

クノダが漸くしてから戻つて来た。

「のめると思つてるのか、そんな条件をよ」

目つきの悪い目を更に悪くして、フィンクスがパクノダを睨んだ。鎖使いの出した人質交換の条件は、0時までには、パクノダ一人がゴンとキルアを連れて来る事だった。

「場所を言え、パクノダ。ガキ二人を殺して、鎖野郎を殺りに行く」

「どうしても?」

パクノダ側にいたマチがフィンクスに言った。

「どうしてもだ。言わないなら行かせるわけにはいかねえ」

「絶対に場所は言わないし、二人を連れて戻るのは私だけよ」

邪魔しないでと返したパクノダに、フィンクスは眉間の皺を深めた。

「邪魔? そりやどつちの話だよコラ!」

「行きなよパクノダ。ここはあたし達が止める」

「とめる? なめてるか?」

パクノダの前に立つマチを見て、フェイタンが言う。

「本気かよ、理解出来ねえぜ。お前から頭どうかしまつたのか?」

パクノダの前を庇うように立つ、マチとコルトピを睨むのはフィンクスとフェイタンだ。

「おそらく、ワタシ達着く前に、全員鎖野郎にやられてるね。こいつら操作されてるよ。これ以上は時間の無駄ね。ワタシが吐かせる」

対立し、睨み合う五人の様子をじっと見ていたゴンは堪えきれずに、フィンクスとフェイタンを見つめながら口を開いた。

「本当にわからないの?」

パクノダが、何故団員に何も話さず戻ろうとしているのか。何故マチがフィンクスやフェイタンを止めようとしているのか。

それは操られているからと、本当にそう思っているのかと、ゴンは二人に問うた。

「お前達の団長を助けたいからに決まってるだろ? 仲間を取り戻したいって気持ちだが、そんなに理解出来ない事なのか!!」

「黙ってるガキが!」

助かりたくて必死か。フィンクスが言うと、ゴンは自分を縛っていた頑丈な鎖を千切り壊し、立ち上がった。

そんなゴンを見ながら『やれやれ』と、キルアも鎖を壊している。

「自分の為に言ってるんじゃない。取り消せ!」

今にもゴンに対して攻撃を仕掛けそうなフェイタンを手で制し、フィンクスはゴンの言葉を拒否すると、『文句あるなら来いよ、一歩でも動いたらその首をへし折る』と告げ

た。

「んじやヤダね！ 誰が動くもんか！」

ゴンはフィンクスに向けて舌を出した。

「クラピカはお前達と違う！ たとえ相手が憎い仇だつて、感情に焼かれて容赦無しに殺したりはしないし、約束を交わしたのなら一方的にそれを破つたりもしない！」

更にゴンは続ける。

それは直接会つたパクノダ自身がわかつている筈。条件通りにすればクロロは必ず戻つて来ると。

「いい加減にしろよてめえ。勝手な事ゴチャゴチャ吹きやがつて」

「フィンクス」

収まりつかなくなる現状を止めようと、フランクリンが名を呼んだ。

「もうやめろ。パクノダを行かせてやれ」

「な……、お前エまで何を！」

フランクリンは、自分達にとつて最悪のケースをシャルナークに質問した。

「団長は既に死んで、ヒソカ、パクノダ、マチ、コルトピ、シズク、ノブナガが鎖野郎に操作されてる。鎖野郎の所在は結局知れず、この二人にもまんまと逃げられる……かな？」

その答えに、フランクリンは『それが間違っている』と指摘した。

最悪なのは、団員全員がやられて旅団クモが死ぬ事であると。

「それに比べりゃあ、お前が言ったケースなんざ屁みてえなもんだ。違うか？」

「そりゃ、そうだね」

「理由はどうあれ、お前えらどつちも団長に依り過ぎだぞ」

結果、致命的に旅団が崩壊でもすれば、それが一番クロロに対する裏切りであると、フランクリンは言う。

「頭冷やせ。ガキとパクノダを行かせて、もしも団長が戻らなかつたら、そんな時は操作されてる奴全員ぶつ殺して、旅団再生だ。簡単な事だろうが？」

それに対しマチは、『それで良い、それで気が済むならね』と答える。すると、フランクリンの言葉に押し黙っていたフィンクスのポケットの中の携帯電話が鳴った。

「もしも——」

『人質の二人に代われ』

鎖使いことクラピカからだった。クラピカはゴンに全員いる事を確認させると、再びフィンクスに代わらせた。

そして、フィンクスの出した答えは——。

「……追わなくて良いのか？」

パクノダがゴンとキルアを連れて仮宿を出た後、フランクリンが言った。
フィックスは結局、条件をのんだのである。

「今からなら鎖野郎がオレ達の動向を調べる術は無くなったぜ？」
「うるせえ。追おうとすりゃ、またお前らが止めるだろうが」

取り敢えずは様子見だ。全てはクロロが戻るか戻らないかで決めれば良い。フィックスは自分にそう言い聞かせながら、今はただ、この仮宿で大人しく待っている事を選んだのだった。

「これで団長が戻って来なかったら、てめえもぶつ殺す」

リンゴーン空港。

待ち合わせの場所に到着したパクノダが見上げるのは、一機の飛行船。そこへ何者かがやって来た。

「ヒソカ……!?!」

気付いたパクノダは驚いた。何故ヒソカがこの場所に来たのか。

ヒソカは仮宿に影武者を置き、パクノダを付けていたのだ。目的はただ一つ。クロロと闘^やりたいだけである。クラピカと携帯電話で会話しながら、ヒソカは飛行船に自分も乗せるように言った。断れば、『ゴンとキルアを殺す』と脅しながら。

勿論嘘である。だがクラピカは、それを嘘か真かを見抜く余裕も無い。結果、クラピ

カはヒソカを。パクノダと同じ飛行船に乗船させた。

暫く飛行船で移動し、人質交換の場所へと到着。この地に雨は降ってはいなかった。岩群ばかりの草木も生えていない峡谷にそびえ立つ、崖の一部に降り立った両者は、端と端に人質を置いて立った。

人質であるゴンとキルアが何もされていない事を確認したクラピカが、『交換開始だ』と告げると、両者の人質はそれぞれに仲間の元へと歩き出した。

「ゴン！ キルア！」

「クラピカ！」

解放され、再会に喜ぶゴンとキルア達。反対にパクノダは、戻って来たクロロと互いに目も合わさず、語らず、乗って来た飛行船へひとり乗船した。

そして一機を残し、もう一機の船はゆっくりと飛び去って行く。

顔の左側に殴られた痕が真新しいクロロの視線は、雲の多い星空へと飛ぶ飛行船にあった。

「——ずっと待っていたよ、この時を♥」

声に目を移せば、喜びを顔にみなぎらせているヒソカがいた。

「さあ、闘ろう♥」

この時をどれ程待ち望んだ事か。

「ボクが入団したのは……いや、入ったと見せかけたのは——」

ヒソカは、最初からクロロと闘う目的の為に前4番を倒し、三年程前に新しい4番として幻影旅団へ偽装入団した。

「——まさにこの瞬間トキの為♥」

服を脱ぎ捨て上半身を裸にしたヒソカの背中には、旅団のメンバーである証の、団員ナンバーが入った12本足の蜘蛛の入れ墨があった。

「もうこんなモノは、必要ない◆?」

自身の能力である薄ドッキリテクスチャつぺらな嘘で貼り付けていた入れ墨を剥がして捨てると、それは吹かれる風の流れに流れていった。

「これでもう仲間割れじゃないから、遠慮なく闘えるだろう?」

その様を見つめながらクロロは、短い沈黙の後にひとり可笑しそうに鼻で笑った。

「なるほど。団員じゃないなら話せるな。オレは、お前とは戦えない——というより、戦うに値しないと云っておくか」

クロロがパクノダやヒソカの前でも沈黙していたのには、理由わけがあった。

「くくく……? それってボクへの挑発? それとも時間を稼いで、その間にボクの念能力を盗もうってワケ?」

決して挑発ではない。クロロは真実を述べている。

「鎖野郎にジャツジメントチェーンなる鎖を心臓に刺されて、オレはもう、念能力を全く使えないんだ」

クロロは、クラピカの念能力により能力を使えなくなったただけではなく、旅団員との会話の一切も禁じられていた。それに抗い破ってしまうと、刺さった念の鎖が心臓を握り潰してしまうのである。鎖使いを上手いこと利用し、クロロとの闘いを実現させようとしていたヒソカには、まさかの誤算だった。

「冗談でもなくて?」

「そんなお前を目の前に、ここまで来て冗談だと思うか?」

二人の間に、静かな風が通り抜けていく。

——楽しみにしてた闘いだったのに……残念なんだけど? デート

酷く萎えてしまったヒソカは、オーラを放つのも止め、つまらなそうに溜め息を吐いた。

「ヒソカ——」

「何? もう用は無いや?」

興味なさ気に返すヒソカは、クロロの横を通って飛行船に乗り込もうとしていた。

飛行船に背を向けたままのクロロはふと、アリシアの顔を頭の中で過ぎらせ、夜空の星に目を向けた。

「……船は二人で出てくれ、オレは船には乗らない」

その言葉を最後にそれ以上は何も語らず、空から遠い東の方向へと目を写したクロロの表情には、静かな笑みがあった。

「どうやって抜け出したの？」

クロロを残して出発した飛行船の中で、パクノダがヒソカに気になっていた事を訊いた。

「変身の得意な友達がいてね♣？」

ヒソカは携帯電話を取り出して、その相手にメールを送ろうとしている。

「安心しなよ◆？ 少なくとも団長^{クロロ}がボクに殺される事はなくなった♣？」

どういう意味なのかと言いたげな表情をしたパクノダに、ヒソカはこう言った。

「壊れた玩具に興味はないんでね♣？」

ほぼ同時刻、仮宿にて。

「——ねえ、わたしわかったの」

携帯電話に目をやる偽物の隣にぴたりとくっ付いたアリシアは、内緒話をするように耳元で話しかけた。

「目を見て思い出したわ」

今までずっと考えていて、やっとわかったらしいアリシアの表情は、とても嬉々とし

ている。

「あなた——、イルミでしょ?」

男の闇の眼は、携帯電話からアリシアへとゆっくり移り捉える。

その瞬間。アリシアの首筋に男の手刀が当てられ、アリシアは男にもたれかかるように気を失った。

ぐったりとした状態のアリシアを抱き抱え、立ち上がった影武者が待機場から出ようとした時、『どこいくね?』と背中を覗みながら、フェイタンが呼び止める。

「隣の屋上。1日に1回は外の空気に当てないとさあ、彼女弱って死にかけちゃうんだよね」

振り向きもせず answers 影武者に、フィinksはシャルナークの方を向いて、『そんなのか?』と訊いた。

「え? ……そんな特徴あったかなあ?」

「オイ、嘘ついてんじゃねーぞ」

「他は知らないけど彼女はそうなんだよ。つまらない嘘ついても楽しくないし、彼女が死んじゃったらどうしてくれるの?」

その返しに苛立ったフィinksの舌打ちが響く。

「屋上くらい行かせとけよ。ミムノイチゾクに死なれたら団長に何言われるかわかん

ねーぞ」

未だ気絶したままのノブナガの横で、フランクリンが溜息交じりに言った。

「今は余計な行動されちゃあ面倒なんだよ。おいヒソカ、さっさと行つてさっさと戻つて来い」

「……はいはい」

——意外にすんなりと上手く出れたなあ。

団員達はこの男を偽物であると疑いもせず、アリシアを連れ出る為に即興で設定した嘘にも、男を訝しく見ていたマチでさえも、深くは追求してこなかった。

今はあんな状況だったし、もっと面倒事になるかと思つたけど……。

クロ口の事で皆余裕が無かつたのだろうか。斯くなる上は強行突破であつたが、無駄に動かずに済んで良かったと、影武者は一応に屋上を目指して階段を歩いて行く。

——こんな面倒までやらされるとはね。

抱えたアリシアを見やり、変装を解きながら歩けば、男の長い黒髪がさらりと揺れる。——後で追加料金も請求しよつと。

打たれる雨は気にしない。アリシアを抱き抱えたまま屋上から更に隣へと飛び移り、ヒソカから影武者依頼を受けた男、イルミは、旅団グモの仮宿から静かに走り去つて行つた。

「——これから戻るわ。ええ、団長は解放された」

再びリンゴーン空港へと戻つて来た。仮宿で待つ仲間に連絡をいれたパクノダは、ヒソカと共に飛行船から降りた。

「それじゃ、ボクはここで……」

雨降る空港で別れようとしていたヒソカは、言い忘れた事を思い出して立ち止まった。

「実はボクの本当の占いでは……」

「本当の？ どういうこと？」

「予言を改ざんしたんだ◆？ 旅団をヨークシンに留めておき、団長と闘う為にね◆？」

まさか団長があんな事になるとは思わなかったし◆？」

パクノダはそれについて何も返さず、ただじつと黙っていた。

ヒソカの本当の占いでは、クロロとの対決はおそらく火曜日の筈で、しかも退団する時にはもう、団員は半分になっている筈であったのだ。

「運命は少しずつだけど、ズレてきているね◆？」

最後に『さよなら◆？』と告げたヒソカは、踵を返して行った。

ヒソカと別れ、雨の中を物思いに耽りながら一人仮宿に戻ったパクノダは、クロロのいない団員達の前に、銃を握り締めて立った。

「団長は？」

フィックスだ。

「此処には来れない」

「あ？　ふざけるよパクノダ。きつちり説明しろ！」

「ええ……」

「返答次第じゃ覚悟しろよ」

パクノダは銃に能力の弾を込める。「メモリーボム記憶弾」。と言う、最近までクロロしか知ら

ず、ヨークシンでノブナガやコルトピに初めて使った。

読み取った記憶が込もった記憶弾を銃で他人に撃てば、その記憶を植え付ける事が出

来る。——ただし、一度に撃てる弾は6発までである。

「大丈夫、そのかわり——」

幻影旅団結成時のメンバーの名を呼んだ。パクノダの表情はやけに穏やかで、その奥に

は後悔の無い覚悟があった。

「信じて、受け止めてくれる？」

私の記憶、私の想い、全て込める……!!

仮宿に6発の銃声が鳴り響いた。

全ては走馬灯に消える。最期に思い浮かべるのは、あの日のクロロの姿だった。

「パクノダー」

パクノダはゆっくりと地面に倒れ、シズクが駆け寄った時にはもう、事切れていた。パクノダはクロロと同じく、クラピカ的能力を心臓に受けていたのだ。死ぬとわかって敢えて掟を破り、仲間やクロロへの想いと、話せなかつた記憶情報を伝える事をパクノダは最後に選択したのであった。

彼女ノ旅路

ニシから東へ

誰かに頬を撫でられた。

母親が、幼いアリシアを撫でてくれたあの日々の様に、優しく、そっと。

「……ん」

目を開ければ、見覚えの無い天井が視界に入る。ゆっくりと上半身を起こして、アリシアは辺りを見渡した。

——あれ？　ここはどこ？

丸みのある広くて薄暗い部屋のベッドの上に、何故自分が寝かされているのか。しかもまた衣服は身に付けておらず、裸の状態である。

アリシアはフラットシートに身を包むと、ベッドから降りた。

「……夢、なのかしら？」

何だかデジャヴ感がある。アリシアは独り言を呟きながら、ドアらしき方向へと歩こ

うとした。

「おはよう♥」

「つひやあ！」

突然背後から覆い被さるるように抱き締めて来たヒソカに、アリシアは驚きの悲鳴を上げる。

「ヒソカ！」

「んふふ◆？」

「いつもそうやって驚かせるんだから」

悪戯な表情を浮かべて笑うヒソカに、アリシアは少しむくれ気味に返した。

「ごめんごめん◆？ やつとキミが目覚めたからさあ、つい、ね◆？」

「あつ、そういえば……」

アリシアは思い出したかのように、何故此処に自分が寝かされていたのかを訊いた。「それに、イルミが何でヒソカになっていたの？」

仮宿での最後の記憶と言えば、ヒソカの姿をしたイルミである。

「ああ、『バレてた』って言ってたねえ◆？ ちよつと事情があつてさあ、イルミに代わりを頼んだんだよ◆？ キミのことも連れて来るようにお願いしたんだけど、まさか気絶させて来るとは思わなくてね♥」

アリシアから離れ、ドア付近にあるスイッチを押せば、ほぼ部屋全体のブラインドが上へと自動に上がり出した。明るい太陽の光が、部屋中を照らす。眩しさに目を細めるアリシアは、外の景色に驚いて思わず窓ガラスに走り寄った。

「飛行船!?!」

「正解◆?」

此処は長距離用の飛行船ホテルの一室であると、ヒソカは答えた。

「あ!」

アリシアはまた声を上げる。

「みんなはどうなったの? クロロは大丈夫?」

「ああ……◆?」

壁に身体を寄りかかりながらヒソカは、本当につまらなさそうな顔をして『多分ね◆?』と素っ気なく言った。

「多分?」

「そう、多分◆? そんな事よりさあ——」

これ以上は訊くなよとばかりに、ヒソカは表情も話も切り替えた。

「新しい服、用意したんだ♥」

指を指した先には白い箱が置いてあった。中に入っていたのは、水色の小花柄が可愛

い Goslori Wanpees で、スカートのフロント部分が四段のティアードフリルになっているものだった。

「素敵ね！」

「ボクのセンスがイイからね◆？」

「あー！」

これで何度目か。アリシアはまたもや声を上げた。

「今度は何？」

「本よ！ わたしの本は？」

焦りを露わにヒソカから離れ、ベッド周りから部屋中のあらゆる所をアリシアは必死になって探し始めた。

——わたしの本はどこ？

あの本を最後に持っていた場所は、ヨークシンの仮宿内。イルミに気絶させられるほんの数秒前まで、確かに手に持っていた筈だった。

——ああ、わたしの本はどこなの？

半泣きになりながら探すアリシアの側に、口角を上げて歩み寄るヒソカの右手には、本があった。

「キミの探してる本って、……これだろ？」

「そ、それよー！」

気絶させられていたアリシアは、それでも離さずに持っていたようだった。イルミからの受け取り時にアリシアの手から落ちた本を、ヒソカは拾っていたらしい。

本が見つかった事に安堵しつつ、ヒソカに差し出された本を、アリシアは『良かった』と受け取るうとした。

「そんなに大事なモノかい？」

——が、ヒソカは差し出した本を後ろへと引つ込めてしまった。

「大事なものよ」

「ふくくん ♣？」

「ねえヒソカ、返して」

ヒソカは厭らし気な顔で『どうしようかなあ ♠？』とニタつく。一向に渡す素振りも無いのだ。

「返してったら」

困り顔のアリシアは、ヒソカにまわり付きようにして手を伸ばし、何とかして本を取り戻そうと動いた。

「モノには執着しない性格なのかと思ってたんだけど…… ♠？」

伸ばされた手を何度も躲かわしながら愉快そうに笑うヒソカに、アリシアの表情は徐々に

苛立ったものへと変化させていく。

「いじわるしないで」

「ボクって時々、キミみたいなコを無性にいじめたくなるんだよねえ◆?」

背の高いヒソカが本を持つ手を上へと伸ばせば、アリシアは益々必死になった。

「もつと意地悪くしちやいたいけど……はい、どうぞ◆?」

これ以上やり続けると止まらなくなりそうだと、ヒソカは仕方なくアリシアの手に本を掴ませて返した。

「わたしの本……!」

愛おしむかの如く本を抱き締めれば、独特な甘い香りがアリシアから放たれる。

「クロロからのプレゼントだから、そんなに大事なのかい?」

大事そうに本を抱き締めているアリシアの姿を見つめながら、ヒソカは近くにある白いソファに深く腰を下ろした。

「いいえ。クロロからのプレゼントだからじゃないわ。この本を読んでいるとね、不思議と"ベル"になったような気持ちになれるの」

それは読む程に深まってゆく。

物に思い入れなど持った事などなかったのに、この本だけは何故か、アリシアの特別になっていた。

「でも、クロロがプレゼントしてくれてこの本に出会えたから、クロロにはまた会ってお礼が言いたいわ」

「ふうん………?」

ヒソカは凝を使つて本を見る。

——微かなオーラがあるね◆?

才能ある者が魂を込めて作った作品には、念が宿る。能力者による者の作品だろうか。

クロロが元々は持っていたのだから、それなりに価値のある作品ではある筈だ。そんなものを敢えて贈り、自分へ好意を持たせるような事をわざわざクロロがしたとは思えないが、結果的にはアリシアには良い印象与えているらしい。

何故か無性に、ヒソカはアリシアの目の前でその本を破り捨てたくなつた。

きつとシヨックを受けて泣き叫び、『酷い』と言つて睨み付けるだろうか。そんなアリシアの拒む唇に無理矢理舌をねじ込ませ、力で押さえつけながら乱暴に犯し、最期には首を絞めて優しく口付ける。もしくは、寸前でアリシアの能力を受け、自分が弾け死ぬ。

——ああ、殺しちゃうのは駄目駄目♥ 弾け死ぬなんてもつと駄目♥

愉しそうではあるが、今やるのはもつたない。ヒソカはそのような妄想を、頭の中で巡らせるだけに留まらせておいた。

向かうなら東がいい

きつと待ち人に会えるから

クロロはひたすら、待ち人に会う為に東を目指していた。

クロロにとつての待ち人とは、除念師の事である。

——念能力の使えぬ不便さよ。

地を進み、船に乗って夜の海に出た。ただ、占いの通りに進むだけ進む。

——島、か？

地図にも載っていない島に行き着いた。降りると、前方から見知らぬ人物が一人で現れた。只者ではなさそうな目の前の男を警戒しながら、クロロは相手に何者であるかを問いかける。

「ゲームマスターの一人だ」

「ゲーム？」

「何も知らないでこの島に来たと？」

男は訝しくクロロを見つめた。

「オレはこの島に偶然辿り着いただけだ」

「それでも去ってもらわなければな」

「何故だ？」

「この島に入りたくば、正しい入り口から入る事だ」

一体どういう意味か。

だが、その質問には答えてくれそうにもない。

「出て行け」

男は謎のカードを一枚取り出し、そのカードを自分の前にかざした。

『^{エリミネイト}排除』^{オン}使用！』

急な浮遊感。

気付けば見知らぬ地に、クロロはいた。

——確か、^{グリードアイランド}G・Iだったか？

飛ばされる寸前を見た、男がかざしたカードに書かれていたG・Iという文字。確か

ヨークシンに入る前、世界一高いゲームソフトが売りに出されるという話を耳に入れていた事を、クロロは思い出した。

G・Iとは、1987年に発売された、ハンター専用ハンティングゲームだ。

価格はゲーム史上最高値の58億ジニーで、当時100本が限定販売された。念能力が作つたとされるこのゲームは、念能力者にしかプレイ出来ない。世界一危険なゲー

ムである。

——オレは東を目指し海に出て、確かに島に辿り着いた。クロロクはある疑問を持った。

G・Iとはゲームの中の仮想世界ではないのか。

『この島に入りたくば、正しい入り口から入る事だ』

男が言った言葉である。

——『正しい入り口』か。

占い通りに待ち人に会う為にも、真東にあるあの島に入らなければ。だが、戻ればまた同じ目に合うだろう。面倒だが、言う通りに『正しい入り口』から入るしかない。

あの島がG・Iであるならば、正しく入島する為のゲーム機とソフトを手にする必要がある。クロロクはまず、自分の現在地を調べると共に、本機とソフトの入手に動いた。

飛行船で目覚めて数時間。ヨルビアン大陸北東部に位置する空港に降り立ったアリスアとヒソカは、石畳やレンガ造りの古い建物が美しい、大きな港街を歩いていた。

「ねえ、これは何の匂い?」

「潮の香りだね? 港街だから海がすぐそこにあるんだ?」

「海が?」

「キミは海を見た事ないんだっけ？」

アリシアは海を実際に目にした事がない。テレビや本の中でしか知らないのである。今すぐにでも海を見に走りたい気持ちを抑えて着いた先は、街でも一番高く建てられた宿泊施設だった。

受付を済ませ、エレベーターで最上階まで上がると、その階の一室に入る。部屋の中は赤を基調にした豪華な作りで、天空闘技場でのヒソカの部屋にいた頃を思い出させるような、そんな部屋であった。

——あ！

海側にあつた連続窓が目に入った瞬間、アリシアは走り寄つた。

「海だわー！」

リビングルームの窓から見える景色はまさに絶景のオーシャンフロント。残念ながら開け閉めの出来ない窓だったが、最上階だけあつて眺めは最高だった。

「気に入った？ キミが海を見たいんじゃないかと思つてね◆？」

食い入るように窓の外を見ていたアリシアは、隣に立つヒソカへと移して、顔を上げた。

「だからこの部屋に？」

「うん◆？」

「ありがとう！」

正面からヒソカに抱きついた。背中に回す手がぎこちないのは、アリシアの右手がしっかりと本を掴んでいるせいだった。

本がやっぱり邪魔だなど思いつつ、ヒソカはアリシアの甘い香りに目を細めて舌舐めずりをした。

——本当に堪らないなあ、……この匂い◆？

鼻で香りを深く吸い込めば吸い込む程に、脳天から足の爪先まで、電気が走ったように痺れる。

その感覚に酔いしれたままのヒソカは、アリシアを抱き抱えてベッドルームへと移動し、本をさり気なく奪ってナイトテーブルの上に置くと、押し倒すようにしてアリシアをベッドの上を下ろした。

「ヒソカ……？」

アリシアは何かを察知したのか、自分に覆い被さるヒソカを見つめながら顔色を青く変えた。

過るのは、軀を貫かれた痛みに恐怖した、あの日の出来事。

「い、……痛いのはいやっ！」

顔を背け、両手でヒソカの胸板を押しつけようともがくが、全くびくともしない。

「この香りのせいでさあ……やりたくなっちゃうんだよね◆？」

背けたアリシアの首筋をヒソカが舌先でねっとりと言わせば、びっくりとその身体が震えた。

——どうしようもなく、やりたくて、殺りたくて堪らないんだ◆？

「や……っ！」

恐ろしさで小さく震えているアリシアの左の耳たぶを甘く噛み、膝下から太腿の付け根のギリギリまでを撫で上げたヒソカは、吐息交じりにこう言った。

「今度は痛くないよ——多分、ね♥」

何もかもぶち撒けた後、ベッドの上でうつ伏せのままぐったりとなっているアリシアの背中に唇を落としたヒソカは、とてもすっきりとした気分になり満ち溢れていた。

——ああ、またヤっちゃった◆？

アリシアを横目にして、ペロリと下唇を舐める。

アリシアが人を魅了する特殊な存在であると知った今でも、ミムノイチゾクに興味の無いヒソカには全くどうでも良かった。

ただ、この甘い香りが自分の意思を奪おうとするのが時々腹立たしく思い、抗おうとすればする程に迷路に迷い込んでいってしまうので、いつそのままアリシアを殺してしまうかと思えも考えた。——が、どうしてもその手を限界まで絞める事が出来ない。

最後にはいつも、感じた事の無い凄まじい恍惚感がやって来るからだ。

——ヤダなあ♣？ もしかしてボク、ハマっちゃってる？

まさか魅了されて、と自身を嘲笑しながら上半身を起こすと、近くで携帯電話の着信音が鳴っている事に気付いた。

ベッド近くの床に脱ぎ捨てられた衣服の下を探り、ケータイを手に取って着信画面を見るが、知らない番号からであった。

「……もしもし？」

『久しぶりだな、ヒソカ』

「やあ、クロロ♣？」

その声を聴くのは、あの日から約一週間ぶりである。ヒソカは裸のままベッドルームを出て扉を閉めると、真っ暗なりビングルームの真ん中に立った。

「一体何の用なのかなあ？ 連絡しても大丈夫なのかい？」

今頃何だというのか。ヒソカが気怠げに返せば、『お前に頼みがある』とクロロは言う。

グリードアイランド
『G・Iを知っているか？』

「グリードアイランド？ ……ああ、なんとなくならね♣？ それが？」

『オレの代わりにG・Iへ行き、そこである人物を見つけてもらいたい』

「何それ？ そんな依頼をする為に、わざわざボクに電話を？」

電話の向こうのクロロは、それに対しこう答えた。

『報酬はオレとの決闘……ならどうだ？』

「……念能力使えないんじゃない意味無いんだけど？」

『詳しくは会ってから話そう。場所はメールで送る』

クロロは最後に『指定場所で待つ』と伝えると、用件だけを言って直ぐに電話を切ってしまった。

——その報酬、すっごく魅力的だけどさア◆？

確かクロロは鎖使いであるクラピカの能力によつて、全く念能力が使えなくなつていた筈ではないのか。すると、再びケータイが鳴った。

つい今し方クロロが言つていた、指定場所のメールが送られてきたらしい。

誘いの糸を切つてはいけない

伝えば逢瀬が叶うから

ふと、クロロが盗んだ能力で占つた予言を思い出した。

この「誘いの糸」がクロロからの電話であるならば、「逢瀬」の為に話にのつた方が

良いのがもしれない。——けれど。

片眼の熊の手招きで

大事な箱から夜空の星が飛び出すだろう

「夜空の星」はアリシアを意味している。なら「片眼の熊」とは一体誰か。これは、自分にとってあまり良い予言ではない気がした。

——回避するべきか。

しかしこれを回避したとしたら、「誘いの糸」の方は成就しなくなるのではないのか。

「仕方がないのかなあ……？？」

名残惜しそうに呟きながらベッドルームを見つめたヒソカは、身支度を整える為にバスルームへと入った。

「ん……………」

身体中が重い。

あれから、どのくらいこの状態のままだったのだろう。倦怠感に襲われながらゆつくりと目を開いたアリシアは、カーテンから射す陽の光の先を見つめた。

今は一体何時なのだろうか。

起きたたくても起きれないのは、絶対にあの行為のせいだ。アリシアは思った。

初めての時より痛みは無かったが、その分下半身の奥で圧迫感を感じ、苦しさが増した気がする。

——ヤダって言ったのに。

アリシアは何だかムカムカとした気分になって、掛け布団の内側に顔を埋めた。それから一時間程経過した後、漸くベッドから起き上がったアリシアは、若干の警戒を持ってベッドルームからリビングルームを覗き見た。

——あれ？

ヒソカの気配は無い。

「手紙？」

リビングルームにある、テーブルの上の置き手紙が目に入る。

その紙には、『良いコでお留守番してるんだよ♥』と書かれてあった。

——いないのね。

いつものように背後から脅かしてくる様子もなく、アリシアは愁眉を開いた。

「あー！」

窓越しではなく、海を直接目の前で見たい。唐突にそんなことを思った。

けれど、『良いコでお留守番』との置き手紙が気になる。

でも、外には絶対出ちゃ駄目って書いてないし……。

暫くひとりで葛藤しつつも、やっぱり海を見に行こうと思ひ立つ。そうと決めれば、先ずは身体を洗い流したい。アリシアは慌てるようにしてバスルームへと入った。

着替えの服は、部屋を出る前にヒソカが何着か用意していた内の一つを選び、側にあつた新しいフード付きのマントも忘れずに羽織った。

「……………」

支度も済ませ、大事な本を持って部屋を出る。向かうは近くの港だ。

風につた海の匂いを頼りに、観光客らしき人々や商人らと行き交いながら、アリシアは港を目指した。

——あれは船だわ！

到着した港には、係留している漁船や、沖に出入りするいくつもの貨物船等があつた。灯台の向こうへと飛んで行く数羽のカモメを目で追えば、海からの風がアリシアを優しく撫でる。

美しい景色を見つめて想像するのは、クロロに貰つた小説の中盤、主人公ベルが海を見つめながら、故郷の島国に思いを馳せるシーンだ。

森に戻るのをやめたアリシアには、故郷を思い出して涙するベルの心情が、わかるよ

うでわからない。

ベルには故郷に待っている肉親がいるが、アリシアのいた森にはもう、誰も待つてはいないからだ。

——母様が生きていれば、森に帰りたいたいと思うのかしら？

そんな事を思いながら港沿いを歩いていると、通りすがりに黒いローブ姿の老婆が声をかけてきた。

「お嬢ちゃん」

アリシアは、足までの長さのあるフードマントを全身を覆うように着ているので、女の区別は一見してつきにくい。だが、見知らぬ老婆はアリシアを直ぐに『お嬢ちゃん』だと気付いたらしく、反射的に振り向いたアリシアに笑みを見せた。

「わたし？」

「そう、アンタじゃよ。お嬢ちゃん」

「何かしら？」

「もうすぐ、お嬢ちゃんの行く道を照らしてくれる、明るい光が現れるよ」

「明るい、光？」

「眩しい光もあるけれどね、足を掴もうとする闇の手にも気を付けなくちゃいけないよ」
突然何なのだ。意味がわからずに訊き返したアリシアに老婆は、『いずれ訪れるその

時まで』と答えると、それ以上は何も語らずに柔かな顔をして去って行ってしまった。

——光？

老婆の後ろ姿から海の方向へと視線を戻したアリシアは、老婆に告げられた謎の言葉に頭の中を支配されながらも、再び美しい景色へと目を奪われる。

「あなた、あつちに行つたわ！」

老婆が去って行つた方向へ、中年の男女が呆けて徘徊する祖母を追いかける姿があつたが、アリシアはそれに気付くことはなかつた。

某所——。

華やかな場所から外れた酒場に入ったヒソカは、店内奥のカウンター席に座っていた男の隣の席に腰を下ろした。

「彼と同じもので♥」

目の前に現れたバーテンダーに、男が飲むグラスを指差してヒソカは注文する。

「お前なら、必ず来ると思っていた」

グラスに入った、ウイスキーのロックを一口飲んだ男の口元には、薄く笑みがある。

そんな男を横目にし、力のない歪んだ微笑を口の辺りに浮かべるヒソカは、静かに言葉を返した。

「フフ……
◆？」

さあ、話を聞こうじゃないか、——クロロ◆？」

隻眼とのカイコウ

少年は、左の眼に熱い痛みを感じながら、埃や土臭いコンクリートの地面にうつ伏せの状態で見を覚ました。

——身体中が痛い。

それは、右腕と肋骨の何本かが折れているからだった。

「お、お姉ちゃん……っ」

裸でうつ伏せに倒れている姉のもとへと這いながら向かえば、全身に熱い痛みが走る。

「お姉ちゃん……！」

気絶しているのか、顔が反対方向に向いているせいでよくわからない。必死で這つて、這つて、這つて。呼んでも反応の無い姉に向かって、少年は左腕を伸ばした。

やっとの思いで姉の腕を掴めば、どくりと自分の心臓が震える程に、人の肌の冷たさを感じた。

「お、……お姉ちゃん！」

まさか、嘘だ。恐ろしさに痛みを忘れた少年が、慌てて擦り傷だらけの姉を抱き起す。

「うわあああああ!!!」

少年は泣き叫んだ。

右眼は無残にくり抜かれ、光の無い左眼が虚ろに開かれたまま、姉は既に死んでいたのだ。

廃墟の中で少年の悲痛な叫びが響き渡る。その右眼には溢れる涙、左眼には血の涙。少年の左眼もまた、くり抜かれた空洞があった。

アリシアは、今日もホテルの部屋を抜け出して港に来ていた。

高い場所から広い水平線を眺めるのも悪くないが、部屋に籠るのは退屈だった。近くの堤防に腰を下ろし、被っていたフードを下ろせば、穏やかな海風に髪がなびいた。

——気持ちいい。

風の気持ち良さに目を閉じたその時である。突然、何者かの熱い視線がアリシアに突き刺さった。

——誰？

アリシアはそれを感じ取ると、その場から立ち上がって辺りを見回し、自分に視線を送った相手を探した。

「気のせいかしら……？」

何とも言えない視線だったが、今はそれが無い。もしかしたら気のせいなのかもしれないと、下ろしたフードを再び被ってホテルに戻ろうとした。すると――。

前方から野太い声で雄叫びをあげるが如く、『待つてくれ』と現れた人物が一人。息を切らしながらアリシアの目の前に立つのは、およそ2mもあるうかという、雲をつくような体格の良い大男であった。

いつから切っていないのか、目まで隠れる程のもじやもじやしとした癖毛に、顔の大部分を覆う髭。例えるならば、森のくまさんだ。

「あ、あ、あの……」

深く被っているフードのせいでよく見えない。

アリシアはフードを下ろし、空を見上げるように男を見た。

「おおおお！」

間近でアリシアを見た男は、興奮気味に声を上げると、自らの顔をギリギリまで近付ける。

アリシアはそんな大男に圧倒されて思わず顔を強張らせると、隠すように下ろした

フードをまた被った。

「わ！ すまない！」

恐がらせてしまった。男は慌ててアリシアから離れた。

「そ、その、やっと見つけて……俺のミューズを」

「みゆ、みゆうず？ ……って、何？」

二人の間に妙な沈黙が流れる。

それを先に破ったのは、目の前の大男だった。

「まあ、そのつまり、ミューズとは芸術の女神の事で………ってああああもう!!」

男は若干の恥ずかしさを紛らわせるようにして、頭を掻きむしった。

「単刀直入に言う。頼みがあるんだ。俺の作品のモデルになってほしい！」

「モデル……?」

アリシアは自分の知る情報を頼りに、頭の中で『モデル』というものが何をするのかを想像した。

「勿論報酬金は出す！ 前払いだ！」

笑顔が苦手ののだろうか。必死に作り笑いをする男を見上げつつ、アリシアは警戒を解かない。

「あの……、わたし、戻らなきゃ。部屋に——」

「あ！ 待ってくれ！」

横を通り抜けようとしたアリシアの肩を、男は咄嗟に掴んだ。

「俺は怪しくない！ 見た目はこんなだが、信じてくれ！ これでも一応、名の知れたフィギュア作家なんだ！」

「ふい、ぎゅあ？」

聞き慣れない言葉に振り向けば、男は『あ！』と焦りの声を上げ、アリシアの肩から慌てて手を離れた。

「と、とにかく、一度騙されたと思って——」

「え？」

「いやいやいや！ 言葉の綾だ今のは。頼む！ お嬢さん、どうしてもあんたにモデルになつてほしいんだ」

男は地面に正座をすると、額を地に付けて伏せた。つまり、土下座の形である。

顔は伏せていて窺い知れないが、その声はとても真剣で、どこか哀しげに感じられた。

「ねえ、顔を上げて。額が汚れてしまうわ」

「駄目だ！ 受けてくれるまで上げられん！」

どうしたら良いのか。自分に土下座をしてまで頼む男を、このまま放つて置いて、ホテルに逃げ帰るべきだろうか。アリシアは困り果てた。

「……わ、わかったわ。だから顔を上げて」

「本当か!？」

男は待つてましたと大喜びで顔を上げると、急いで立ち上がる。

「善は急げ、だ。少し歩くが、俺の家について来てくれ」

半分押し切られながら、アリシアは仕方なく男に付いて行くしかなかった。

「着いたぞ」

暫く歩いて着いた先は、街から離れた静かな場所だった。周りに家は無く、男が住むには狭いのではないかと思われるくらいの、こじんまりとした青い三角屋根の平屋が一軒。その横を、小さな川が流れている。

「ここつて……」

まるで、森に住んでいたあの家のようだった。

「どうした？」

家を見つめながら呆けていたアリシアに、男が声をかける。

「……似ていたの、母様と住んでいたお家に」

招かれて中へと入れば、閉め切った部屋が埃臭い。

「す、すまない! ここには誰も入れた事が無いから散らかしっぱなしなんだ!」

男は恥ずかしそうに慌てながら、長い事閉ざしていた窓を開け回った。

脱ぎ散らかった衣服や物が散乱したりリビングらしき部屋を通り、アリシアは導かれるようにして、奥の部屋へと足を踏み入れる。

——わあ。

リビングらしき部屋とは打って変わってこの部屋は、やけに綺麗に整頓されている様子だった。埃一つない大きなガラスケースの中には、何体もの大小様々な種類の人形が飾られている。

「この部屋は作業室だ。アトリエと言った方がいいか」

アリシアがガラスケースの人形を見てみると、少し遅れて男が入って来た。アトリエだと教えてくれたこの部屋の隅をよく見れば、作業台が確かにある。

「この人形は、あなたが作ったの？」

ガラスケースの中を指差したアリシアに、『まあ、そうだな』と自信有り気に男は答えた。

「凄い！ どれもみんな生きてるみたいだわ」

それぞれに大きさや顔形は違えど、どれもがまるで生きているかのようで、「森のくま」みたいな男からは想像もつかない程の、繊細さと美しさが人形にはあった。

「さっき言った"フィギュア"ってのが、この人形達の事だ」

「これがふいぎゅあ……」

物珍しそうにガラスケースの人形を見つめるアリシアの姿に、男は話を切り出した。

「そのフィギュアのモデルを、今回あんに頼んだんだ」

「わたしがふいぎゆあになるの？」

「ああ」

アリシアは再び『凄い』と声を上げて、目を輝かせた。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺の名はハール」

「わたしはアリシア」

「良い名だな」

「母様が好きだった、お話の中の女の子の名前と一緒になのよ」

「へえ。その『かあさま』とは、今は一緒に？」

「いいえ。母様は死んでしまったから、わたしひとり」

アリシアは至って普通に答えた。

ハールは気まずそうに、そしてどこか残念に思いながら『そうか』と呟いた。

「ちよと見てもらいたい物がある、少し待っててくれ」

するとハールは、アリシアを部屋に残して何かを取りに行った。

「これなんだが……」

少しして、ハールが布に包んだ二つの何かを抱えながら持つて戻った。

「それは何?」

「絵だ」

ハールが持ってきたのは、20号と40号サイズの古めかしい絵画であった。ハールは包んだ布を外し、そつと壁に立てかける。

「え……」

アリシアは、その絵画にどきりとした。

絵画には、ネイビーブルーの髪色と星空の瞳をした若い女性の人物画と、同じくその女性と同じ髪色と瞳をした、四人の男女が草原に立つ風景画が油彩で描かれていた。

「これは、俺の……先祖さんが描いたものだ」

「この人達って……」

フードを下ろし、絵画を熱心に見つめる。描かれた人物達は、アリシアと同じ髪色と瞳を持っていた。

「魅夢の一族だ」

刺繍の入った白と黒の民族衣装を身に纏う彼等は、男女共に髪の長さが背中まであり、凜としてとても美しかった。

——わたしと同じ髪色に、瞳の色。

アリシアは何だか不思議な感覚を持って絵画を見た。

「死んだ婆さんから昔聞いた言い伝えでは、道に迷って怪我したご先祖さんが偶然、魅夢の一族に出会って助けられたっていう話があつて……」

そこで交流を持ち、絵描きであつたご先祖さんが描いて残したのが、この二点だとハールは言う。

「見てもらったのは、あんたが魅夢の一族だとわかつたからだ。耳の裏に、星型の入れ墨があるか？」

「……れ？」

アリシアが左耳の裏を見せれば、『それだ！ 確かに“純血者”だ』とハールは、やや興奮気味に声を上げた。

「なんでわかつたの？」

「なんとなく——そう、なんとなく港に足が向いて、海の風に当たつていたんだ。するとアリシア、あんたを見つけた」

長い前髪で隠れて見えない目が、アリシアを見つめる。

ハールは、アリシアが港でフードを下ろした様子を、たまたま目にしていたのだ。ハールという男が押し切つてでもアリシアをモデルにと頼んだのには、理由があつた。

「俺には——」

ハールは右側部分の前髪を、自分の手で上げて見せる。

「俺には、魅夢の一族の血が流れている。だからわかったのかもかもしれない」

その右目には、アリシアと同じ星空の瞳があった。

「正確に言うくと、ご先祖さんが魅夢の一族の女との間に子をもうけ、その子孫が俺なんだ。まあ、先祖返りとも言うんだらうな」

魅夢の一族の特徴である瞳だけを受け継いで生まれたというハールは、二点の内の肖像画の絵に視線を移しながら、アリシアを見つけた時の不思議な感覚を思い出していた。

あの瞬間、ハールの体の細胞や遺伝子の一部が、まるで電流が流れるように反応したのだ。『ここにいた』と。

「この瞳のせいで随分嫌な目にもあったが、あんたに会えて何だか少し心が晴れた気がしたんだ。それに、作品の最後を飾るに相応しい」

「最後」とは、どういう事なのか。

「最後って？」

アリシアは、前髪を下ろして再び目が隠れてしまったハールへと、質問をした。

「今回の作品でフィギュア作家を引退するのさ。来る前に言った『名の知れたフィギュア作家』って事で、一生遊んで暮らせるくらい金は稼いじまった。最後にオリジナルのフィギュアを作って売って、その金で旅行にでも出るかな」

こんなに素敵ないぎゆあを作れるのに……。

初めて見たアリシアでも、ハールの作成したフィギュアの素晴らしさには目を奪われていたのだ。まだ作品を知ったばかりだということなのに、もうそれが終わってしまうのだと思うと、何だか少し残念ではある。

「俺は良いミューズに出会えたものだな」

久しぶりに作品に対する意欲が湧いたハールの声は、若干浮き立っているようだった。

「あつ！ 茶を出してない！」

「いいえ、お茶ならわたしが——」

「いや、アリシア、あんたはモデルだ！ 今すぐ用意するから待つてくれ。その後直ぐに始めるから！」

前髪と髭に覆われた顔でくしゃりと笑っているであろうハールは、アリシアを再び部屋に残し、今度はキッチンへと走って行った。

少しすると、キッチンから色々音がしてきた。家事が苦手なのだろうか。何かの割れた音もした。

「いやあ、こういうのは慣れていなくてな」

真新しい花柄のティーカップに紅茶を淹れてきたハールは、『新しい客用のカップだ

から安心してくれ』と言ってアリシアにそれを出し、ついでに座る椅子もリビングから持ってきた。

「ありがとう」

アリシアは用意された椅子に腰を掛け、紅茶の入ったティーカップに口を付けて一口飲んだ。

「あー」

突然また、ハールが大声を出した。

「そのままだ！ そのまま、少し動かないでいてくれ！」
急にどうしたというのか。

ハールは、慌てるようにして作業台近くに置いてあつたスケッチブックを手に取り、椅子に座るアリシアを色々な角度から素描し始めたのだ。

アリシアは戸惑つたが、これは『空気を読んで』素直にハールに従つた。

「カップを少し口から離して、そうだ。目はこつちを向いてくれ。自然に、いや、笑わなくて良い」

何やら真剣な様子である。前髪が邪魔ではないのか、と心の中で思いながら数十分。そろそろ同じ体勢が疲れてきた。

「ねえ、ハール？ わたし疲れてしまつたわ」

「——よし、良いだろう。ああ、ありがとう。もう動いて良いぞ」

どうやら終わつたらしい。やっと許しを得たアリシアは、固まってしまいそうになっていた自分の身体をほぐすように、腕を頭上へと伸ばした。

「さつきまでのは何をしていたの？」

「あなたを描いていたんだ。これを元にしてフィギュアを1体作り上げる」

ハールが見せてくれたスケッチブックには、先程アリシアがしていた“ポーズ”の素描があつた。

「あなた絵も上手なのね！　色は塗らないの？」

「自慢じゃないが、こういう色の記憶力つてのが俺は良くてな。もうすっかりと記憶したよ」

そう言つてハールは、作業台近くの引き出しから小切手を一枚切り取ると、ペンで日付けと数字を書いてアリシアに渡した。

「俺の予想では1体が結構な高値になると踏んでる。それによってプラス分も払うし、後2体用のモデルも頼みたい。約束の報酬金なんだが、今日の分はとりあえずこの金額を受け取つてくれ」

渡された小切手を不思議そうに見つめるアリシアは、『これはお金？』と訊いた。

「お金というよりは引換券だな。銀行に行つてお金と交換だ。大金だと小切手の方が持

ち運びに便利だし、盗まれる危険も減る。俺は銀行に預けてあるし、今すぐ用意出来る金は20万ジエニーくらいしかない」

「ぎんこう？」

「まさか、銀行がわからないなんて……嘘だろ？」

そのまさか、だった。

お金の存在を最近知ったばかりのアリシアにとって、銀行など知る筈も無い。

「なら勿論口座は無いよな……。金も無くてあんた、一体今までどうやって生きてきたんだ？」

「えっと、ね——」

アリシアはハールに、「全て」、ではなく、ヒソカとの衝撃的な出会いの一部始終や、メルサと幻影旅団の話は省きながら、今までの事をさらりと流すように伝えた。

「じゃあそいつが全部世話してくれてたって？」

「ええ」

随分と気前の良い『友人』とやらは、本当に安心な人物であるのか。

今の俺自身が言えるような立場じゃないが……。

掻い摘んだ説明を聴き終えたハールは、何やら複雑な思いを感じていた。

「……よし、じゃあ、銀行に行って口座を作ろう」

「え?」

「あんたの『友人』は何から何まで世話してくれていたようだが、肝心な事は教えちゃあ
いないんだな。人間生きていくには色々知らなきゃならないし、特に金は必要だぞ」

今から行こうと言うハールに連れられ、アリシアは街の中にある銀行へと、急遽向か
う事になった。

「ふいぎゆあ、作らなくても良いの?」

前を歩くハールを見上げながら訊けば、『それよりも気になって手につかない』と返さ
れた。

「わたし、ハールの妹なの?」

それから銀行を出て、歩きながらのこの質問。

それは、銀行で口座を作る手続きでの事。口座を作る上で欠かせないものが、素性の
よくわからないアリシアには無い。その為、咄嗟にハールがアリシアを兄妹だと偽った
のである。

「そういう設定のおかげで口座作れただろ? これから金を引き出すには、自分の指の
指紋と暗証番号を入力するんだ。覚えたか?」

「勿論よ。"しもんにんしよう"は人差し指でしょ? 番号は1——」

「っだあああ!! それは口に出して言ったら駄目だ! 誰にも言うな、自分だけ覚えて

りやあ良いんだ」

「友達にも?」

「当たり前だ!」

ハールのお陰で、アリシアはなんとか口座を開く事が出来た。ついでに、1体分の報酬金である3500万ジェニーも、ハールの預金から振り込んでくれた。

「着いたな」

「今日はありがとう」

アリシアの滞在するホテルの入り口前で、2人は向き合った。

「いや、お礼を言うのは俺の方だ。あんたのお陰で良い作品を作れそうだからな。また

明日もよろしく頼む」

「ええ。また明日ね」

家路へと戻るハールの背中に手を振る。

——あの人は、メルサと違うといいなあ。

そのような期待を持ちながら明日を楽しみにして、アリシアはホテルの中へと戻って行った。

ホシゾラに願いを

「おばあちゃん、ミムノイチゾクはもう存在しないの？」

ある日の姉弟二人は、暖炉の前のソファに座る祖母の前に腰を下ろして質問をした。

「どうだろうねえ。あたしら"混ざり者"でさえ、こうやつて人里離れた場所で静かに暮らしているんだ、"純血者"はもつともつと生き辛い筈だからね」

「私、"純血者"に会ってみたいな」

先日、13歳の誕生日を迎えたばかりの姉が言った。

「会ってどうするんだい？」

「ただ会ってみたいのよ」

5歳下の弟は、あぐらをかきながら生意気そうに『それだけ？』と姉に言葉を投げた。「だって、私たちだってほんの少しだけけど、ミムノイチゾクの血が流れているのよ？」

お話を絵じゃなくて、実際に会ってみたいじゃない。私の中のほんの少しの血が、

「純血者"を求めてるんだわ。きつと」

祖母はその言葉に目を細め、姉の頬を優しく撫でた。

「あたしもね、小さい頃にひいおばあさんに聞かされて『会いたい』と思ったもんさ。お前達は特にそう思うのかもしれないねえ」

姉の右目と弟の両目の星空の瞳が、祖母からお互いへと移った。

「僕はそれでもないよ」

弟はそう返しながら、姉から先に目を逸らした。

「そんな事言つて、勝手に入っちゃいけない部屋に、一人でこつそりどご先祖様の絵を見に行つてるのを知らないと思つたの？」

「え、ちよつ……!」

顔を恥ずかしそうに赤くさせた弟をからかう様に、姉の顔はとても楽し気だった。

「留守なのかしら?」

約束通り、次の日の朝にハールの家を訪ねたアリシアは、玄関のドアの前で暫く佇んでいた。

何故なら、いくら中に呼びかけても呼び鈴を押しても、ハールは一向に出てこないからだ。

——どうしよう。

このまま出て来るまで待つべきか、ホテルに戻るかを考えた結果。アリシアはドアノブに手をかけてみる。『もしかしたら開くかも』と。

——開いてる。

試しに開けようとしたドアは、すんなりと開いた。どうやらハールは鍵を閉めていなかったらしい。

「お邪魔します……」

リビングの電気は点いておらず、中は窓も締め切られていて薄暗く、未だ埃臭い。

「ハール、いないの？」

一体何処へと思いながら、奥の部屋の扉に目を向けた。もしかしたらアトリエにいるのかもしれない。

「ハール？」

扉を開けて顔を覗かせると、室の隅で作業をするハールの姿が目に入った。

「ふいぎゆあを作っているの？」

側まで近寄って声をかけるも、ハールからの応答は無い。

「ハール？」

ハールは真剣にフィギュアを作っている様子で、アリシアの声にも反応しないくらい、一心不乱であった。

——どうしよう？

手持ち無沙汰で暫くその部屋をうろうろとして待っていたが、いくら待ってもハールはアリシアに気付きもしない。

そうだ——。

不意に何かを思い立ったアリシアは、作業室から隣のリビングへと戻った。

「こんなんじや息も出来ないわよね」

物が散乱したリビングを見回し、アリシアはハールに声をかけた。

「ハール、わたしここを片付けているから」

ハールからの返事は無い。だが返事を待たずして、アリシアは早速行動に移した。

それから数時間後である。

ひと段落ついたハールは手を休めると、椅子から立ち上がった。

——久しぶりに集中したなあ。

その場で背伸びをして『何か飲むか』とリビングに入った瞬間、ハールは驚いた。

「な、何で……？」

リビングが綺麗に片付けられていたのだ。

随分と使っていないなかったテーブルには埃一つ無く、足の踏み場もなかった筈の床もピカピカだ。

誰が掃除を……？

一体誰がと思つていると、近くで規則正しい寝息が聞こえてきた。

「あー！」

アリシアがひとり、ソファにもたれるようにして眠つてゐるではないか。ハールはまでも驚いて、焦りながら『しまった』と声を上げた。

フィギュア作成に集中するあまり、アリシアに頼んでいた事をすっかりと忘れてしまつていたのである。

——もしかして、片付けたのはアリシアか？

この様子を察し、ハールはアリシアを起こそうとした——が。

「はー！」

ソファにもたれて眠るアリシアの姿にピンと閃いたハールは、慌てて作業部屋に戻りスケッチブックを持って来た。それは、その姿を素描する為である。

「……よし、描けた」

描き終えると同時に、我に返つたハールは『何やってんだ』と、自分に対して呆れた溜息を漏らした。

「おい、……アリシア、起きてくれ」

軽く肩を揺さぶると、アリシアはゆっくりと目を覚まし、小さな欠伸を漏らす。

「ハール……? ふいぎゆあは、終わったの?」

「ひと段落は、な。ところで、この部屋を片付けてくれたんだな」

「ええ。時間も沢山あったし、片付けながら待つていようつて思つたの。ちゃんとあなたには伝えたわ、『片付けているから』つて」

アリシアは隅を指差し、「捨てて良いかわからない紙や本はあつち」とも伝えた。

確かにその隅には、書類やら本類が積み重ねられている。

「今日は本当にすまない! 自分で頼んでおきながら……」

昔から集中すると周りが見えなくなる癖を説明し、ハールは頭を下げて謝つた。
「気にしてないわ。それにお掃除するの嫌いじゃないの。だから顔を上げて」

顔を上げ、長い前髪の隙間からアリシアを見れば、とても楽しそう微笑む表情が目に入った——と、同時。窓の外が暗い事ハールは気付いた。

「もう日が暮れたのか!」

「そうみたい」

「ああ、しまった。まさかこんな時間になるとは……」

ハールは一応、予定を立てていたらしい。だが、時刻は夜の8時を過ぎている。

「腹は減つていないか? 飯を食いに行こう。何も食べてないだろう? 何か食べたいものあるか?」

「うーん……」

「そうだった。食欲は殆ど無いんだったな」

昔祖母から聞いていた話を思い出した。

——なら、林檎か何かの果物でも。

アリシアが食べれそうな物を考えていると、その当人がポツリと一言。

「"ばーがー"を食べたいわ」

アリシアが食べ物で頭に思い浮かべるのは、木の実や野菜と果物以外に、ゴンとキルアと一緒に食べたハンバーガーだ。

ハールは少し驚いていた。まさか"バーガー"を食べたいと言うなんて、思いもよらなかつたからである。

「ハンバーガー？ そんなもんが食べたいのか？」

「わたし、"ばーがー"がいい」

それから30分後。アリシアとハールの2人は、街に唯一あるバーガーショップへと向かい、お望み通りの"バーガー"を食べた。

その店からの帰り道、アリシアの足は自然と港へと進んでいた。

「戻らなくて良いのか？ 世話をしてくれている『友人』が待っているんだろ？」

送るついでだったハールは、夜空を見ながら前を歩くアリシアに付いて、後ろから声

をかけた。

「平気よ。それにまだ戻って来ないと思うの」

アリシアは足を止め、星空を見つめて言った。

「そうか」

同じく足を止めたハールも、夜空の星へと目を向けた。

——星なんて、久しく見てなかったなあ。

今宵の星は一段と美しく、光輝いて見える。

「ひとりでさみしくはないか？」

唐突なハールの質問に、アリシアは『さみしい？』と訊き返した。

「魅夢の一族の“純血者”は、恐らくあんただけ。ひとりではさみしいだろ？」

「さみしい、ってよくわからない」

少し唸るように考えてから、アリシアは答えた。

「でも最近ね、ひとりでいるのは退屈だったりするの。これが『さみしい』って事？」

アリシアには、『さみしい』という概念が、やや欠落しているようだった。

「上手く説明出来ないが、誰かに会いたいか、そういう僅かなものが『さみしい』になるんじゃないだろうか」

「あ、だったら多分あるわ」

「これが正解かは知らんぞ」

「ねえハール」

星からハールへと真つ直ぐに目を向けて、アリシアは言う。

「ハールは、さみしいと思つた事、ある？」

星空と同じ瞳同士が見つめ合った。

二人が黙つた静かな夜の港には、波の音だけ。

「俺は……」

ハールはアリシアを見つめたまま、一体自分は何を言おうとしているのかと戸惑つていた。

「ガキの頃は、そう思つた事もあつたさ。今はひとりが長過ぎて、あんたに訊かれるまで忘れていたよ」

ハールは少しの間を空けて、懐かしい感情思ひ出すように返した。

「さつきハールが言つたみたいに、『誰かに会いたい』つて、さみしく思つた事があつたのね」

「まあな——さて、散歩はお終いだ。そろそろ帰つた方が良いで。夜は冷えるからな」
「ええ」

ホテルに到着するまでの短い間、ハールから言われた『今日のモデル代は小切手じゃ

なく、振り込んでおいたから』に、アリシアは首を傾げた。

「わたし今日、モデルをしたかしら？」

「あ、ああ、それは……」

ハールは気まずそうに、そして申し訳なさそうにして、アリシアがソファで寝ている姿を素描した事を弁解したのだった。

翌日もアリシアはハールの家を訪ねていた。昨日と同じく、フィギュア作成に夢中だったハールは迎えには出ず、またも鍵は開いたままである。

締め切られた窓を開け、風通しを良くしたアリシアは、アトリエを覗いてハールの様子を伺った。

——聴こえないわよね。

没頭するハールの背中を見つめ、そう思いながらも一応、『こっちにわたしいるから』と声をかけておくと、アリシアはリビングのソファに座って本を読みながら待った。

「……また夢中になっていた。本当にすまない」

5時間経った頃、アトリエの入り口から申し訳なさそうにハールが現れた。

「1体目が完成したんだ」

「え！ 見せて！」

「こちらにも本には夢中だったが、自分がモデルになったフィギュアが完成したと聴い

て、アリシアは急いでアトリエの中へと入った。

「これが、わたし?」

30 cm程の大きさのフィギュアは、初日に素描された、紅茶を飲んでいる姿の自分である。

それは全てにおいて繊細な作りで再現されており、まるで、もう一人の小さな自分のようだった。

「こうやって椅子に座らせれば、ほら」

「まあ! 一緒だわ!」

アンティーク風の小さなチェアに座らされたフィギュアを見つめながら、嬉しそうにアリシアは微笑んだ。

——あら?

「ねえハール」

何故か今になって気付いた事がある。

ハールが作ったガラスケースの中のフィギュアや、この完成された自分の姿のフィギュアには、オーラが纏っているではないか。

物にオーラを込めるのは、「纏てん」という技法だ。以前アリシアは、ヒソカからそう教わっていたのを思い出していた。

「あなたのフィギュアにオーラが見えるのだけど、念が使えるの？」

「一応は、な……って、まさかあんた、見えるのか？」

「ええ。一応そうみたい」

「そうか……」

修行次第では誰でも使える念能力。しかし、使いこなすには難しい。

凝を使いこなせるという事は、それなりに修行を積んでいるのかと、ハールはアリシアを意外に思っていた。

「初めから使えてるのもあったの。だから教わった技も『覚えが早い』って褒められたわ」

「へえ。念の師匠ってか？」

「ししよう？ うーん、親切なお友達のヒソカよ」

「ヒソカ？」

その名前には、どこか聞き覚えがあった。

「あんなの世話をしてくれている気前の良い『友人』とヒソカって奴は、もしかして同一人物か？」

「ええ」

名前までは知らなかった『友人』の名を初めて知ったハールは、どこかで聞いた事の

ある名前だと思いながらも、それが誰だったかまでは思い出せなかった。

「しかし、意外だった。あんたが念を使えるとは……」

「わたし、弱そう？」

アリシアは眉尻を下げながら、真横にいるハールに迫る勢いだった。

「そ、そりゃあ見た目はか弱そうだしな……」

「どうやったら弱く見られないかしら？」

「別に見た目なんて気にするな。一見普通の少女だと思って侮ったら、実は見た目とは違って最強に強く、痛い目に合った……という事もあるぞ」

ハールは、頭の中で思い出を振り返りながら言った。

「そういう人に会ったことあるの？」

「昔な。ちよつとばかり腕つぶしが強くて調子にノツてた頃、腕試しのつもりでハンター試験つてのを受けに行つたんだ」

周りを蹴散らしながら難なく最終試験まで進んだ時、最後の試験官として現れたのが、その人物だった。

「ただのガキかと思つて舐めてたんだが、違つてね」

「どうなったの？」

「勿論コテンパンにやられたさ」

数少ない受験生が脱落していく中、ハールは一人、意地でも諦めはしなかった。

「強かったよ、何もかも。でも、俺はラッキーな事に試験に合格した。『顔はイケてないけど、その諦めの無さは評価してあげる』ってよ。その後も色々あって世話になってない、今の自分があるのは、その人のおかげでもある」

「素敵な出会いだったのね」

「それはどうだか……。話は少しズレちまったが、見た目だけの強さにこだわらなくていい。あんたに強いて言うなら、基礎体力を磨くとか、スタミナをつけるとかだな」

——きそたいりよく？ すたみな？

頭の上で、知らない言葉にハテナを浮かべつつ、アリシアは『何をするの？』と質問を投げた。

「歩いたり走ったり、泳いだりだとか色々ある」

「それをすれば、つけるのね。わたし、きそたいりよくつきたい。どうしたら良いかしら？」

「走り慣れてないなら、まずは散歩程度から始めれば良い。この周辺は道も悪くないし、なんなら俺が付いて教える」

「ハールが教えてくれるの？」

「"っいで"だ。俺も体が鈍ってきてるからな」

こうしてアリシアは、フィギュアのモデルから突如として思い立った基礎体力をつける為、ハールと共に周辺を散歩するところから始めるのだった。

混ざり者はモトメル

「少し休憩するか」

昼下がり。小さな川のほとりの周辺を走るアリシアとハールは、風通りの良いその場に足を止めた。

基礎体力をつけたいと、ハールに付いてアリシアが始めた行動から、ひと月半。

「走るのにだいぶ息切れしなくなったな。顔色も前より良いぞ」

「本当？」

ハールに付き添われて初めて自分のお金で買った、ピンクの線が縦に入った黒のトレーニングウェアを身に付けたアリシアは、被っていたウェアのフードを下ろしながら、横に立つハールを見上げた。

日影にばかりいたせいとか、病的な程であったアリシアの白い肌は、以前よりも少しだけ、健康的に明るくなったように見える。

「ああ。星の光に当たるのも良いが、時には陽にも当たらなくちやな」

「わたし、自分でも『きそたいりよく』ついたと思うわ。ハールのお陰ね」

「俺は良いコースを教えるついでに自分の運動不足を解消しただけだ。それに、付かないきや良い作品を見逃す」

現に本日、ハールはアリシアに付いてのトレーニング中、またも突然『ストップ!』と声を出し、その場で素描し始めていたのだった。

「これで3体目に取りかかれる。ありがとう、アリシア」

「わたしこそ。ありがとう、ハール」

「なあ、アリシア……」

微笑んでいるアリシアから目を離し、川の方へと顔を向けるハールは、『この先、どうするんだ?』と、いつもよりやや低めのトーンで質問を投げた。

「これから先?」

「ああ」

「うーん……」

唸りながら考えるアリシアは、数秒黙ってから質問に答えた。

「実はね、やってみたい事があるの」

「やってみたい事?」

「ベルがやった事を、わたしもやってみたい」

「ベル?」

アリシアはハールに、大事にしている本の内容と、その中に登場する主人公、ベルの事について簡単に説明した。

「例えばどんな事がやりたいたんだ？」

「色々あるのよ。後、ベルが思ってる気持ちも知りたいの。ハールには故郷がある？」

「故郷か……」

故郷と訊かれ、ハールが懐かしくも思い浮かべた場所は、家族と過ごした静かな湖畔の家だった。

楽しい思い出も、悲し過ぎる思い出もあったその地には、もう誰も待つてはおらず、帰りたくても帰れない。

「故郷というべき所はもう無い。今の俺には、あの家に帰るしかないさ」

ハールの視線の方向には、川を挟んだ向こう側の木々の間から、青い三角屋根が見えていた。

「あ、ねえハール。これからもまた、ハールのお家に行つても良いかしら？」

顔をアリシアへと向けたハールは、心なしか戸惑っているようだった。

「た、頼んだ仕事は終わったんだぞ？ もうあの家に来る必要も無い」

「終わったらハールに会いに行つては駄目なの？」

「駄目というか……普通は報酬を渡してこれでさよならをする。仕事を続けるならまた

依頼となるが、俺はもう引退するし、会う理由も無くなるだろ」

「でもわたしは、これからもあなたに会いたいわ」

これは会う理由にはならないのかと、アリシアは尚続ける。

「あなたもあの家も、なんだかとても懐かしい気持ちになって、わたし好きなの」

異性としての『好き』ではないのに、ハールの心臓は激しく高鳴った。

「ねえハール——」

その時、『迂闊に心を許しちやイケないんだよ◆?』という言葉が、アリシアの頭の中で響いた。

何も知らないアリシアは騙されやすいと、メルサの一件でヒソカが言った忠告だった。

——ハールは、メルサとは違う。

アリシアは、脳裏に浮かんだメルサの顔をかき消すように首を振った。

「わたしとお友達になって！」

「と、友達？」

「そう。わたし、あなたとお友達になりたいの」

まさかの『友達になりたい』という発言に、ハールは困惑しながらアリシアから顔を逸らし、そのまま背を向けた。

「普通、俺のようなのは友達になんてなりたいたとは思わない」

「わたしはなりたいわ。ハールとお友達に」

静かな沈黙が2人の間を流れた時、アリシアは、背を向けるハールの前に回り込んで立った。

俯き加減のハールは、髪や髭で隠れていて表情がうかがい知れない。

「俺の事を何も知らないだろ。あんたを騙す為に、全てが嘘だったとしたらどうする？」
それはまるで拒絶するような、ぞつとする程の重々しい声だった。

——え？

あの日の出来事とメルサが通り、アリシアの心は酷く揺れる。けれどアリシアは再び首を左右に振り、その場で大きく息を吸い込むと、ハールを見上げながら言った。

「お願いハール！ わたしの目線に合わせて！」

不思議な感覚に襲われる。まるでテレビの電源が落とされるように、ハールの思考は一度止まった。時間にすれば数十秒。気付けばアリシアの言われた通り、ハールは目線を合わせる為にしゃがんでいた。

「今何を——」

目の前には、何もかも見透かしそうな大きな星空の瞳が、ハールを真っ直ぐに捉えている。アリシアの細くて長い指先がハールの前髪に触れれば、ハールの身体全体がびく

りと跳ねた。

「ハールはわたしをタベない。騙したりしないわ」

鼻先程の距離まで顔を近付けられ、指先で右側の前髪をかき分けられたハールは、金縛りにでもあつてしまったかのように動けない。

これが「混ざり者」とは違う、「純血者」……。

絵画に描かれた以上の妖しい美しさがアリシアにはあると、ハールは哀しくも改めてそれを実感する。

「あなたの事、全部知らない。でもほら、わたしと同じ目のあなたは、嘘なんかついてないわ」

ハールの右目を見つめて、アリシアは柔らかく微笑んだ。

——眩しい。

「混ざり者」のハールには、「純血者」^{アリシア}が酷く眩しかった。けれどその光はとても温かく、とても心地が良い。いつまでも、いつまでも許される限りに、それを感じていたと思った。

——だが、俺にそれが許される筈がない。

アリシアから『友達になりたい』と告げられたハールの心情は、嬉しくもあり、悲しくもあった。

「何で、何でなんだ？ どうして……」

どうしてアリシアを見つけてしまったのだろうか。ハールは堪らず、心の言葉を口に出してしまっていた。

偶然にも見つけなければ、温かい光を知らなくて済んだのに。葛藤などしなくても良いのに。しかしアリシアは、それを自分への問いだと勘違いし、答えたのである。

「わたしと同じミムノイチゾクの血があなたにも流れてるって知ってから、なんだか不思議なの。これはきつと、わたしの中のミムノイチゾクの血が、あなたに会いたいわって言っているのね」

アリシアからそれを聞いた瞬間だった。ハールの頭の中で懐かしくも遠い過去が、稲妻が走ったように今とリンクしたのである。

『私の中のほんの少しの血が、"純血者"を求めてるんだわ。きつと』

優しく美しかった姉の顔が、声が、言葉が、ハールの中で鮮明に蘇った。

「ハール？ どうしたの？」

ハールの右目から、ゆっくりと一粒の涙が流れ落ちていく。

「何で泣いているの？」

「……姉ちゃんっ、同じだった！ 同じ……っ」

「ねえ、ちゃん？ 同じ？」

ハールはその場で崩れるように地面に頭をつけると、嗚咽を漏らして泣き出してしまったのである。

「どうしてしまったのハール？ わたし、あなたに何か酷い事を言ってしまったの？
ねえ？」

熊のような大男がおいおいと泣いてしまった事に動揺したアリシアは、あたふたと慌てふためきながらなんとかしなければと、上から覆い被さりながらハールを抱き締め、みる事にした。

「ごめんなさいハール。泣かないで、お願い」

その後30分程、ハールは泣き続けた。

幸いにも周りには通る人が現れず、泣き喚く大男に覆い被さった少女の囃は、人目を引かずに終わった。

「もう平気なの？」

泣き終えたハールと共に家に戻ったアリシアは、項垂れてソファに座るハールの隣に腰を下ろした。

「ああ、突然すまなかった。大の男が、ガキみたいに喚き散らして」

「わたし、やっぱりあなたに何か酷い事を言ってしまったんじゃない？」

「いや、そうじゃない。そうじゃないんだ」

ハールは目を伏せ、心の奥に仕舞い込んでいた辛い記憶を、頭の中で巡らせた。

憎い男の顔。簡単に心を許し、騙されているとも知らない少年時代の自身。無残に殺された家族。右眼をえぐり取られた姉。

まるでカメラのシャッターを切るように変わる記憶は、今はもう無い、ハールの左眼の傷を疼かせる。

「……俺が信じたばかりに、みんな死んじまった……」

左眼辺りを手で押さえ、震える口でハールが言った。

「……知れば嫌になる」

少年だったハールは、「混ざり者」でも価値がある事をちゃんと理解出来ていなかった。どんなに恐ろしい話を聞かされていても、『いつかは、信じられる人に必ず出会える』そう希望を持っていたからだ。

人を避け、逃げて隠れる生活に嫌気がさしていたある日。ハールはある男と出会った。

「最初は恐かった。だけどそいつは、聞かされていたような恐ろしい人じゃなかった」

優しく穏やかだった男からは知らない世界を学び、色々な知識を得た。家族の誰にも知られずに会っていた秘密の友人。しかし、自分が「混ざり者」である事を知れば、どうなるか。

「二年経ち、完全にそいつを信じきっていた俺は、コンタクトで隠していた瞳の片方だけを晒して、自分が“混ざり者”である事を告げたんだけ」

知った男の態度は、少しも変わらなかつた。魅夢ミムノイチゾクの一族の存在を知らなかつた男は、『どんな存在であろうと関係ない』そう言つて笑つて見せたのである。

『君と私は友人じゃないか』

この男こそ、いつか出会えると信じていた人だ。きつとそうだ。ハールは心の底から喜んだ。希望を持つていて良かった、信じて良かったと。

「俺は簡単にほだされ、浅はかで愚かだつた」

男は金に困つていた。莫大な借金を抱え、自殺を凶ろうと森に入った時、偶然にもハールと出会つたのである。

何度か死のうと試み、葛藤しながら一年。『これで最後だ』と告げる前に、ハールが“混ざり者”であると男は知つた。

「そいつは借金取りに俺を、家族を売りやがつたんだ……!」

いつものように男に会う為に抜け出していたハールが家に戻ると、家の中は酷く荒らされておき、壁には血飛沫が。転がる父親の首と体。立て半分に分かれた祖母の屍体があつた。

ハールは半狂乱に陥つた。何が起こつた。姉は何処だ、一体誰がやつたのだ。

すると背後から何者かに殴られ、気付けば知らぬ倉庫の中で椅子に縛り付けられていた。

恐怖を感じて震えていると、真ん中で裸にされて倒れている姉の姿が目に入る。

『悪く思うなよ。騙されたお前が悪い。』混ざり者』でも、お前には価値があるんだ』
借金取りはケタケタと笑って、ハールの左眼を強引にくり抜いたのである。

「恐怖が通り過ぎ、怒りと悲しみ、痛みと憎しみが俺の身体から溢れ出そうになった時……俺は全員を殺していた」

先祖返りの能力ちからに目覚めたハールは、自分の腕や身体の一部が折れてしまった事もわからぬ程、家族を殺した借金取り達を殴り殺すと、そのまま事切れるように気を失った。暫くして全身の痛みを目を覚まし、這いずりながら姉の側に寄れば、右眼をくり抜かれた冷たい屍体に変わり果ててしまっていた。

「怒りに狂った俺は、売った奴を死に物狂いで探し出し、遂に居場所を突き止めた」
貧しい建物で暮らしていた男は、出来たばかりの家族と幸せそうに笑っていた。身重の妻の腹を摩りながら、ハールの事など忘れてしまったかのように。

「俺は許せなかった。幸せそうに笑うあいつを……」

怒りは収まらない。ハールは建物に進入し、ソファで一人くつろぐ男の背後を取った。『覚えているか?』と問えば、男は驚きとも恐怖とも言えない声を上げた。

『し、仕方なかったんだ！ どうしても金が必要だったんだよ！』

不思議な瞳を持つハールと、魅夢の一族という知らない一族の事が妙に気になった男は、町外れにある古い図書館で、その存在の価値を知ったのだ。

『……純血じゃなくても価値があった。お前を売ったお陰で、私は死なずに済んだ。しかもお前だけじゃない。ラッキーだったよ。借金全額返済どころか、金も手に入った』
男の身勝手な言い訳に、更に悲しみと怒りが湧いてくる。男に対しても、信じた自分に対してもだ。

泣いて許しを請う男を見つめれば、無残に殺されてしまった家族の姿と重なって見える。

「女の叫び声で我に返った時、俺の両手は血に塗れていた」

床に何度も激しく叩きつけられた男の顔は、もはや原型を留めてなどいない。身体は真逆を向き、ピクリともしていなかった。身重の女は腰を抜かしながら、まだ少年であるハールを見上げて震えている。

『ひと、いゝろ……しー』

声にならない声で女が言う——と同時。女は腹を押さえながら痛みを苦しみ始めた。

ハールはその場から逃げるように走り去ると、一度も後ろを振り返りはしなかった。それからその身重の女がどうなったのかは、未だ不明なままである。

「あの男が許せなかった。俺を騙した憎いあいつを殺してしまえば、消えると思ったんだ。悲しみが、怒りが……！」

だが、消えはしなかった。

殺したところで、全てが元に戻るわけではない。

あの男が騙さなければ——いや、あの時、「混ざり者」であると明かさなければ、こんな事にはなっていないかかったのではないか。

「俺が殺したんだ。家族を、あいつも。俺の手は血に塗れてる。今も、この先もずっと消えはしない」

語り終えたハールの両手は、僅かに震えている。黙って聞いていたアリシアはハールの隣に移動すると、その背中を優しく摩った。

「理解されるつもりで話をしたんじゃない。いつその事、俺を嫌ってくれればと思ったからだ」

嫌だろう？ 恐ろしいだろうか？ こんな奴と友達になど、なりたいとは思わない筈だ。ハールはアリシアから顔を背けて言った。

ハールは恐れている。裏切られる事も、人に心開く事も。本当は信じたい相手も一人はいた。けれど、過去がそれを許さないのだ。

「……あなたを嫌いになんてならない」

ハールに寄り添ったアリシアは、弾ける赤い風船を初めて使ったあの日の事や、メルサに騙されたあの夜の衝撃を振り返っていた。

ハールよりずっとずっと、わたしが……。

食べられるのを恐れ、身を守る為にあの能力を使った自分自身こそ、血に塗れている。「わたしの方こそ血に濡れているの。恐ろしい能力で、何人も何人も……」

嫌われてしまうのは、わたし。と言ったアリシアの言葉に対し、ハールはとても驚いた様子だった。

「わたしの方が、恐いでしょ？ 嫌いになった？」

アリシアが、悲しそうな顔で微笑んだと同時に言った。

「嫌いになんてならない……!」

大きな体で覆い被さるように、ハールはアリシアを抱き締める。このまま距離を置いて、そしてもう二度と会わぬようにするつもりだった。今までそうしてきたように、ひとり生きていくべきだった。

しかし、ハールは出来なかった。何故か。人は信じられない。けれどアリシアは信じていた。何故だ。

「混ざり者」だからか、アリシアが「純血者」であるからか。

「本当に？」

「本当に！」

アリシアは、ハールの大きな背中に腕を回しながら、『わたし、ハールとお友達になりたい』と告げる。

「後悔……するぞ」

「こうかい？」

「後になって、『やっぱり友達になんてならなきや良かった』ってなる事だ」

「何で？ わたし、ならないわ」

「そうか……」

少しだけ二人の間に沈黙が流れると、アリシアは再度ハールに告げた。

「お友達になりたいの、なつてくれる？」

ハールは何度も頷きながら、アリシアを抱き締めるその腕を更に強めた。

「今日から、——俺とあんたは友達だ」

パドキア共和国デントラ地区、ククルーマウンテンの、某邸宅。とある一室にて、肥満体の若い男がひとり。

パソコンのモニター画面に表示された、専用ネットオークションサイトを食い入るように見つめながら、男はニタニタと笑みを浮かべていた。

「Wooden最後の作品だつて？」

" W o d e n " とは、フィギュア界限でも名の知れた有名作家である。

W o d e n の作る洗練されたフィギュアは多くのコレクター達を魅了し、1体に億の値がつけられる程だ。

——定期的にアクセスしてて良かった！

今回久しぶりに出品されたW o d e n の作品は、フィギュア作家として最後の作品だ
そうで、ファンとしてはなんとも残念ではある。

——欲しい！

W o d e n の作品はアニメやゲームのキャラクターが従来だったが、最後の作品は珍しくオリジナルが3体。

サンプル画像を見れば、同じ少女の違うポーズが三種類。画像で見ても可愛さが伝わってくる。

「グフウ！ か、可愛いイイイイ……!!」

これは間違いなくプレミアがつく作品だ。是が非でも手に入れたい男は、既にいくつか入札されている今の最高入札額に目をやると、余裕の笑みで躊躇いもせず、3体共にそれ以上の額で入札した。

「絶対に全て手に入れてやるからな！」

W o d e n の最後の作品を手に入れる為、世界中のコレクター達との熱き競り合^パいが
今、始まったのであ^トった。

カノジヨは諦めない

モデルを引き受けたフィギュア3体が、遂に完成を迎えた。

専用サイトにて作品を出品するや否や、入札の嵐に凄まじい競り合いが開始されると、3体の作品の値はそれぞれ億まで上昇し、最終的に一人の人物によって全ての作品が落札された。

「もう、本当に『ふいぎゆあ』は作らないの?」

「作らない。最後だと決めたからな、この3体で。最後にして最高傑作だ!」

ハールは何かの荷が下りたらしい。今までとは違う、スツキリとした穏やかな笑みを浮かべている。決断に後悔は無い。そんな面持ちだった。

小さな分身であるかのような3体を見つめながら、アリスアは心の中で願った。落札をした人が、どうかハールの作品を永遠に大事にしてくれる人でありませうように、と。

ゾルディック家の次男であるミルクィゾルディックは、コレクションにしている様々

なフィギュアやゲームに囲まれた薄暗い自室でひとり、競り落としたフィギュアを嬉々と見つめては、満足そうに肥満体による荒い呼吸を漏らしていた。

「可愛い……なあ」

溜息代わりに出たのは、コフー音。

目の前に並べて出した、3体のフィギュア達の完成度の高さよ。瞳を輝かせたミルキが一人の世界に浸っていると、突然、ぎいと音を立てて部屋のドアが開かれた。

「オイ！ 誰が勝手にドア開けて良いって——」

些細な幸せの時を邪魔するなど、吠えかかったミルキは啞然として、たらりと額から冷や汗を流した。

「あ、ノックするの忘れてた。ゴメンゴメン」

「い、イル兄……！ 帰って来てたんだ……」

「うん、今さつきね。ただいま」

ドアを開けて入って来たのは、ミルキの兄。ゾルディック家の長男、イルミだ。

ミルキは少し引き攣らせた笑顔で『おかえりなさい』と言うと、デスクの上に並べていたフィギュアをさり気なく箱に仕舞おうとした。

「また、買ったんだね」

ミルキが背後に隠そうとするのを止めるように、イルミはフィギュアを指す。

「う、うん。凄く欲しかったファイギュアなんだ」

イルミにはさり気なくが通用しない。ミルキは再度、デスクの上にファイギュアを並べる。

「ミルは相変わらず人形が好きだなあ」

ファイギュアの目線に合わせて背を屈めたイルミが、3体のファイギュアをそれぞれ見つめながら言えば、黒くて長い艶のある髪がさらりと肩から流れる。

「そういえばイル兄、なんか用があるんじゃないの？」

いつもは興味なんて示してこなかったのに。ファイギュアを見つめる兄の姿を珍しく思いながら、ミルキは問いかける。

「用が無きゃ、——弟の部屋に入っちゃ行けないかい？」

するとイルミは、ファイギュアから目を離すことなく、数秒置いてから呟き気味に返した。

「……………んなわけないじゃん！ 全然良いよ！ 良いに決まってるし、いつでもウエルカムだって！」

暑くもないのに。ミルキの汗は、ぽとり、またぽとりと床に流れ落ちた。

「良かった。お前にも駄目だって言われたら、兄ちゃん泣いちゃうよ……………絶対」

「え——！」

イルミは顔だけをミルクに向けて、『冗談だよ』と言つて笑つた。けれどその表情に変化は無く、抑揚も無い。

「は、ははは！ イル兄の冗談、面白いやあ」

「ところでさあ——」

唐突に話を切り替えたイルミは、もう一度フィギュアを指差した。

「この人形、良く出来てるね。オーラが纏つてるし」

こんなに連続してフィギュアを話題に出すなんて。ミルクに電流が走つた。

今まで三男である弟ばかりを構つている兄が、用も無いのにわざわざ部屋を訪ねたり、しかも、一番興味から確実に外れているフィギュアを褒めるなどという事が、未だかつてあつただろうか。

「で……、でで、でしよ？ W o d e n の最後にして最高の作品なんだよ！ めちゃくちゃ繊細で、リアルで、他のフィギュアとは比べ物にならない位でさあ、ほら見てこの色！」

三男が生まれるまで一身に受けた兄の愛を思い出しつつ、ミルクは興奮気味に語り始める。

そんなミルクの想いとは裏腹に、イルミは別の事を思い出そうとしていた。

——誰かに、似てるんだよなあ。

誰だ、誰に似ている。そうだ、誰かさんの玩具に似てるんだ。まるで、喉に刺さった骨が取れたような気分である。

何となくミルキの部屋に入ってからずっと気になっていたフィギュアの姿は、何時ぞや何処ぞの奇術師の部屋で見た少女に、とても良く似ているのだ。

——瞳の色は違うけれど、ね。

あのコの目には、確か綺麗な星があつた。少女と目と目を合わせた時の事をなんとなく思い出しながら、イルミは自分のケータイを取り出した。

「ねえミル——、この人形さ、撮っても良い？」

時をほぼ同じくして。アリシアがハールと出会って、早ひと月過ぎ去った日の事である。

「いつその事、ホテルから出たらどうだ？」

ソファでくつろいでいたハールは、毎日のように会いに来ていたアリシアに、ある提案を出してみた。

「この家に来れば良い。毎日来る手間が省けるぞ」

「勝手に出て……良いのかしら？」

ヒソカの事が頭を過る。

うーんと唸る、そんなアリシアの様子を見て、ハールは『しまった』と思った。

「そ、それもそうだな。すまん。あんたの気持ちとか……色々考えてなかった。さっきのは聞かなかった事にしてくれ」

気持ちが先走り、自分でも思い切った提案をしてしまったと恥じて、ハールはひとり反省をする。

一方アリシアは、迷いながら葛藤を繰り返していた。外出している現状、今更ではあるが、『お留守番してるんだよ』という、ヒソカの書き置きを守り、ホテルから出ないでいるべきだろうか。

でも……。

大事な本を胸に抱きしめて、アリシアは一呼吸置いてから告げた。

「わたし、やってみみたい事があるの」

「え?」

「ハールに言ったでしょ?」

そういえば以前、『色々やりたい事がある』とアリシアは言っていた。それを思い出しながら、ハールが問う。

「何がやりたいんだ?」

「ハンター試験」

思わず声が裏返ってしまう程、ハールは驚きの声を上げた。

「じよ、冗談、だよな？」

「じようだん？」

「本気なのか？ やりたい事が、ハンター試験って」

「ベルもハンター試験を受けたの。だから、わたしもハンター試験受けたい」

「他にもやりたい事あるだろ。よりによって、何でハンター試験……」

アリシアは本を抱き、『他にもあるのよ。でも最初はハンター試験』と微笑んで見せる。

「すっごく難しいのよね。ベルも試験会場に辿り着くのに、大変な思いしていたから」

「そうだ。年によって試験内容も試験官も変わるし、死ぬ奴も出るくらい、危ない」

ハンター試験は難関。それを一応は理解しているアリシアであるが、頑なにどうしても受けたいと言う。

「アリシア。自分が魅夢ミムノイチソクの一族だって事、自覚しているのか？」

「わたしを、た、タベちやう人がいるんでしょ？」

そんなに怯えて恐がるなら止めておくと、泣きそうに震えるアリシアを、ハールは反対した。

静かに暮らしていけば、表に出過ぎなければ、穏やかに生きていける。そう良い聞かせるように。

「……それでも、それでもわたしは受けたいのよ」

俯き加減で呟きながら、アリシアは諦めない。

「どうしてそこまで……。自分から危ない橋を渡る事はないだろ」

「……あのね、ベルはね、最初は普通の女の子なの。でも、いつか帰るその日まで、知らない世界で生きていく為に強くなるうって、頑張るの」

境遇は全く違えど、森から出た世界は、知らない世界。アリシアは読む度に、自分とベルを少し重ねていたのだ。

「ベルの気持ちもわからないところがたくさんあって、それを知りたい、知れたらなうって思うようになって……」

——この本は、わたしの知らない事を、知りたい事を教えてくれる。

「上手く伝えるのが難しいわ。こういうのが、『あこがれ』って言うのかしら？」

本の表紙を優しく撫で、『だからどんなに恐ろしくても』アリシアは続ける。

「わたし、ハンター試験を受けたい」

その瞳には、確かに堅い決意が表れている。

アリシアの強い思いを知り、ハールは深く考えた。

本心は、この家で静かに暮らし、穏やかな日々を生きていつてほしかった。だが、アリシアはきつとその選択を選ばない。

押し込めた気持ちを抑え切れなくなって、希望に溢れた外に飛び出して行ってしまうだろう。

たとえそれが、残酷で恐ろしい世界だとしても。

「……ハンター試験は必ず受かるってわけじゃない。それは、わかるよな？」

本からハールへと目を移したアリシアは、答えるように頷く。

「魅夢の一族だと知られちゃいけない。どんな奴が試験を受けに来てるかわからないからだ」

いざという時の事を想像して気持ちが滅入るアリシアだが、頭を左右に振って、挫けた心を立て直した。

「わたし、頑張りたい。頑張ってみたい。ハールは、反対する？」

「……友として、正直に言おう」

ハールは姿勢を正し、少しだけ間を置いて答える。

「ハンター試験なんて、本当は受けて欲しくない。ただ俺は、あんたの思いは尊重してやりたい」

だから今回は、今回だけは応援する。それを伝えれば、アリシアは明るい笑顔を浮かべて『ありがとうハール』と、嬉しそうに伝えた。

「……よし、試験の申し込みをしないと」

「ネットで申請しようと、ホールに助けられながら申し込みを完了させ、数分も経たない内に、審査委員会から受理の返信と試験会場の案内の通知が返ってきた。

案内には、第288期ハンター試験、日時は2001年1月7日。試験地はビースカフマロ。とだけ記されている。

「ビースカフマロ……？」

「ホール、知ってるの？」

「いや、何処だったか……」

審査員からの試験地案内通知は、非常に大雑把。志望者は、僅かな情報だけで試験会場に向かわなければならなかった。

ハンター試験は受験者の数が多い。時間も人的余裕も無く、ふるいにかける為に様々なルートの幾つか関門が設けられ、身体能力や柔軟性などが試される。

これが大半の受験者がたどり着けずに脱落するという、予備試験だ。

「駄目だ。うろ覚えで場所がわからない」

知っていれば会場まで案内出来るかもしれないが……と、やや悔しそうなホールに、アリシアはこう言った。『自分で見つけて行くんでしょう？』と。

「それはそうだが……な」

暫し考えに耽ける。すると、ホールは閃くように何かを思いついた。

「ダローガの森だ！」

「だろーが？」

「そうだ。ダローガの森へ行けば、導いてくれるかもしれないぞ」

「ハールは言う。ダローガの森とは、ナビゲーターのいる森であると。ナビゲーターは、毎年変わる会場の場所を把握し、志望者を案内する役目をもった者達だそうだ。」

「俺の時に案内してくれたのは、ダローガの森の主だった」

「じゃあ、そこへ行けば会場の場所を教えてくれるの？」

「いや、ナビゲーターも志望者達を審査する側だからな。ナビゲーターに認められなきゃ、案内はしてくれないんだ」

普通はそこに行き着くまでもが大変らしく、大半の志望者が脱落するという。

「ダローガの森近くまでは教える事が出来るんだが、そこから先は一人で進め。ハンター試験会場に行けるかは、結局自分次第なんだからな」

「自分……しだい……」

「やめるなら今のうちだぞ？」

「や、やめない！ 決めたの！」

意気込む様子のアリシアは、ソファから勢い良く立ち上がると、フードを深く被って、飛び出すように玄関のドアを開けた。

「わたし、ホテルを出て来るから！」

ハールの家からホテルへと一旦戻ったアリシアは、メモ用紙に何か伝言を書き残すと、ヒソカから貰った洋服等をそのままにして、振り返りもせずにホテルを後にした。

「出て来たわ！」

「え、大丈夫だったのか？」

勝手に出て良いのかと、悩んでいるようだったアリシアがホテルから出たと聞いて、ハールは一応にも心配する。

「だってハンター試験受けたいんだもの」

勝手にホテルを出た事を、ヒソカがなんと言うか少し不安ではあったが、今のアリシアの頭の中を占めてしまっているのは、ハンター試験である。

「ねえハール。さっき『この家に来れば良い』って言ってたの、本当？」

「あれは……だなあ」

「このお家にも、良いの？ わたしも住んで良いの？」

「あんたさえ良けりゃあ……」

「じゃあわたし、ハールのお家で暮らしても良いのね！」

このまま話は流れたと思っていたのに。

自分から提案しておいて、アリシアから『良いのか』と逆にいざ問われると、ハール

は頷きつつも、何だか無性にむず痒い気持ちになるのだった。

「あ、改めて、よろしく……頼む」

「ふふ。ハールってば、よろしくばっかりね」

悪夢の森へヨウコソ

ダローガの森は、サヘルタ合衆国の北西に存在する。

ハールと共に飛行船に乗船したアリシアは、ダローガの森から比較的近い空港に降りると、とある街に入った。

この街に入る理由は、ダローガの森へと通じる道が唯一繋がっているからである。

遊びに来たわけではないので、長居は無用。という事で、街で一番高い建物を目標に進み、その建物の裏通りを真っ直ぐ西へ。暫く歩いた先の右側に赤い看板が見えれば、店と店の間にある、普通の人ならまず通らないであろう薄暗い細い路地裏を通る。

その路地裏を抜けて左に曲がり、途中、三つに分かれた道の真ん中を奥まで進むと、人が一人通れるくらいの小さな門が現れた。

「扉が開いてるな」

普段は閉められているらしい門扉は、何故か意味有り気に開かれている。

「付き添えるのは此処まで。後は、あんた一人で行くんだ」

ハールが指差す方向、開かれた門から外へと目を向ければ、遠くの方に小高い山が見えた。その山を囲む様に生い茂る森林が、ダローガの森であると言う。

「この先はどうなるかわからない。認められなけりや、森の入り口に戻され、認められたら反対側の出口から出られる」

森の方向を見たまま黙っているアリシアの肩を、ハールは優しく叩く。頑張れと、敢えて言葉には出さなかった。

アリシアがハールの家で住むと決まって二週間。

その間特別何をするでもなく、周辺を共に走ったり、買い物をしたり、家のソファに座ってお互い好きな本に没頭したり。短くも濃い日々を過ごしたハールの心は、とても満ち足りていた。

「家への帰り道は、わかるか？」

「ええ。ちゃんと覚えたわ。それに、迷ったらこれを使うから」

アリシアは、羽織るマントの下に着ていた、薄紅色のロリータワンピースのポケットの中から、白いうさ耳型のケータイを取り出して見せた。

ハールから『持っておいたほうが良い』と、連れて行かれた街の専門ショップ内で一目惚れし、初購入したのである。

薄型で持ちやすく、機能には通常の電話やメール以外に、テレビ視聴とナビ機能まで

搭載されているケータイだ。

ハールは、なんとか電話機能ぐらいは使える程度にと考えていたが、意外にもアリシアはケータイの扱いを覚えるのが早く、一日で使いこなせるようになっていた。

「アリシア」

目線を、同じくらしいの高さに合わせるように屈んだハールと、アリシアは向き合った。
「気をつけてな」

「うん」

ニカツと笑いかけるハールに『いつてきます』と微笑み返したアリシアは、フードを深く被り直すと、ダローガの森へと向かう道に前進する。

門をくぐれば、天空闘技場でのヒソカの部屋から初めて勝手に出た時のとは、少し違った高揚感。

——ベルも、こんな気持ちだったの？

ハンター試験を受ける前の心境とは、こういうものなのだろうか。……だとしたら、ベルと同じ気持ちになれて嬉しい。見えない先は恐ろしいけれど。アリシアは、決して後ろを振り返らずに、前だけを向いて歩いて行く。

「森には、あんたを苦しめる恐怖トラウマが待っている……」

後ろ姿を見送るハールは、誰にも聴こえない声でぼつりと言った。

——本当に良かったんだよな、これで。

今更悔いたところで何になるう。少女はもう、前に進んでしまっているのだ。

してやれる事は、今は無い。ナビゲーターに認められようが認められまいが、試験に合格しようが落ちようが、ただ待つのみ。

——無事であつてくれ。

アリシアの姿が完全に見えなくなると、ほぼ同時だった。小さな門扉が、自然に閉じられていったのは。

小高い山を目指すように、ダローガの森へと続く道を歩くアリシアの足取りは、今のところ軽い。

——このまま行けば良いのよね？

道沿いを進めば、鬱蒼と茂る森が見えてきた。近くに立て札などは無く、どこが入り口なのかもわからない。アリシアは森に入る手前で立ち止まり、はるかに高い木々を見上げた。

「空まで届きそうだわ……」

住んでいたあの森とは全然違う。そのような事を思いながら、一歩ずつ足を踏み入れる。

外はとても明るいのに、中に入ればあつという間に暗くなった。それは、びっしり葉

を茂らせている高い木々が、陽の光をさえぎっているからだろう。

森の中に人はおらず、まともな道らしき道も無い。木々を縫って暫く歩いたアリシアは、その場に一度足を止めた。夜には慣れているので、段々と深まる暗闇に視界がはつきりとしてくる。

「誰かいるの?」

声は反響し、森中に響いた。

声を発したのは、何となく、誰かに見られている気配がしたからだ。

森の主さん……?」

アリシアは辺りをぐるりと見回し、少し息を飲んで耳を澄ませる。すると突然、どこからか微かな歌声が聴こえてきた。

「誰かが、歌っているわ」

……しかも女性だ。透明感のある、耳に心地良い声だ。一体何を歌っているのか知りたくなったアリシアは導かれるように、その歌声のする方へと走った。

おいでや　おいで　いますぐおいで

ここは　こわい　もりのなか

おいでや　おいで　いますぐに

歌声は、アリシアを繰り返して呼んでいる。

——どこまで行けば良いの？

止まらない歌声に呼ばれて着いた先には、一際細く、一際短い一本の木が、開けた場所の真ん中に、ぽつんと生えていた。

「この木から？」

近付いて耳を傾ければ、アリシアの背の半分位の高さしかない木から歌声が聴こえてくる。

ねむれや　ねむれ　いますぐに

ねむれや　ねむれ　いますぐに

ねむれや　ねむれ　いますぐに

まるで母が歌う子守唄のように、その歌声はアリシアを眠りへと誘っていく。ゆつくり、ゆつくりと。

完全に瞼が閉じられた時、アリシアは小さな木の前で倒れた。

『……………』

誰かの声が。

『いめ………さいい』

何だか懐かしい声に目を開ければ、近くで誰かの泣き声が耳に入ってきた。

——誰が泣いているの？

上半身を起こし、フードを下ろして、泣き声のする方へと顔を向ける。広がる闇の中、一筋のスポットライトが当てられた先には、ベッドに横たわる女性と幼い子供の姿があった。

目を凝らしながら母娘らしきその二人を見れば、アリシアは驚愕して口もとを両手で押さえた。

あれは、母様……わたし？

なんとそこにいたのは、命の消えかかった母と、幼い自分であったのだ。

『ごめんなさい、アリシア。あなたをひとり残してしまう私を許して……』

『かあさま、わたしをおいていくの？ いやよ。わたし、かあさまと一緒にいる。いつてもしまわないで』

美しかった母の頬はこけ、痩せ細り、身体を自分で起き上がらせる力も、もう残ってはいない。そんな母に縋り付くように抱きつきながら、幼いアリシアは泣いて駄々をこねている。

『アリシア。私がいなくなっても、この森はあなたを隠してくれる。守ってくれるの』
『いやー！ いやよー！』

『……よくお聞き。私達はミムノイチゾク。この森から出ると喰われてしまうの。だから、森の中から出てはイケナイ……！』

切り替わる場面演出のように暗転し、暗闇に戻る。すると今度は、背後からすすり泣く声。振り向けば、スポットライトが当てられている先にまた幼い自分の姿があった。

母様は、とても軽かった……。

冷たくなった母を一生懸命にベッドから降ろし、爪が剥がれてしまいそうになるくらい深く土を掘り、泣きじやくりながら母を埋め、朝を迎えるまでその土の上で眠る。——という悲しい光景を再び違う視点から見ていたアリシアの胸は、今にも張り裂けそうになる程に痛んだ。

——死んでしまったモノを土に埋めるといふ事を知ったのは、いつだった？

「かあさま。うさぎさん、なんでうごかないの？」

ある日、生い茂る草の上で倒れて動かない兎を見つけたアリシアに、母はこう答えた。

「兎さんはね、『死』んでしまったのよ」

冷たくなった兎を両手ですくうように抱えた母は、木の根元の隣に穴を掘って、その

兎を埋めて見せた。

「生きているものにはいつか終わりが来る。これは『死』というの」「し？ わたしにも、かあさまにもやってくる？」

「ええ。『死』はみんな同じにやって来る。私にも、勿論あなたにも」

これが、アリシアが知った初めての『死』だった。

意識をふと、スポットライトを浴びた幼い自分へと戻せば、土の上で眠って閉じている筈であった目が、何故か此方をじっと見ているではないか。

——え？

恐ろしい程に開かれた目と見つめ合えば、また暗転。再び暗い空間に戻り、アリシアはその場からゆっくりと立ち上った。

——これは、何なの？

ダローガの森の主は一向に現れず、代わりに現れたのは、アリシアの悲しい記憶だった。

『はじめまして、わたしはアリシア！』

自分の声に肩をぶくりと震わせ、咄嗟に振り向いた。次は何処からなのか、と。聴こえてきた方向を頼りにアリシアは走る、走る。

『へへっ、そうだよ。今からダンス。楽しい楽しいパーティーさ』

『まあ！ 素敵！』

アリシアは足を止めた。それは突然目の前に現れた、スポットライトを浴びた自分の姿に驚いたからだ。

まさか……。

目を輝かせて男達に付いて行く。囲んで歩く怪しげな男達の企みなど、気付きもしない。

森を出てしまったばかりの、外の世界を何も知らない自分だった。

「ダメよ！ ついて行ったらダメなの！」

声は届かない。アリシアはなんとか自分を止めたいと、必死になって追いかけた。

「な、なんで……？！」

追付けるぐらいの速さで走っているのに、何故か追い付けない。

とうとうアリシア自分は、男に背後から口を塞がれ、他の男達に身体を仰向けにされて、強引に地面へと押さえつけられてしまった。

『助けてかあさまあ!!』

「やめて——！」

無理矢理脚を割って入ろうとする男達を止めるように、アリシアは手を伸ばした。

……が、すり抜けて触れやしない。

「ダメー！ アリシアー！」

思わず、自分の名前を叫んでいた。

『グウっ、……フウっ！』

『ギツ……、ヤアツ!!』

苦しように顔を歪める男達は、少しずつ地面から身体を浮かせ、その身を限界まで膨らませていく。

『ぐぐうっ！……ガアアア！』

パアンと音を立てて弾け破れ、細かく飛沫となった血が、地面に倒れている自分に降り注がれる様子を、アリシアは呆然と見つめるしか出来なかった。

「やめて……」

再度暗転。今度は、あのメルサが目の前に姿を現した。

『メルサ、そっちは真つ暗よ』

『大丈夫、月が照らしてくれるから』

確かこれが、メルサと会った最後の夜であったと思ひ出す。アリシアは酷く動揺して心臓の鼓動を速めると、己の胸元をぎゅっと強く押さえた。

メルサ……。

周りの草影から三人の柄の悪い男達が現れ、メルサの側に寄って怯える自分の姿。冷

たい表情を向け、『目障りなのよ』と突き飛ばす、メルサ。

——やめて。

見たくない。見せないで。アリシアは目を瞑り、両耳を塞いだ。

『——やだ、タベラレタクナイ!!』

塞いだ筈の耳から自分の叫ぶ声が響き、反動して目を開ければ、再びあの光景が始まった。

「いや!!」

アリシアはその場から逃れるように走った。暗い闇の中をひたすらに走れば、段々と息が切れてくる。

「あつ………!」

何かに躓いて膝を付いたアリシアの前には、新たなスポットライトが当てられる。

『い、いたい………っ! や、めて………!』

『無理♥ だつて、止まんないから………♥』

太股を肘で開き、両膝裏に手を入れて持ち上げ、覆い被さる裸身のヒソカの下で顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らした自分と目が合った。

『恐い、痛い、痛い。クルシイ、やだ、母様、タスケテ………!』

此方に向けて伸ばす手を、アリシアは慌てて掴もうとしたが、またも暗転。

『アリシア、ねえ、アリシア』

茫然自失となったアリシアを呼ぶのは、赤いベッドの上でヒソカと愉しそうに絡み合う、もう一人のアリシア^{自分}だった。

「ど——」

——どうして。その姿にショックを受けたアリシアは、思わず絶句した。

今まで、自分の悲しい過去や辛くて恐い記憶が現れていたというのに、目の前の場面には全くもって覚えがないのだ。

「嫌！」

目を逸らし、この場から離れるアリシアを止めたのは、いやらしげに舌を出して微笑む自分である。

『今はコワイ、イタイ、クルシイ。でも、そのうちキモチヨクなるわ』

——ならない！

『こんなのはね、恐くないの』

アレも、コレも。そう言っただけで左右に指をさせば、初めて能力を使った時の血を浴びた自分と、メルサが用意した男達に押さえつけられている自分が現れ、そして闇にフェードアウト。

『勿論、ヒソカもね』

嫌な予感がした。アリシアは、もう一人の自分の足によって、顔を踏まれて悦んでい
るヒソカに目をやった。

「ヒソカはお友達よ！」

『トモダチ？ ……本当に？』

高笑いを一つ。踏み付けている力を強めれば、ヒソカは恍惚とした表情を浮かべ、長
い舌先でその足の親指をなぶりだした。

それに対して蔑んだ目を向けるもう一人のアリシアは、まるでボールを蹴るように、
ヒソカの顔面を思い切り蹴り上げたのである。

『痛かった、恐かった。でも、トモダチだから我慢した——ううん、してあげたのよ！』
悲痛な顔をしたアリシアを睨み付け、気が狂ったように声を枯らせて笑った。

「やめて！」

震えて苦しみ悶えるヒソカが、徐々に身体を膨らませながら浮いていく。

『やろうと思えばいつでも出来る。だから……、恐くないわ』

アリシアがこれ以上見たくない目を逸らそうとすれば、血塗れの自分と、また別の
自分が阻止する為に現れて、二人で片方ずつアリシアの腕を押さえ、目を閉じないよう
指で強引にこじ開けて見せた。

「いやあ！ やめて！」

逃げようともがけば、握り締めた掌に爪が食い込んだ。

「いやあああ!!」

膨れ上がるヒソカは、最後に目玉を飛び出させるまで膨れ切つて、そのまま醜く弾け割れた。

もう一人のアリシアは歪んだ笑いを頬に浮かべたまま、降り注ぐ血を浴びて空を仰いでいる。その光景に背筋を寒くさせたアリシアは二人に抵抗し、力の限りに振り解いて半ば半狂乱になつて逃げた。

「もう嫌! もう見たくない! もうやめて!」

永遠に続く闇の中を走れば、沢山の小さなモニターが周りに現れて、この森に入つてから見せられた悲しくて恐ろしい記憶が、次々に映し出されていく。

『——アリシア』

スポットライトが自分に当たれば、前を塞ぐようにして立つ、もう一人のアリシア。

「消えて! 今すぐに!」

『聞いてアリシア』

対峙した自分は、先ほどの笑みを全て消して言った。

『ミムノイチゾクはね、タべられてるんじゃないの——』

「消えて」

『——タベてるのよ』

ブラッドバルーン
"弾ける赤い風船"

微笑みながら言う、もう一人の自分と同時だった。オーラを放ったアリシアが、念能力を発動したのは。

自分が弾け割れる様を見つめながら、アリシアは涙をポロポロと流して膝から崩れ落ちた。

「う……、ううっ！」

涙はとめどなく溢れ、声を上げて泣き叫ぶ。

「………何で、何でこんなの見せるの？」

ダローガの森の主は、何故このような恐ろしいものを見せるのだろうか。アリシアのすすり泣く声だけが、虚しく響いていた。

『お前の運命の道を選べ』

闇を包むように、頭上から突然知らない男の声がした。

「だ、………誰？」

姿は見えない。

『二つの道がある。一つは光明。もう一つは暗黒。どちらかを選択し、お前の道を生き

『よ』

目の前に、分岐した二つの光る道が現れた。

「道……?」

『右を選べば、お前の森。左を選べば先の見えない闇。さあ、選べ』

——わたしの、……森?

右に目を向ければ、美しい母の姿があった。

「母様……?」

此方に優しい笑みを向け、母が手を振っている。

『アリシア、帰りましょう! 森へ。恐ろしくて悲しい事は全部お終い。誰もあなたを
タベたりしないわ』

「お、おしまい? 全部?」

『ええ、全部。さあ、アリシア!』

両手を広げる母の笑顔に、アリシアは堪らず駆け出した。

悲しくて、恐くて、痛い思いはもう嫌だ。森へ帰りたい。母と二人で静かに暮らした
い。

わたしは、わたしの森を……!

母親の胸に飛び込むまで、後もう少しという時だった。

『アリシア!』

左の先にハールの姿が目に入り、アリシアは足を止めた。

『俺と友達になつてくれて、本当にありがとう！』

「ハール……？」

アリシアを呼ぶ母の声が入らなくなるくらい、ハールの声はつきりと耳に流れた。

『たとえこの道があんたを苦しめても、たとえこの道が闇しかなくても、俺はあんたを救いたい。あんたを支える友でありたい。アリシア、俺はお前の——』

アリシアはハールから母親に目を移す。

『アリシア、この道はあなたを守ってくれる。さあ、いらつしやい！』

瞬間、母親との懐かしい日々の全てが、走馬灯のように頭の中を走つて行つた。

「母様。わたし——、母様を埋めたのよ。あの森には、もう、……誰もいない」

それを伝え終えたアリシアは、左の道に真つ直ぐ足を向かわせる。

この道はきつと、恐い、痛い、苦しい。でも、それでも……！

「ハール！」

逆光を浴びながら両手を広げるハールの胸にアリシアは飛び込んだ。

暗闇は一瞬にして明転し、何もかもが光に包まれる。

真つ白な空間の真ん中、低くて小さな木の根に横たわるアリシアのもとに、二人の男

女が現れた。やがて光は消え失せ、元の暗い森へと戻っていた。

「暗黒の道を選んだ……か」

真つ黒な髪色をした、長髪の男が言う。

「あんたが満足して選択させたんでしょ？ それに、道はこのコが自分で選んだのよ。気にしない気にしない。ていうかさあ、久しぶりに良い恐怖だったわね」

同じ髪色をした女の方は側でしゃがみ込み、『ごちそうさま』と囁きながら、フードから見えるアリシアの頬を指で優しく撫でる。

「魅夢ミムノイチゾクの一族など、此方の地では、とうに滅びたと思っていたがな」

「可哀想ね。あたし達と同じくらい」

「……フン。同じなものか。——おい、さっさと連れて行くぞ」

「はいはい。じゃあ行きましようかね、アリシアちゃん。予備試験合格、おめでとうございま〜す〜！」

二人の男女はアリシアを抱き抱えると、そのまま森の奥へと消えて行った。

ウチナル心、秘めて

あまりの眩さに目を開けたアリシアは、ベッドから慌てて飛び起きた。

——あれ？

そういえば、何故ベッドに寝ているのだろうか。周りに目をやれば、暖かい雰囲気のある木製の壁や家具。小さな花柄で統一されたインテリア。一見して、誰かの部屋らしい事はわかる。

——そうだわ。

アリシアは思い出した。ダローガの森にいた事を。

ベッドから出てもう一つ気付いたのは、いつものマントを身につけていないのと、大事な本やカードを入れている、白地にピンクのうさ耳リュックが無いという事だ。

「ないわ……」

部屋の中を探してみるも、それらしきものは無い。一体どこにあるのかと、この部屋のドアを開ける。

決して広くはないが、暖炉のあるリビングに出た。目覚めたりリビング同様、こちらも

木製の壁や家具で統一されていた。

「誰かいらないの?」

窓の外へ視線を向ける。外からの陽の光は無く、朝か夜かもわかりにくい。先程まで人が居たかのような気配はあるのに、誰の姿もない。

ふと、ソファの前のテーブルの上を見れば、綺麗に折りたたまれているマントとリュックが置かれていた。急いで中身を確認し、無くなつていない事に安堵したアリシアは、リュックを背負い、マントを身に纏う。

すると、足下にはらりと手紙が落ちた。

「手紙?」

手に取り、封を開けて見る。手紙には、こう書かれていた。

アリシアちゃんへ

ダローガの森は、あなたを歓迎します。

マントは洗って干しておきました。だからとっても良い匂いです。

読み終ったら、外に出てみてね。

手紙の『歓迎します』という事は、この家はダローガの森の主の家なのだろうか。マントも確かに花の良い匂いがする。

「外に……?」

アリシアは読み終えた手紙を閉じると、視界に入った玄関らしきドアを開けた。
——森の中だわ。

生い茂る高い木々を見上げて、この森がダローガの森だという事を確信し、出て来た家を振り返った。

赤い屋根が特徴の、丸太組みのログハウスが一軒。近くに大きな湖がある。

「寝心地は良かった？」

声のする方へと顔を向ければ、金の糸の刺繍が入ったエキゾチックな藍色の民族衣装を纏い、目から下を隠す為に花緑青色のフェイスベールを着けた男女が、木の上から現れた。

「あの部屋はね、あたしの部屋なんだけど、可愛いでしょう？」

女の方は楽しそうに微笑ましく、アリシアを見つめて問いかける。

「え、ええ。あなたの？　じゃあ、このお家は……」

「あたし達の家よ。あ、此処で立ち話もなんだから、また中に入ってお茶でも飲みましようよ」

そう言って女に背中を押されたアリシアは、二人と共に、もう一度家の中へと戻った。

「ここに座ってね」

丸いテーブルの前に座らされ、淹れたての紅茶と手作りのクッキーを出された。紅茶

からは、ミントをブレンドした良い香りが放っている。

「ハーブティーよ。目覚めに良いから飲んで。あ、何も危ないもの入ってないから安心していいから」

少し戸惑っていたアリシアは、あまりにも嬉しそうな表情を向けてくる女の好意を下にしては駄目だと、取り敢えずは空気を読んだ。

「じゃあ……、いただきます」

……美味しい。一口飲んだ反応を待つ女に笑みを向ければ、女は満面に喜色を浮かべていた。

「良かったあ！ ね、このクッキーも食べてよ」

「ええ」

勧められたクッキーに手を出そうとした時だ。不機嫌そうに一人でソファに座っていた男が、痺れを切らすように『おい』と割って入って来た。

「のんびり茶なんぞ出す前に、話を進める話を。何の為に外で待つてたんだ」

「良いじゃない。この森選んで来る志望者なんて、滅多にこないんだからさあ」

もう少しティータイム楽しませてよ。女は不満な目で男を睨むと、気を取り直してアリシアに話を切り出した。

「もうわかっているとと思うけど、あたし達はこのダローガの森の主で、あたしがボワハタ

ピール。こっちの愛想のないのが……」

愛想のないと紹介された事に眉間の皺を寄せた男は、むすつとした態度で『フォレタピールだ』と名を名乗ると、また一人でソファアに座ってしまった。

「因みに双子の姉弟ね」

「あ、あの……森の主人」

「ボワでいいわ」

「じゃあ、ボワ。わたしは、あなた達に認められたの？」

ボワは、『当たり前よ！』と笑う。手紙に書いてあった、『歓迎する』の意味は、認めたからなのだそうだ。

「わたし、何もしてないわ」

「そんな事ないって。アリシアちゃんが見せてくれてね、あたし達とっても美味しい……ううん、嬉しかったのよ」

悪夢のようなものを見せられて、怖い思いをした——ぐらいしか覚えが無いアリシアには、ボワの言っている意味がよく理解出来ない。

何となく、ソファに座っているフォレと目が合えば、『深くは考えるな。素直に喜んでろ』と言われてしまった。

「ねえ、気分はどう？」

「大丈夫、平気よ」

「それなら良かった。アリシアちゃんたら4日も寝たきりで起きないんだもん。びっくりしちゃった」

「あ……」

確か自分が寝ていた部屋は、ボワの部屋だった。アリシアは申し訳なさそうな顔をして、ボワに頭を下げた。

「あなたのベッド、ごめんなさい」

「いーのいーの。あたしはフォレのベッド奪って寝たから」

フォレはジト目でボワを見つめながら、『早く』と促して立ち上がる。一体何を急ぐのか。

「はいはい。じゃ、アリシアちゃん、忘れ物ないわよね？」

「ええ。ちゃんと持ってる」

「じゃあ行きましょうか？」

何処に。それを問えば、急に背後からフォレに目隠しをされ、アリシアは驚いた。

「ごめんね。この森から出るには、目隠しさせてないと危険なのよ」

どういう理由なのか明確には教えてくれなかったが、森の主が危険だと言うので、素直に従うのみである。

ボワに手を引かれ、何かの乗り物に乗せられたアリシアは、耳からの情報を頼りにして、これからの話を聞いた。

「丁度良かったわね。今からだとハンター試験間に合うし」

——え？ どういう事？

ハンター試験は、記載されていた開催日が2001年1月7日の筈。そんなに長い期間をかけて向かうのかと、アリシアは不思議に思った。

「ダローガの森は時間の流れが外より少し遅い。お前が寝ていた4日間、外では二ヶ月と数日時が経っている」

「本当無理矢理起こす手前だったんだからね」

二人からのまさかの説明に啞然としつつ、もうすぐハンター試験を受ける事が出来ると思えば、アリシアの心は弾んだ。

乗り物に揺られて暫くすると、その動きは止まった。どうやら、やっと何処かに着いたらしい。

「さ、降りて」

乗り物から降ろされたアリシアは、数歩進んだ所でやっとフォレに目隠しを外された。眩しくてなかなか目を開けられずにいたが、徐々に慣れてきた視界は、知らない街並みを映した。

「ビースカフマロ？」

「そうよ。じゃ、付いて来てね」

前を歩くボワとフォレに付いて歩いてしていると、フォレが花を売っている店を指差した。

「あの花屋で赤い薔薇を一本買え。買えば、あっちの店だ」

フォレの言う通りに花屋で薔薇を一本購入し、次はレトロな喫茶店へ。

「あの……『オーナーが、あなたにこれを』」

テラス席に座る貴婦人に『台詞』を言えば、貴婦人は頬を赤らめて、『彼にこれを渡してくださいませんか？』と、紫のアネモネをモチーフにしたネクタイピンを手渡された。

「ボワ、フォレ、次はどうしたら？」

「次で最後だ」

最後だと言う場所に向かえば、ディックサクラという、デパートらしき建物の前に着いた。

「この店に入って右にある受付に、さっきのネクタイピンを渡すの。『落とし物です』つて。後は受付で案内してくれるから」

「会場に？」

「そうよ」

案内は終わり。ボワとフォレとは、此処でお別れだそうだ。アリシアは二人に向き合つて『ありがとう』と、頭を下げてお礼を伝える。

「試験頑張つてね。落ちちやつたら、また次の時にいらつしやいよ。アリシアちゃんならいつでも大歓迎だわ」

今度は森に入つても恐くないからね。と笑うボワと、機嫌の悪そうなままのフォレに別れを告げたアリシアは、手を振りながらデイツクサクラの中へと入つて行つた。

「森で見た悪夢つて、結構後で引きずつちやつたりするんだけど……。大丈夫よね、アリシアちゃんなら」

アリシアが去るまで笑顔で手を振りながら言うボワに、フォレは眉間に皺を寄せて踵を返した。

「——さあな。戻るぞ」

デイツクサクラの中で受付を見つけたアリシアは、『落とし物です』と言って、受付嬢にネクタイピンを手渡した。

『『落とし物』ですね。ではお客様、どうぞこちらへ』

営業スマイルの受付嬢に付いて行けば、従業員専用のプレートがついているドアの前に案内された。中はエレベーターらしく、アリシアが入った瞬間に下へと動き出す。

——ああ。ドキドキするわ！

フードの両端を両手でぎゅっと握る。言い表せない緊張感と高揚感に包まれながら、アリシヤは被っていたフードを更に深く被った。

着いた音を知らせるベルが鳴る。開かれたドアから足を踏み入れれば、広いホールのような場所に出た。

「受験番号です。左側の胸元につけてお待ち下さい」

ドアの近くにいた関係者らしき人物から、『1000』と記されたナンバープレートを配布され、アリシヤは指示通りにそれを付けて奥へと進む。

ヒトが、いっぱい……。

入って来た建物からは、想像もつかない程の広さと人の多さに圧倒されたアリシヤが、自然に隅の方へと足を向けた時である。

「今年は去年より人数が多いね」

声のする方へ振り向けば、アリシヤより少し背の高い男が、愛想の良い顔で近寄って来た。

「やあ。オレはトンパって言うんだ。よろしく」

トンパと名乗った男に握手を求められ、アリシヤは躊躇いがちにそれを交わした。

「初めまして。わたしは、アリシヤよ」

「へえ、ハンター試験は初めてだよね？」

「ええ。初めてなの」

「やっぱり！ オレは試験のベテランだからすぐにわかったよ！」

何かわからない事があつたら、何でも訊いてくれ。トンパはそう言つて、ポケットから缶ジュースを二本取り出した。

「お近づきのしるしに、これをどうぞ。飲みなよ」

はい、と一本差し出されたアリシアが、じつとその缶ジュースを見つめれば、トンパはもう一つの缶ジュースを開けて、『お互いの健闘を祈ろう』と、目の前で飲んで見せる。

「……ごめんなさい。わたしいらないわ」

アリシアは、缶ジュースを受け取る事を断つた。ハールから、『試験では、他人から貰つた飲み物や食べ物は絶対口にするな』と教えられていたからだ。

「え？ な、何にも入つてないし。ほら、オレ飲んでるだろう？」

もう一度ぐびりとジュースを飲むトンパに、アリシアは首を横に振つた。

「折角だけれど、本当にごめんなさい」

「ま、まあそうだよな。用心に越した事はないし……。じゃあ、試験頑張ろうな！」

トンパは何処と無くぼつが悪そうな顔をして、アリシアの前から離れて行つた。

——ごめんなさい。

折角の好意を無駄にして申し訳ない気持ちでいると、近くにいた数名の受験者達から

の、信じられない言葉がアリシアの耳に入る。

「新人潰しのトンパ」が早速失敗したぜ」

「ざまあねえな」

思わずそちらに顔を向ければ、言ったであろう者達から目を背けられた。

「新人潰し」とは、一体どういう事なのか。そのままの意味なら、ハールの言う通り、トンパから缶ジュースを受け取らないで良かったのかもしれない。

その後、トンパの缶ジュースを飲んだ新人受験者の何人かが、腹痛を訴えて倒れ、棄権となった。

壁に持たれながら、1500名近く集まった受験者等と待つ事一時間。突然鳴ったブザー音と共に、ドアから誰かが入って来た。

「よく来たな、諸君」

眼鏡をかけ、ファンキーな服装をして現れた男は、どうやら一次試験の試験官らしい。「今年は、1492人が会場まで辿り着いたそうだが……早くも棄権者が三名か、まだまだだな」

試験官は一呼吸置いて続ける。

「実は二次試験官から、多くとも300人位に絞ってくれて言われててなあ。まさかこんなに集まるとは思わなかったぜ」

さて、どうしたものかな。顎に手を当てながら、試験官は会場全体を見渡した。
「んんんん。お前等……、殴り合うか？」

ピリツとした雰囲気、会場中が一瞬で包まれる。

「取り敢えず時間はあるし。……そうだな、昼飯まで後二時間。その間に、五人、ぶつ倒せ」

試験官が手つ取り早く決めた一次試験の内容は、『二時間以内に五人を倒し、その五人の各プレートを集めて提出せよ』というものだった。

「いいか？ オレがああ扉の奥に入ってドアを閉めたら、試験スタートだ」

ざわつく受験者等の視線は、全て試験官へと向けられる。

試験官が扉を開ければお互いを見やり、奥に入れば構えのポーズ。そして、ドアがゆっくりと閉められた――。

試験、スタート……！

瞬間、割れんばかりの雄叫びが上がった。

対峙し、殴り合い、倒し倒される。そんな中、隅で啞然と立ち尽くしていたアリシアは、目の前の光景におののいていた。

――ど、どうしたら良いの？

殴り合いなど勿論した事もなく、この一次試験を、どう乗り越えていけば良いのかさ

えわからない。

「オイ、そのあんた！ ぼーっと突っ立つてる場合かあ？」

ボクシングでもやっているような風貌の男が、アリシアに向かって近寄って来る。

「わ、わたし……！」

「へへっ、ナンバープレートは頂くぜ」

男の右ストレートが打たれる寸前、アリシアは軽く悲鳴を上げ、その場で腰を抜かしてしまった。

「チツ……！」

今までアリシアが持たれていた壁には、男の腕がめり込んでいる。タイミング良く腰を抜かしたお陰で、男の右ストレートを受けずに済んだ。

こ、怖い……！

このままでは、ナンバープレートを奪われて失格に——否、自分を守る為、咄嗟に相手を能力で殺してしまう恐れがある。しかも、自分達の近くで闘っている相手をも、巻き込んでしまうかもしれない。

「ま、待って。やめて、お願いっ！」

男は聞く耳など持たずに攻撃を続け、アリシアは床に這うようにして、なんとかそれをギリギリで避ける。

「ちよこまか動きやがって!!」

どうしよう、どうしよう、どうしたら……!!

男の蹴り技が、顔面に向かって来る寸前だった。アリシアが声を上げたのは。

「——お願い! やめて!! 何もしないで!」

アリシアの半径一メートル内にいた、闘い合ってる他の受験者達の動きが止まった。それは、アリシアの顔面を蹴り上げようとす男も同様、鼻先すれすれのところで止まっているのである。

まるで一時停止のように止まっている者達を不思議そうに見つめながら、ハッと我に返ったアリシアは、その者達のナンバープレートに目が行った。

この人達のプレートを……。

動かない今なら、無理に倒さなくてもナンバープレートを手に入れられる。咄嗟の判断だった。

「ごめんなさい」

丁度五名分、五枚のナンバープレートを手に持ったアリシアが頭を下げると同時、止まっていた者達が動き出す。

「——あ?」

「ん?」

「え……?」

寸止めだった五人は狐につままれたような表情を浮かべ、お互いのナンバープレートが無いのに気付いて焦り始めた。

「てめえ! いつの間に取りやがった!」

蹴り上げようと寸前だったアリシアが背後に立ち、しかも自分のナンバープレートを持っている事に驚いた男が吠えかかる。

「あ! 俺の!」

「いつの間に!」

奪われた他の者もそれに気付けば、ナンバープレートを奪還すべく、大慌てでアリシアに詰め寄った。

「返しやがれ!」

ギリギリと迫り来る五人に隅に追いやられ、ピンチに陥りかけた時であった。

大暴れの会場の中央から、黒い影が一つ現れた。それは縫うように間を走り、次々と受験者達を倒して行く。

「ガアっ!」

アリシアから何とか取り戻そうと必死に掴みかかろうとした五人が、瞬く間にやって来た影により、首に直撃を受けてその場に倒れた。

気が付けばアリシアと影以外、誰もその場に立っている者がいない状態である。

「あれ？ お前確か——」

アリシアの前に立った影の正体は、なんとあのキルアだった。幻影旅団の仮宿で、ゴンと一緒に連れて来られたのを見て以来である。

一方キルアは、天空闘技場でのアリシアのマントの色や姿で、何となく当時の事を思い出している様子だった。

「——名前、なんだったっけ？」

「アリシアよ。あなたは、キルア」

「そうそう。つーか久しぶり。相変わらず目立つマントしてるよな、お前」

「そ、そうかしら？」

今まであまり気にはしてはこなかったが、やはりマントを羽織る姿は目立つらしい。

「お前も試験受けに来たのか？」

「うん。キルアも？」

「ああ。二回目だけだね。でも今回は絶対受かる。楽勝だぜ」

親指でキルアが指す先には、床に倒れて動かない受験者達が。

「強いよね、キルアって。凄いわ」

「へへっ、まあな」

自信有り気に笑ったキルアが、ふと、アリシアの手に持つているナンバープレートに気付く。

「なんだ、お前もう五枚集めてんじやん」

「え？ あ、うん。そうなの！」

少し気持ちが高ぶっていたのか。アリシアは、キルアの前に差し出すように見せた。

「もう駄目かもしれないって思ったの。初めてだから、本当に緊張したわ」

嬉しそうに笑うアリシアを見据えながら、キルアはもう一度ナンバープレートに視線を移す。

——このまま気絶させて奪っちまえば良いか。

そんな考えを巡らせ、さっさとこの場を終わらせてしまおうとした。

「ゴンは元氣？ 一緒ではないの？」

唐突にゴンの名前を出され、密かに動こうとしたキルアの手が止まる。

「……ゴンは今、別の場所にいる。アイツならいつも元氣してるぜ」

「わたし、ゴンにお礼を言いたいの！」

何のお礼だよ。キルアが問えば、『ハンバーガーよ』と、アリシアは答えた。

天空闘技場で初めて会ったあの日、ハンバーガーという食べ物を教えてくれたゴンに、どうしても感謝したかった。

「あんなに美味しい食べ物に出会えて、わたし本当に嬉しく思ってるの。ゴンに教えてもらわなかったら、ずっと知らないままだったわ。だから会いたいのに」

幻影旅団の仮宿では声をかける事も出来ず、アリシアはずっと再会を期待していたのだ。

「ねえ、代わりに伝えてくれないかしら？」

流石に大袈裟だろ。キルアは半ば呆れていた。けれど、その気持ちが決して冗談ではないというのは、嬉々として話すアリシアから伝わってくる。

「……やだね。直接言えよ。会いたがってた事はゴンに言っとくからさ」

「わかったわ。ありがとう、キルア！」

——こういう時って、マジ面倒。調子狂うんだよな。

手に力を込めるも、ゴンの話を出されてしまっただけ、躊躇いが出て手出ししにくい。キルアは軽く溜息を吐いた。

「あーあ。時間かかっちゃうじゃん」

「何が？」

訊けば、怠そうに『試験』とだけ返すキルアが、アリシアからする甘い香りを指摘する。

「お前こんな時にお菓子でも食うつもりだったのかよ？」

「お菓子?」

菓子の匂いなんてするのかと、周りを嗅いでみるが、アリシアにはわからない。

——あ、もしかして。

ダローガの森から乗り物に乗っている際、ボワから『お土産よ』と、クッキーを貰っていた事を思い出したアリシアは、リュックの中から手のひらサイズの丸い缶を取り出すと、缶の蓋を開けて見せた。

「クッキーを貰ったの。どうぞ」

「じゃあ遠慮なく」

缶の中からクッキーを一枚取り、それを口にした瞬間、キルアはあまりの美味さに、思わず『美味しい!』と舌鼓を打つ。

「さっきの匂いとは違うけど、コレめちやくちや美味しいじゃんか!」

「手作りだそうよ。はい、このクッキー、あなたに全部あげる」

「マジ? サンキューな」

蓋をして渡せば、キルアは上機嫌でクッキー入りの缶をポケットに仕舞った。

「あ、集めねーと」

今が試験中である事を、危うく忘れるところだった。倒れている受験者からナンバープレート回収するキルアの近くに、アリシアが駆け寄る。

「何してんだよ？ 五枚集めたんなら試験官に渡しに行けって」

「キルアは残り全部集めるんでしょ？ わたしも手伝うわ」

「は？」

クツキーを貰った手前、今更邪険にするのも面倒である。

——ああ、俺って変わったよなあ。ゴンのお陰で。

キルアはやれやれといった顔をして口元を緩ませると、奥を指差した。

「俺はこつち。お前は向こう側からな」

居寝りをしていた試験官は、開かれたドアの音で目を覚ました。

「漸く、一次合格者第1号か……」

入って来たキルアから、腕時計に目をやる。

「おいおい、もう1時間半も経ってるじゃねーか。何をやってんだ、他の連中はよ！」

「みんな寝てるよ」

キルアの言っている意味がわからないのか、試験官は思わず『はア？』と声を裏返した。

「集めるのに時間くつちった。それと、もう一人いるぜ」

大量のナンバープレートを布で包み、縄で括り付けて引きずっていたキルアの背後から、アリシアが顔を覗かせる。

「アイツらみんな、半日くらいは起きないと思うけどね」

倒れている他の受験者達の姿を目の当たりにし、唾然と立つ試験官に、『どうする？二次試験』と問えば、試験官は一人頭を抱えて悩み出した。

「……ちよ、ちよつと待て。オレじゃ判断しかねる」

判断を仰ぐ為に、どこかに電話をかけ始めた。相手は、ハンター協会及び審査委員会の会長である、アイザックⅡネテロだ。

試験官はネテロに、一次試験の内容とクリア者の名前、今の状況を説明していた。

「……はい、ええ。はい。え、わかりました……」

通話は終了。アリシアとキルアに向き直った試験官は、軽く溜め息を吐きながら告げる。

「あゝゝゝ、試験番号1000、アリシアくんに、1219、キルアくん……」

アリシアとキルアが手を上げれば、ピシツと二人に指を指した。

「ハンター試験、合格!!」

——え？合格？

合格だと告げられても、アリシアはまだよくわかっていない。

「おい、俺ら試験合格したんだって。わかってんのか？」

「二次試験が終わったんじゃないか？」

「だからハンター試験、ご・う・か・く。本当ラッキーだよな、お前」

受かったのは俺のお陰だから、感謝しろよ。キルアはニシシと、ご満悦気味に笑う。

前回の試験で実力を大いに発揮していたらしいキルアは、今回の結果にネテロから、即合格判定を出された。

アリシアは実質おまけ扱いではあるが、他の受験者達が続行不可能な現状、一応ナンバプレート^{ナンバープレート}を五枚集める事をクリアしているので、今回は特別に合格扱いとなったのである。

「説明会だが——」

「俺はパス。さっさと」ハンター免許証^{ライセンス}を受け取りたいんだけど」

急ぎの用があるのか、キルアは説明会に出ないと言う。

「ではキルアさんは説明無しということ。ハンター免許証をご用意致しますので、此方で少しお待ち下さい」

人間離れた豆状形の顔の人物が、突然背後から現れた。

「申し遅れました。私は、ネテロ会長の秘書を務めております、マーメン^{マーメン}ビーンズと申します」

マーメンという人物は、アリシアの前に移動して頭を下げた。

「アリシアさんは初めてですので、説明会に是非ご参加下さい」

説明会はこの会場とは違う場所で行うらしく、移動しなければならないと言う。

「じゃあまたな」

「またね、キルア」

手を振ってキルアと別れたアリシアは、マーメンに付いて試験会場を後にした。

「因みにアリシアさんは、念能力を会得していますか？」

移動中の車の中で、マーメンから念能力について問われた。プロハンターになるには念能力は必須。使用出来ない者は、裏ハンター試験を受けてからでないと合格を認められないのだ。

「ええ」

「それなら良かった」

空港に着けば、待っていた飛行船に移る。どうやら、この貸し切りの飛行船の中で説明会をするらしい。アリシアはマーメンの案内で、何かの会議に使われているであろう少々広い部屋に入った。

「会長、お連れしました」

部屋の奥に座る、長い髭を蓄えた人物にマーメンは深く頭を下げた。一見して普通の老人のようでもあったその人こそ、アイザック・ネテロである。

「お主がアリシアか。ワシがネテロじゃ。ま、座って座って」

アリシアはマーメン同じように頭を下げ、用意された椅子に腰を下ろした。

「しかしラツキーじゃったのう。こんな事は滅多にないぞ。さて、お主はどんなハンターを目指す？」

「会長、先に説明致しませんと……」

「お、そうじゃったそうじゃった」

目尻を下げて笑うネテロの横でマーメンが、『では説明いたしますね』と、アリシアに一枚のカードを配る。

「そのカードが、ハンター免許証になります」

——前にヒソカか言つてた『便利』って、このカードの事かしら？

手に取つて見ると、カード自体はとても地味であつた。

「ただし、普通のカードど侮るなかれ」

その効力は絶大。民間人が入国禁止の国の約90%と、立ち入り禁止地域の75%まで入る事が可能になり、公的施設の95%がタダ。銀行からの融資も一流企業並みに受けられ、売れば人生7回位豪遊出来る他、所持しているだけでも、何不自由無い暮らしが可能になるのだ。

「なので、紛失や盗難には十分気をつけて下さい。再発行は致しておりませんので」

ハンター協会の統計では、ハンターに合格した者の五人に一人が、一年以内に不明な

理由でカードを失っているという。

プロハンターになった最初の試練が、『カードを守る事』と言っても過言ではない。マーメンはそう力説した。

「続いて、協会規約の説明を……」

粗方説明が終わり、マーメンから最後に締めくくられる。

「——試練を乗り越え、自分の力を信じ、夢に向かって進みましょう！ アリシアさん、あなたを新しいハンターに、認定致します！」

——わたし、ハンターになれたの？

信じられなかった。まるで夢の中にいるような、気持ちがふわふわとする。

キラアやネテロが言うように、本当に幸運である。

「嬉しい……！」

アリシアは、ハンター免許証を両手で優しく包むようようにして、胸に抱き止めた。

「……ん？ なんか甘い匂いが」

突然漂って来た甘い匂いに、マーメンは周りをキョロキョロとし始めた。

「甘い匂いじゃと？」

誰か菓子でも用意したのか。マーメンが嗅いでる方へ、ネテロも鼻をヒクつかせてみる。

その甘い匂いが鼻腔を通り抜けた時、遠い過去の記憶が、計り知れないあの地での戦慄の光景が、甘美な香りと共に強烈に蘇った。

まさか……、匂いの元はもしや……！

説明会も終わり、ラッキーな合格でハンターに認定されたばかりのアリシアへ、ネテロの目は向けられる。

「会長、最後に一言お願いします」

「——ああ、わかっとする」

マーメンに呼ばれて気を取り直し、さてさてと、ネテロは咳払いをした。

「第288期ハンター試験も、無事に終わりましたね」

アリシアが去って行った部屋の中で、ネテロと二人だけになったマーメンが、ひと息つきながら言った。

「少々、物足りなさ過ぎたわい。今回は」

ネテロは大きな欠伸をし、机の上に肘をつく。

「そりゃあ、去年は濃かったですから。会長、次回はどうなるんでしょうかね？」

遅かれ早かれ、知られるか。それとももう……。

ネテロの心は内に秘め置き、知らないマーメンと共に笑い合いながら言葉を返した。

「ふおっふおっふおっ。来期に期待じゃ」

——わたし、ハンターになれてしまったわ！

アリシアは、心踊る気持ちで飛行船から降り立っていた。先ずは、ハールに連絡を。否、その前に本だ。ハンター試験に受かった時のベルの気持ちを読み直そう。

リュックから本を取り出してページを開いたアリシアは、前も気にせずに読みながら歩き始めた。

「……うふふ。そう、これよ。わたしも同じ気持ちだった」

突然、小さな旋風が巻き起る。

「わっ！」

その風の煽りに、被っていたフードが捲れ、顔が晒された。しかも余所見をしていたせいで、アリシアは知らない誰かにぶつかってしまったのである。

「あー！」

その拍子に、本が地面へ落ちてしまった。拾わなければ。慌てて手を伸ばすと、アリシアより先に手が伸びる。

拾ったのは、ぶつかってしまった相手だった。

「い、い、いめんなさー——」

「どうもすいませんー！」

眩しい程の笑顔を浮かべるその男は、『はい』と言って、本をアリシアに手渡した。
「懐かしい本じゃないですか。昔好きだったんです」

「え？」

「近い内にまたお会いしますから。じゃ、ボクはこれで失礼しますね！」

「ええ？ あ……」

歯を見せた笑顔をアリシアに向け、ストライプ柄の背広を着た男は颯爽と去って行った。

色々と少し気になるところはある。本を知っている事や、『またお会いしますから』だ。しかし、知らない相手を引き留める理由は、今は無い。

「ハールに、連絡しなきゃ」

アリシアはフードを被り直しながら踵を返し、今度はケータイを取り出して、待つているであろうハールに連絡を入れた。

く希望ノ世界く 笑顔のウラガワ

ヒソカは、クロロの依頼で" G・I " グリードアイランド の世界に入り、偶然にも必然的に出会った旅団員らの手を借りて、難なく除念師を発見する。

自ら交渉を経て、高額報酬を条件に応じた除念師、アベンガネと共に、" G・I " から現実の世界へ戻ったヒソカは、クロロの待つ指定場所へと足を進めていた。

——早く、クロロと闘ヤリいたい♥

一步、一步と進む度にその想いを強めていったヒソカは、ここに至る前の事を頭の中で振り返る。

それは、クロロからの依頼の真相を確かめる為、指定された酒場に出向いた時だった。

「——除念師?」

「そうだ。能力で封じられた念をもう一度使えるようにするには、貴重な除念師が必要になる。そこいらの半端な奴ではなく、優秀な奴をな」

他に誰もいなくなった酒場のカウンター席で、グラスの中の溶けかけたアイスボールを見つめたまま、クロロは更に言葉を続ける。

「オレの占いによれば、除念師は"G・I"に必ずいる。だが、このゲームは念能力者にしかプレイできない」

「……で、ボクが行って、除念師を連れて来ればイイんだ？」

頷くクロロを横目に、残り少なくなったグラスの中身を、ヒソカはごくりと飲み干した。

「報酬が除念後のオレとタイマンなら、お前も文句ない筈だろ？」

「まあ、……そうだね◆？ オークー。それ、受けるよ♥」

先ずはどうすれば良いのか。それを問うヒソカに対し"G・I"に行く為に必要なものは既に揃えてあると、クロロは言う。

「じゃあ、善は急げって事で◆？」

ヒソカが先に席を立とうとすれば、『訊きたい事がある』そう言ってクロロに呼び止められた。

「何？ ボクはいつでも行けるんだけど？」

「……アリシアはどうしてる？」

クロロを真つ直ぐと目で捉えながら、ヒソカがほくそ笑んだ。

「ふうん、諦めてなかったんだ……？　元氣だよ、アリシア彼女なら……？」
「……そうか」

諦めてなどいない。含み笑いを浮かべるクロロから目線を離れたヒソカも、丁度今気になってる事を質問した。

「あそうだ、キミにこういう質問するのもアレなだけだよ、——アリシア以外とやれなくなったのって、魅夢の一族が関係してる？」

アリシアと魅を合わせてからというもの、男女関係なくいざそういう時にだけ、何故か勃たなくなってしまうのである。

「本当に、そういう時にだけ、なんだけどね……？　どんなにしても萎えちゃってさ……？　キミは魅夢の一族のコト、詳しいだろ？」

これがイルミ相手に告げたのなら、『笑った方が良い？』と返ってくるであろう。しかしクロロは違う。

「魅夢の一族を手にするにもリスクはある。肉を喰らった時と同様に起こる症状のようなもの。他の食べ物を受付なくなっただ。つまりそれは、……副作用だ。」

——真面目か。

「副作用？　ボクさあ、取り扱い説明書読むの苦手なんだよね……？」

クロロヘジト目を向けたヒソカは、席を立ちながら溜め息交じりに言った。

「お前に一つ言っておこう。アリシアを、あまりひとり置いておかない方が良い」

一脈の微笑と共に遅れて席を立ったクロロは、ヒソカの横を通り過ぎて店のドアの前まで先に歩くと、端然とした声で告げる。

「オレは、欲しいものは必ず手に入れる」

……ざわり、ヒソカの胸の奥底から、何かが蠢く音がした。

——ボクから奪うつもりなんだろうけど。

アリシアを見つめた時のクロロを思い起こせばヒソカの心臓は疼き出し、この身を抉つても、無性に掻きむしりたい衝動に駆られる。

「あの玩具は、ボクのだから……?」

……絶対に、あげない。舌先で下唇をぺろりとひと舐めし、ヒソカは言葉を漏らした。

「お、おい……! 本当に大丈夫なんだろうな? 除念した途端に用済みで……なんてのは無しだぞ!」

後ろを付いて歩いてきたアベンガネは、禍々しいオーラを発してしまっているヒソカを警戒し、眉間に縦皺を作りながら問いかける。

「大丈夫だよ? 除念師は貴重だからねエ、用済みなんかで消したりしないし、ちやあんと報酬も払うんだしさあ……?」

安心しなよ。立ち止まってくるりと振り向いたヒソカからはもう、発していたオーラは消え失せていた。

「だったら、いい……。さっさと依頼主のところへ急ごう」

薄気味悪い奴だ。ヒソカと目を逸らしたアベンガネは、足早に先を歩く。

「はいはい……。？」

自分より先に前に出たアベンガネの背を見やりながら、ヒソカは微かに笑うように頬を動かして言った。

「そこ、右ね？？」

——某日。ヨークシンシティで、最も名の知れたサザンピースに、奇妙な生物の一部が持ち込まれた。

条例に触れる未登録生物の疑いがある為、リストには載せられず、公共機関にタダ同然で持つていかれる位ならと、許可証を持つハンターを限定に、裏で取引が行われていた。

この生物の一部というものは、一見して昆虫の足に非常に似ている。

しかし、大きさがあり得ない。他の昆虫には無い特徴として、普通なら鉤爪は2本だが、これは6本もある。まるで、人間の指のようだった。

一部を買い取り調べた者達の結果によれば、この奇妙な生物は、『キメラアントの女王

蟻』と酷似しているという。

キメラアントとは、第一級隔離指定種に認定されている、虫^蟻である。

非常に危険で貪欲。旺盛な食欲。摂食交配という特殊な産卵形態をとる虫で、個体によつては好き嫌いが全く違い、別名『グルメアント』とも言う。

だが、従来のキメラアントの女王蟻は、10 cm程度のサイズであるのに対し、今回持ち込まれた奇妙な生物の大きさが、2 m以上あると推測され、急遽、本体の回収が急がれた。

それは、体長2 mもある女王蟻が人間をターゲットにした場合、必ず村や町単位の集団失踪事件が起きる事を、危惧されたからであつた。

ハンター^{ライセンス}免許証を取得したアリシアは、寄り道もせず真つ直ぐハールの家に帰宅し、待つていたハールと共にささやかな祝杯を挙げた。

二人で住むには少し狭かった家の中を改造したり、試験前に暮らした日々と同じような時間を過ごして、早四ヶ月。

「あつたぞ二冊目！」

パソコンのモニター画面を指差して、ハールが声を上げた。

「本当？」

「ああ、間違いない」

ハールの隣に駆け寄り、モニター画面を見つめるアリシアの瞳は、感動と喜びに輝いている。

実はアリシアの大事にしている本が、三部作で構成された小説であるという事がわかった。

アリシアは読むのに時間をかけていた。途中で繰り返しをし、先日やっと読み終わると、この本に初めて続きがあるのに気付いたのだ。

ハールにその事を伝え、代わりに調べてもらおうと、この小説が発刊されたのは1990年。もともと発行部数が少なかったらしく、現在は三部作とも絶版されているという。

一作目は出回っている事も極たまにあるらしいが、二部、三部はレア扱い。探してもなかなか見つかりはしない。

レアとしての価値が上がったのは、三部作を書き終えた作者が謎の失踪を遂げ、曰く付きの作品として今も一部のコレクターに人気があるからである。

続きをどうしても読みたくなったアリシアは、電腦ページの情報を頼りに、残りの二冊をハールに協力してもらいながら探していた。

そして今回見つけた情報によれば、ヨークシンシティで年に二回行われている、

『古本屋祭』のメインイベントの一つ、特選古書即売会で、二部作目の本が販売される事がわかったのである。

「行ったら買えるかしら？」

「どうだろうな。五日後だから、今から準備してヨークシンシティに向かおう」

こうしてアリシアは、心配だから付いて行くと言うハールと一緒に、再びヨークシンシティへと向かった。

「ヨークシンの街の中って、とても賑やかなのね」

リンゴーン空港から車で直行し、久しぶりのヨークシンに立つ。以前は廃墟の仮宿で留まっていた為に、街の中に実際足を踏み入れるのは初めてである。

「ほら、あっちだ」

人集りがある先に目を移せば、大きな高いビルの建物に、『古本屋祭』と垂れ幕が掲げられているのが見えた。

老舗だけあって、建物の造りも歴史を感じさせる古さが伺える。

以外にも驚いたのが人の多さ。なんと世界中から、本好きのコレクターが掘り出し物を求めてやって来るらしい。

「いらつしやいませ！ 何かお探しですか？」

特選古書即売のコーナーでうろつくアリシアとハールの元に、店の主人が声をかけて

来た。

「この本の続きを探しているの」

アリシアは店主に例の本を尋ねながら、自分の大事にしている本を差し出して見せる。

「おや、これはこれは。珍しいのお持ちで」

店主はアリシアが持つ本を珍しそうに見つめながら、『そういえば……』と申し訳なさそうな顔をして告げた。

「あなた方が来る前に、もう出ちやいまして……」

どうやら一足遅かったらしい。レア品の為、一冊限定だったその本は、アリシアとハールが来る10分程前に売れてしまったそうだ。

「残念だったな」

「……ええ」

古本屋から出て来たアリシアは、しょんぼりと肩を落としていた。

「仕方ないさ、あんた以外にも欲しかった奴がいたって事だ。また探して見つけければ良い」

「そうね、そうするわ」

売れてしまったものは忘れ、次を探そう。ハールの言葉に少しだけ気を取り直し、ア

リシアは笑みを浮かべる。

「折角ヨークシンまで来たんだ。買い物したり、何か食べたりしよう」

何もしないで帰るよりかは、色々楽しんで帰ろう。ハールの提案に乗ったアリシアは先ず、ファツション系の店が連なる通りに向かった。

流石、お洒落で華やかな街である。ショーウィンドウに飾られた衣服は、どれもこれもセンスが良い。

「その店にするか？　じゃあ俺は向かいの店に入るから、終わったら連絡をくれ」
「わかったわ」

ハールと一旦別れたアリシアは、一番初めに気になったロリータファツションショップに入り、甘ロリやゴスロリ、クラシカル系などを何点か選んで購入する。

以前は買い方さえもわからなかったのに、ハールにお金のやり取りを改めて学んでは、一人で店の中に入るのにも緊張しなくなった。

店の外に出たアリシアは、商品の入った紙袋を両手一杯に持ち、合わせて買った装飾品や靴の箱を地面に置いて、これらをどうやって一人で持って行くかと考える。

——クローゼットに入るかしら？

一緒に住む際に用意してくれた、アリシアの部屋のクローゼットの中は、真新しい服や靴で溢れかけていた。

こうやって大量に購入するのだから、溢れてしまうのだが……。

実はアリシアは、ヒソカからプレゼントされていた服や装飾品などを、つい最近まで使い捨てにしていたのだ。その原因は、勿論ヒソカにある。

アリシアの為に何百着も用意し、毎日新しいものを着せ替え人形のように着用させていたヒソカは、一度でも袖を通した服は全て処分。着るのも許さない。

森で暮らしていた時は、そんな事を一切してはいなかったのだが、ヒソカにそうやって教えられて過ごすうちに、『服は使い捨て』という、一般常識からズレた認識を持つようになってしまった。

ハールに指摘された今では、『ベルはそんな事をしない』と肝に銘じ、使い捨てはしていない。ただ、何度も着ようとは思えず、結局捨てる代わりに溜まっていく一方であった。

「……あ」

終わったら連絡をくれと言われていたのを忘れるところだった。アリシアはケータイを取り出し、ハールに『買い終わった』とメールを送る。

『もう少し時間がかかる。すまない』

返事は直ぐに返って来たが、合流はまだ出来ないらしい。

……さて、どうしたら良いか。荷物となってしまう紙袋や箱と睨めっこをしながら

ら、再び考えるように唸るアリシアの前に、満開の笑みを浮かべて誰かが現れた。

「奇遇ですね！」

その人物は、ハンターに認定された日に空港でぶつかってしまった、ストライプ柄の背広を着た男だった。

「あなたは……」

「こんな所でまた会えるとは思っていませんでした！」

「こんな偶然、本当にあるんですね。キラキラした笑みを見せながら、男はアリシアの足元に置かれている箱や紙袋に目を向ける。

「おや、お一人で買い物ですか？」

「友達を待っているの」

「こんな所で待たなくても、あのカフェで待てば良いのに」

男が指差す方向には、一軒のお洒落なカフェが。

「箱はボクが持ちますから、アリシアさんは紙袋を」

「え、ええ。ちよ……！」

唐突にひよいひよいと箱を持ち上げ、先にすたすたと歩いて行ってしまふ男を、アリシアは慌てて付いて走った。

「何か頼みますか？」

アリシアはカフェで、何故かよく知らない男とテーブルを挟み、向き合うような形で座っている。

「すみません、エスプレッソをお願いします。アリシアさんは？」

「じゃあ、わたしはオレンジジュース……」

店員を呼んで注文をした男は、決して爽やかな笑顔を絶やさない。

「アリシアさんはヨークシンによく来るんですか？」

「……まだ二度目よ」

「へえ、そうなんですか」

自然に受け入れてしまっていたアリシアは、目の前の男に少々戸惑っていた。この男は何故、名前を知っているのだろうか。まだ教えてもないのに。

間もなくして、注文したエスプレッソとオレンジジュースが運ばれて来た。男はエスプレッソの入っているカップを口にする前に、黙り込んでしまっているアリシアを視界に入れて問いかけた。

「どうしたんですか？」

「あ……あの、何でわたしの名前を知っているの？」

男は笑みは崩さずに数秒黙った後、右手で頭を押さえながら声を上げた。

「ああ〜！ どうもすみません。そういえば、まだご挨拶してなかったですね！」

「ハハハと、申し訳なきような顔で言う男は、改まった姿勢に直る。」

「ボクは、パリストン＝ヒルと申します。どうしてあなたの名前を知っているのかという疑問なんですが、それはですね……」

自らをパリストンと名乗る男は背を丸め、内緒話をするように口元に手を当てると、アリシアだけに聞こえる声で告げた。

「実はボク、ハンター協会の関係者なんです」

「……ハンター協会の、カンケイシヤ？」

アリシアも同じく小声で訊き返せば、パリストンは人の良い笑顔を浮かべて頷いた。

「初めて会ったあの日、受験生だったあなたの事は既に情報に入っていました」

「だから『近い内にまたお会いしますから』って、言ったの？」

記憶を振り返るアリシアは、あの時のパリストンの言葉を思い出し、その事について問いかける。

「ボク、そんな事言いましたっけ？」

「ええ。言ったわ」

覚えてないなあ。パリストンは困ったように薄く微笑むと、脈略も無しに突然、話を別なものへと切り替えた。

「すいません。アリシアさんにお訊きしたいんですが、あなたは何故、ハンターになろう

と？」

本当に唐突である。

わたしは……。

始めはただ、ベルの気持ちを知りたくて同じ事をしてみたかった。ハンター試験を受け、合格してプロハンターとなったアリシアは、今でも自分とベルを重ねたり、憧れたりする。

ベルがハンターを目指したのは、普通の一般人が入る事を許されていない国や地域に入るのが目的で、世界の財宝発掘ハンターや、賞金首ハンターといったような専門分野を目指す為ではない。

アリシアも同じく、専門のハンターになるなど考えてはいなかった。ベルや世界を知る事で、それよりもっと、別の何かの思いが芽生えていたからだ。

「ベルと同じ事をすれば、わかると思ったわ」

「ベル……？　もしかして、『彼女は知らない世界で』の"ベル"ですか？」

そうよ。アリシアはこくりと頷いた。この思いをどんな言葉で表せば良いのか、相手に上手く伝えられるのかわからない。

「わたしって、本当は何の為に存在してるんだろうって、知りたくなかったの。だからその理由がわかりたくて、なろうとしたのかも」

それを聞いたパリストンの微笑みは、いつそう深くなった。

「なる程、存在意義ですか」

「存在、……いぎょ。」

「あなたがこの世界に生きる理由、重要性、生み出される価値の事ですよ」

信頼するような人の良い笑顔を浮かべて、パリストンはアリシアを真つ直ぐに見つめる。

「アリシアさん。あなたの存在には意味があり、誰も知らない本当の価値がある——と、ボクは思うんです」

気を許してしまいそうな爽やかな笑みで、パリストンが言った。

「それを見つけてみませんか？　ボクと一緒に」

「あなたと、一緒に？」

「はい。ボクを信じてくれませんか？」

なんて答えれば良いのだろうか。そもそも信用して良いのかどうかもわからない。アリシアには、パリストンを計り知る事が出来なかつた。

「知りたいですよね？　"ベル"に道が開けたように、あなたにも必ず道は開ける。あなたが存在している意味を、ボクなら見つけ出せますよ？」

その言葉は、まるでトドメの一発だった。アリシアの心臓は波のような動悸を打ち、

僅かに唇を震わせる。

——知りたい。思うままに答えれば、パリストンは満足気な表情を見せた。

「今ですね、極秘に調査している事があるんですが、それが手に入れば、あなたに是非協力して頂きたいなあって思ってますんで」

「協力？」

「今はまだ何も教えられないんです。あ、そうだ。ホームコードをお持ちですよね？」
使いだは無いだろうと思っていたホームコードを伝えると、『偶然にも会えて良かったなア』と、パリストンが席から立ち上がった。

「今日の事はご友人には内緒でお願いします。なんせ秘密裏に動いてるものですから」
また連絡させて頂きますね。さり気なく伝票を手についたパリストンは、アリスアの前から去る途中、何かを思い出して舞い戻って来た。

「そうそう。これ、良かったら受け取ってくれませんか？ お近づきの印に。喜んでくれると嬉しいんですが」

「え？」

「では、ボクはこれで失礼しますね」

キラキラした微笑みを残して、今度こそパリストンが去って行った。

——これは、プレゼント？

有無を言わずに目の前に置かれたそれは、羊皮紙の包み紙で包装された何か、である。アリシアは数秒見つめた後、括られた赤い紐をゆつくりと解いて見る。

——あ！

パリストンから贈られたのは、なんと二部作目の『希望の国』だった。アリシアはその本を胸に抱くと、大急ぎでカフェを飛び出し、辺りを見渡してパリストンを探した。

「いない……」

姿は何処にもなかった。せめてお礼を言いたかったが、パリストンに連絡する手段が今は無い。

——『連絡する』って言ったから、また会えるのよね？

本を抱き締める力を更にぎゅっと強めたそんなアリシアのもとに、慌ただしくハールが駆け走って来た。

「アリシア！ 電話にも出ないから心配したぞ！」

「あらハール。もう用事は終わったの？」

どうやらハールは、アリシアがパリストンと一緒にいる時から電話をかけていたらしい。今更だがケータイを見てみれば、電源が切れてしまっている。あまりにも繋がらずに心配になって探し回っていたところ、漸くアリシアを発見したのでそうだ。

「今さっき終わらせた。……買った服は何処だ？」

「大変、お店の中だわ」

カフェにそのまま置いて出てしまった事を思い出し、再度店の中に戻ろうとすれば、後ろを付いていたハールが、アリシアの胸に抱かれた本に気付いて呼び止めた。

「それどうしたんだ？」

「あ、これは……」

パリストンの事を言いかけそうになって、アリシアは慌てて口籠った。『内緒』なのだから、ハールには話せない。

「……そう、親切な見知らぬ人に貰ったの！ 本当に、偶然。中身がまさかこの本だつて知らなくて急いで追いかけたんだけど、見失ってしまったのよ」

「稀有な奴もいるんだな。レア品なのに」

怪しまれてはいないだろうか。ただ、全部が嘘ではない。パリストンの事と、それに関わる話だけは伏せておいただけだ。以前、メルサの事をヒソカに内緒にした時とは違う後ろめたさを感じながら、アリシアはハールと共にカフェへと戻って行った。

蟻
of
the
DEAD

バルサ諸島・ミテネ連邦の西端に位置し、ロカリオ共和国との国境以外は海に囲まれ、自然保護を目的としたNGL自治国。

機械文明を捨て、自然の中で生活する、人口217万人のこの国は、国民の約99%がネオグリーンライフという団員であり、残りは支援のボランティアだ。

通信手段は主に手紙である。交通手段は馬などの動物。ただし外交業務の為、国境近くに位置する大使館ではパソコンなどを使用し、情報交換にあたっている。勿論国内には、電気・ガス・水道などの文明社会の必需である、ライフラインは存在しない。一般構成員は畑を耕し、自給自足の生活を営んでいた。

入国審査は非常に厳しく、金属・石油製品・ガラス製品の持込は禁止。銀歯や整形用シリコンが体内にある場合は、摘出しないと入国は出来ない。しかもパソコンなどの文明の利器を持ち込んだ場合は、極刑になる場合があるという。

エコ団体として活動しているNGLには、世間には知られていないもう一つの顔が存

在する。

自然保護区を名目に、NGLが裏で行っていたのは、飲むだけで手軽に効果が得られる事から、世界中で流行している、麻薬『D₂』^{デーデー}の製造と売買だった。

一般構成員は、NGLの純粋な共感者として暮らしており、麻薬の事を知るのは、NGL上層部のみである。

このような表と裏の顔を持つNGL自治国では今、信じ難い事が起こっていた。

キメラアントの女王蟻に酷似する奇妙な生物の一部を分析した結果、巨大なキメラアントの可能性が高い事と、漂流先がNGL自治国である可能性が出てきた事により、1組のハンターがそれを突き止める為、NGL自治国に現地入り。

その内6組が全滅。残りの脱出したハンターが、ハンター協会に討伐隊を要請する騒ぎとなった。NGL自治国では、一体何があったのか。

なんと、分析された一部の本体である、巨大キメラアントの女王は生きていた。虫や魚、小動物に飽き足らず人間までも捕食し、異種配合を繰り返して部下を大量に繁殖。自らを頂点にし、組織を作り出していたのである。

凶悪な進化を遂げたキメラアント達によってNGL自治国はほぼ占領され、事態の深刻さに気付いたハンター協会は、主戦力を領内に投入するが、今は均衡を保ちながら膠着状態だった。

「キメラアアントについて詳しくせ説明しますね。キメラアアントは5つの階級で構成され、王が産まれると階級がぶ分裂します」

NGL自治国の隣、ロカリオ共和国で待機していたアマチュアハンターの4人は、ハンター協会からの連絡を待ちながらキメラアアントについて話し合っていた。

「へえ。一定周期で産まれた王が放浪して、色んな生物と交配しながら次世代の女王を孕ませるってわけね」

「うわあ。爆発的に増えるんだ……」

増殖を防ぐには、王を産む前に女王を倒す事が必須。しかし女王を倒すには、周りを固める兵を全て掃わなければならない。

「あ、かかってきたー！」

風船ガムを膨らましていた少女のケータイに連絡が入る。待っていた協会からだつた。

「討伐隊の第一陣が来るよ」

3日後。その第一陣部隊三名が、NGL自治国に足を踏み入れた。中途半端な戦力で敵に吸収される虞おそれを避ける為、実力のある少数精鋭。その3名とは、ハンター協会会長のアイザック・ネテロ、一ツ星ハンターのモラウ・マッカーナーシ、プロハンターのノヴである。

この実力者達で即解決……というわけにはいかず、女王が産む王の為の直属護衛隊も、新たに誕生するのであった。

「アリシア、起きろ」

ソファの上で本を読みかけたまま眠りこけているアリシアの肩を、ハールが軽く揺さぶって起こした。

「……ん。わたし、眠ってしまったのね」

アリシアは目を擦りながら小さく欠伸をし、開いていた読みかけの本を閉じてソファから立ち上がった。

「面白いか？ それ」

ハールの言う『それ』とは、パリストンから贈られた『希望の国』である。

「ええ、とっても！ 今はジャポンっていう島国に入ったところなの」

眠そうだった筈の顔を一気に吹っ飛ばすように、アリシアは高揚して言った。

「とても不思議な国でね、みんな”キモノ”っていう服を着てるのよ。ハールはジャポンに行った事がある？」

「いや、まだない。独特な伝統なんかがあると聞いた覚えがあるだけだ」

200年近く前まで鎖国をしていたらしいジャポンという国は、近隣の文化を取り入

れつつ独自に発展した小さな島国の事だ。

「わたし、ジャポンに行つてみたい。明日」

「なるほどな、明日か……つて、明日!?!」

一瞬納得しかけたハールは、慌てるようにして問いかけた。

「ええ。明日行きたいなあつて。駄目なの?」

「い、いや、駄目というわけじゃないんだ。突然だから少し驚いたというか……」

じゃあ明日からジャポンに。アリシアがそう言いかける前に、『待った』と一言が入る。

「ここからの直通便は無いぞ。ヨルビアン大陸からジャポンに行くには、リンゴーン空港を使うのが良い。あそこは大きいからな、大抵の国にはリンゴーン空港から行ける」

「そうなのね。なら、明日リンゴーン空港まで行つて、そこからジャポンに行くわ」

随分急だなど思いながら、行く準備を始めようかと動いたハールを、アリシアは呼び止めた。

「わたし一人で行くから、ハールはお留守番してて」

「え? でも一人じゃ……」

「わたし小さな子供じゃないのよ。一人でも平気だし、どうしても一人で行きたいの」

「こういう時は、無理に止めても無駄である。心配だから本当は付いて行きたい。けれ

ど、それをしてもしアリシアは喜びはしないだろう。今はもう嫌われてしまいたくはないハールの心は、とても複雑だった。

——前髪や髭を剃ってなくて、良かった。

「ジャポンはどの国よりも平和らしいからな。観光するには最適だろうよ。でも……気を付けて行くんだぞ」

表情が見えれば、アリシアを困らせてしまったかもしれない。ハールは、なるべく明るい声を出して言った。

「大丈夫よ。ミムノイチゾクだつてわからないように気をつけるから。それに、ハールに教えてもらったあれを着けて行くわ」

魅夢ミムノイチゾクの一族の特徴でもある瞳とネイビーブルーの髪色を隠す為、カラーコンタクトとブラウン色のウィッグをハールに勧められていたのだ。一応外出時にはフードを被つてはいるが、もしもを考えての事だった。

翌日。空港までハールに見送られた後、飛行船に一人で乗船したアリシアは先ず、直通便のあるリンゴーン空港を目指して向かった。

「では、乗船時間まで搭乗待合室でお待ち下さい」

到着してから直ぐに、リンゴーン空港のチケットカウンターで乗船手続きを済ませ終える。すっかり慣れた様子のアリシアは時間が来るまでの間、読みかけだった『希望の

『国』を読んでいようと、黒のうさ耳リユックから本を取り出し、近くに設置された椅子に腰を下ろす。——すると、ロビーの方向から耳を劈くような悲鳴が上がった。

逃げる——。誰かの声の共に、周りにいた者達が騒めいた。聴こえてくる悲鳴は止まらない。何かが現れたのか、それは徐々に近付いて来ている。

「な、なんだありや……？」

全身緑色。両手に、まるでカマキリのような鎌状を持ち、目が異様に離れた人間らしき謎の生き物が搭乗待合室に現れた。

「コスプレ？」

騒ぎに駆けつけた係員と警備員は、カマキリ人間が仮装して来た不審者だと思つたらしく、やれやれと溜息を吐いて声をかける。

「こちらこちら君イ！ コスプレするなら専門の場所でやってくれ——」

警備員の一人が近寄って行つた瞬間だった。カマキリ人間が鎌を一振りすれば、警備員はバタリとその場の床に倒れた。離れた頭が近くにいたアリシアの足下へ転がって来れば、封を切つたように、皆が一斉に逃げ出した。アリシア以外は。

あ、頭……？

足下に転がる警備員の頭を見つめながら、ついていけない思考のせいで固まっていたアリシアは、自分の前に近寄って来たカマキリ人間に声をかけられて、漸く我に返る。

「——おいコラ。聴こえてんのかコラ。さつきから呼んでんだよ」

右側の鎌の端を使い、被っているフードを強引に下ろせば、アリシアの怯えた表情と目が合う。カマキリ人間は愉快そうに、ニタリと裂けそうな口で笑った。

「お前、めちやくちや美味そうだな。記念に食ってヤル」

不気味な口を大きく開けて、頭から食い千切ろうと息を大きく吸ったカマキリ人間は、アリシアから微かに漂っている香りをも吸い込んだらしい。すると突然、その動きが止まった。

——何？

危機を感じ、能力を使おうとする寸前だったが、まだ使ってもいない。カマキリ人間は、口を半分開けたままだらしなく涎を垂らし、焦点を上に向けて目をひん剥かせながら体を悶えさせている。

「はああああアア……ん!! 気持ツイイ!!」

急に声を上げたカマキリ人間は、アリシアの足下に頭こぶを垂れるようにして膝を付いた。

「なんだコレ? 食べたいのに、そんななんどうでもイイヤ。気持ちイイ! はあつあん!!」

一体何だ、何が起きたのだろうか。自分の前で膝を付き、頭を垂れるカマキリ人間を

見下ろしながら、アリシアはこの場からどうやって逃げ出そうと考える。

「動くな!! 両手を上げろ!」

通報により、武装した警備隊がやつと現れた。カマキリ人間がアリシアの前から動かないのを知ると、銃口を向けつつ、周りを囲むようにして搭乗待合室に次々と入ってくる。

「……ぞろぞろやって来やがって、この最高な時を邪魔すんじやねえぞゴラ……!」

——ゆらり。カマキリ人間は苛立ちを露わに立ち上がった。

「そこから動くな、撃つぞ!」

「あ?」

オーラを放ったカマキリ人間が、周りにいる警備隊員を見渡しながら右手を軽く振れば、何かがブーメランのように隊員らの首元を走る。

「これで邪魔はいなくなつたナ」

ぼとり、ぼとりと、周りを囲んだ警備隊員全員の頭が床に落ち、切れた首元から血飛沫が次々と噴き出した。

「きゃあああ!」

惨劇に驚愕し、アリシアは思わず悲鳴を上げた。カマキリ人間はくるりとアリシアに向き直ると、再び膝を付く。

「イイ気分ダヨ。もつと、モット……い！」

床に頭を擦り付け、何かを乞うように腕を伸ばしてくるカマキリ人間に、アリシアはびくりと体を震わせた。鎌の付いた手らしきものが、マントの下から覗かせていたアリシアの足首に触れた時、鎌の先が当たって、レースの靴下ごと切れてしまったのである。「痛っ」

カマキリ人間は一瞬『しまった』と焦りつつも、血を見て興奮したのだろう。アリシアのその足目掛けて勢い良く飛び付き、小さな傷口から流れる血を、恍惚の表情でペロペロと舐め始めたではないか。

「い、いやあー！」

しがみ付くカマキリ人間から逃れようとすれば、掴まれた力は強まっていく。

——逃げれない。

ちゆうちゆうと音を立てて、血を吸い出すカマキリ人間にこれ以上耐えられず、躊躇っていた能力を使おうとすれば、増員された警備隊員が再び現れた。

「……ちっつ、また来やがった力」

血を吸うのを止め、アリシアから離れたカマキリ人間は警備隊員らに自ら近寄り、先程と同じような動作をしようと右手を上げる。

——今だ。

「弾ける赤い風船」
ブラッドバールン

アリシアの放つオーラに気付いた時にはもう遅い。潰れた蛙のような声を上げて弾け割れたのは、念を使う謎のカマキリ人間が振り向くより先だった。

飛び散る様子を見つめながら、警備隊員が此方に走って来るのが視界に入ると同時。アリシアの記憶は、そこからプツリと途切れてしまったのである。

『——本日昼前、リンゴーン空港内で一般市民2名、施設関係者1名、警備隊員20名が殺害される事件がありました』

そのニュースは、ここ数日発生していた、謎の生物による事件の一報だった。カマキリ型の生物が空港内に入って行く映像と、事件現場の映像が映し出され、空港前で報道する報道アナウンサーや、目撃者のインタビューが流れる。

「出ないから関係ないもんねー」

テレビを見ながら電腦ページのとある実況掲示板で書き込みをするミルクは、グラスコップに入った炭酸ジュースをぐびりと一口飲むと、掲示板のフィギュアスレッドを新たに開き、気になる書き込みを発見した。

34. 52 ID : 1g6VdXkj
 100 : 名無しさん@人形の楽園町。 : 2000/06/18 (日) 19:35 :

リンゴーン空港のニュース映像に、Wooden^{ウオーデン}氏の最後の作品「ブルーヘアの少女」に似た女の子映ってなかった？

101:名無しさん@人形の楽園町。 : 2000/06/18 (日) 19:35:

40. 13 ID:md2wAc8p

>>100 動画貼れよks

てかブルーヘアじゃなくてネイビーブルーだろ

102:名無しさん@人形の楽園町。 : 2000/06/18 (日) 19:36:

10. 50 ID:9c3Ww5a

>>101

オレも見たよ 画像ならこれじゃない？

ミルキは興味本位で貼られた画像をクリックし、ガタリと椅子から立ち上がって驚いた。

「……ま、マジか!？」

報道アナウンサーがインタビュウをしている後ろの方に、女性職員に毛布を掛けられて椅子に座る、虚ろな表情の少女がはつきりと映っているではないか。髪型や色は違うけれど、見れば見るほどに、その少女の顔はWoodenのフィギュアにそっくりである。

ミルキは直ぐさま画像を切り抜き、拡大して保存したのだった。

某国某所。ノブナガやコルトピと途中で別れ、別行動をしていたマチの荷物の中から、ケータイの着信を知らせる音が鳴っている。知らない番号からだったが、マチは妙にこの番号が気になってしまい、何となく試しに出てみる事にしたのである。

——誰よ、一体。

聞こえてきた声を耳にした時、マチの唇は微かに震えた。

『わかるか?』

「——団長?」

番外編 —ソウマトウ—

通り過ぎて行く記憶の中で、若い頃のアイザック・ネテロは瀕死に陥っていた。

お忍びで来たこの未開の地で、自分は本当に死ぬのか。まだ着たばかりなのに。情けねえな。

二人はどうした？ どうなった？

逸れた仲間の安否が気にはなったが、それどころではなくなってきた。完全に動けなくなった身体だけではなく、意識も朦朧としてきたのだから。

いよいよよかと思われたその時だった。鼻をかすめる甘い匂いと共に、何者かの影が自分の視界に現れた。

「馬鹿め。お前が口にしたメラヴエルの実は、お前達にとっては毒でしかない」

誰だ——。霞む瞳には相手の姿を捉える事が出来ない。人間じゃないのか、未開の地の化け物か。相手が言う『実』とは、大きな木々に混じって生える、背丈ほどの小さな木に実っていた林檎のような青い実。この地の生物らが食べているのを確認し、平気だ

と思つて一口だけ齧つたのが命取りになつた。直ぐに吐き出したが、無意味だつたらしい。

「腹が、減つてたからな……」

地面に横たわる自分を見下ろしているであろう相手に向けて返したが、相手からは何も語られない。

何だ、死に行く最期を嘲笑いに來ただけか。

見世物じゃねーぞ、消えろ。

もう声も出なくなつて、ひゅーひゅーと過呼吸のよう。やがて視界も真つ暗になつた。

——あ、死ぬ。

呆気ない死だつた。

——の筈が、死んではいなかった。

時間の経過はわからない。がばりと上半身を起こし、自分の両頬を両手で叩いた。
「生きてる……」

声も出る。身体も自由だ。そして、此処は何処なのか。——水の流れる音。河原だ。ネテロは巨大な岩の上に寝かされていた。一体誰に。

「生き返つたか」

鈴を転がすような声がして反射的にその方へと向けば、刺繍入りの白と黒の細身の民族衣装を着て、ネイビーブルーの長い髪の若い女が、隣の岩に腰をかけて此方を見ていた。

——別嬪な女だ。恐ろしいくらいに。ネテロは思った。これ程までに美しい女がこの世に存在するのかと。

「誰だ、アンタ？ この地の人間か？」

「お前に名乗る必要は無い」

「良いじゃねーか名前くらい」

女は立ち上がり、ネテロの前から去ろうとした。

「早く去れ。その命、これ以上無駄にするな」

去り際に一言だけを残し、巨大岩から数メートル下の地面へと飛び降りる。普通ならば骨折では済まされないが、女は簡単に着地し、岩や石を軽く避けながら歩いて行く。

ネテロは呆然と……という訳でもなく、慌てて女を追いかけたのである。

「おい待て！」

「待たぬ。去れ」

「やだね」

「ついて来るな」

「なあ、何で俺を助けたんだ？」

「その時の気分で、だ。納得したろ？ さあ、もう去れ」

「裸足だけど靴履かねえの？」

「お前も裸足だろ！」

女がどんなに高い身体能力で逃げるように行こうとも、ネテロはそれと同等以上の身体能力を使って追いかけていた。決して逃がさないと言わんばかりに。

逃げる、追いかけるを暫くずっと続けていく内、女は遂に諦めたらしい。巨木の太い枝の上で足を止めた。

「……愚かなメビウスの民は皆、お前のようにしつこいのか？」

溜め息混じりに言う女は、隣で当たり前のように腰掛けるネテロを横目に見た。

「さあね。俺は特別。で、"メビウスの民"って何だ？」

「メビウス湖の真ん中に浮かぶ小さな島の人間の事だ。お前達はそこからやって来たんだろ？」

島……か、確かにな。

この地からしたら自分達の住む世界など『小さな島』でしかないか。桁違いの大陸の存在を身をもって知ったネテロは、妙に納得してしまった。

「まあな。——とところでよオ、アンタ」

一人なのか。ネテロは問うた。女は数秒考えてから、木々からの木漏れ日に目を向ける。

「私は一族の中でも変わり者でな、一人でいる方が好きなんだ」

一族、という事は、まだ何人もこの女のような存在がいるのか。女の返答を聞いたネテロは、遠くに広がる広大な景色に目を細めながらも一つ訊ねた。

「俺以外に後二人を知らないか？ 一人は男、もう一人は女だ。途中で逸れちまつてよお」

「知らん。この地では脆い人間など生きている保証もしてやれぬわ。諦めて一人でも去る方が賢明だぞ」

「二人をおいては帰るつもりはねえよ」

「じゃあ勝手にしろ」

女は枝の上から下へ、再び飛び降りた。

「……だから何故ついて来るんだ」

「勝手にしろって言ったろ？ だから勝手にしてるだけだ」

まあ、気にすんな。歯を見せてニツカリと笑うネテロは、繰り返すようにまた、女の後ろを歩いて行くのである。

助けた事を僅かに後悔したような表情の女は、これ以上何も言いたくないと、歩きを

速めながら眉間に深く皺を寄せていた。

「オイ、なんか食えるもん持つてねえか？」

大きな木の森の中に入って直ぐ、ネテロの腹が大きく鳴った。先程から、この女の近くにいと甘い匂いがしていたので、もしかしたら何か持つているのかもしれない。そう思つて訊いてみたのだが、女からの返事は無かつた。

「ねえならよ、この辺に生えてるので食えるの教えてくれ」

スルーを決める女が無言で先を行くので、ネテロは負けじとまとわりつくようにして何度も食べ物の在り処を訊いた。

「——少しは黙つて歩けぬのか」

大きな溜め息を吐き出して、女はその場に立ち止まる。

「腹が減つてちやあ何も出来ねえよ。あー死にそう。死んじやうナア、うん。きつと死ぬな俺。後数秒でお腹と背中がくつついて死ぬわ絶対」

女の目の前で腹を押さえてワザとらしく木にもたれかかる演技をするネテロを、女はジト目で見つめた。

「それでも食べていろー！」

そして早く黙れ。長い袖の中に潜ませていた竹皮に包まれているモノを、女は苛立ちながらネテロに手渡した。

「握り飯?」

受け取ったそれを開いて見れば、自分の拳程の大きさの握り飯が二つあった。ネテロはその握り飯を躊躇なく掴むと、大きな口を開けてムシヤリと食べた。

「う、美味いっ!」

何だこの米は。噛めば噛む程に口一杯に広がる甘みが舌を伝ってなんとも心地良く、身体中もほかほかと暖かくなってきた。一見、ただの握り飯であるのにそうではない。ネテロは人生で初めて、米の美味さに感動した。

「アンタの飯だったのに悪かったな。美味かったぞこれ」

「今更気になるな。我らにとつては腹を膨らませるだけの、ただの米に過ぎん」

私はこれだけで充分だ。女が近くに生えていた木から実をもぎ取った。

「お、おい!」

ネテロが慌てて止めようとしたのは、女がメラヴェルの実、つまりネテロが口にして死にかけてた実であつたからだ。

「お前達にとつては毒と言つたが、我らには効かぬ」

女はそれを一口齧ると、当たり前のように咀嚼した。

——マジかよ。ネテロは信じられないという目をして、実を食べきる女を凝視する。

——しかし、まあ……。

最後の一口を食べ終え、唇に垂れた果汁を舌先で舐める仕草に思わずどきりとしてしまったのは、暫く断っていた禁欲のせいかもしれない。

ごくりと生睡を飲む。何考えてんだか俺は。気を引き締めようと自分の頬を自分で一発殴れば、女は冷めた視線をネテロに向けていた。

「気合いを入れたんだよ、気合いを」

聞かれてもいないのに。女の視線が気になったのか、殴った頬をさすりながら一人答える。

おかしな奴だな。女がそう言って、止めていた足を一步踏み出した時である。広い森のどこからなのか、男の悲鳴に似た叫び声と共に、パラパラと機関銃のような音が耳に入ってきた。

「お前はここにいろ」

女はネテロを置いて走った。しかし、ネテロも走る。

疎らに森の中を走る何人かの気配だ。素早く高い木の上に駆け上がる女と、草木を避けながらそのまま行くネテロは、人の気配がした方へと進んだ。

「なっ……、なんだこれは！」

その道すがら、地面に荒縄状の何かが、一つ二つとあった。

「お前と同じメビウスの民だ。もう死んでる」

木の上から飛び降りて来た女が、荒縄状に捻られたそれを見て淡々と言う。

——これが死体だつて？

ネテロは戦慄した。このような死体を未だかつて見た事が無かつたからだ。

「お前の仲間か？」

「……違う。多分だが、絶対違うと思う」

「まだ何人かは北東の方角に逃げて行つたぞ」

木の上から見たのであろう女の話に、ネテロは閃いた。

ああ、そうか。高い所から見れば現在地がわかる。高層ビルよりも更に高い木によじ登ろうとすれば、『何をしている』と女が問うた。

「見りゃあわかるだろ。木に上つてんだよ」

先程の登つた木よりも更に何倍も大きい。樹齡何百年以上経つていであろう大木に登るのは、一苦労も二苦労もあつた。

「そのように遅いと夜までかかるぞ」

苦労して4分の1くらいまで登つたネテロのずっと上、太い枝の上にまでいつの間によら登つていた女が、思いやりのない微笑を浮かべながら言った。

——畜生。

悪態をつきたいのを今は我慢して登り切ろうとする必死なネテロに対し、女は枝の上

で緩やかに吹く風に当たりながら涼しそうな顔である。

「お前から撒いて逃げるなら、この木を使えば良かったな」

上にいた女はそう笑って、ネテロが登っている下の幹の枝へと降りて来た。

「へっ、じゃあ今、撒いて行けよ」

苦笑いを浮かべるネテロが、女のいる枝に手をかけた時だった。

「枝か何かに掴まれ」

今更木登りのアドバイスかよ。そう言い返す前に、ネテロは宙を舞った。左手を掴まれた瞬間、遥か高い空へ放り上げられてしまったからである。

「——っうおとおお!」

天と地がひっくり返ったのかと思った。重力によって下へと落ちる瞬きの間、逆さまになった状態で樹頭が目に入った。

枝か何かに掴まれ。女が言った事を思い出したネテロは、咄嗟の判断で小枝もろとも葉を鷲掴み、落下する寸前に徒長枝にしがみついた。

——あつぶねえ!

下手をしたら危うく死ぬところだった。小枝で頬が出来たが、今はそんな傷などどうでも良いくらい心の心境である。

「日が暮れる前に登れて良かったな」

感謝しろと言わんばかりの顔でひよいひよいと簡単に登つて来た女は、安定のある平
行の枝の上に立つ。

——見た目より力あり過ぎだろ。

正直、突然放り上げられた事については少々物申したいところではあるが、それは一
先ず置いておこう。ネテロは枝を支えに立つと、辺りをぐるりと見渡した。

「此処は南東に位置する。今見えているのはメビウス湖だ」

幹に背を寄せて女が言う方を見つめる。なんて巨大な湖だろう。この木は周りの
木々より一番高く見渡しも良い。けれど北に広がる泉の向こうは水平線しか見えない。

「おい、あつちには何がある？」

この木から北西よりの方向を指差す先には、森林の中に岩肌が目立つ場所があった。
女の表情は無から冷笑の影が頬を掠め、何も答えずに木から降りた。

「お、おいー」

登ったばかりかだろ。おいおいとネテロも、女を追うように木から降りて行く。降りる
のも一苦労かと思われたが、登りよりかは随分と楽だった。

先に降りていた女は、荒縄状の死体を見つめていた。

「何があるかぐらい教えてくれよ」

木から降りて直ぐ、ネテロは頭や体についた葉っぱを払いながら声をかける。

「……お前達が欲しがっている宝の一つだ」

「宝？ 俺と仲間が探してんのは、あらゆる液体の元になり得る三原水ていの？ それどこにあるのかを知りてエんだ」

女はネテロに顔を向け、じつと見つめながらその方へと指をさした。

「そりゃあイイ！」

目的のモノは意外にも、仲間とはぐれた近くにあったようだ。もしかしたら仲間の二人と合流出来るかもしれない。ネテロが向かおうとした時、その前を塞ぐように女が立った。

「メビウスの民は欲深い。故に死を呼ぶ。それでも向かうのか？」

ネテロは荒縄状の死体を視界に入れ、そして女と少しの時間見つめ会った。

「……確かに、な。俺はその深い欲のお陰でこの地に来た。逃げたいところだが仲間がいるかもしれないし、今は向かう他ねえわ」

それじゃあな。ネテロはそう一言告げて、女から離れるように走った。

その時からどれくらい時間が経ったのか。数分か、否数時間か——。ネテロは地面にうつ伏せの状態で倒れていた。

思っていた通り、仲間とは合流出来た。しかし、一人は瀕死、もう一人は頭から血を流して気絶していた。

何があったのか。それは、いざという時に用意されていた非公式な三人とは違い、公式に依頼されてこの大陸に来た者達の内の五人が、仲間の二人を攻撃したのである。

「貴様らには渡さない!!」

短機関銃をネテロ達に向けて、その中の一人が必死な形相で言った。この五人は念能力者ではない。特別優れていたわけでもなく、ただの頭数要員だった。

——こんなヤツらにハマするとは。重症の仲間二人を横目に、ネテロは苦笑する。

既に負傷していた仲間のもとに駆けつけた時、一人が匍のように目の前に現れた。それに集中すればもう一人が背後から。次は左右同時。蜂の巣になるのを避けつつ攻撃を仕掛けようとした瞬間、最後に現れた五人目が仲間の一人を狙った。

——くそが。咄嗟にその前に出たネテロは、銃弾を両肩と左脚に受けてしまったのだ。

拍子に地面へと倒れ、今に至る。

「絶対に渡さねえ!」

依頼主からの報酬欲しさの為かと思われたが、それだけにしては何だが様子がおかしい。五人皆、目が虚ろなのだ。そしてよく見れば、五人の足下に黒い霧のようなものが纏わり付いている。

何だ、あれは。荒く息を吐きながら目を凝らせば、それが小さな霧状の動く存在であ

る事がわかった。

——生き物？

ぞわりと全身が粟立つ。決して自分達にとって良い存在ではないと、その霧状の生物から本能的に恐怖を感じ取った。

「これは、絶対に俺のものだ！」

「ああ？ お前のもんじゃねーよ、オレのだ」

「誰のだって？」

「ふざけんな！ オレのに決まってる！」

霧状生物に意識を向けていると、突然仲間割れが始まった。五人は皆、自分のものとそれぞれに主張しながら短機関銃を向けあっている。依頼の宝の事を言っているのか、それとも——。

今のうちにどうにかしねえと。失った血のせいで意識が朦朧とする中、ネテロは考える。

——どうする、どうするよ。

「おい貴様！ 何勝手に動いてんだ！」

痛みに耐えながら少しずつ仲間近寄っていたのがバレた。まだ動ける片方の脚を使えば自分だけでも何とかなっただろうが、それを選べば仲間は死ぬ。

何だ、結局ここで終わりじゃねえか。つまんねえ人生だったな。脳天に銃口を押し当てられたネテロが、自分を嘲笑した時だった。

——来た。

アイツだ。それは直ぐにわかった。

「だ、誰だ!?!」

全ての銃口が、ゆっくりと歩きながら現れたその相手へと向けられる。五人は、時が止まったかのように一点に集中した。微かな風になびくネイビーブルーの長い髪、真っ直ぐに見つめる星空の瞳。その女の美しさに息を飲んだ。

「あ……あい」

惚けていた五人の足下に纏わり付いていた霧状生物らが一斉に離れ、吸い寄せられるように女へと近付いて行く。

「ああ! 行くなあ!!」

離れてしまった霧状生物に気づいた五人はそれぞれに焦り、奪われた玩具を取り戻そうとする子供のような怒りを持って銃口を女に向けた。

「か、返せええええ!」

「オレのだああああ!!」

「死ねええええ!」

躊躇いもなく引き金を引いた一人に合わせ、残りも同じくそうした。

——避ける。ネテロが口に出そうとした瞬間である。短機関銃は確かに放たれたが、女はそこにいなかった。

同時だったのだろうか。ぼたぼた、ぼた、ぼたぼた——。何かの鈍い音がした。

「……悪く思うな。これでもマシな"死"だ」

女が五人の首を落としたのは、瞬きの間であつた。残りの胴体が地面に全て倒れ終えると、女はくるりとネテロへ振り向く。

「何で、来た？」

ネテロが問う。

「気分で、だ」

「へっ、左様ですか」

何が可笑しいんだと言う顔でネテロを見下ろした女は、無の表情で『立て』と言つた。「私が肩を貸してやるんだ。片脚で歩け」

こんな重症な状態だからってつきり優しく起こしてくれるのかと少しでも期待してしまつていたネテロは、口から出て来ようとした文句を寸前で飲み込んだ。

「また助けてくれんのか？ な、ならよお、仲間も頼む」

代わりにそう頼めば、女は氣を失っている仲間二人に目をやる。

「良いだろう、先にお前とこの娘だ」

女はそう答えると、片方の肩に担ぐようにして若い娘を。そして反対側の肩でネテロを起こして歩き出す。

「何処へ？」

「お前達が来た方へ」

女の歩くスピードは速かった。片脚で歩けと言われていたが、殆ど引き摺られた状態だった。向かった先は船を停泊させている港。港と言つても綺麗に整備されてはいない。そこには客船程の大きな船が一隻。公式連中に紛れ、非公式のネテロら三人も乗つて着ていた船である。

「頭は打っているが気を失っているだけ。お前も大量に血は流れているが、島に着くまでは持つだろう」

船の中に置かれ、女が降りようとするのをネテロは止めた。

「おい、もう一人は？」

女は数秒黙つてネテロを見つめる。

「——あれは諦めろ。もう手遅れだ」

ふざけんな、何が手遅れだ。アイツは、まだ息がある。ネテロは身体を引き摺りながら片脚で立ち上がった。

「その命、もう捨てるのか？ 折角助けてやったのが無駄になる」
「うるせえ。ここで見捨てるワケにはいかねえんだよ」

息荒く女の真横を通ろうとすれば、止めるかのように腕を掴まれた。

「お前達にとつて災いになろうとも？」

「……離しやがれ」

僅かにオーラを放ちながら、ドスを効かせた声でネテロが言う。能力者でなければ念のオーラなど見えぬが、何かを感じ取った女は静かに瞳を閉じてこう言った。

「無謀なお前、嫌いではなかった」

「な——」

何を。言いかけて視界が暗転。ネテロは意識を失った。

数時間後、我に返るように目覚めれば、心配そうに見つめる仲間の一人の少女と目が合った。

「——つつあ!？」

簡易ベットのの上に寝かされていた上半身を起こそうとすれば、全身に激痛が走る。

「起き上がっちゃダメ！ あんた死にかけてんだから！」

頭に包帯を巻いていた一人は、ネテロをベットから起こさないように押さえた。

「あ、……アイツは？」

姿の無いもう一人の事を訊けば、顔が僅かに曇った。

「生きてる。だけど——」

もう一人は意識を失ったまま、何時間経っても目覚めなめと言う。

ネテロ同様、身体中に銃弾を受けて瀕死ではあったが、そんなもので簡単に弱る奴ではないのに。

ふと、あの女が過ぎる。

「おい、誰かに、女に会わなかったか？」

女の特徴を言えば、少女は思い出したかのように語る。

自分の意識が戻った時、ちょうど女は仲間を担いで来たところだった。

——誰。目の前にいる謎の女を見つめ、訝しげに少女が問いかけるも、女は何も答えない。ちらりとネテロに視線を送り、最後に『去れ』と一言。それから直ぐに船から出て行ったそうだ。

この三人の状態ではと、仕方なく断念した少女の決断をネテロは責めなかった。

「ねえ、あの女、知ってる人だったの？」

女の事を問われ、数秒考えてからネテロは答えた。

「……知らねえよ」

その日から数年。ネテロは再び、お忍びの依頼で彼の地に参った。もしかしたらまた

会えるかもしれない。だが、そんな密かな期待も虚しく、ネイビーブルーの髪色をした件の女に会う事は、もう二度と無かった。

行方を誰かに問えば良かったのか、否、何故だかそれをしたくなかった。あの女との邂逅は、自分と女だけのものにしたかったからだ。

——最期に、アンタともう一度会いたかった。

キメラアントの王と一騎打ち、死を目の前にしたネテロの走馬灯である。